

# 史跡 勝瑞城館跡 I

— 勝瑞館跡西半部の発掘調査 —

《第2分冊》

2020

藍住町教育委員会

# 史跡 勝瑞城館跡 I

— 勝瑞館跡西半部の発掘調査 —

《第2分冊》

2020

藍住町教育委員会



## 第2分冊 目次

### 本文

第3章 調査の成果	1
1 基本層序	1
2 遺構と遺物	6
(1) 第1遺構面	6
① 濠	6
② 庭園	73
③ 建物 (SB)	85
④ 溝 (SD)	118
⑤ 井戸 (SE)	159
⑥ 杭列 (SG)	161
⑦ 土坑 (SK)	163
⑧ 池状遺構 (SL)	210
⑨ 小穴 (SP)	213
⑩ 土壙墓 (ST)	244
⑪ 石敷遺構 (SU)	247
⑫ 不明遺構 (SX)	249
(2) 第2遺構面	260
① 堀	260
② 溝 (SD)	263
③ 小穴 (SP)	268
④ 不明遺構 (SX)	277
(3) 第3遺構面	281
① 小穴 (SP)	281
(4) 包含層等	290
(5) 勝瑞城館跡下層の遺構・遺物について	315
① 貝層1 (SS2001)	315
② その他古代の遺物	315

第4章 まとめと考察	319
1 出土遺物の様相	319
(1) 出土土器・陶磁器の器種構成	319
(2) 土師質土器・杯の検討	319
①分類	320
②土師質土器皿・杯の共伴関係	321
③中国磁器との共伴関係	321
④年代観	323
2 遺構の様相	323
(1) 区画を形成する遺構の年代観	323
①濠跡の年代観について	324
②溝の年代観について	325
③濠・溝の年代観と形成される区画について	326
3 まとめ～勝瑞城館の変遷と歴史背景～	328

## 挿 図

### 第3章 調査の成果

第58図	基本土層調査地点位置図	1	第95図	濠1003断面図4)	46
第59図	基本土層柱状図1)	2	第96図	濠1003断面図5)	47
第60図	基本土層柱状図2)	3	第97図	濠1003(10-I区)出土遺物実測図	48
第61図	基本土層柱状図3)	4	第98図	濠1003(11-I区)出土遺物実測図	48
第62図	基本土層柱状図4)	5	第99図	濠1003(14-III・IV区)出土遺物実測図1)	51
第63図	濠1001平面図	7	第100図	濠1003(14-III・IV区)出土遺物実測図2)	52
第64図	濠1001平面図(第63図のA)	8	第101図	濠1003(14-III・IV区)出土遺物実測図3)	53
第65図	濠1001平面図(第63図のB)	9	第102図	濠1003-EK1平・断面図	55
第66図	濠1001平面図(第63図のC)	10	第103図	濠1003-EK1出土遺物実測図	55
第67図	濠1001断面図1)	11	第104図	濠1003-EP1・EP2平・断面図	55
第68図	濠1001断面図2)	13	第105図	濠1003-EP1・EP2出土遺物実測図	55
第69図	濠1001断面図3)	15	第106図	濠1004平面図	57
第70図	濠1001断面図4)	17	第107図	濠1004平面図(第106図のA)	58
第71図	濠1001(3-II区)出土遺物実測図	20	第108図	濠1004平面図(第106図のB)	58
第72図	濠1001(10-II区)第III層出土遺物実測図	20	第109図	濠1004平面図(第106図のC)	59
第73図	濠1001(10-II区)出土遺物実測図1)	22	第110図	濠1004断面図1)	60
第74図	濠1001(10-II区)出土遺物実測図2)	23	第111図	濠1004断面図2)	61
第75図	濠1001(10-II区)出土遺物実測図3)	24	第112図	濠1004断面図3)	62
第76図	濠1001(10-II区)出土遺物実測図4)	25	第113図	濠1004断面図4)	63
第77図	濠1001(10-II区)出土遺物実測図5)	26	第114図	濠1004断面図5)	64
第78図	濠1001(11-I区)出土遺物実測図1)	29	第115図	濠1004(3-IV区)出土遺物実測図	64
第79図	濠1001(11-I区)出土遺物実測図2)	30	第116図	濠1004(13-I区)出土遺物実測図	64
第80図	濠1001(11-I区)出土遺物実測図3)	31	第117図	濠1005平面図	65
第81図	濠1001(11-I区)出土遺物実測図4)	32	第118図	濠1005出土遺物実測図	66
第82図	濠1001(11-I区)出土遺物実測図5)	33	第119図	濠1005平・断面図	67
第83図	濠1001(12-I区)出土遺物実測図	34	第120図	濠1006平面図1)	70
第84図	濠1002平面図	36	第121図	濠1006平面図2)	70
第85図	濠1002平面図(第84図のA)	36	第122図	濠1006断面図	71
第86図	濠1002断面図	37	第123図	濠1006出土遺物実測図	72
第87図	濠1002(6-II区)出土遺物実測図	39	第124図	庭1001平面図	74
第88図	濠1002(13-I区)出土遺物実測図	39	第125図	庭1001景石断面図(1)	74
第89図	濠1003平面図	40	第126図	庭1001景石断面図(2)	75
第90図	濠1003平面図(第89図のA)	41	第127図	庭1001景石断面図(3)	76
第91図	濠1003平面図(第89図のB)	42	第128図	庭1001景石断面図(4)	77
第92図	濠1003断面図1)	43	第129図	庭1001景石断面図(5)	78
第93図	濠1003断面図2)	44	第130図	庭1001景石断面図(6)	79
第94図	濠1003断面図3)	45	第131図	庭1001周辺出土遺物実測図	80
			第132図	庭1001周辺出土遺物実測図	81
			第133図	庭1001周辺出土遺物実測図	82
			第134図	庭1001周辺出土遺物実測図	83

第135图	庭1001周边出土遗物实测图	84	第175图	SD1010出土遗物实测图	134
第136图	SB1001平·断面图	87	第176图	SD1012平·断面图	135
第137图	SB1001平面图	89	第177图	SD1012出土遗物实测图	136
第138图	SB1001简易图	90	第178图	SD1013平·断面图	138
第139图	SB1001復元案模式图	90	第179图	SD1013出土遗物实测图	138
第140图	SB1001と庭1001	91	第180图	SD1014平·断面图	139
第141图	SB1001周边出土遗物实测图	92	第181图	SD1014出土遗物实测图	139
第142图	SB1001周边出土遗物实测图	93	第182图	SD1017平·断面图	140
第143图	SB1001周边出土遗物实测图	94	第183图	SD1017出土遗物实测图	141
第144图	SB1001周边出土遗物实测图	95	第184图	SD1018平·断面图	142
第145图	SB1001周边出土遗物实测图	97	第185图	SD1018出土遗物实测图	143
第146图	SB1001周边出土遗物实测图	98	第186图	SD1023平·断面图	144
第147图	SB1002·1003平断面图	101	第187图	SD1023出土遗物实测图	144
第148图	SB1002·1003周边出土遗物实测图	103	第188图	SD1024平·断面图	146
第149图	SB1002·1003周边出土遗物实测图	104	第189图	SD1024出土遗物实测图	146
第150图	SB1002·1003周边出土遗物实测图	105	第190图	SD1042平面图	147
第151图	SB1002·1003周边出土遗物实测图	107	第191图	SD1042出土遗物实测图	148
第152图	SB1002·1003周边出土遗物实测图	108	第192图	SD1043平·断面图	148
第153图	SB1002·1003周边出土遗物实测图	109	第193图	SD1057平·断面图	150
第154图	SB1002·1003周边出土遗物实测图	110	第194图	SD1057出土遗物实测图	150
第155图	SB1004平断面图	112	第195图	SD1058平·断面图	151
第156图	SB1004周边出土遗物实测图	114	第196图	SD1058出土遗物实测图	151
第157图	SB1005平·断面图	115	第197图	SD1060平·断面图	152
第158图	SB1005周边出土遗物实测图	116	第198图	SD1060断面图	153
第159图	SB1005周边出土遗物实测图	117	第199图	SD1060土師質土器一括廃棄状況图	154
第160图	SB1006平·断面图	119	第200图	SD1060出土遗物实测图(一括廃棄)	154
第161图	SB1006出土遗物实测图	119	第201图	SD1060出土遗物实测图	156
第162图	SD1001平·断面图	120	第202图	SD1060出土遗物实测图	157
第163图	SD1003平·断面图	121	第203图	SD1066出土遗物实测图	158
第164图	SD1003出土遗物实测图	122	第204图	SD1066平·断面图	158
第165图	SD1005平·断面图	124	第205图	SE1001平·断面图	160
第166图	SD1005出土遗物实测图	125	第206图	SE1001出土遗物实测图	161
第167图	SD1007·SD1008平·断面图	126	第207图	SG1001平·断面图	162
第168图	SD1007出土遗物实测图	127	第208图	SK1001平·断面图	163
第169图	SD1009平·断面图	128	第209图	SK1001出土遗物实测图	163
第170图	SD1009出土遗物实测图	129	第210图	SK1002平·断面图	164
第171图	SD1009出土遗物实测图	131	第211图	SK1002出土遗物实测图	164
第172图	SD1009出土遗物实测图	132	第212图	SK1008平·断面图	165
第173图	SD1009出土遗物实测图	133	第213图	SK1008立面图	165
第174图	SD1010平·断面图	134	第214图	SK1008出土遗物实测图	166

第215园	SK1016平·断面图	167	第255园	SK1053平·断面图	187
第216园	SK1016出土遗物实测图	167	第256园	SK1053出土遗物实测图	187
第217园	SK1019平·断面图	168	第257园	SK1054平·断面图	188
第218园	SK1019出土遗物实测图	168	第258园	SK1054出土遗物实测图	188
第219园	SK1020平·断面图	169	第259园	SK1059平·断面图	189
第220园	SK1020出土遗物实测图	169	第260园	SK1059出土遗物实测图	189
第221园	SK1029平·断面图	171	第261园	SK1061平·断面图	190
第222园	SK1029出土遗物实测图	171	第262园	SK1061出土遗物实测图	190
第223园	SK1030平·断面图	172	第263园	SK1064平·断面图	190
第224园	SK1031平·断面图	172	第264园	SK1064出土遗物实测图	190
第225园	SK1032平·断面图	173	第265园	SK1071平·断面图	191
第226园	SK1032出土遗物实测图	173	第266园	SK1071出土遗物实测图	191
第227园	SK1033平·断面图	174	第267园	SK1079平·断面图	192
第228园	SK1033出土遗物实测图	174	第268园	SK1079出土遗物实测图	192
第229园	SK1034平·断面图	176	第269园	SK1083平·断面图	193
第230园	SK1034出土遗物实测图	176	第270园	SK1083出土遗物实测图	193
第231园	SK1035平·断面图	177	第271园	SK1110平·断面图	194
第232园	SK1035出土遗物实测图	177	第272园	SK1110出土遗物实测图	194
第233园	SK1037平·断面图	178	第273园	SK1112平·断面图	195
第234园	SK1037出土遗物实测图	178	第274园	SK1112出土遗物实测图	195
第235园	SK1038平·断面图	179	第275园	SK1114平·断面图	196
第236园	SK1038出土遗物实测图	179	第276园	SK1114出土遗物实测图	196
第237园	SK1039平·断面图	179	第277园	SK1117平·断面图	197
第238园	SK1039出土遗物实测图	179	第278园	SK1117出土遗物实测图	197
第239园	SK1042平·断面图	180	第279园	SK1126平·断面图	198
第240园	SK1042出土遗物实测图	180	第280园	SK1126出土遗物实测图	198
第241园	SK1043平·断面图	181	第281园	SK1128平·断面图	199
第242园	SK1043出土遗物实测图	181	第282园	SK1128出土遗物实测图	199
第243园	SK1044平·断面图	181	第283园	SK1149平·断面图	200
第244园	SK1044出土遗物实测图	181	第284园	SK1149出土遗物实测图	201
第245园	SK1045平·断面图	182	第285园	SK1149出土遗物实测图	202
第246园	SK1045出土遗物实测图	182	第286园	SK1150平·断面图	203
第247园	SK1046平·断面图	183	第287园	SK1150出土遗物实测图	203
第248园	SK1046出土遗物实测图	184	第288园	SK1150出土遗物实测图	204
第249园	SK1050平·断面图	185	第289园	SK1153平·断面图	206
第250园	SK1050出土遗物实测图	185	第290园	SK1153出土遗物实测图	207
第251园	SK1051平·断面图	186	第291园	SK1161平·断面图	207
第252园	SK1051出土遗物实测图	186	第292园	SK1161出土遗物实测图	207
第253园	SK1052平·断面图	187	第293园	SK1162平·断面图	208
第254园	SK1052出土遗物实测图	187	第294园	SK1162出土遗物实测图	208

第295园	SK1164平·断面图	209	第335园	SP1193平·断面图	225
第296园	SK1164出土遗物实测图	209	第336园	SP1193出土遗物实测图	225
第297园	SK1197平·断面图	210	第337园	SP1196平·断面图	226
第298园	SK1197出土遗物实测图	210	第338园	SP1210平·断面图	226
第299园	SL1001平·断面图	211	第339园	SP1211平·断面图	227
第300园	SL1001出土遗物实测图	212	第340园	SP1240平·断面图	227
第301园	SP1001平·断面图	213	第341园	SP1246平·断面图	228
第302园	SP1001出土遗物实测图	213	第342园	SP1246出土遗物实测图	228
第303园	SP1002平·断面图	214	第343园	SP1248平·断面图	229
第304园	SP1002出土遗物实测图	214	第344园	SP1248出土遗物实测图	229
第305园	SP1004平·断面图	214	第345园	SP1260平·断面图	229
第306园	SP1004出土遗物实测图	214	第346园	SP1260出土遗物实测图	229
第307园	SP1009平·断面图	215	第347园	SP1261平·断面图	230
第308园	SP1009出土遗物实测图	215	第348园	SP1261出土遗物实测图	230
第309园	SP1010平·断面图	215	第349园	SP1307平·断面图	230
第310园	SP1010出土遗物实测图	215	第350园	SP1315平·断面图	231
第311园	SP1011平·断面图	216	第351园	SP1315出土遗物实测图	231
第312园	SP1011出土遗物实测图	216	第352园	SP1318平·断面图	231
第313园	SP1012平·断面图	217	第353园	SP1325平·断面图	232
第314园	SP1012出土遗物实测图	217	第354园	SP1334平·断面图	232
第315园	SP1088平·断面图	217	第355园	SP1334出土遗物实测图	232
第316园	SP1088出土遗物实测图	217	第356园	SP1337平·断面图	233
第317园	SP1091平·断面图	218	第357园	SP1340平·断面图	233
第318园	SP1091出土遗物实测图	218	第358园	SP1340出土遗物实测图	233
第319园	SP1093平·断面图	219	第359园	SP1352平·断面图	234
第320园	SP1093出土遗物实测图	219	第360园	SP1352出土遗物实测图	234
第321园	SP1105平·断面图	220	第361园	SP1389平·断面图	234
第322园	SP1105出土遗物实测图	220	第362园	SP1391平·断面图	235
第323园	SP1106平·断面图	221	第363园	SP1396平·断面图	235
第324园	SP1106出土遗物	221	第364园	SP1396出土遗物实测图	235
第325园	SP1110平·断面图	222	第365园	SP1400平·断面图	236
第326园	SP1110出土遗物实测图	222	第366园	SP1401遗摺平·断面图	236
第327园	SP1112平·断面图	222	第367园	SP1402遗摺平·断面图	237
第328园	SP1142平·断面图	223	第368园	SP1404遗摺平·断面图	237
第329园	SP1142出土遗物实测图	223	第369园	SP1405遗摺平·断面图	238
第330园	SP1162平·断面图	224	第370园	SP1406遗摺平·断面图	238
第331园	SP1162出土遗物实测图	224	第371园	SP1407遗摺平·断面图	239
第332园	SP1180平·断面图	224	第372园	SP1408遗摺平·断面图	239
第333园	SP1182平·断面图	224	第373园	SP1412遗摺平·断面图	239
第334园	SP1185平·断面图	225	第374园	SP1412出土遗物	239

第375図	SP1426平・断面図	240	第415図	SP2001遺構平・断面図	269
第376図	SP1426出土遺物実測図	240	第416図	SP2002遺構平・断面図	269
第377図	SP1427遺構平・断面図	240	第417図	SP2003遺構平・断面図	270
第378図	SP1455平・断面図	241	第418図	SP2004遺構平・断面図	270
第379図	SP1455出土遺物実測図	241	第419図	SP2005遺構平・断面図	271
第380図	SP1518遺構平・断面図	241	第420図	SP2006平・断面図	271
第381図	SP1519遺構平・断面図	242	第421図	SP2007平・断面図	272
第382図	SP1520平・断面図	242	第422図	SP2007出土遺物	272
第383図	SP1521平・断面図	243	第423図	SP2008遺構平・断面図	272
第384図	SP1522平・断面図	243	第424図	SP2009遺構平・断面図	272
第385図	SP1563平・断面図	244	第425図	SP2010遺構平・断面図	273
第386図	SP1563出土遺物実測図	244	第426図	SP2011遺構平・断面図	273
第387図	ST1001平・断面図	245	第427図	SP2012遺構平・断面図	274
第388図	ST1001出土遺物実測図	245	第428図	SP2013遺構平・断面図	274
第389図	ST1002平・断面図	246	第429図	SP2014平・断面図	274
第390図	ST1002出土遺物実測図	246	第430図	SP2014出土遺物実測図	274
第391図	SU1001平・断面図	248	第431図	SP2015平・断面図	275
第392図	SU1001出土遺物実測図	249	第432図	SP2016遺構平・断面図	275
第393図	SX1018平・断面図	250	第433図	SP2017遺構平・断面図	276
第394図	SX1018出土遺物実測図	250	第434図	SP2018平・断面図	276
第395図	SX1019平・断面図	251	第435図	SP2019遺構平・断面図	277
第396図	SX1019出土遺物実測図	252	第436図	SP2020遺構平・断面図	277
第397図	SX1022平・断面図	254	第437図	SX2001出土遺物実測図	278
第398図	SX1022 (EP3 EP4 EP5 EP6) 平・断面図	254	第438図	SX2002平・断面図	279
第399図	SX1022出土遺物実測図	255	第439図	SX2002溝状遺構出土状況図	280
第400図	SX1025平・断面図	256	第440図	SX2002出土遺物実測図	280
第401図	SX1025出土遺物実測図	257	第441図	1-1区第3遺構面遺構配置図	281
第402図	SX1029平・断面図	258	第442図	SP3001平・断面図	282
第403図	SX1029出土遺物実測図	259	第443図	SP3002平・断面図	282
第404図	1-1区第2遺構面遺構配置図	260	第444図	SP3003平・断面図	283
第405図	堀2001周辺平面図	261	第445図	SP3004平・断面図	283
第406図	堀2001・2002・SX2001断面図	261	第446図	SP3005平・断面図	283
第407図	堀2001周辺出土遺物実測図	262	第447図	SP3006遺構平・断面図	283
第408図	堀2003平・断面図	262	第448図	SP3007平・断面図	284
第409図	SD2001平・断面および遺物出土状況図	264	第449図	SP3007出土遺物実測図	284
第410図	SD2001出土遺物実測図	265	第450図	SP3008遺構平・断面図	285
第411図	SD2001出土遺物実測図	266	第451図	SP3009遺構平・断面図	285
第412図	SD2001出土遺物実測図	267	第452図	SP3010平・断面図	286
第413図	SD2002平・断面図	269	第453図	SP3011平・断面図	286
第414図	SD2002出土遺物実測図	269	第454図	SP3012平・断面図	286

第455図	SP3013平・断面図	286	第472図	包含層等出土遺物実測図	301
第456図	SP3014遺構平・断面図	287	第473図	包含層等出土遺物実測図	302
第457図	SP3015遺構平・断面図	287	第474図	包含層等出土遺物実測図	303
第458図	SP3016遺構平・断面図	288	第475図	包含層等出土遺物実測図	304
第459図	SP3017遺構平・断面図	288	第476図	包含層等出土遺物実測図	305
第460図	SP3018遺構平・断面図	288	第477図	包含層等出土遺物実測図	306
第461図	SP3019遺構平・断面図	288	第478図	包含層等出土遺物実測図	308
第462図	SP3020遺構平・断面図	289	第479図	包含層等出土遺物実測図	309
第463図	SP3021遺構平・断面図	289	第480図	包含層等出土遺物実測図	310
第464図	包含層出土遺物実測図	291	第481図	包含層等出土遺物実測図	311
第465図	包含層出土遺物実測図	292	第482図	包含層等出土遺物実測図	312
第466図	包含層出土遺物実測図	293	第483図	包含層等出土遺物実測図	314
第467図	包含層出土遺物実測図	294	第484図	SS2001出土遺物実測図	317
第468図	包含層出土遺物実測図	295	第485図	勝瑞城跡下層出土遺物実測図	318
第469図	包含層等出土遺物実測図	298	<b>第4章 まとめと考察</b>		
第470図	包含層等出土遺物実測図	299	第486図	勝瑞城館跡の遺構と区画の配置	327
第471図	包含層等出土遺物実測図	300	第487図	勝瑞城館変遷模式図	329

## 表

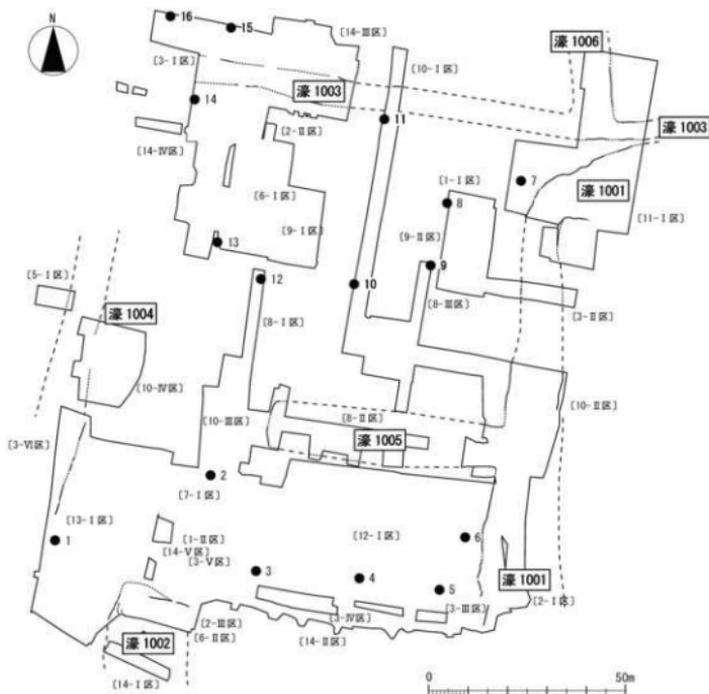
第8表	SS2001出土貝組成表	316
第9表	勝瑞城館跡出土遺物種類別一覧	319
第10表	土師質土器の器種構成	319
第11表	土師質土器の分類	321
第12表	遺構出土土師質土器皿・杯の組成	322
第13表	遺構出土の中国磁器	322
第14表	濠出土の土師質土器皿	323
第15表	濠出土の中国磁器	324
第16表	勝瑞城館の濠、遺構面、曲明となる事象の年代一覧表	331

## 第3章 調査の成果

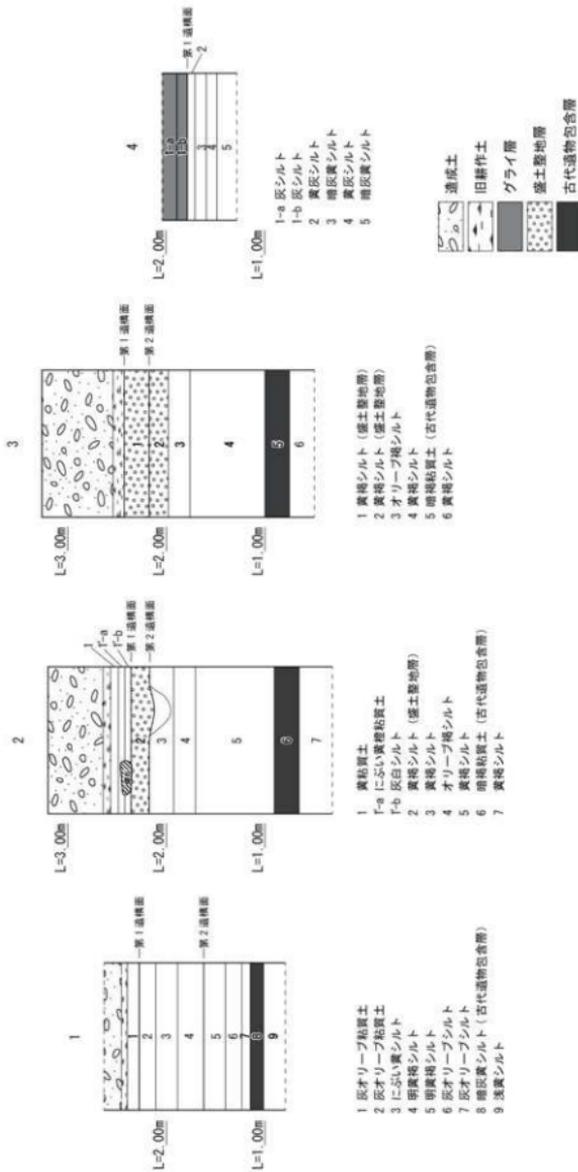
### 1 基本層序

調査地周辺は、T.P.で3.3mを測り、旧吉野川南岸に形成された自然堤防帯の中でも若干高い場所に位置する。基本層序では正貴寺跡等、勝瑞城跡や勝瑞館跡から離れた調査地では砂層が確認されるのに対して、ここでは砂層は確認できず、良く締まった粘土層の堆積が確認される。このことから考えても、勝瑞城館は微高地の中でもより安定した地点に築かれていることが分かる。

現地表面直下には厚さ約1mに及ぶ工場造成時の客土がある。大規模な盛土工事は礎石の移動等、直下の遺構に与える影響が大きかったとも思われるが、同時に以後の開発から遺構面を保護

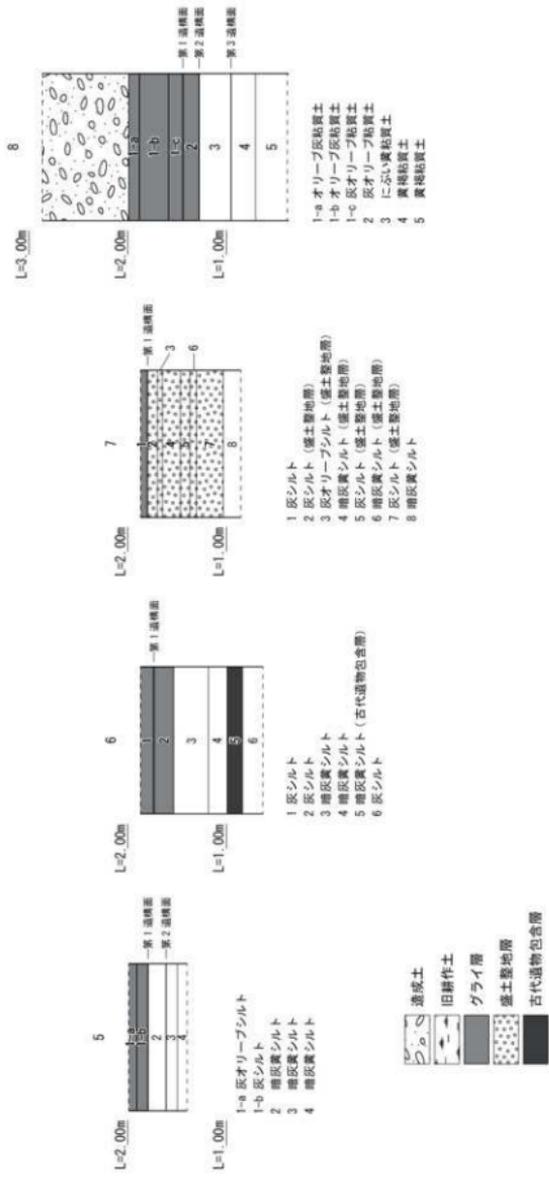


第58図 基本土層調査地点位置図



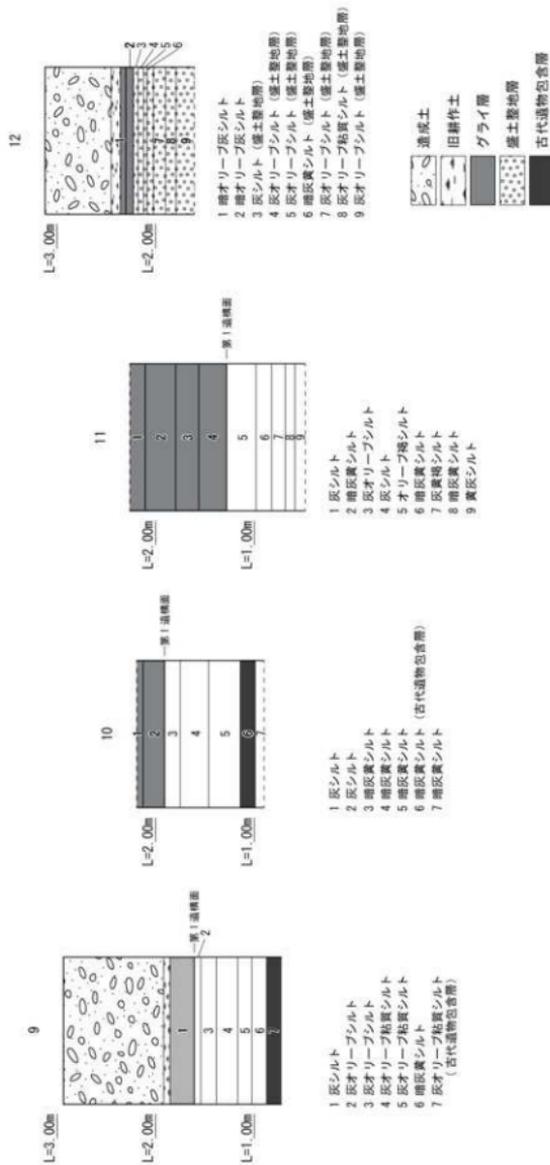
※柱状図の土層に付けた番号は、それぞれの図で独立したものであり、同じ番号が対応するものではない。

第 59 図 基本土層柱状図 (1)



※注記図の土層に付けた番号は、それぞれの図で独立したものであり、同じ番号が用いられるものではない。

第 60 図 基本土層柱状図 (2)



※柱状図の土層に付けた番号は、それぞれの図で独立したものであり、同じ番号が対応するものではない。

第 61 図 基本土層柱状図 (3)



する役割も果たしており、遺構の保存状況は良好であった。また、調査地は工場以前にはほとんどが畑地であり、工場造成時の客土の下は旧耕作土である。旧耕作土下には地点により厚さが異なるが、青灰色のグライ層が確認され、その直下で第一遺構面を検出した。ただし、SB1001の北側であるNo.2や庭1001附近のNo.3、SB1002・SB1003の南側であるNo.13ではグライ層が確認されていない。これは、礎石建物や庭園が検出された地点では基本的に盛土が施されており、厚いところでは50cm以上の盛土が確認できる。そのため、生活面の標高が高く、後世に地下水の影響を受けなかったことによるものと思われる。第一遺構面の標高は、SB1001、SB1002、SB1003及び庭園の部分ではT.P.で2.3m前後、その他の部分が1.8m前後である。

第一遺構面を形成する盛土層の下では部分的に第二遺構面も検出している。

また、標高1m前後では10世紀頃の遺物を包含する暗灰黄色シルト層の堆積も確認されており、これは井隈郷の時代の生活の痕跡であると思われる。

## 2 遺構と遺物

以下では、順に成果の報告を行う。個別遺構は濠、堀、庭園、建物(SB)、人工溝(SD)、井戸(SE)、杭列(SG)、土坑(SK)、池状遺構(SL)、小穴(SP)、貝塚(SS)、土壙墓(ST)、集石遺構(SU)、不明遺構(SX)の順に整理し、記述する。

### (1) 第1遺構面

#### ①濠

幅10mを越える濠が各所で検出されており、これらの濠が城館を形成する区画を囲繞していたものと考えられる。濠の方向や規模、地割り等から整理すると、濠は大きく6つに分類することができる。

#### 濠1-1 [濠1001]

(検出地点)

2-I区 [中グリッド (b-8～c-8)・小グリッド (S～A-19)]

3-II区 [中グリッド (c-9)・小グリッド (B～E-14)]

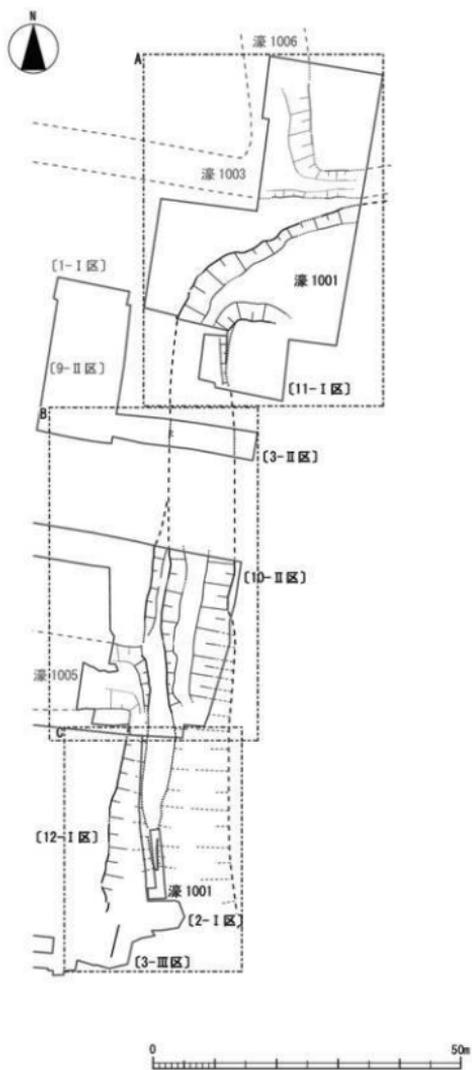
10-II区 [中グリッド (c-9)・小グリッド (A-5～9, B-5～10, C-5～10, D-7～10)]

11-I区 [中グリッド (c-9～10)・小グリッド (B-18, C-18～20, D-18～20, F-19～1, G-18～1, H-1・2)]

12-I区 [中グリッド (b-8～9, c-8～9)・小グリッド (T-17～3, A-17～4, B-18～4)]

(形態等)

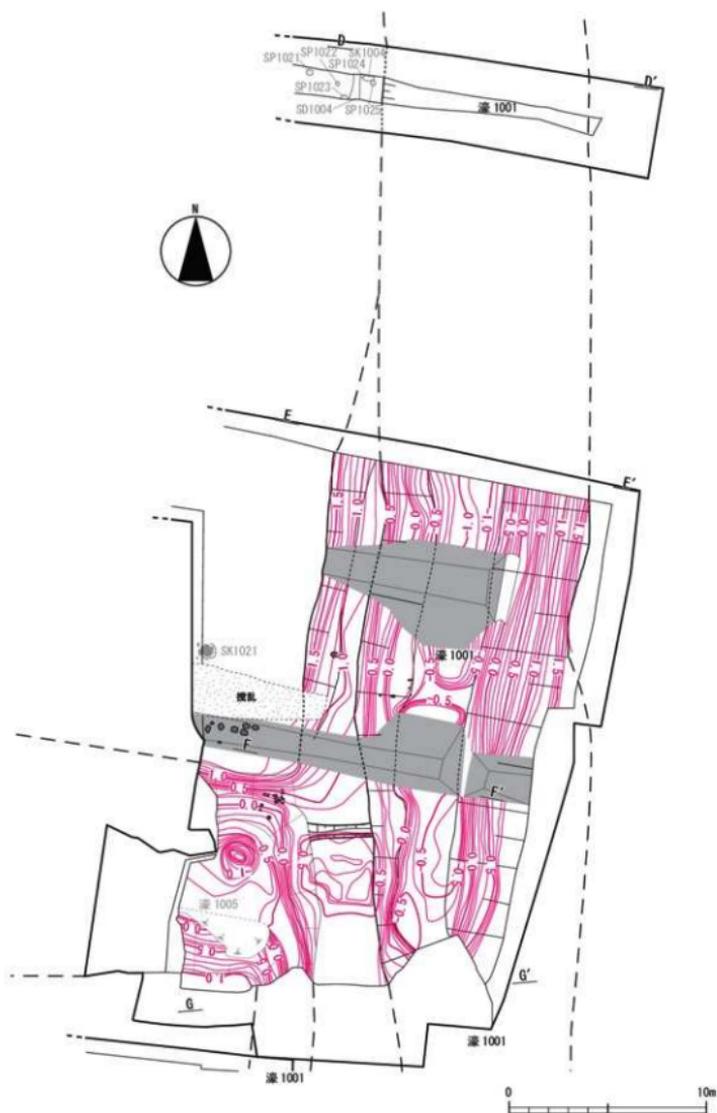
現在、勝瑞館跡として指定されている範囲のほぼ中央部をN-7°E程度やや東に振った軸で



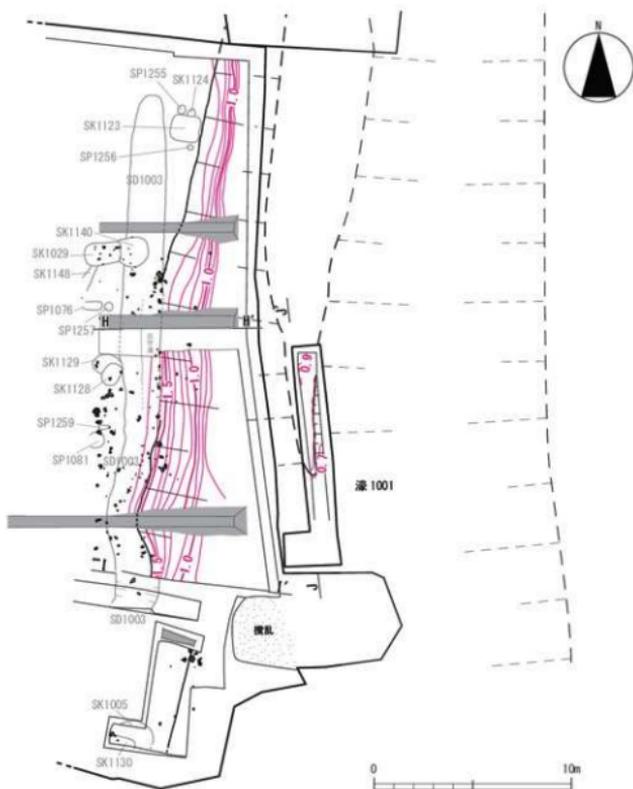
第63図 濠1001平面图



第64図 瀬1001平面図(第63図のA)

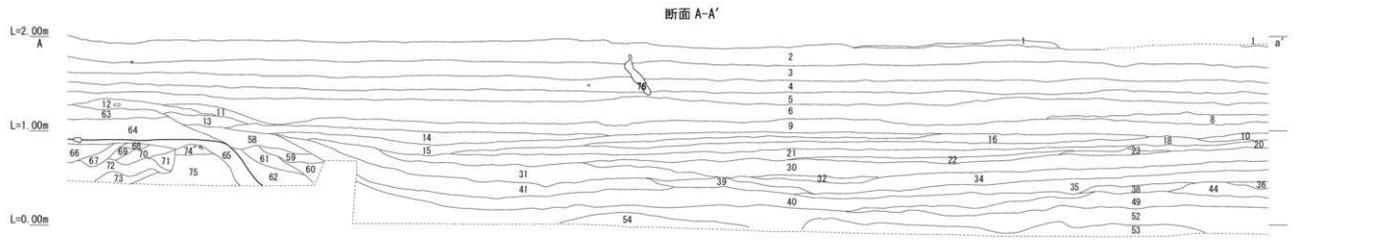


第 65 図 濠 1001 平面図 (第 63 図の B)

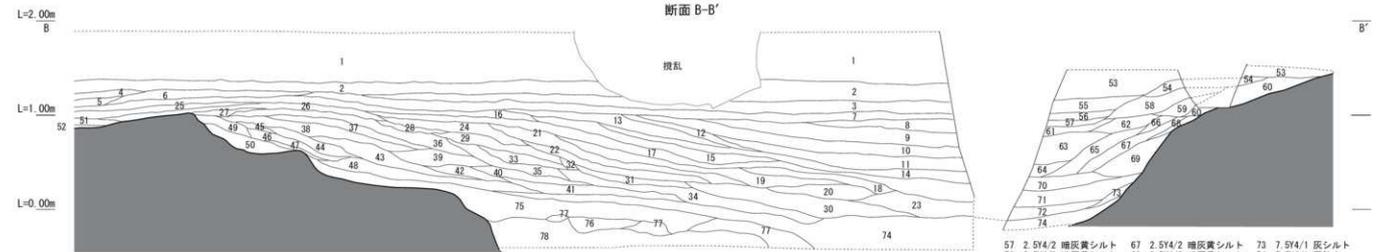
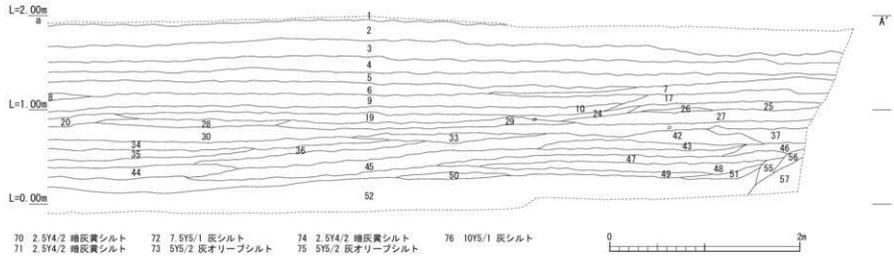


第66図 濠 1001 平面図 (第63図のC)

南北方向に約 120 m 延び、東方向へ約  $80^\circ$  の角度で曲がる。さらに、そこから東方向へ延びていることは地下レーダー探査で確認している。明治期の地籍図（一步一間之図）で濠の痕跡と見られる区割が確認できることから、城館の廃絶まで存続した濠と思われる。基本的な形状は上幅 11 m ～ 18 m、深さ 2.5 ～ 3 m を測り、濠法面は  $30^\circ \sim 40^\circ$  で断面形状は逆台形を呈する。濠の覆土は最下層に有機質粘土層が堆積しており（以下、「第V層」とする。）、濠が常時帯水していたことを示す。その上層には灰白色系の粘質土が堆積しており（以下、「第IV層」とする。）、ここまですが 16 世紀後半の堆積層と思われる。ここから上層は、灰黄色系の粘質シルト、灰オリーブ系の粘質シルトの堆積があり（以下、「第III層」とする。）、近世～近代の堆積層と思われる。

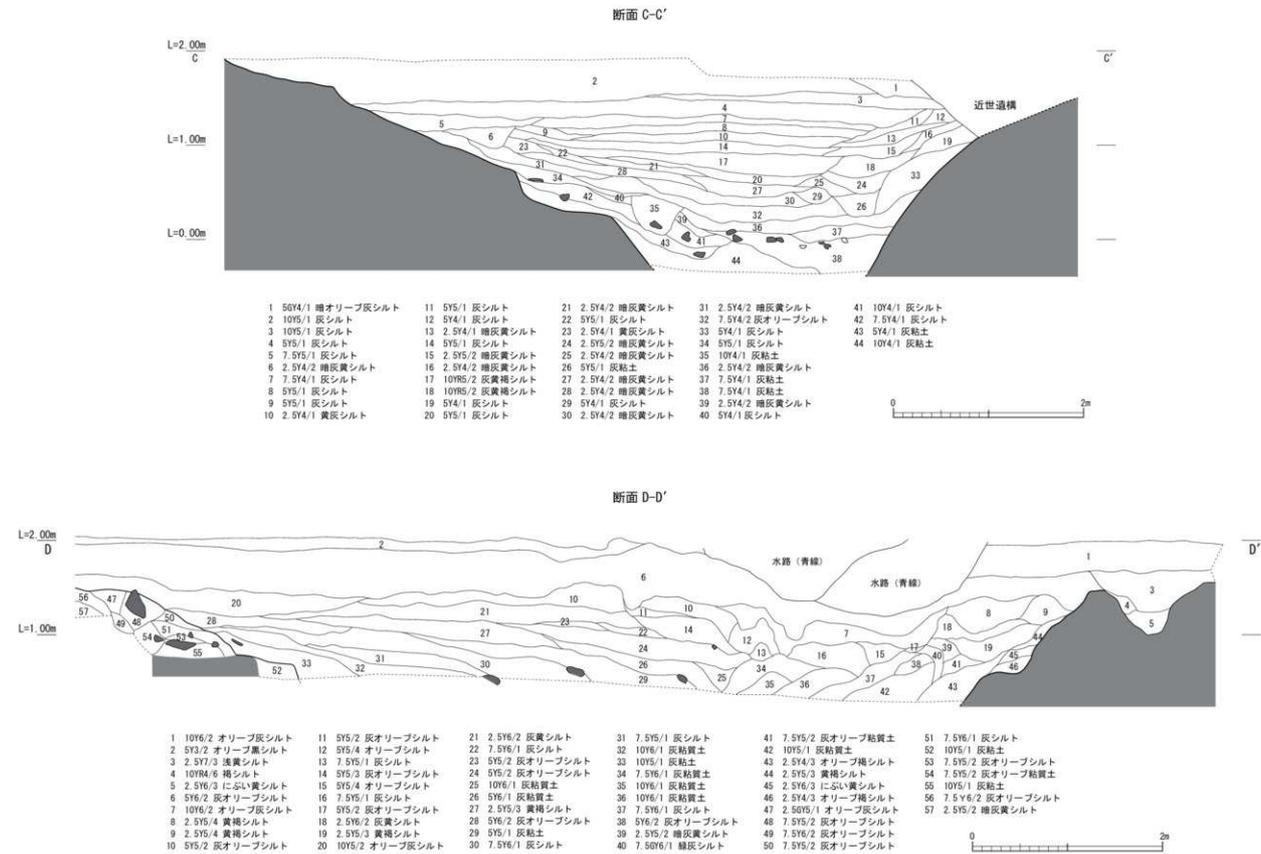


- |                     |                     |                     |
|---------------------|---------------------|---------------------|
| 1 5Y4/1 灰シルト        | 24 7.5Y5/2 灰オリーブシルト | 47 5Y4/1 灰シルト       |
| 2 7.5Y5/1 灰シルト      | 25 7.5Y5/1 灰シルト     | 48 5Y4/1 灰シルト       |
| 3 7.5Y4/1 灰シルト      | 26 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 49 7.5Y4/2 灰オリーブシルト |
| 4 2.5Y4/2 増戻黄シルト    | 27 5Y5/2 増戻黄シルト     | 50 7.5Y4/2 灰オリーブシルト |
| 5 10Y5/1 灰シルト       | 28 2.5Y5/2 増戻黄シルト   | 51 2.5Y4/2 増戻黄シルト   |
| 6 7.5Y4/1 灰シルト      | 29 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 52 10Y4/1 灰シルト      |
| 7 7.5Y5/1 灰シルト      | 30 7.5Y5/1 灰シルト     | 53 10Y4/1 灰シルト      |
| 8 10Y5/1 灰シルト       | 31 7.5Y5/1 灰シルト     | 54 10Y4/1 灰シルト      |
| 9 2.5Y4/2 増戻黄シルト    | 32 2.5Y4/1 黄灰シルト    | 55 5Y5/2 灰オリーブシルト   |
| 10 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 33 5Y5/1 灰シルト       | 56 2.5Y4/2 増戻黄シルト   |
| 11 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 34 5Y4/1 灰シルト       | 57 2.5Y4/2 増戻黄シルト   |
| 12 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 35 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 58 5Y5/1 灰シルト       |
| 13 5Y4/2 灰オリーブシルト   | 36 7.5Y4/2 灰オリーブシルト | 59 2.5Y4/2 増戻黄シルト   |
| 14 10Y5/1 灰シルト      | 37 7.5Y5/1 灰シルト     | 60 2.5Y4/1 黄灰シルト    |
| 15 5Y5/2 灰オリーブシルト   | 38 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 61 2.5Y4/2 増戻黄シルト   |
| 16 5Y5/2 灰オリーブシルト   | 39 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 62 2.5Y4/2 増戻黄シルト   |
| 17 7.5Y4/1 灰シルト     | 40 5Y4.4 増オリーブシルト   | 63 7.5Y4/1 灰シルト     |
| 18 5Y5/2 灰オリーブシルト   | 41 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 64 2.5Y4/2 増戻黄シルト   |
| 19 5Y5/2 灰オリーブシルト   | 42 7.5Y5/1 灰シルト     | 65 2.5Y4/1 黄灰シルト    |
| 20 2.5Y4/2 灰オリーブシルト | 43 7.5Y5/2 灰オリーブシルト | 66 2.5Y4.3 オリーブ増シルト |
| 21 10Y5/2 オリーブ灰シルト  | 44 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 67 5Y5/1 灰シルト       |
| 22 5Y4/1 黄灰シルト      | 45 2.5Y4/1 黄灰シルト    | 68 2.5Y5/3 黄増シルト    |
| 23 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 46 2.5Y5/2 増戻黄シルト   | 69 7.5Y5/1 灰シルト     |

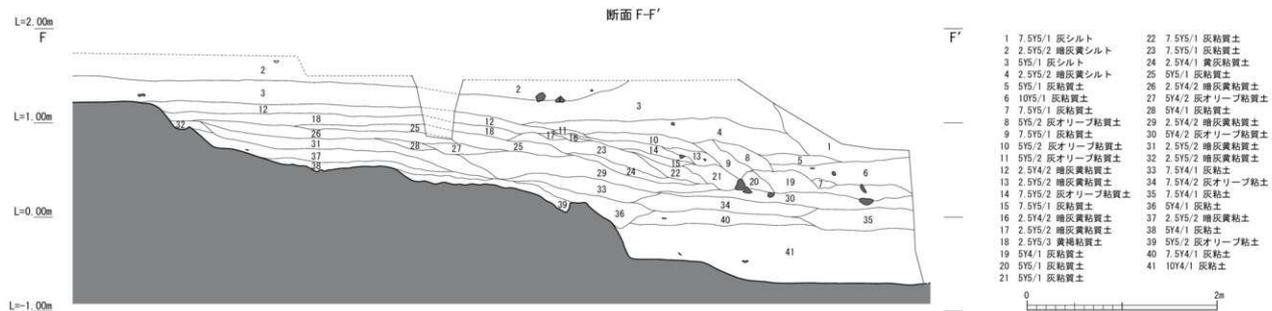
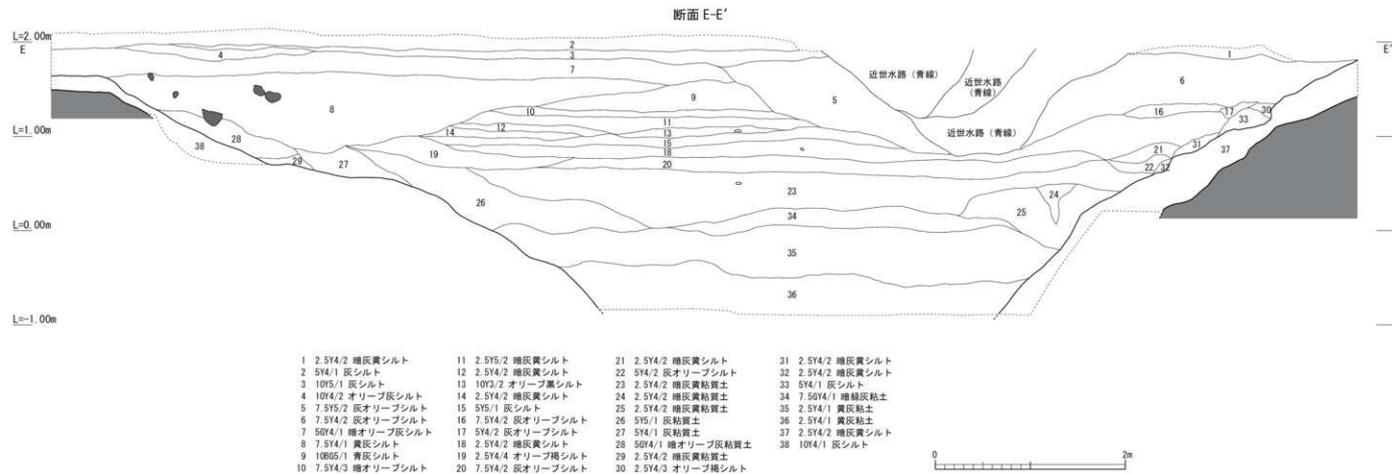


- |                    |                   |                   |                     |                   |                     |                   |
|--------------------|-------------------|-------------------|---------------------|-------------------|---------------------|-------------------|
| 1 5Y5/1 灰シルト       | 9 2.5Y4/2 増戻黄シルト  | 17 5Y4/2 灰オリーブシルト | 25 7.5Y4/1 灰シルト     | 33 2.5Y4/2 増戻黄シルト | 41 5Y4/1 灰シルト       | 49 2.5Y4/2 増戻黄シルト |
| 2 7.5Y5/1 灰シルト     | 10 5Y5/1 灰シルト     | 18 10Y65/2 灰黄増シルト | 26 10Y5/1 灰シルト      | 34 2.5Y4/2 増戻黄シルト | 42 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 50 5Y4/2 灰オリーブシルト |
| 3 10Y5/1 増戻黄シルト    | 11 2.5Y4/1 黄灰シルト  | 19 10Y4/1 灰シルト    | 27 2.5Y4.6 オリーブ増シルト | 35 2.5Y4/2 増戻黄シルト | 43 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 51 M4/0 灰シルト      |
| 4 7.5Y4/2 灰オリーブシルト | 12 5Y4/1 灰シルト     | 20 5Y4/1 灰シルト     | 28 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 36 2.5Y4/2 増戻黄シルト | 44 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 52 2.5Y4/2 増戻黄シルト |
| 5 7.5Y5/1 灰シルト     | 13 2.5Y4/2 増戻黄シルト | 21 2.5Y4/1 黄灰シルト  | 29 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 37 2.5Y5/2 増戻黄シルト | 45 7.5Y4/2 灰オリーブシルト | 53 7.5Y5/1 灰シルト   |
| 6 7.5Y5/2 灰オリーブシルト | 14 2.5Y4/2 増戻黄シルト | 22 2.5Y4/1 黄灰シルト  | 30 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 38 2.5Y4/2 増戻黄シルト | 46 7.5Y4/1 灰シルト     | 54 7.5Y5/1 灰シルト   |
| 7 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 15 5Y4/1 灰シルト     | 23 2.5Y4/1 黄灰シルト  | 31 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 39 2.5Y4/2 増戻黄シルト | 47 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 55 7.5Y4/1 灰シルト   |
| 8 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 16 7.5Y4/1 灰シルト   | 24 2.5Y4/2 増戻黄シルト | 32 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 40 5Y4/1 灰シルト     | 48 2.5Y4/2 増戻黄シルト   | 56 2.5Y4/2 増戻黄シルト |

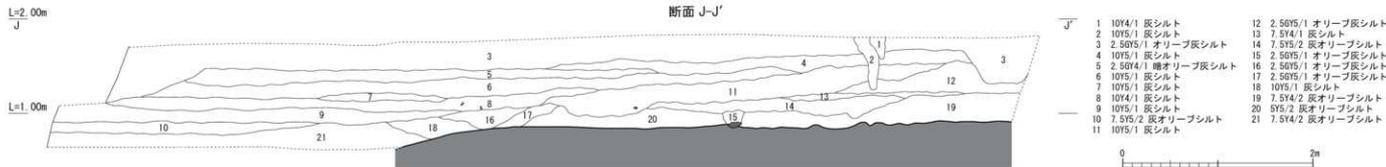
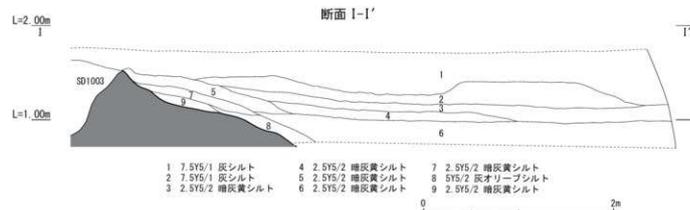
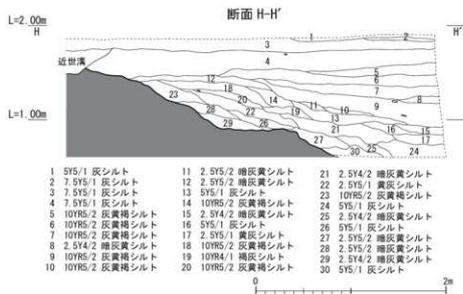
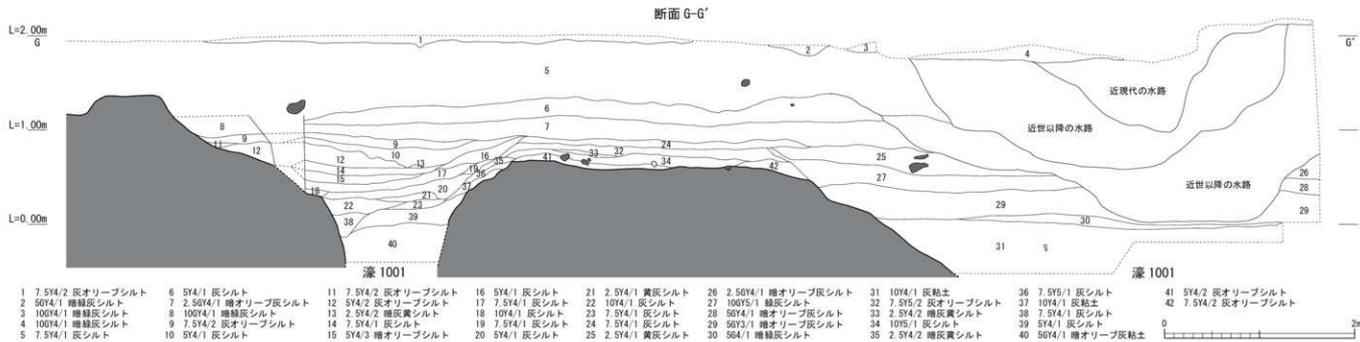
第 67 図 濠 1001 断面図 (1)



第 68 図 濠 1001 断面図 (2)



第69図 濠1001断面図(3)



第70図 濠1001断面図(4)

10-II区では濠の西法面にテラス状の平坦面を確認しており、そこから南へ約40m、濠底に幅約3mの台形状の掘り残しが舌状に延びる。テラス状の平坦面及び台形状の掘り残しは船着き等の可能性も考えられるが、現時点では明らかでは無い。テラス状の平坦面の西側では、濠の西屑上に天端の平らな石が確認されており、ここに何らかの構造物が存在したのであろう。構造物の性格についても不明であるが、濠1001の西側の区画への入口等の施設ではないかと考える。

また、11-I区の南端では濠幅は約8m程度に狭まり、東へ約80°折れる。濠の東側にあたるこの地点には東西約8m、南北約12mの張出部が形成されており、その上面には建物1-5(SB1005)が検出されている。ここは、濠1001が最も狭くなる地点であるが、濠の西法面では柱あるいは杭と考えられる木質が検出されており、ここには橋等の施設が存在した可能性が考えられる。東へ折れた濠は、再び幅が広くなり、張出部の北側では約13m、さらに15m以上の規模となって東へ延びる。濠の南屑は検出されていないが、調査区の南端付近では右上がりの堆積が確認できるため、まもなく立ち上がるものと思われる。

〈出土遺物〉

濠は、広い範囲に及ぶため出土遺物については調査区毎に紹介する。

### 3-II区 (第71図)

1～5は手づくね成形の土師質土器皿である。1と2は橙色系、3～5は灰白色系である。

6はロクロ成形の粗製の土師質土器皿である。口径は8.4cmに復元され、底部切り離しは回転ヘラ切りである。7と8はロクロ成形の土師質土器皿で、底部切り離しは静止糸切りである。逆「ハ」字状に直線的に立ち上がる体部を持ち、器高は2.5cm前後とやや深くなる。

9は小柄である。

10～17は、北宋銭である。10は真書体の天禧通寶で1017年初鑄。11は篆書体の天聖元寶で1023年初鑄。12は篆書体の熙寧元寶で1068年初鑄。13は篆書体の元豊通寶で1078年初鑄。14は篆書体、15は行書体の元祐通寶で1086年初鑄。16は篆書体の聖宋元寶で1101年初鑄。17は篆書体の政和通寶で1111年初鑄。18は無文銭である。

### 10-II区 (第72図～第77図)

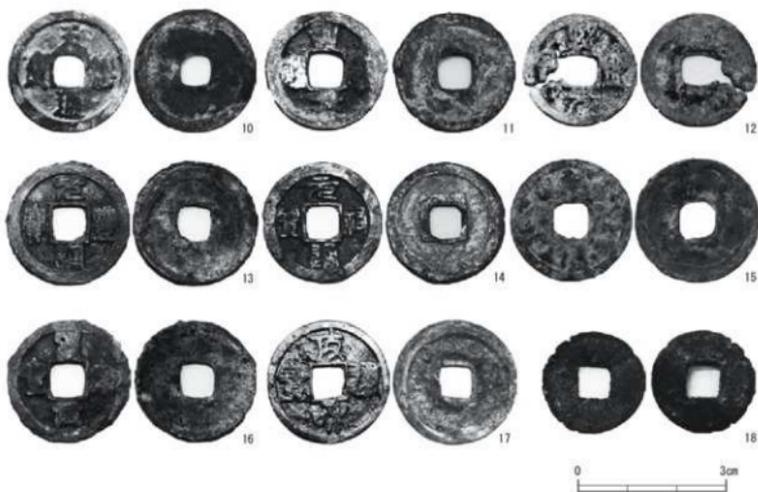
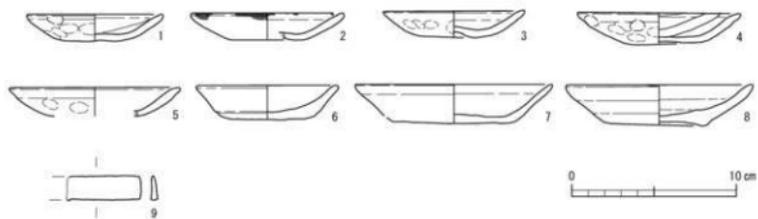
(第72図は第Ⅲ層出土遺物、第73図～第77図は第Ⅴ層出土遺物である。)

19～21手づくね成形の土師質土器皿で、口径は9cm前後となる。19と20は灰白色系で底部がやや突き上げ底になる。21は橙色系である。22はロクロ成形の土師質土器皿で、底部切り離しは回転ヘラ切りである。

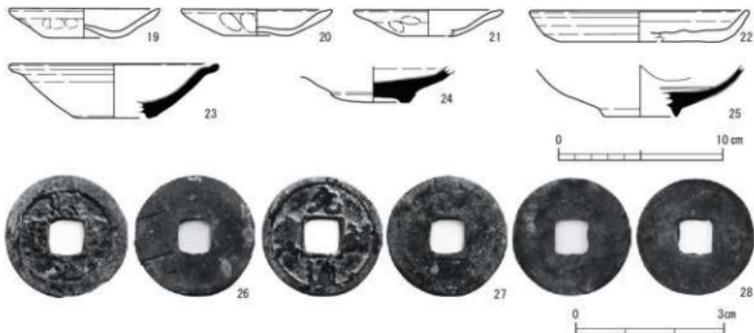
23と24は唐津焼皿、25は伊万里焼碗である。

26は真書体の熙寧元寶で1068年初鑄、27は行書体の元祐通寶で1086年初鑄、いずれも北宋銭である。28は無文銭。

29～34は手づくね成形の土師質土器皿である。29～33はやや突き上げ底となる器形で、内面には「の」の字状のナデ上げが認められる。34は口径11.2cmに復元され、内面には「2」の字状のナデ上げが認められる。29と34の口縁部にはターゲが付着しており、灯明皿である。



第71图 濠1001(3-Ⅱ区)出土遗物实测图



第72图 濠1001(10-Ⅱ区)第三层出土遗物实测图

35～37は、ロクロ成形の土師質土器皿で、底部切り離しは回転ヘラ切りである。体部にはロクロ目が顕著に残る。38と39はロクロ成形の土師質土器皿で底部切り離しは静止糸切りである。40は土師質土器杯で、上方に直線的に立ち上がる体部を持つ。

41は土師質土器鍋で、播磨型の製品である。体部外面下半には平行タタキの痕跡を留める。体部はやや内傾し、端部を丸く収める。42と43瀬戸美濃焼天目茶碗である。体部はやや内彎しながら立ち上がり、端部は外方に小さく折り返す。軸は体部下半までかかり、露胎部分には錆輪がかかる。43は軸が黄白色系を呈しており、黄天目である。

44は端反りの白磁皿で、森田分類のE2群に相当する。45は白磁碗で森田分類のB'群に相当する。46は青花皿で、体部は内彎しながら立ち上がる。破片であるため全体像は見えないが、見込みには山水人物が描かれ、外底面には「洪」の文字が見える。「洪武年造」であろうか。小野分類の皿E群に相当する。

47は小柄である。表面に渦状の文様が施される。

48は刃渡り31cmの小刀である。約7cmの茎まで完全に残っており、直径5mmの目釘穴も認められる。

49は真書体の開元通寶で621年初鑄の唐銭である。50は行書体の至道元寶で995年初鑄、51は真書体の天聖元寶で1023年初鑄、52は真書体の熙寧元寶で1068年初鑄、これらはいずれも北宋銭である。53は無文銭。

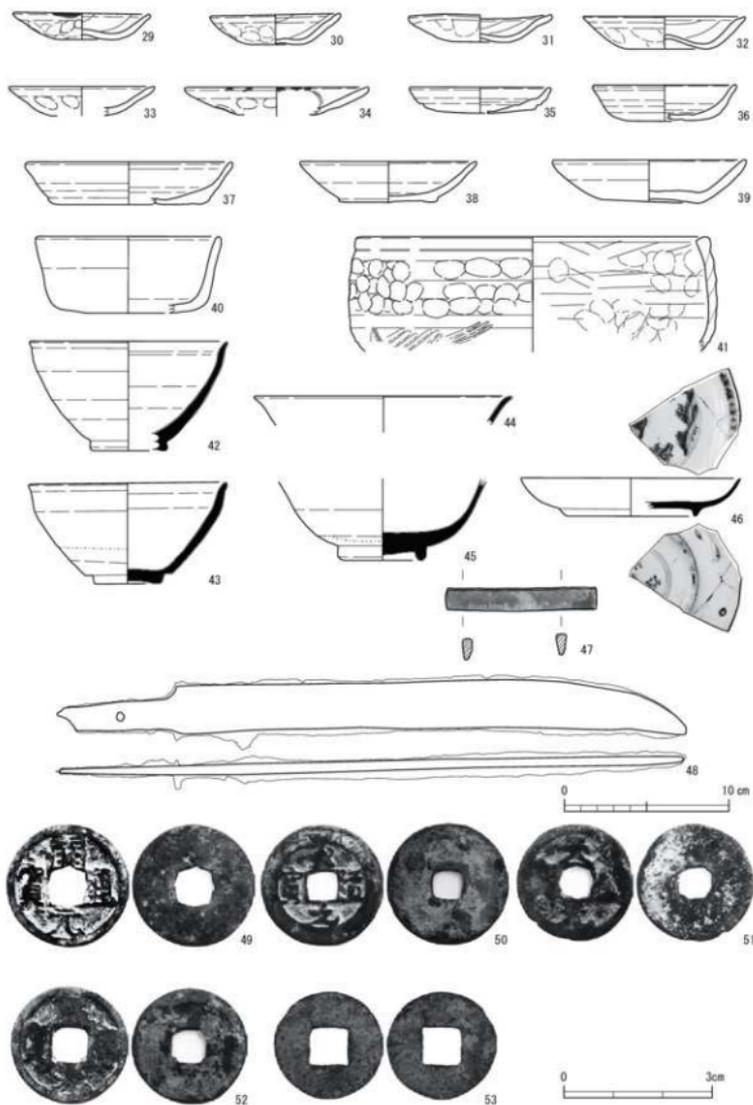
以下は、第10次発掘調査で濠1001から出土した木製品である。木製品は第V層とした有機質粘土層から大量に出土しており、形状や用途が不明なものも多くある。ここでは、形状が分かり実測可能なものをピックアップして掲載した。

54～56は高台が低く、やや浅いタイプ、57は高台が高いタイプの漆器椀である。54は、外面は黒漆の上に朱漆で草花文が施され、内面は朱漆で仕上げられる。高台内に「大」の文字が刻まれている。55は高台内を黒漆、内外面を朱漆、56は外面を黒漆、内面をやや茶色がかかった朱漆で仕上げる。57は、外面は黒漆の上に朱漆で草花文が施され、内面は朱漆で仕上げる。

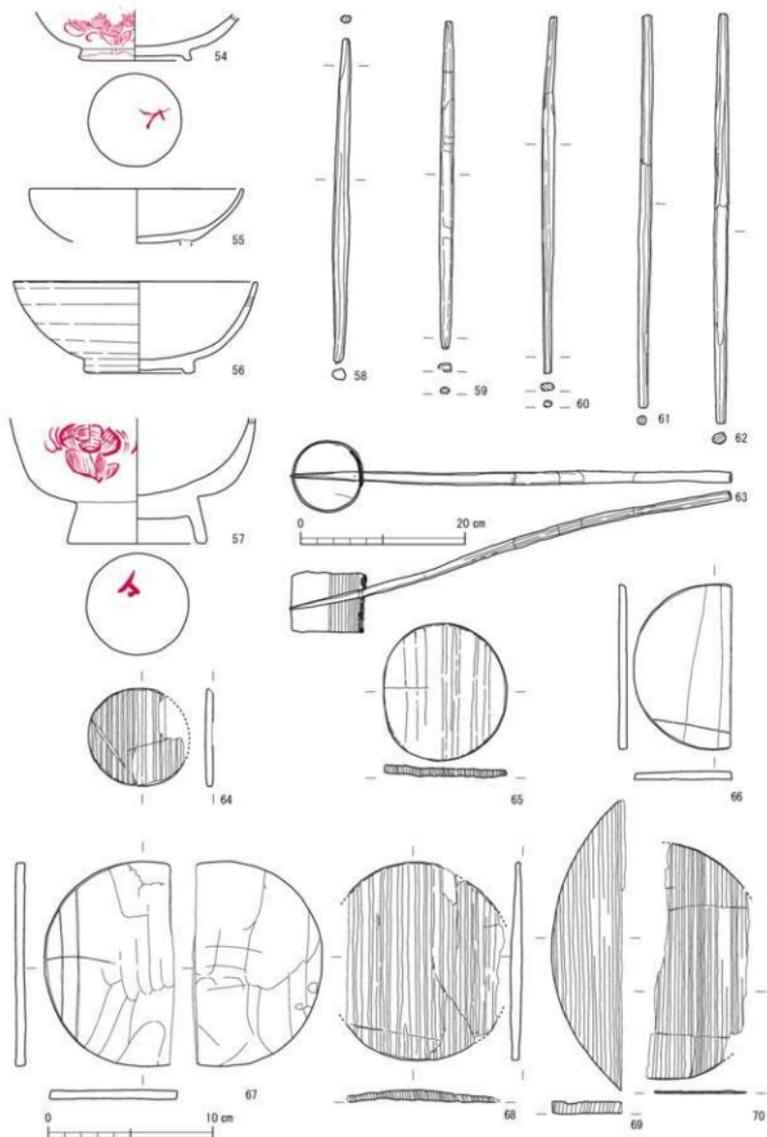
58～62は太さ0.5cm～1.0cm程度、長さ20～25cm程度で両端を細く削る棒状の木製品で、著と思われる。63は柄杓。胸部は直径8.6～8.8cm、深さ7.1cmの曲物で、柄を差し通す。64～72は曲物あるいは桶などの木製容器の底部と思われる。直径6cm～23cmの様々な大きさの円形の板で、厚さは薄いもので1mm、厚いもので8mmを測り、いずれも柁目取りである。73と74は結桶の側板。長方形の柁目板で、断面は弧状を呈する。75は横椀で、直径5cm・長さ22.5cmの頭部に直径3.2cm～4.0cm・長さ10cm程度の柄が付く。

76はトンボと思われる。木の葉形の加工木の中央部に直径5mm程度の孔を穿ち、両側を対照的に薄く斜めに削っている。77は独楽である。上面をロクロで削り、心棒は削り出しによる。赤・黄・緑の三色に同心円状に彩色されている。78は小刀あるいは短刀の柄で、植物の蔓による柄巻が施されている。79は連函下駄。

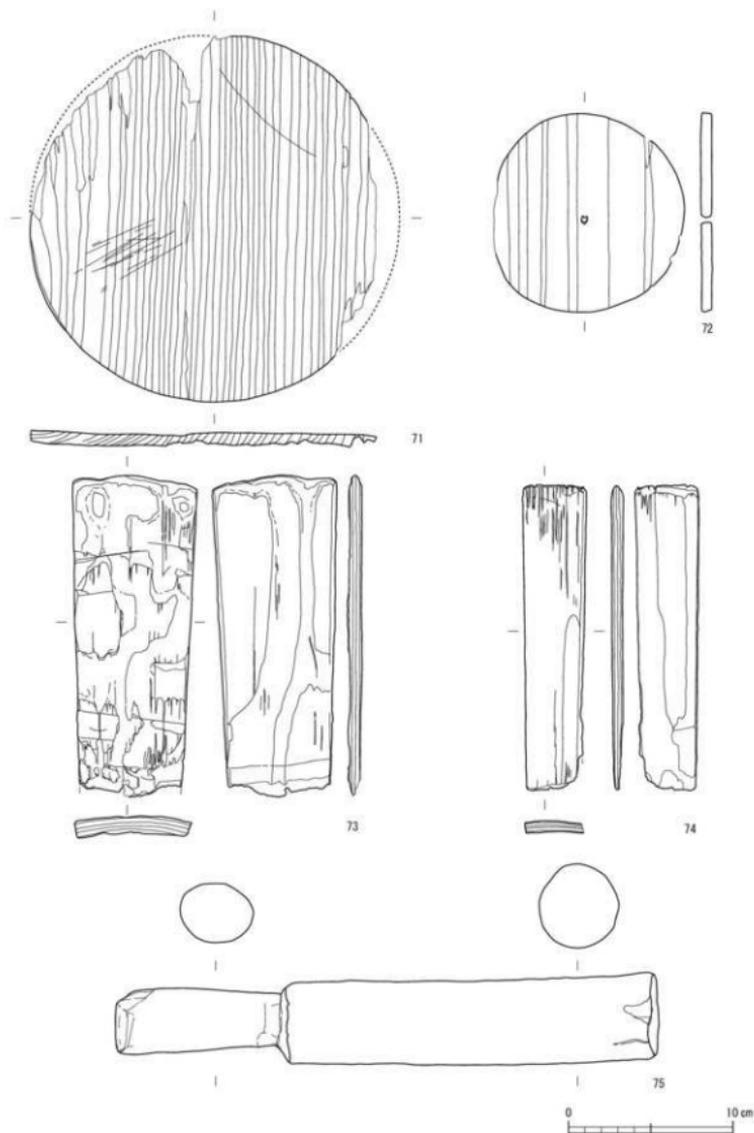
80～87はこけら経で、いずれも妙法蓮華経の経文が墨書されている。頭部の残るものは山形



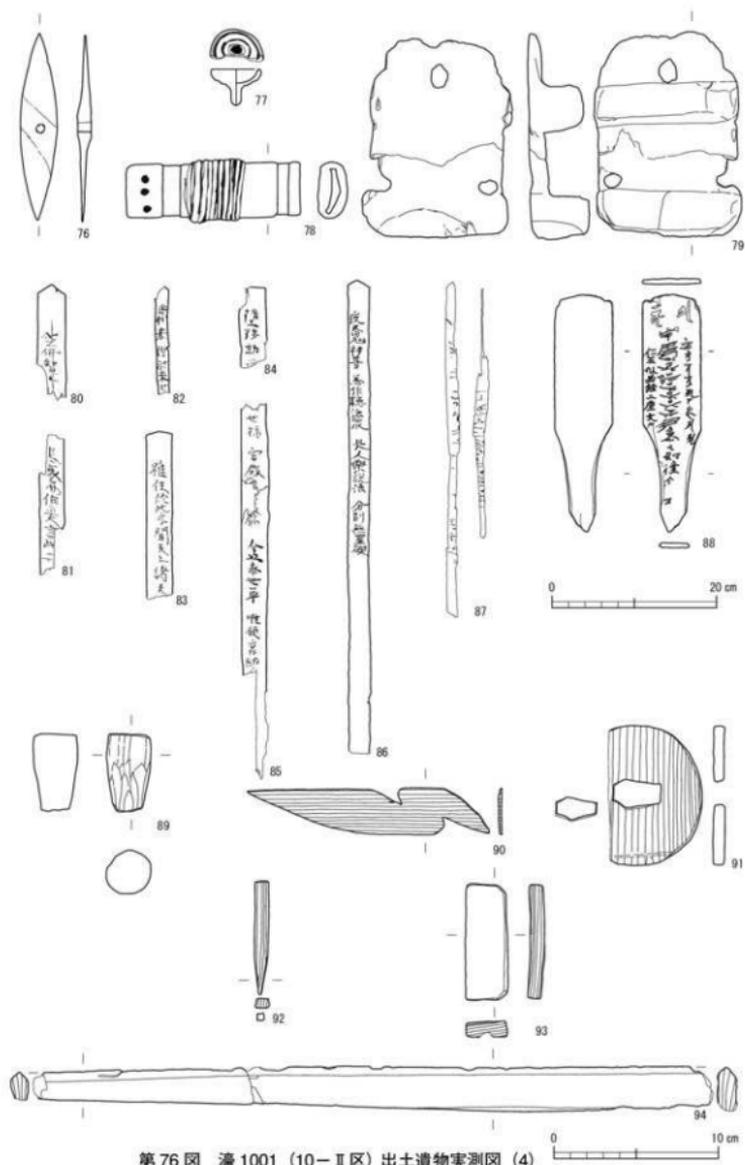
第73图 濠1001(10-II区)出土遗物实测图(1)



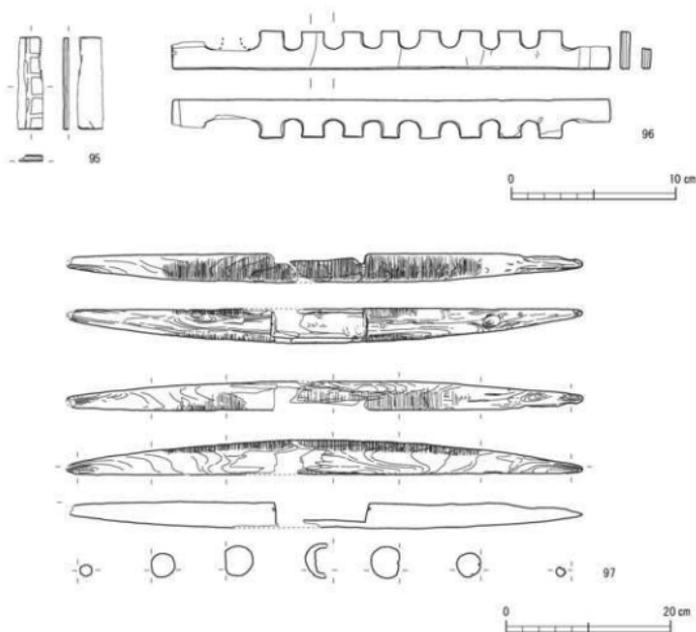
第74图 濠1001(10-II区)出土遗物实测图(2)



第75图 濠1001(10-II区)出土遗物实测图(3)



第76图 濠1001(10-II区)出土遗物实测图(4)



第77図 濠1001(10-I区)出土遺物実測図(5)

を呈する。88は呪符木筒で、墨書きは残っていないが、墨の部分盛り上がり残っている。上部に観音菩薩をあらわす種子(サ)と不動明王をあらわす種子(カーン)が記される。下の右側は梵字、中央に符録と「急々如律令」、左側に「仁王般若経二座文」の文字が見える。

89は円柱状の木製品で栓であろうと思われる。下部をやや細く削る。90は鳥形である。

91～97は用途不明の加工木である。91は円形の板で、中心部に変形の六角形の孔が開く。92は先端部を尖らせた棒状の木製品である。93は片面に筋状の凹みが認められる。94は棒状の製品で、柄杓の柄であろうか。95には朱色で碁盤目状のラインが見える。96は板状の製品で、直径1.1cmの半円形に削り抜いた箇所が10箇所あったことが確認できる。97は両端が丸く先細りの形状で、中央部に2.8cm×11.8cmの長方形の孔が穿たれる。二面に何かを巻き付けていたような多数の筋が認められる。

#### 11-I区 (第78図～第82図)

98～111は手づくね成形による土師質土器皿で、色調はいずれも灰白色系である。98～101は口径が8.5cm前後、102～104は9.5cm前後、105・106は10cm程度となり、内面には「の」の字状のナデ上げ痕を留める。103・104・106の口縁部にはタールの付着が見られ、灯明皿である。107～109は口径が13cm前後、110・111は15cm弱に復元され、内面底面端をやや強くヨコナデした後、「2」の字状のナデ上げの痕跡を留める。

112は厚い器壁を持つ杯で、底部はヘラ切りの後、丁寧にナデ仕上げしている。口縁端部は面を取り、平たく収める。113～121はロクロ成形で底部切り離しが回転ヘラ切りによる土師質土器皿である。113・114は口径8cm弱、115・116は8.5cm前後、117～121は11.5cm弱で、器壁が厚く、ロクロ目を顕著に残す。

122・123はロクロ成形で、底部切り離しが静止糸切りによる土師質土器皿である。口径はいずれも8cm前後で、体部は、122はやや内彎し、123は逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる。

124は土師質土器釜で、口縁部と鈿部が形骸化した形状を持ち、口径は復元値で26.7cmを測る。

125～127は瀬戸美濃焼天目茶碗である。125は直線的に開く体部を持ち、126・127はやや内彎気味に立ち上がる体部を持つ。口唇部はほぼ直立し、端部は外反する。体部外面下方には鎗軸が施される。128は瀬戸美濃焼灰釉丸皿で、体部は内彎し、端部は外反する。高台内には輪トチンの痕跡が認められる。見込みには印花文が施される。

129・130は備前焼播鉢である。129は直立した口縁帯、130はやや内傾する口縁帯を持ち、口径はそれぞれ29.5cm、18.8cmに復元される。口縁帯外面には弱い凹線が巡り、間壁幅年のV期に相当する。131は備前焼壺で、頸部はやや外反し端部は玉縁状を呈する。肩部には節目による5条の沈線が巡る。

132は白磁小杯。口径は7.0cmに復元され、ゆるやかに外反する体部を持つ。見込みは円形に軸を掻き落とす。133～138は端反りの白磁皿で、森田分類のE2群に相当する。139は青花小杯で、内彎しながら立ち上がり体部を持ち、端部は外反する。体部外面には草花文、口縁内部には四方樺文が施される。140は端反りの青花皿である。体部外面には牡丹唐草が施される。小野分類の皿B群に相当する。141・142は青花碗である。141はやや開いた体部を持ち、外部に捻花文が描かれる。142はいわゆる饅頭心の碗で、見込みがゆるやかに盛り上がった形状をもつ。見込みには如意雲が施される。

143は鉄鍔と思われる。先端部は尖り、細長い四角錐形を呈する。製品の中程よりやや上部で捻られ、以下は断面形が一辺2mm程の方形で細長く延びる。この部分は茎と考えられ、出土したときの部分は、矢柄と考えられる竹に入った状態であった。144は鉄鍔である。全体の長さは10.4cmを測り、茎は3～5mmの方形で約8.1cmである。

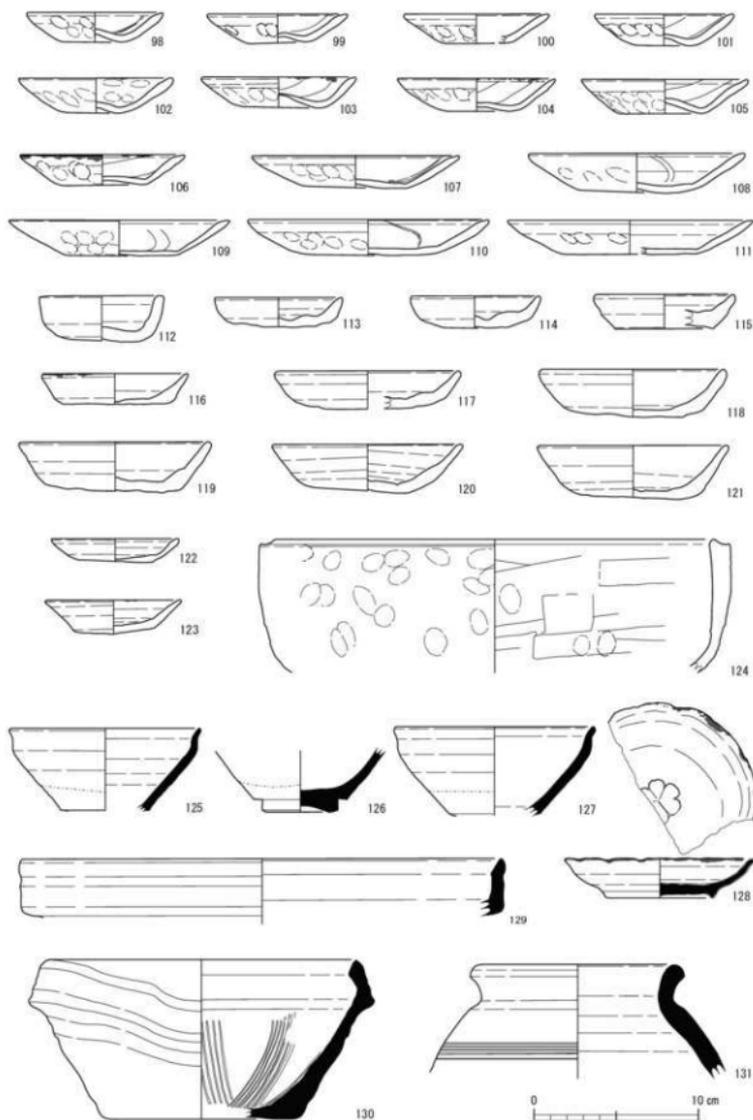
145～149は銅銭である。145は嘉祐元寶で1056年初鑄、146は真書体、147は篆書体の熙寧元寶で1068年初鑄、いずれも北宋銭である。148は洪武通寶で1368年初鑄の明銭、149は無文銭である。

150～163は漆器椀である。163は内外面ともに黒地であるが、それ以外は外面は黒地、内面を朱塗りで仕上げる。木取りはいずれも縦木取りである。150・151は高台が低く、やや浅いタイプである。150の体部外面には朱漆による梅文が描かれる。152～157はやや深くなり、158～163は高台が高く、深型の椀である。163の高台内には刻字が見られる。

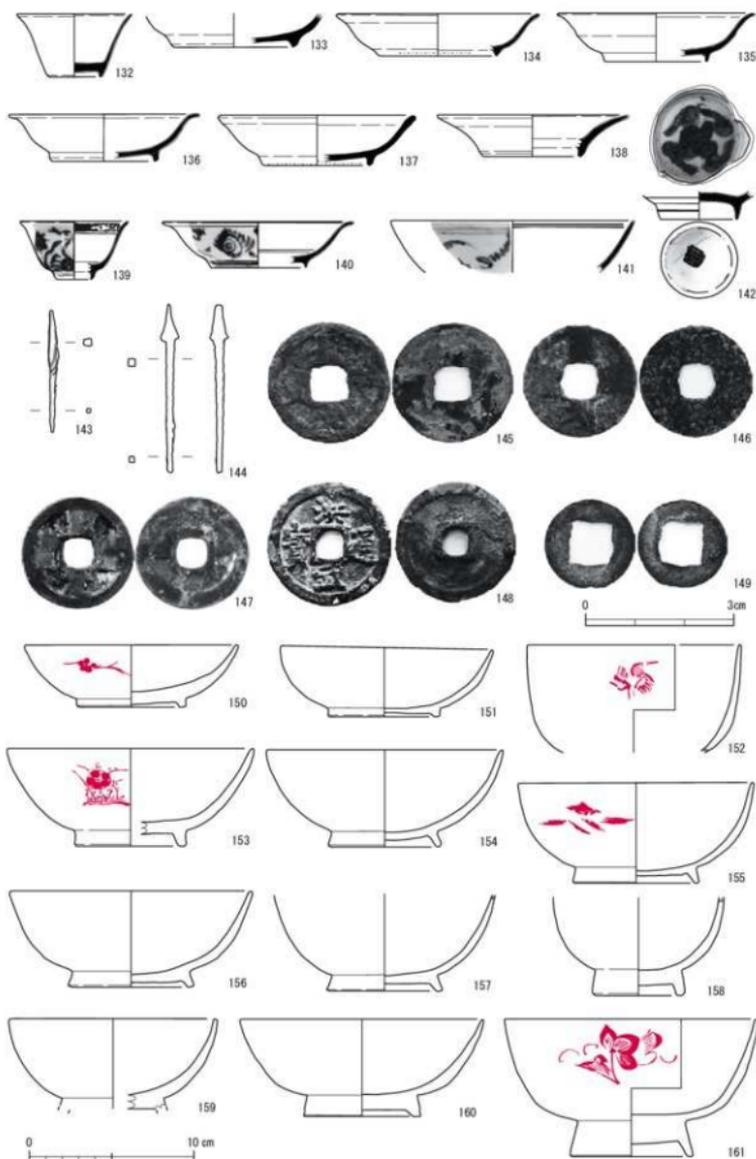
164～170は箸で、ヒノキあるいはスギが使われている。長さは17.8cm～23.5cm、太さは0.5～0.8cmの方形で、両端が細くなる。171～173は箸である。171・172は先端が刃先形で、柄部は弧状に切り取り細くなる。173は小刀形の薄板である。これらは切匙であろう。174・175は羽子板である。厚さ1cm程度のヒノキの柃目板で作られている。176は独楽で、直径5.8cm、高さ3.6cmを測る。上部に5mm程の円柱形の部分を残し、下部を円錐形に削る。下部には心棒差し込み用の孔が穿たれている。

177は曲物で、ヒノキの柃目の薄板を筒状に加工し、桜皮綴りで仕上げる。

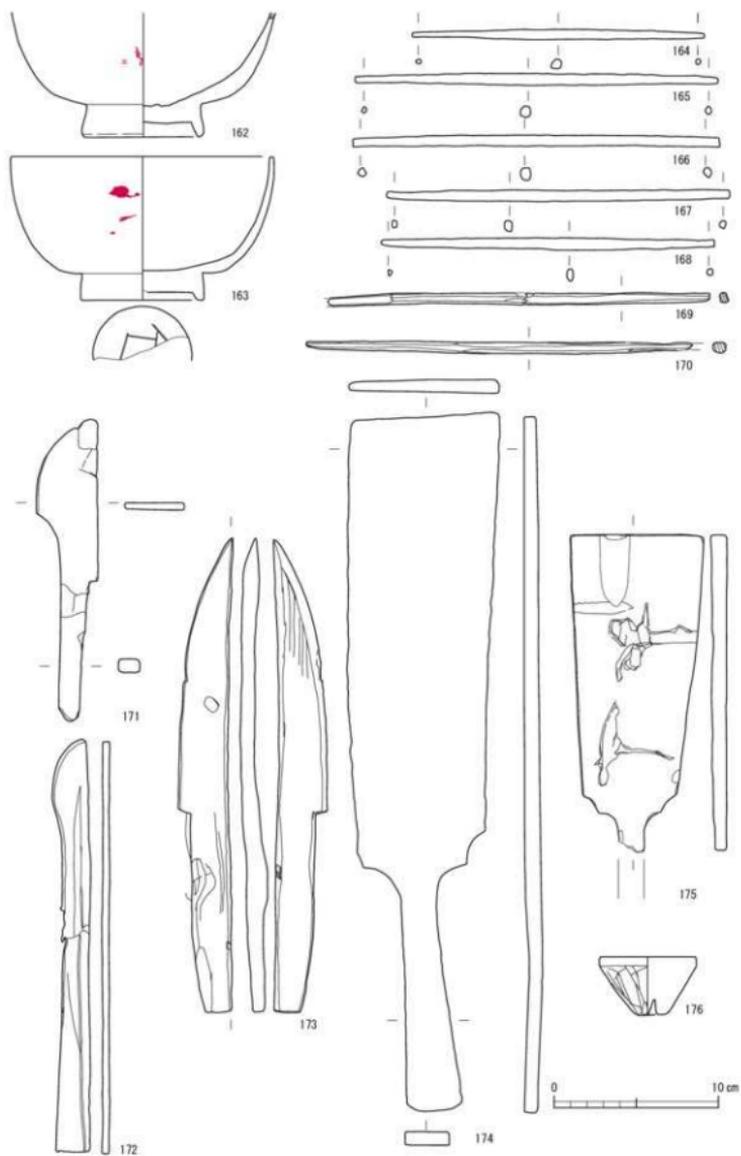
178～182は下駄である。長さが14cm弱ものと、19cm前後のものがあり、歯の高さも様々であるが、いずれも一木から台と歯を作り出した連歯下駄である。183は舟形。184は人面状の切り込みが入る棒状の木製品で、人形と思われるが、上端が尖り、炭化していることから火鑽子を転用したものかもしれない。185は、幅1cm程度の加工した竹で、片側を丸く削り出す。186はこけし形をした木製品で、長さは27.0cmを測る。上部から約3.4cmの部分をも5～8mm削り込み、円柱状の頭部を形成する。下部も削り込むが、中央よりやや上部が最も太く、そこから下部へ向かって細くなり、下端は尖る。その形状から人形であろうと考える。187～190は呪符木簡である。187は、判読は難しいが、墨書の痕跡が認められる。中央よりやや下部に穿孔があり、釘等が打たれていたものと考えられる。188は表面に梵字で「(カ)」の下に符録が記され、「八九七十二」などの文字が記される。189には「(ア) (ビラ)」等の梵字が見える。190は、墨は残っていないが、文字の部分が盛り上がっているため、ある程度は判読が可能で、「天王」や「九九八十一」、「八九七十二」、五芒星「☆」が見える。191は板状の加工木である。判読は不能であるが、両面に墨書が見られる。192は卒塔婆で頭部は山形に切る。表面は二条の界線の下に梵字で「(ア) (ビラ) (ウン) (ケン) (オン) (ハラ) (ドボウ?)」、さらに「・・・為・・・」の文字が見える。裏面には「(パン) (ハラ) (ドボウ) 南無阿弥陀仏」の文字が記されている。193・194はこけら経で、法華経の経文が記されている。195は加工木で、片側の角を2箇所丸くする。直径4mm程度の孔が4箇所認められ、何かに取り付けられていたものと思われる。196は弧状に穿った形成が認められ、形代であるかもしれない。



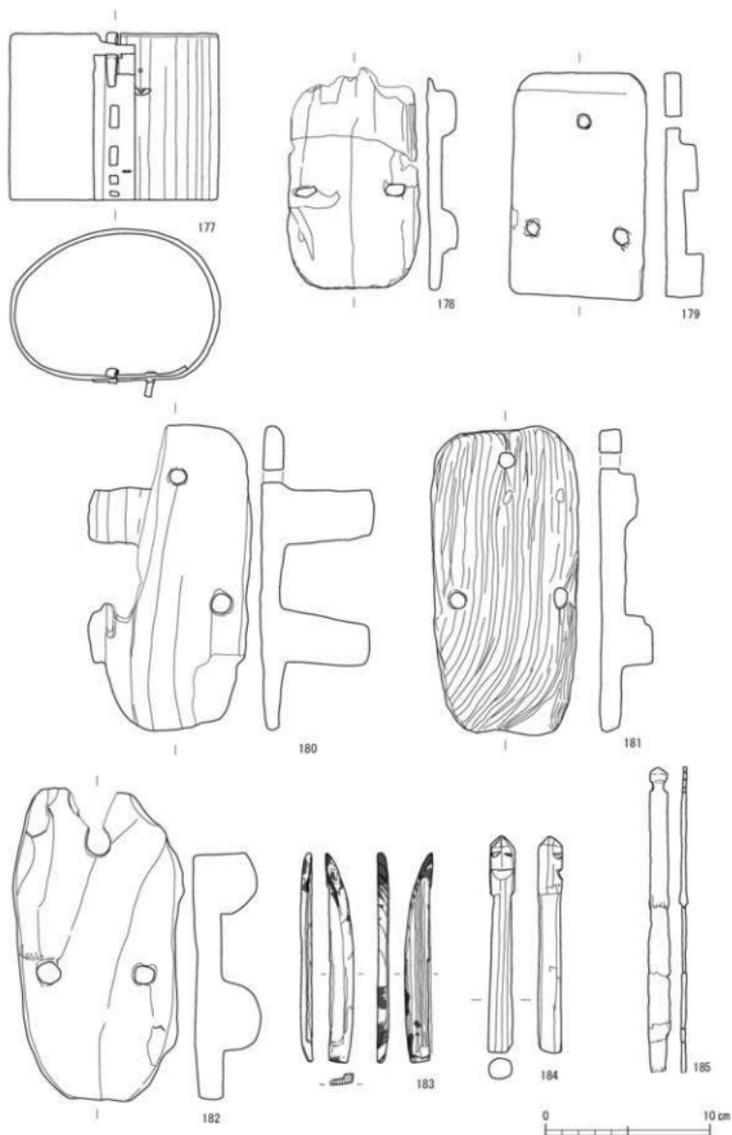
第78图 濠1001(11-I区)出土遗物实测图(1)



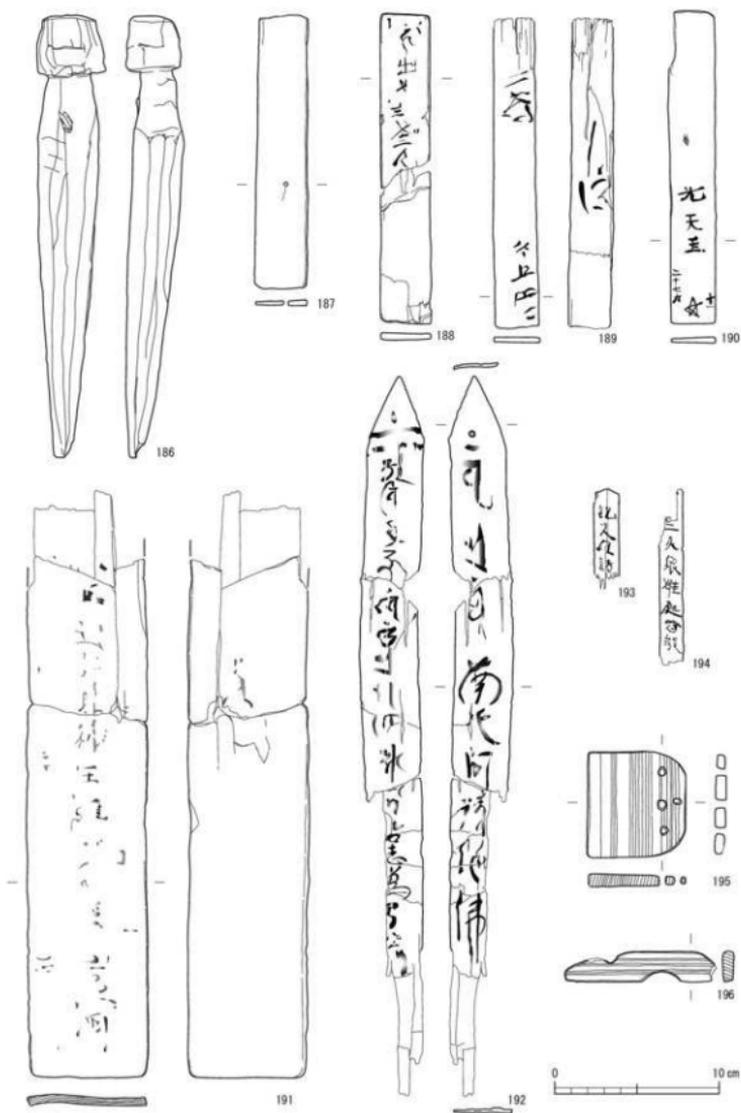
第 79 图 濠 1001 (11-I 区) 出土遗物实测图 (2)



第80图 濠1001(11-I区)出土遺物実測図(3)



第81图 濠1001(11-I区)出土遗物实测图(4)



第82图 濠1001(11-I区)出土物实测图(5)

12-I区 (第83図)

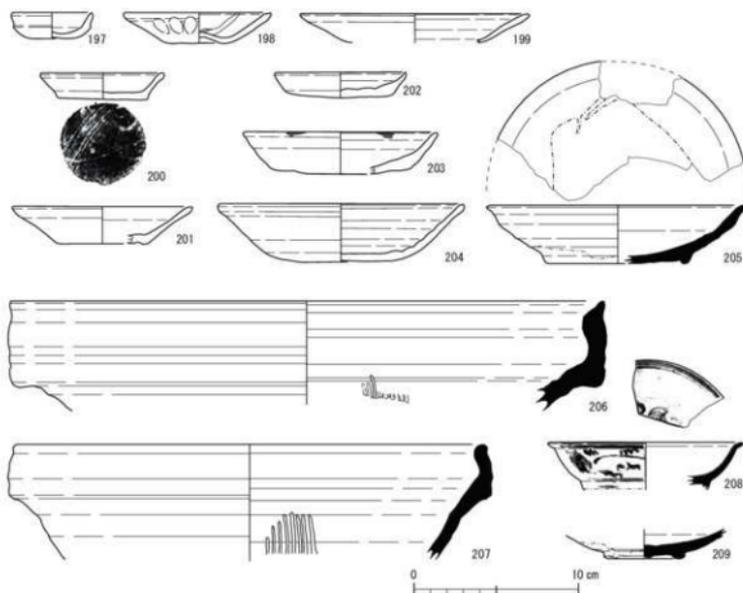
197～204は土師質土器皿で、そのうち197～199は手づくね、200～204はロクロによって成形されたものである。

197は口径4.8cmを測る小皿で、口縁端部から下に約8mmのところにはヘラなどによって段が形成されている。198は色調が灰白色系である。口径は8.7cmを測り、体部外面にはユビオサエの痕跡が顕著に認められ、底部は突き上げ底となる。内面はヨコナデの後、「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。199は色調が橙色系で、口径13.8cmに復元される。

200・201は平たい底部に静止糸切りの痕跡を留める。200は口径7.2cmを測り、逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる体部を持つ。201は口径10.8cmに復元され、体部は大きく開きながら直線的に立ち上がる形状を持つ。202～204は底部に回転ヘラ切りと板目の痕跡を留める。202・203は厚い体部を持つ粗製品で、204は深型の皿である。

205は瀬戸美濃焼の皿で、口径15.3cmに復元される。体部には灰軸が施されるが、内底面は灰軸を掻き落とし、錆軸を施す。高台は露胎である。

206・207は備前焼播鉢で、いずれも間壁編年のV期に相当する製品である。



第83図 濠1001 (12-I区) 出土遺物実測図

208は粗製の青花皿で、端反りの形状を呈する。見込みには2条の界線が施され、その内側に玉取獅子が描かれる。

209は唐津焼皿で、見込みに砂目痕が認められる。

## 濠 1-2 [濠 1002]

〈検出地点〉

2-Ⅲ区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (E-17・18、F-18)]

6-Ⅱ区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (A-18・19、B-18・19、C-18・19、D-18・19、E-17・18)]

13-Ⅰ区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (A-18・19、B-18・19、C-18・19、D-18・19、E-17・18)]

14-Ⅰ区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (A-16、B-15・16、C-15～17、D-15)]

〈形態等〉

現在、勝瑞館跡として指定されている範囲の南西部で確認された。南側の指定地外の土地にかけて「かじ池」と呼ばれる池が近年まであったようで、明治期の地籍図等にもため池が確認できる。このため池が濠の残欠である可能性が考えられ、調査を実施した。

調査では、30°前後の傾斜で南へ落ち込む濠 1002の法面が確認された。濠は幅 20 m近くになると推定され、ここから南へ延びる。深さは 2 m程度で、底には濠が常に帯水していたことを示す有機質粘土層が堆積する。

指定地の南端にも明治期の地籍図ではため池があり、これらも濠の残欠と考えられることから、濠は東の方へ曲がることが想定される。この濠の南側は、「西町」と呼ばれる地区で、伝承や歴史地理学的な検討から、勝瑞城下で唯一町が想定される。このことから、この濠が勝瑞城館の南を区画すると考えられる。

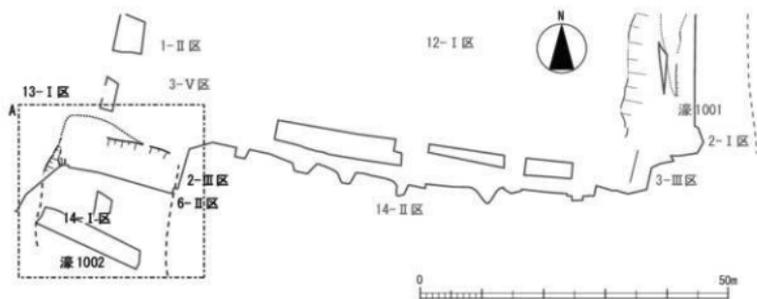
〈出土遺物〉(第 87・88 図)

210は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系である。内底面端には原体によるナデによってできた凹線が巡る。このサイズのものでは通常、「2」の字状のナデ上げを施すが、これには「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。211・212はロクロ成形による土師質土器皿で、底部にはそれぞれ回転ヘラ切りと静止糸切りの痕跡が認められる。

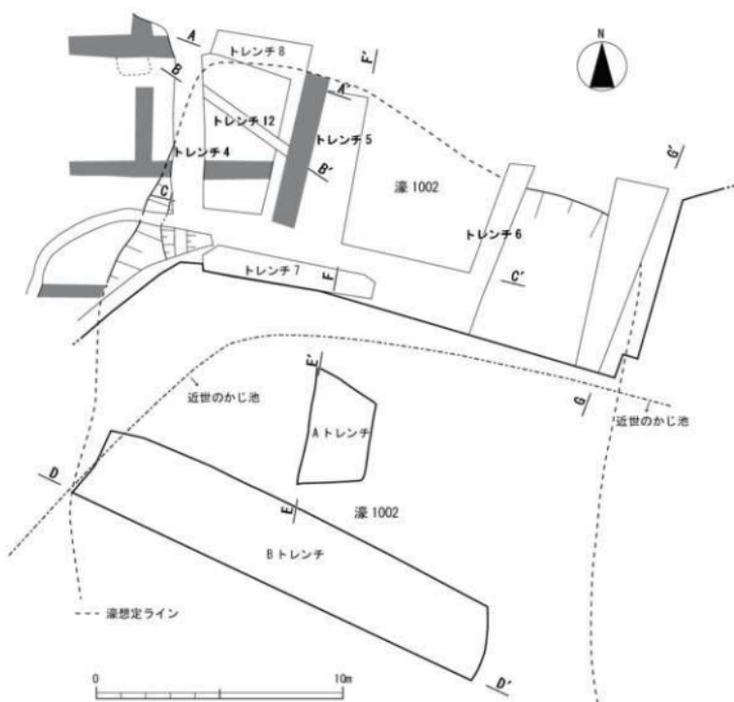
213は土師質土器鍋である。口縁端部は短く立ち上がり、直下に鈎が形骸化した凸帯が巡る。

214は端反りの白磁皿で、森田分類の E2 群に相当する。

215は龍泉窯系の青磁碗である。外面には片切彫連弁文が施されている。上田分類の BⅠ類に相当する。216は粗製の青花盤である。遺存部分では、高台から体部への立ち上がり部分に沈線とともに界線が巡る。見込部は界線によって区画され、螺旋状の文様が描かれる。

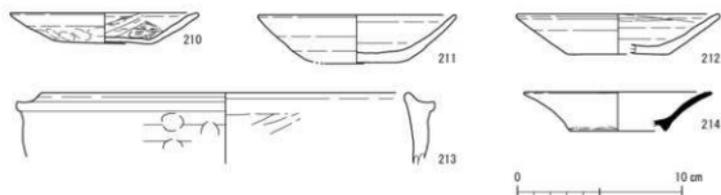


第84図 濠1002平面図

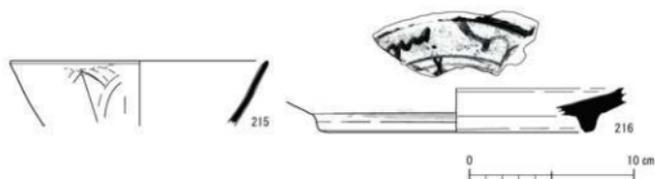


第85図 濠1002平面図(第84図のA)





第 87 図 濠 1002 (6-Ⅱ区) 出土遺物実測図



第 88 図 濠 1002 (13-Ⅰ区) 出土遺物実測図

### 濠 1-3 [濠 1003]

〈検出地点〉

3-Ⅰ区 [中グリッド (b-10)・小グリッド (F-5・6、G-5・6)]

10-Ⅰ区 [中グリッド (b-10)・小グリッド (P-4)]

11-Ⅰ区 [中グリッド (c-10)・小グリッド (E-2・3、F-2・3、G-2・3、H-2・3)]

14-Ⅲ区・Ⅳ区 [中グリッド (b-10)・小グリッド (G-5・6、H-5・6、I-5・6、J-4・5、K-4・5、L-4・5、M-4・5)]

〈形態等〉

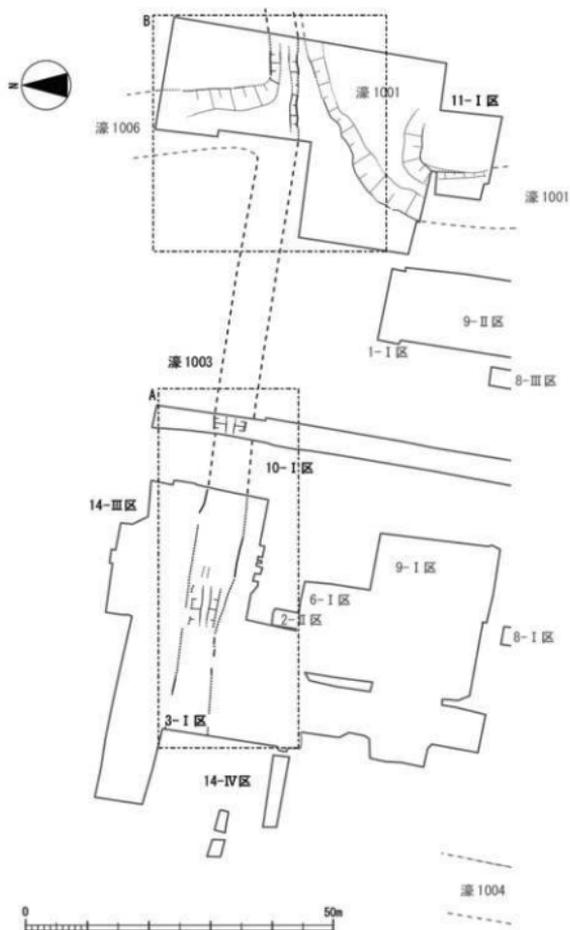
現在、勝瑞館跡として指定されている範囲の北側を東西方向に約 110 m 延びる濠。さらに濠 1001 に平行して東に延びることが地下レーダー探査で確認されている。軸は 7°～10° 南に振る。基本的な形状は上幅約 6 m、深さ 2～2.5 を測り、濠法面は 30°～40° で断面形状はゆるやかな V 字形から逆台形を呈する。濠底には常時帯水していたことを示す有機質粘土が堆積している。

〈出土遺物〉

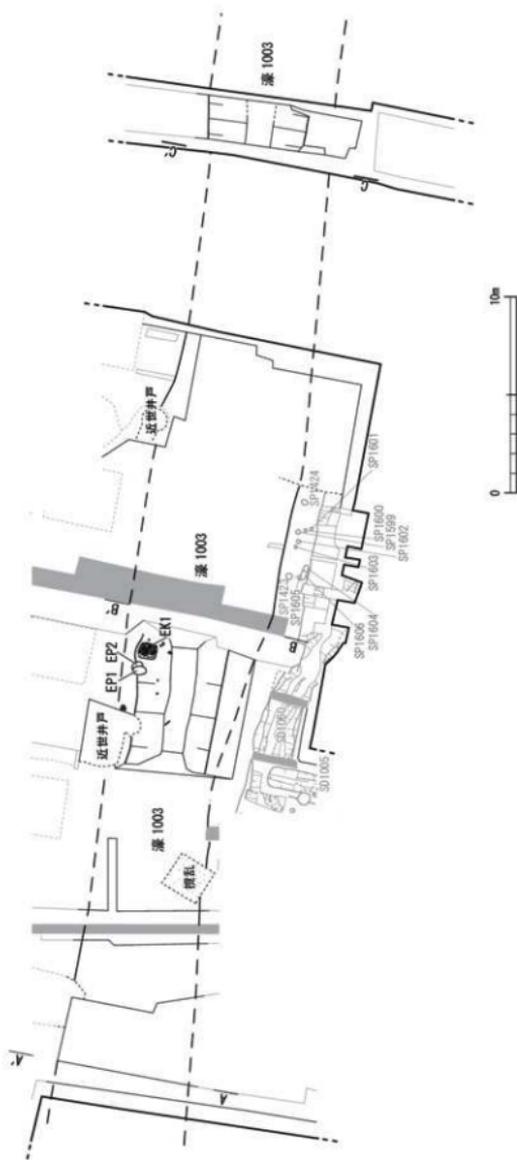
濠 1003 についても広い範囲に及ぶため出土遺物については調査時毎に紹介する。

#### 10-Ⅰ区 (第 97 図)

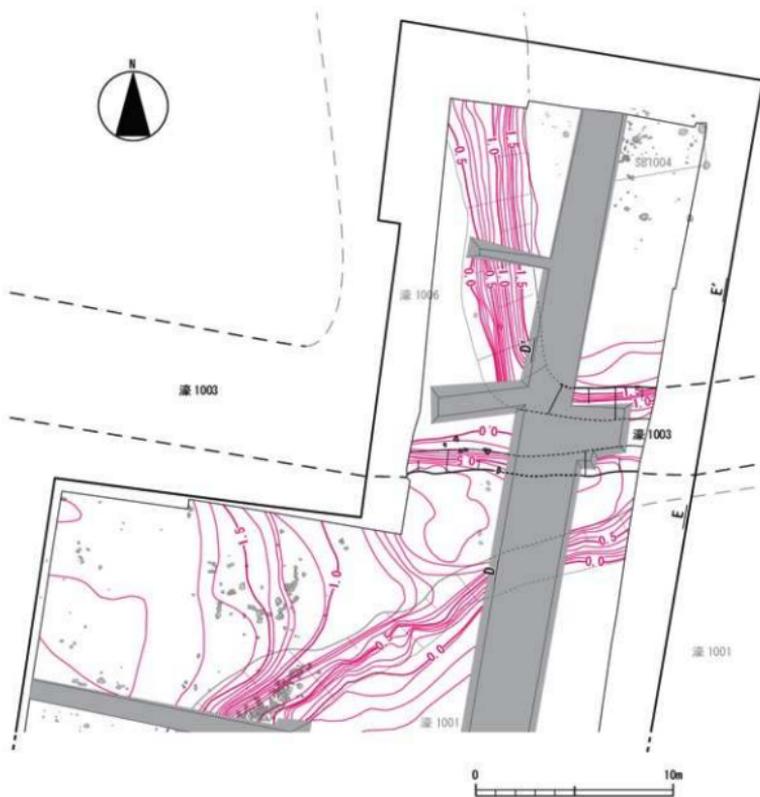
217～221 はいずれも手づくね成形による土師質土器皿である。217 は、口径 8.8cm の皿で、色調は橙色系を呈する。218～220 は灰白色系を呈し、口径は 12cm 前後となる。218 の口縁部にはタールが付着しており、灯明皿である。219 の内底面端には強いヨコナデによる圏線が巡り、「2」の字状のナデ上げが認められる。221 は口径 13.5cm を測り、内底面端には強いヨコナデが施され



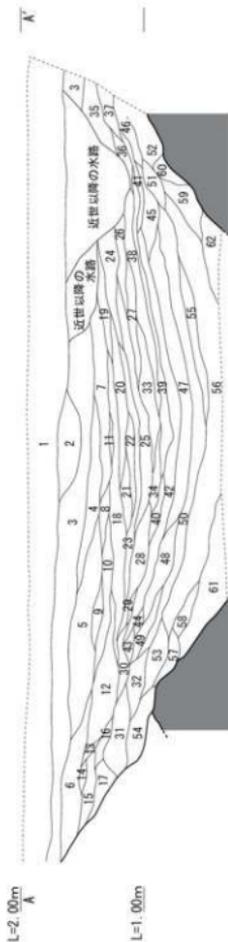
第 89 图 濠 1003 平面图



第 90 図 濠 1003 平面図 (第 89 図の A)



第 91 図 濠 1003 平面図 (第 89 図の B)

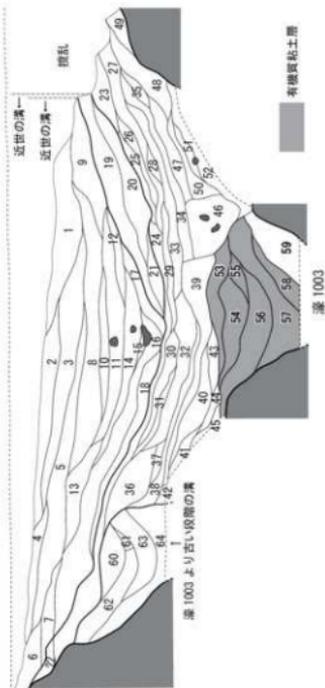


1	7.5/5/2 灰オリーブシルト	17	5/5/2 灰オリーブシルト	33	7.5/5/2 灰オリーブ粘質土	48	5/5/1 灰粘土
2	7.5/5/1 灰シルト	18	2.5/4/2 細灰質シルト	34	5/5/2 灰オリーブシルト	49	7.5/5/1 灰粘土
3	7.5/4/1 灰シルト	19	7.5/5/1 灰シルト	35	7.5/5/2 灰オリーブシルト	50	7.5/5/1 灰粘土
4	7.5/5/1 灰シルト	20	5/4/2 灰オリーブシルト	36	2.5/5/2 細灰質シルト	51	2.5/4/2 細灰質シルト
5	5/4/1 灰シルト	21	2.5/4/2 細灰質シルト	37	7.5/4/1 細灰質シルト	52	5/5/2 灰オリーブシルト
6	2.5/4/2 細灰質シルト	22	2.5/5/2 細灰質シルト	38	2.5/5/2 細灰質シルト	53	5/5/2 灰オリーブシルト
7	7.5/5/1 灰シルト	23	10/5/1 灰シルト	39	7.5/4/3 細オリーブ粘質土	54	5/4/2 灰オリーブシルト
8	5/4/1 灰シルト	24	5/5/2 灰オリーブシルト	40	5/5/1 灰粘質土	55	5/5/1 灰粘土
9	2.5/4/1 黄灰シルト	25	5/5/2 灰オリーブシルト	41	5/5/2 灰オリーブシルト	56	5/5/1 灰粘土
10	2.5/4/3 オリーブ粘シルト	26	2.5/5/2 細灰質シルト	42	2.5/5/2 細灰質粘土	57	5/5/2 灰オリーブ粘土
11	5/5/1 灰シルト	27	2.5/5/2 細灰質シルト	43	2.5/5/2 細灰質シルト	58	2.5/5/2 細灰質粘土
12	2.5/4/2 細灰質シルト	28	5/5/1 灰シルト	44	5/5/2 灰オリーブシルト	59	2.5/5/2 細灰質粘土
13	2.5/4/2 細灰質シルト	29	2.5/5/5.6 粘シルト	45	2.5/5/2 細灰質シルト	60	5/5/1 灰シルト
14	2.5/4/2 細灰質シルト	30	2.5/5/2 細灰質シルト	46	5/5/2 灰オリーブシルト	61	5/5/1 灰粘土
15	2.5/4/2 細灰質シルト	31	2.5/4/2 細灰質シルト	47	7.5/5/1 灰粘土	62	7.5/5/2 灰オリーブ粘土 (61層と対応)
16	7.5/4/2 灰オリーブシルト	32	2.5/4/2 細灰質粘質土				



第 92 図 濠 1003 断面図 (1)

L=2.00m  
B



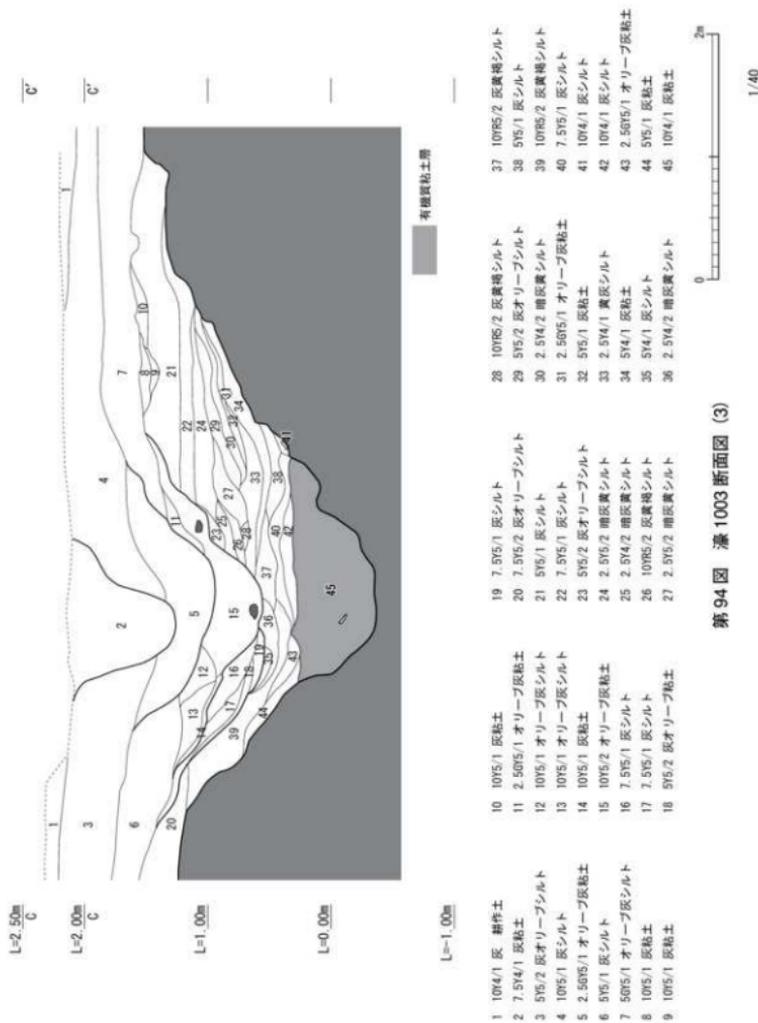
L=1.00m

L=0.00m

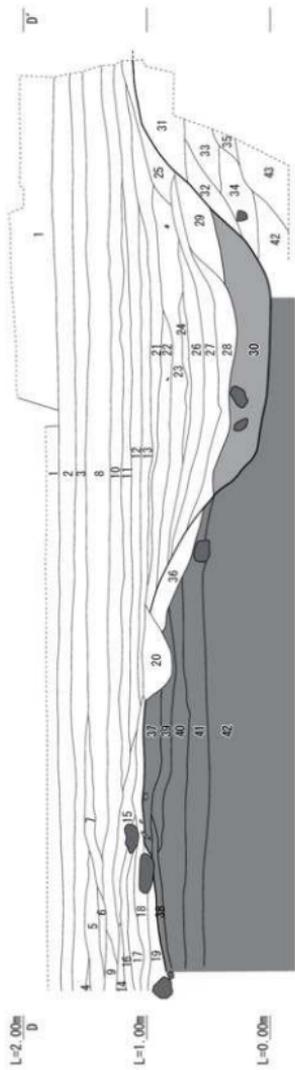
L=1.00m

- |            |          |         |          |             |
|------------|----------|---------|----------|-------------|
| 1 灰オリーブシルト | 14 灰シルト  | 27 灰粘質土 | 40 灰粘土   | 53 青灰粘土     |
| 2 灰オリーブシルト | 15 灰シルト  | 28 灰シルト | 41 灰粘土   | 54 暗灰粘土     |
| 3 灰オリーブシルト | 16 灰粘質土  | 29 灰粘土  | 42 灰シルト  | 55 暗粘質土     |
| 4 黄得砂質土    | 17 灰シルト  | 30 灰粘土  | 43 青灰粘質土 | 56 暗粘質土     |
| 5 灰オリーブシルト | 18 灰粘質土  | 31 灰粘質土 | 44 灰粘質土  | 57 暗粘質土     |
| 6 黄得砂質土    | 19 灰シルト  | 32 灰粘土  | 45 灰粘土   | 58 青灰粘土     |
| 7 黄得砂質土    | 20 灰シルト  | 33 灰粘土  | 46 灰粘質土  | 59 青灰砂泥じり粘土 |
| 8 青灰シルト    | 21 灰シルト  | 34 灰粘土  | 47 灰粘質土  | 60 黄褐シルト    |
| 9 灰黄褐シルト   | 22 黄褐シルト | 35 灰シルト | 48 黄褐シルト | 61 黄褐シルト    |
| 10 灰黄褐シルト  | 23 灰シルト  | 36 灰シルト | 49 黄褐シルト | 62 黄粘質土     |
| 11 灰シルト    | 24 灰粘土   | 37 灰シルト | 50 灰シルト  | 63 黄粘質土     |
| 12 灰シルト    | 25 灰シルト  | 38 灰粘土  | 51 灰粘土   | 64 灰黄褐シルト   |
| 13 黄得シルト   | 26 灰シルト  | 39 灰粘土  | 52 青灰シルト |             |

第 93 図 湖 1003 断面図 (2)

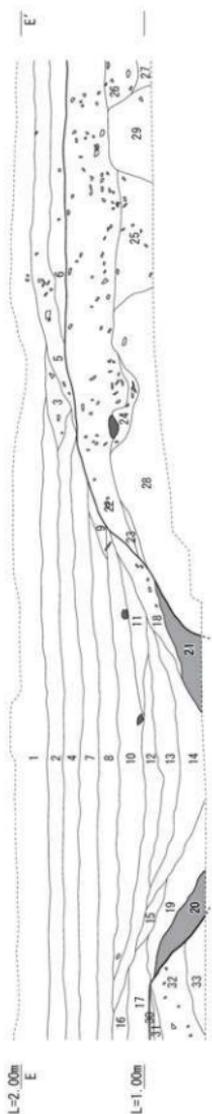


第94図 瀬1003断面図(3)



- |    |          |           |    |         |          |    |         |          |    |         |          |
|----|----------|-----------|----|---------|----------|----|---------|----------|----|---------|----------|
| 1  | 2.50/4/1 | 備オリープ底シルト | 12 | 5/4/2   | 底オリープシルト | 23 | 2.5/4/2 | 備灰質シルト   | 34 | 7.5/4/2 | 底オリープシルト |
| 2  | 10/5/1   | 底シルト      | 13 | 5/5/2   | 底オリープシルト | 24 | 7.5/5/1 | 底シルト     | 35 | 2.5/4/2 | 備灰質シルト   |
| 3  | 7.5/4/2  | 底オリープシルト  | 14 | 7.5/5/2 | 底オリープシルト | 25 | 2.5/4/2 | 備灰質シルト   | 36 | 7.5/4/2 | 底オリープシルト |
| 4  | 10/5/1   | 底シルト      | 15 | 5/5/1   | 底シルト     | 26 | 7.5/5/2 | 底オリープシルト | 37 | 7.5/5/1 | 底シルト     |
| 5  | 5/5/1    | 底シルト      | 16 | 2.5/4/2 | 備灰質シルト   | 27 | 10/5/2  | オリープ底シルト | 38 | 2.5/4/1 | 備灰質シルト   |
| 6  | 5/5/1    | 底シルト      | 17 | 5/4/2   | 底オリープシルト | 28 | 2.5/4/2 | 備灰質シルト   | 39 | 10/5/1  | 底シルト     |
| 7  | 7.5/5/1  | 底シルト      | 18 | 7.5/5/2 | 底オリープシルト | 29 | 7.5/5/1 | 底シルト     | 40 | 7.5/4/1 | 底シルト     |
| 8  | 5/4/2    | 底オリープシルト  | 19 | 7.5/4/2 | 底オリープシルト | 30 | 7.5/4/1 | 底シルト     | 41 | 7.5/4/1 | 底シルト     |
| 9  | 5/4/2    | 底オリープシルト  | 20 | 5/5/2   | 底オリープシルト | 31 | 5/5/2   | 底オリープシルト | 42 | 7.5/4/1 | 底シルト     |
| 10 | 5/5/2    | 底オリープシルト  | 21 | 7.5/5/2 | 底オリープシルト | 32 | 7.5/4/2 | 底オリープシルト | 43 | 5/4/2   | 底オリープシルト |
| 11 | 10/5/1   | 底オリープシルト  | 22 | 7.5/5/2 | 底オリープシルト | 33 | 7.5/4/2 | 底オリープシルト |    |         |          |

第95図 濠1003断面図(4)

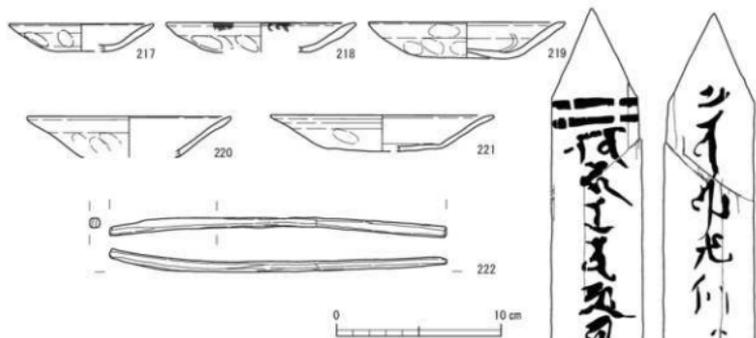


有機質粘土層

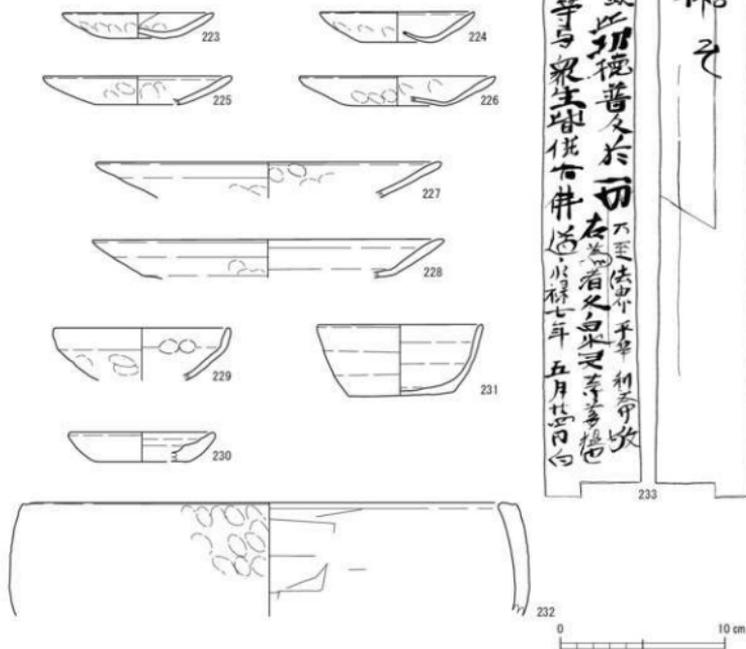
- |   |                     |    |                  |    |                |    |                |
|---|---------------------|----|------------------|----|----------------|----|----------------|
| 1 | 7.5/5/1 灰シルト        | 10 | 7.5/5/2 灰オリーブシルト | 19 | 7.5/5/1 灰シルト   | 28 | 5/4/2 灰オリーブシルト |
| 2 | 7.5/5/2 灰オリーブシルト    | 11 | 2.5/5/2 増圧黄粘土    | 20 | 2.5/4/2 増圧黄粘土  | 29 | 2.5/4/2 増圧黄シルト |
| 3 | 7.5/5/2 灰オリーブシルト    | 12 | 5/5/2 灰オリーブシルト   | 21 | 5/5/2 灰オリーブ粘土  | 30 | 2.5/4/1 黄灰シルト  |
| 4 | 10/5/2 オリーブ灰シルト     | 13 | 7.5/5/2 灰オリーブシルト | 22 | 2.5/5/2 増圧黄シルト | 31 | 7.5/5/1 灰シルト   |
| 5 | 2.5/0/4/1 増オリーブ灰シルト | 14 | 7.5/5/2 灰オリーブシルト | 23 | 2.5/5/2 増圧黄シルト | 32 | 5/5/1 灰シルト     |
| 6 | 10/5/1 灰シルト         | 15 | 7.5/5/2 灰オリーブシルト | 24 | 5/5/1 灰シルト     | 33 | 5/3/2 灰オリーブシルト |
| 7 | 10/5/1 灰シルト         | 16 | 7.5/4/1 灰シルト     | 25 | 5/5/2 灰オリーブシルト |    |                |
| 8 | 7.5/4/1 灰シルト        | 17 | 2.5/4/2 増圧黄シルト   | 26 | 2.5/4/2 増圧黄シルト |    |                |
| 9 | 2.5/4/2 増圧黄シルト      | 18 | 2.5/4/2 増圧黄シルト   | 27 | 5/5/2 灰オリーブシルト |    |                |



第 96 図 溝 1003 断面図 (5)



第 97 图 濠 1003 (10-I 区) 出土遗物实测图



第 98 图 濠 1003 (11-I 区) 出土遗物实测图

る。色調は橙色系を呈する。

222 は箸で、断面は 6mm 四方の方形で、長さ 20.5cm を測る。

#### 11-I 区 (第 98 図)

223 ~ 228 は手づくね成形による土師質土器皿である。223・224 は、口径が約 9cm で、底部は突き上げ底となる。色調は灰白色系を呈する。225・226 は口径が 11 ~ 12cm で、内底面端を強くヨコナデした後、「2」の字状のナデ上げが認められる。色調は灰白色系を呈する。227・228 は口径がそれぞれ 20.9cm、21.2cm に復元される大型の製品である。

229 は、体部が逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がり口縁部はほぼ直立する。内外面にユビオサエの痕跡が認められる。口径は 10.6cm に復元される。230 はロクロ成形による土師質土器皿で、口径は 8.7cm に復元される。胎土は粗く、器壁も厚い粗製品である。231 は土師質土器杯で、静止糸切りによる平坦な底部を持ち、体部はやや内彎しながら立ち上がる。口径 10.0cm、器高 4.4cm を測る。

232 は土師質土器鍋である。口縁部と鈎部が形骸化した形状を持ち、口径は復元値で 28.6cm を測る。

233 は、厚さ 3mm 程度の卒塔婆である。頭部を山形に切り、2 本の圈線が引かれる。仏教の宇宙観の五大要素である「空」「風」「火」「水」「地」をそれぞれ表す「(キヤ) (カ) (ラ) (ハ) (ア)」、その下に阿弥陀三尊を表す「(キリーク) (サク) (サ)」の種子が記されている。以下には二行にわたり「願以此功德普及於一切」「我等与衆生皆供成仏道」という回向文が記される。さらにその下には三行にわたって「乃至法界平等利益」「右為者久(?) 泉靈等菩提也」「永祿七年五月廿四日」の文字が見える。「敬白」の文字で下部を取める。裏面には大日如来を表す「(パン)」などの種子が見える。

#### 14-III・IV 区 (第 99 図~第 101 図)

234 ~ 244 は手づくね成形による土師質土器皿である。234・235・244 は灰白色系、236 ~ 243 は橙色系を呈する。口径は 9cm 前後のもの (234 ~ 236)、10cm 前後 (237)、11cm 前後 (238 ~ 241)、13cm 以上の大型のもの (242 ~ 244) がある。

245 ~ 250 はロクロ成形による土師質土器皿・杯である。245 は口径が 6.4cm に復元される小型の皿で、底部には静止糸切りの痕跡を留める。246 は体部にロクロ目が顕著に残るやや粗い作りの皿であるが、底部を回転ヘラ切りした後、底面端をなでて丸く仕上げている。247 は深型の皿で、底部に回転ヘラ切りの痕跡を留める。口径は 22.0cm に復元される大型のものである。248 ~ 250 は杯で、底部に静止糸切りの痕跡を留める。250 は 3 片が接合したものであるが、2 片は内外面に漆の付着がみられる。外面には 0.5 ~ 2mm 大の粒状に飛散した状態で付着し、内面は口縁部付近に帯状に、胴部から底部では部分的に付着する。1 片は内外面とも鉄分の沈着が著しく、漆の付着が見られず、前の 2 片とは割れた後に別の環境に置かれていたと思われる。このことから、杯片の一部を漆のパレットとして使用した可能性も考えられる。

251 は口径 12.9cm、体部最大径 25.9cm に復元される土師質の茶釜である。肩部に約 1.8cm の穿孔

と、把手部の剥離痕が、体部の内外面には煤及び鉄分の付着がみられる。胎土は厚く、結晶片岩の混じった小礫を多く含む。

252は濠の北側肩部から出土した瓦質鉢である。口径36.6cm、器高6.9cmに復元される。外面はナデ、ユビオサエがみられ、底部は板ナデの後ナデにより仕上げられている。内面は幅3mmのヘラミガキが隙間なく密に施され、胎土には雲母、石英、長石などが含有する。徳島県下の16世紀代の瓦質土器としては異質なものであるが、勝瑞遺跡では同様の鉢が何点か出土している。同様のものは堺環濠都市遺跡の調査において出土事例が確認されている。

253は備前焼播鉢で、播目は7条/2.8cmを一単位とする。口縁帯はやや内傾し、外面には3条の弱い凹線が巡る。間壁編年のV期に相当する。254は備前焼甕の口縁部である。頸部はやや外傾し、端部は玉縁状を呈する。口径は28.8cmに復元される。

255・256は青磁碗である。255の口縁外面には線描きによる沈線が一条巡る。口径は13.2cmに復元される。256の体部には線描きの蓮弁文が施される。257は青磁の腰折れ皿。高台内の軸を円形に掻き落としている。

258は白磁燗反り皿で口径12.4cmに復元される。灰色の素地に灰白色の釉薬がかかり、全面に貫入が入る。口縁部では内外面に軸垂れがみられ、壘付のみ露胎となる。この皿は、接合可能な複数の破片で出土し、濠1003の覆土と礎石建物SB1002周辺の炭化物層、SD1060の覆土とそれぞれ異なった地点から出土している。

259～262は青花碗で、蓮子碗である。259・260は、体部外面や見込には丸を三つ結合した文様が描かれる。259は濠1003覆土とSD1060から1片ずつ接合可能な破片として出土しており、ほぼ完形品となっている。261・262は粗製の碗で、漳州窯系の製品と思われる。体部外面には芭蕉葉文が描かれる。263は萁苜底の青花皿で、体部外面には芭蕉葉文が描かれる小野分類の皿C群である。

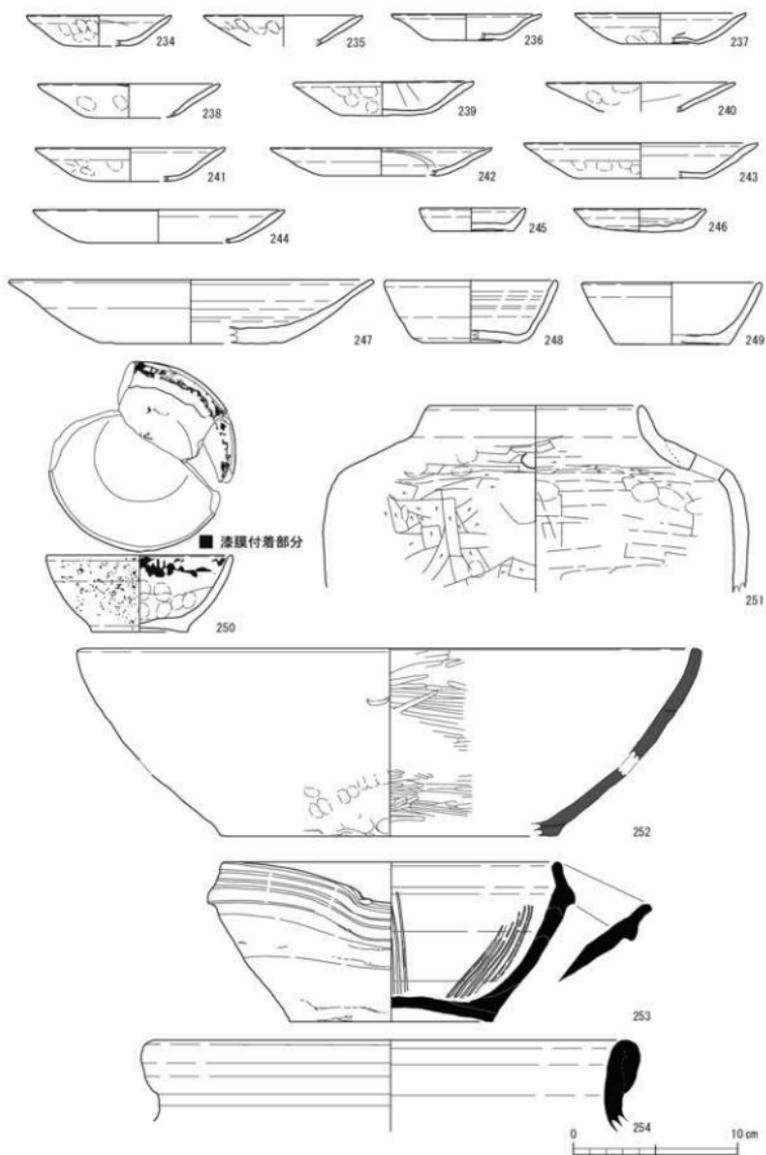
264は鉄鎌と思われる。

265は土錘で、長さ4.1cm、幅2.2cm、重さ16.08gを測る。墨書らしき痕跡が見られるものの、明瞭ではない。

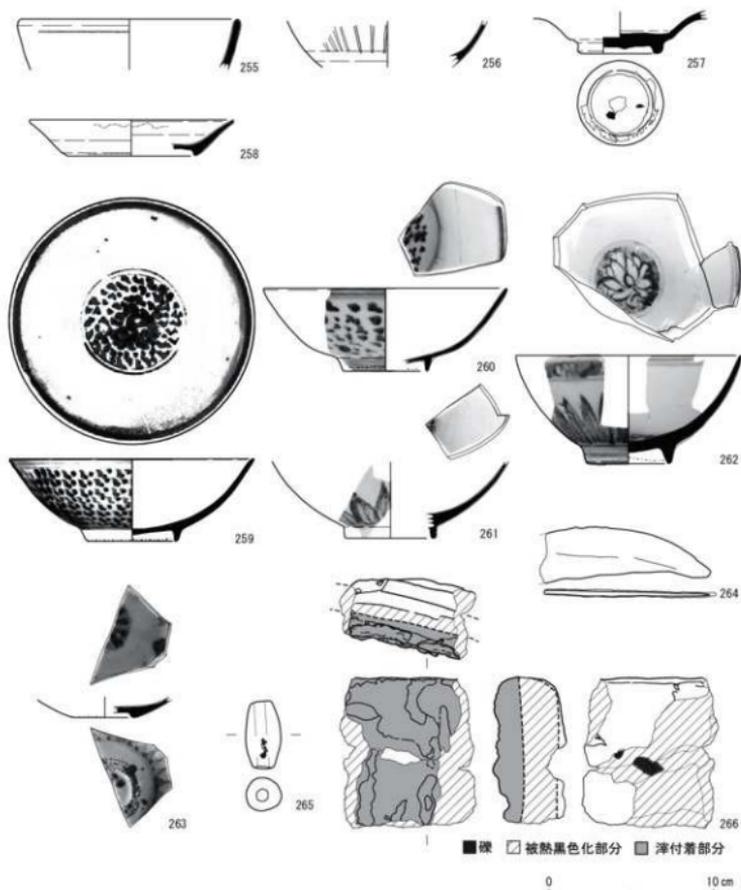
266は炉壁の一部とみられる。色調などで3層程度に分類できる。内面は暗赤色でガラス化し、その外側には灰白色の土師質の層がみられる。ただ、この層は内側が被熱により半行程黒色化しており、結晶片岩、石英、長石などととも2cm大の砂岩なども含有している。外面は橙色の土師質の層で、結晶片岩、石英、長石などを含有する。上端部は平坦であるため、継目であると考えられる。

267は卒塔婆で、五輪塔状の形態を有する。墨書の痕跡が見られるが、判読には至っていない。遺存部分で長さ32cm、幅5cm、厚さ0.6cmを測る。

268～275は0.3～0.55mmの薄板に妙法蓮華經を書写した柿経である。268は完形の状態で出土し、「諸大菩薩面説偈言」とみえる。従地涌出品十五の一節である。269は智諭品第三の一節である「面・・・・・百千萬種於虚空中一」がみえ、270は観世音菩薩普門品第二十五の一節で



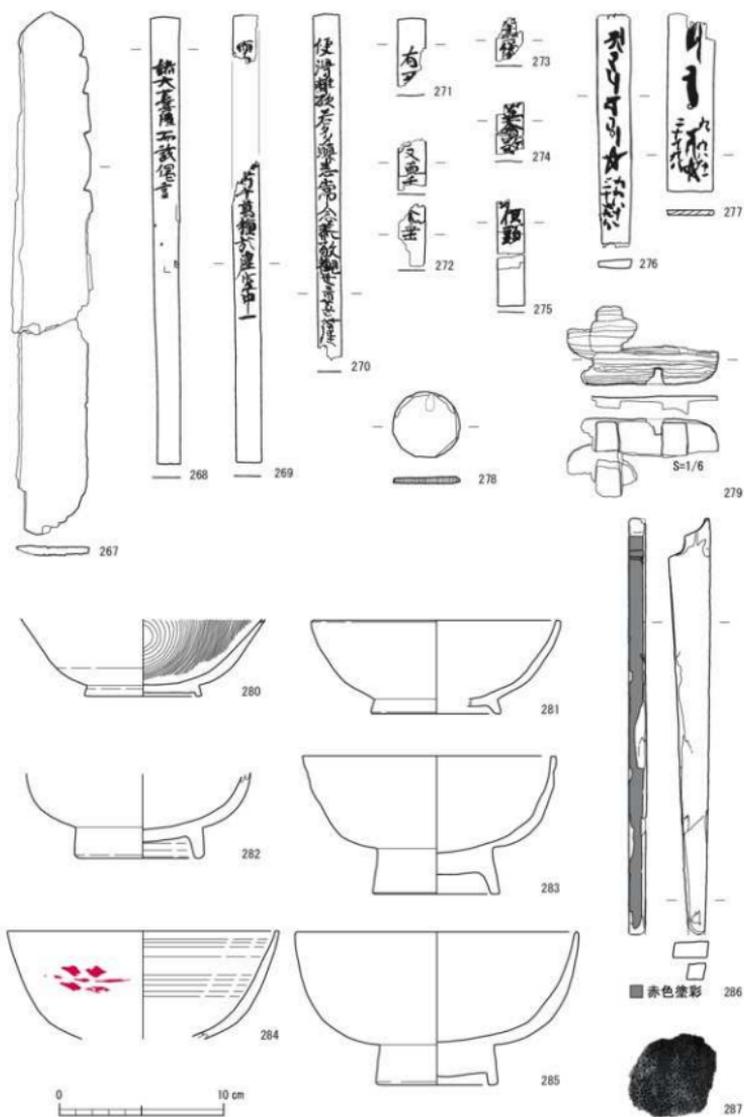
第99図 濠1003(14-Ⅲ・Ⅳ区)出土遺物実測図(1)



第100図 濠1003(14-Ⅲ・Ⅳ区)出土遺物実測図(2)

ある「便得離欲若多願悲常念恭敬觀世音菩薩」がみえる。271は「有・」の文字がみえ上端が遺存する。272は分別功德品第十七の一節「・又兩千・衣垂」である。273は「・頭」の文字がみえ、下端が遺存する。濠1001から出土した柿経と比較すると、先端部の形状が緩やかな尖頭形となっている。

276・277は呪符木筒である。276は上下端を欠損するものの、厚さ5.5mmの板に文殊菩薩を表す種子「アラハシヤノウ、五芒星「☆」、「八九七十二」、「九九八十一」の文字がみえる。ほぼ中央



第 101 图 濠 1003 (14-Ⅲ·Ⅳ区) 出土遗物实测图 (3)

に3mm大の孔が穿たれており、柱などに釘で打ち付けられていたものであろう。277にも梵字と五芒星「☆」、「八九七十二」、「九九八十一」の文字がみえる。

278は径4.1cm、厚さ4mmの円盤状の木製部材である。片面にのみ端部に面取りが施されている。279は連歯下駄で、9mm大の鼻緒孔が穿たれている。

280～285は漆器椀である。木取りは縦木取りで、280は内外面ともに黒色漆、その他は外面を黒色漆、内面を赤褐色の漆で仕上げている。281の外面には朱色の漆が確認できるが、何らかの文様が描かれていたものと思われる。

286は加工木。表面には部分的に薄く赤彩が見られ、上端は連弧状にカットされた形状を有する。用途は不明である。

287は珊瑚で、被熱痕が認められる。

#### 濠 1003-EK1

〈検出地点〉

14-Ⅲ区〔中グリッド(b-10)・小グリッド(J-5)〕

〈形態等〉

平面形は長軸96cm、短軸75cmの隅丸方形を呈する。20～30cm大の多くの礫が出土した。

〈出土遺物〉(第103図)

288は瓦質羽釜である。内彎する体部を持ち、端部断面は方形を呈する。

#### 濠 1003-EP1

〈検出地点〉

14-Ⅲ区〔中グリッド(b-10)・小グリッド(J-5)〕

〈形態等〉

平面形は長径90cm、短径44cmの楕円形で、深さは30cmを測る。断面は碗形を呈する。

〈出土遺物〉(第105図)

289は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。内底面端に強いヨコナデによる凹線が認められる。口径は11.6cmに復元される。

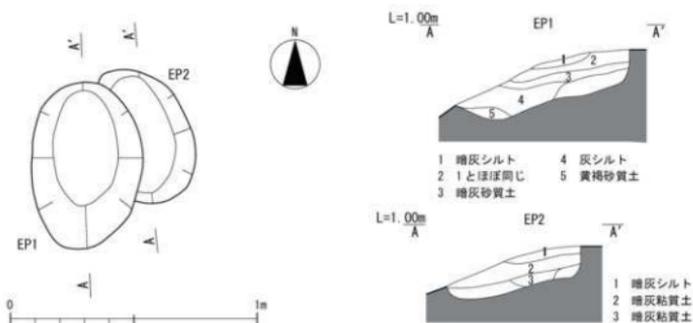
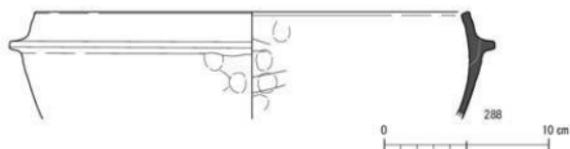
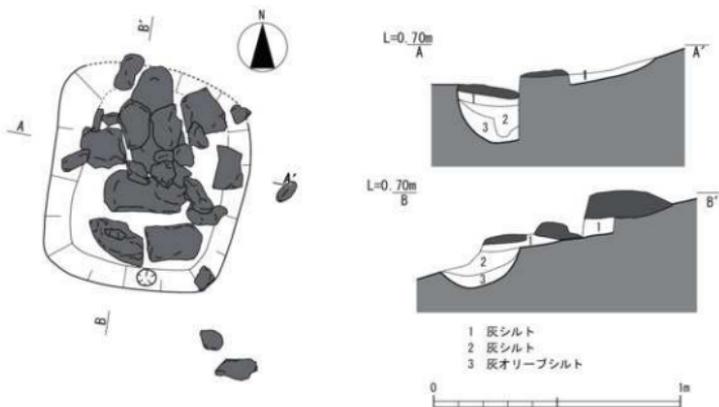
#### 濠 1003-EP2

〈検出地点〉

14-Ⅲ区〔中グリッド(b-10)・小グリッド(J-5)〕

〈形態等〉

平面形は長径62cm、短径40cm程度の楕円形で、深さは21cmを測る。EP1に切られている。



#### 濠 1-4 [濠 1004]

〈検出地点〉

- 3-V区 [中グリッド (a-9)・小グリッド (S-6・7、T-6・7)]
- 10-IV区 [中グリッド (a・b-9)・小グリッド (T-10～12、A-10～12)]
- 13-I区 [中グリッド (a-9)・小グリッド (R-1～8、S-2～8、T-5～8)]

〈形態等〉

現在、勝瑞館跡として指定されている範囲の西側を南北方向に約 60 m 延びる濠。さらに南および北へも延びることが推定される。軸は 17° 東に振る。基本的な形状は上幅約 10 m、深さは 2 m 以上と推定される。濠法面は 40°～50°である。

〈出土遺物〉

濠 1004 についても広い範囲に及ぶため出土遺物については調査時毎に紹介する。

#### 3-V区 (第 115 図)

290～292 はロクロ成形の土師質土器皿で、底部には回転ヘラ切りの痕跡が認められる。口径はそれぞれ 12.5cm、13.1cm、17.0cm を測り、器高は 3cm 以上となる深型の皿である。

#### 13-I区 (第 116 図)

293～297 はロクロ成形の土師質土器皿で、底部には回転ヘラ切りの痕跡が認められる。293 は体部が逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる形状を持ち、口径が 7.0cm に復元される。294～296 は口径が 12cm 前後、器高が 3cm 以上となる深型の皿である。297 はやや粗製の皿で、胎土には結晶片岩を含有する。

298 は壺の肩部と考えられる。外面は褐釉が施され、凸帯が巡る。内面には黒いシミが認められる。中国南方系の陶器と思われる。

#### 濠 1-5 [濠 1005]

〈検出地点〉

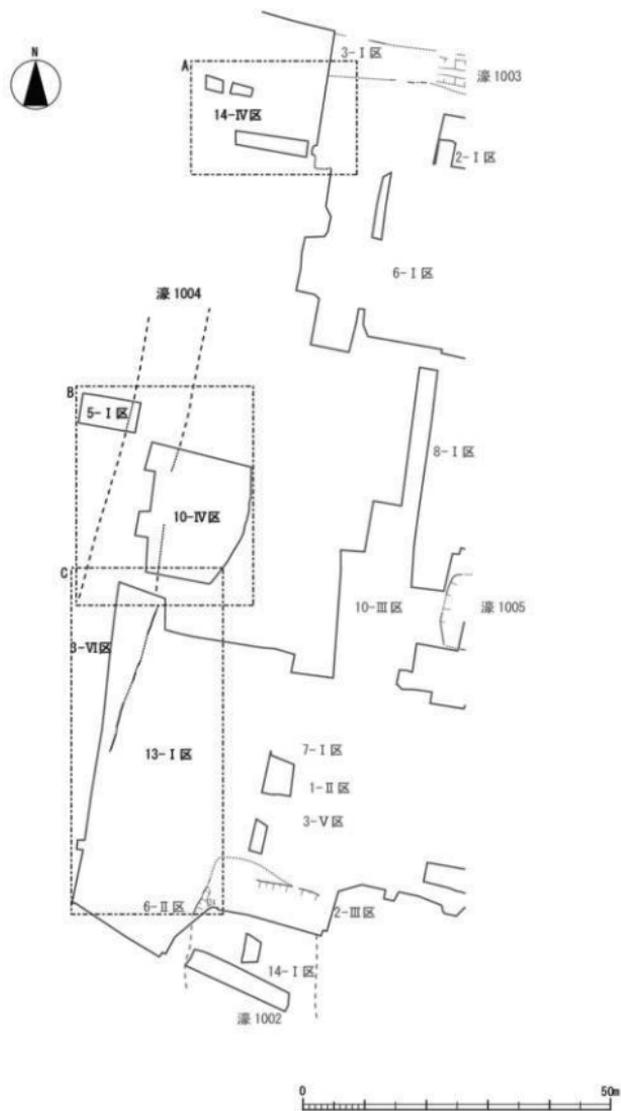
- 10-II区 [中グリッド (b・c-9)・小グリッド (N～T-5、A-5、I～T-6、A-6、I～T-7、A-7、I～S-8、J-9)]

〈形態等〉

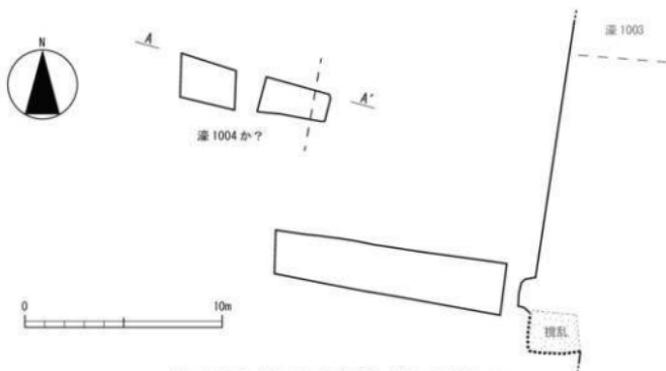
濠 1001 から西に分岐し、約 60 m 延びる。軸は 9° 北に振る。濠幅は、断面形状や地籍図の分析から約 14 m 程度と推定され、深さは 2 m 程度である。濠法面は 20°～30°と緩やかな傾斜となっている。濠底には有機質粘土層が堆積しており、常時帯水していたものと思われる。濠 1001 と同様に、明治期の地籍図で濠の痕跡と見られる区割が確認できることから、城館の廃絶まで存続した濠と思われる。

〈出土遺物〉(第 118 図)

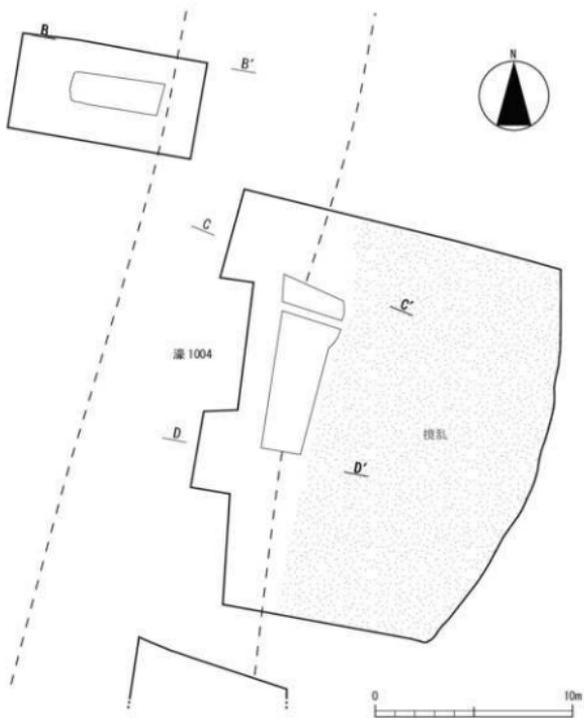
299 はロクロ成形の土師質土器皿で、底部には静止糸切りの痕跡が認められる。やや内彎する体部を持ち、端部は尖り気味に仕上げる。口径は 11.3cm を測る。300 は土師質土器鍋で、外底面



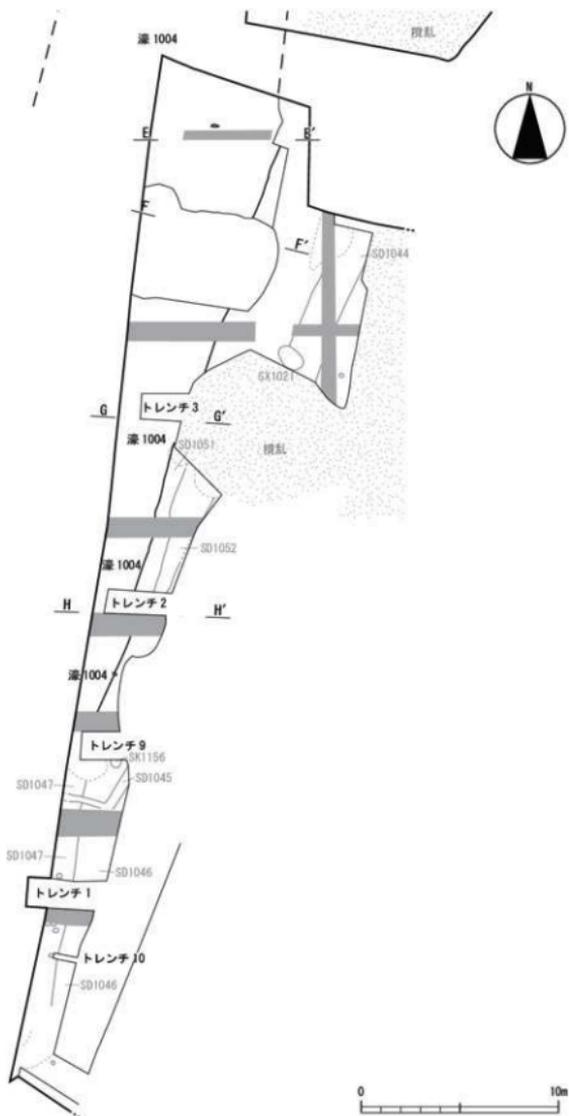
第 106 图 濠 1004 平面图



第 107 図 濠 1004 平面図 (第 106 図の A)

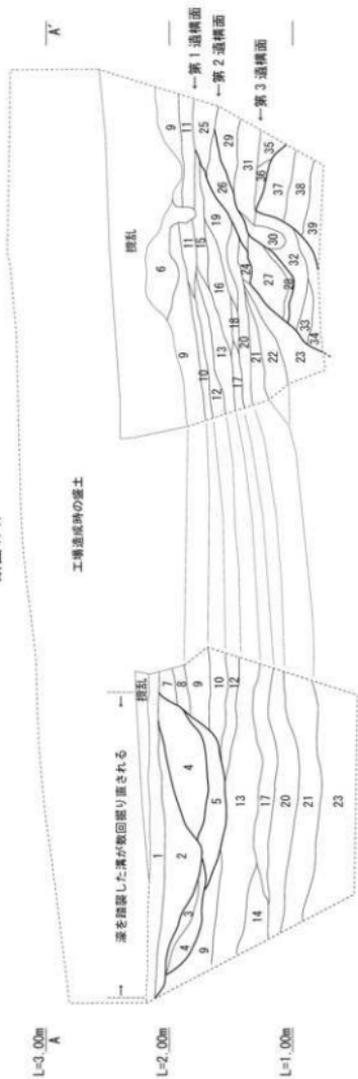


第 108 図 濠 1004 平面図 (第 106 図の B)



第109図 濠1004平面図(第106図のC)

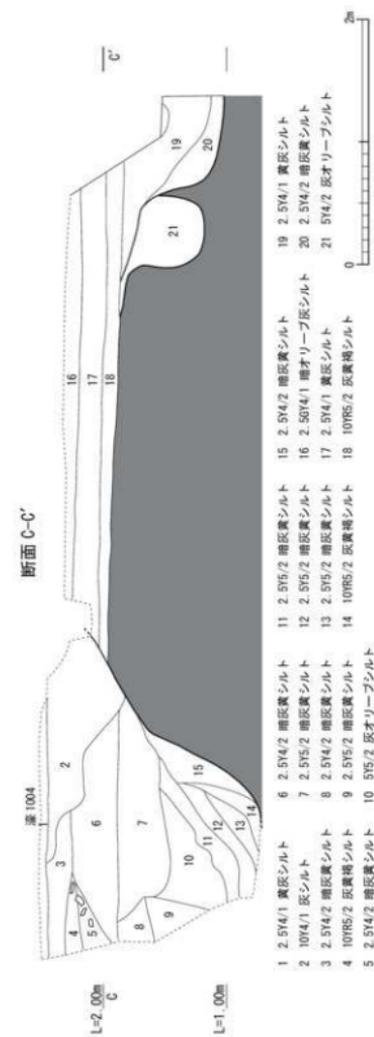
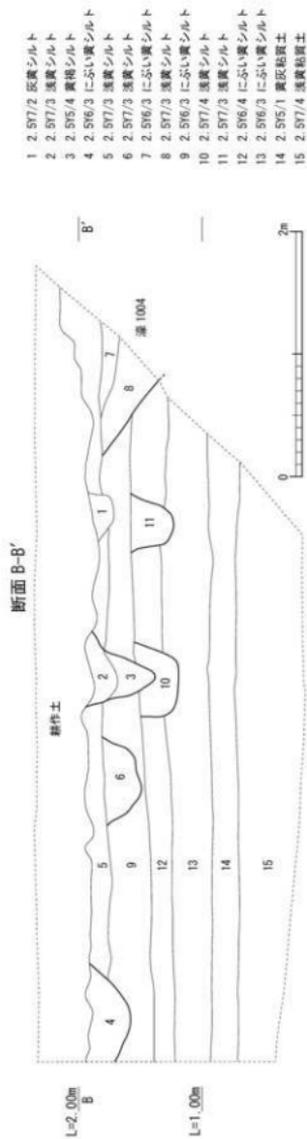
断面 A-A'



- |    |                                |    |                                |    |                             |
|----|--------------------------------|----|--------------------------------|----|-----------------------------|
| 1  | 5% <sup>1</sup> /1 戻粘土         | 21 | 2.5% <sup>4</sup> /2 埋戻黄粘土     | 31 | 5% <sup>5</sup> /2 戻砂シルト    |
| 2  | 2.5% <sup>5</sup> /2 埋戻黄シルト    | 22 | 2.5% <sup>5</sup> /2 埋戻黄粘土     | 32 | 2.5% <sup>4</sup> /2 埋戻黄粘土  |
| 3  | 2.5% <sup>4</sup> /2 埋戻黄シルト    | 23 | 2.5% <sup>4</sup> /3 オリリープ埋シルト | 33 | 5% <sup>5</sup> /2 戻オリリープ粘土 |
| 4  | 2.5% <sup>4</sup> /4 オリリープ埋砂質土 | 24 | 5% <sup>5</sup> /2 戻オリリープ粘土    | 34 | 5% <sup>4</sup> /2 戻オリリープ粘土 |
| 5  | 2.5% <sup>4</sup> /3 オリリープ埋シルト | 25 | 10% <sup>5</sup> /2 埋戻黄シルト     | 35 | 2.5% <sup>4</sup> /1 黄底シルト  |
| 6  | 2.5% <sup>5</sup> /2 埋戻黄シルト    | 26 | 2.5% <sup>5</sup> /2 埋戻黄粘土     | 36 | 2.5% <sup>4</sup> /2 埋戻黄粘土  |
| 7  | 2.5% <sup>5</sup> /2 埋戻黄粘土     | 27 | 2.5% <sup>5</sup> /2 埋戻黄粘土     | 37 | 2.5% <sup>4</sup> /2 埋戻黄粘土  |
| 8  | 2.5% <sup>5</sup> /3 黄底シルト     | 28 | 5% <sup>4</sup> /2 戻オリリープ粘土    | 38 | 5% <sup>5</sup> /2 戻オリリープ粘土 |
| 9  | 5% <sup>5</sup> /3 戻オリリープシルト   | 29 | 7.5% <sup>5</sup> /1 戻シルト      | 39 | 5% <sup>5</sup> /2 戻オリリープ粘土 |
| 10 | 2.5% <sup>4</sup> /2 埋戻黄粘土     | 30 | 5% <sup>5</sup> /2 戻オリリープ粘土    |    |                             |

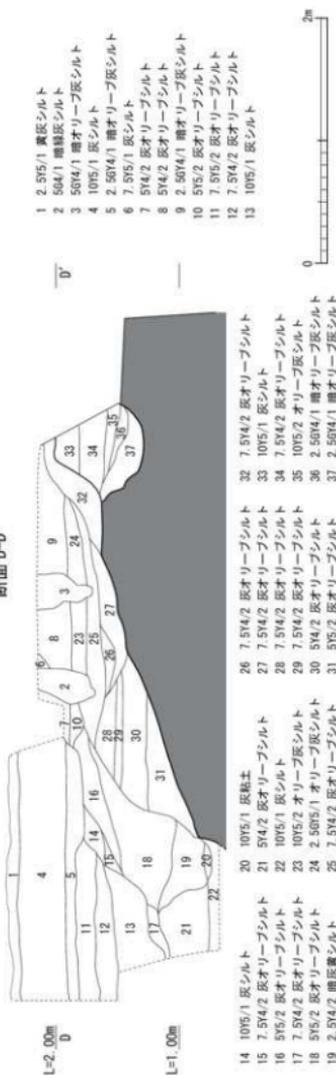


第110図 濠1004断面図(1)

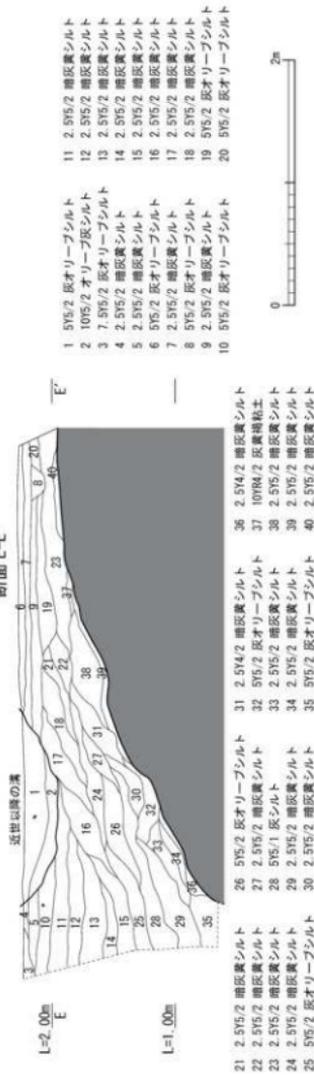


第 111 図 道 1004 断面図 (2)

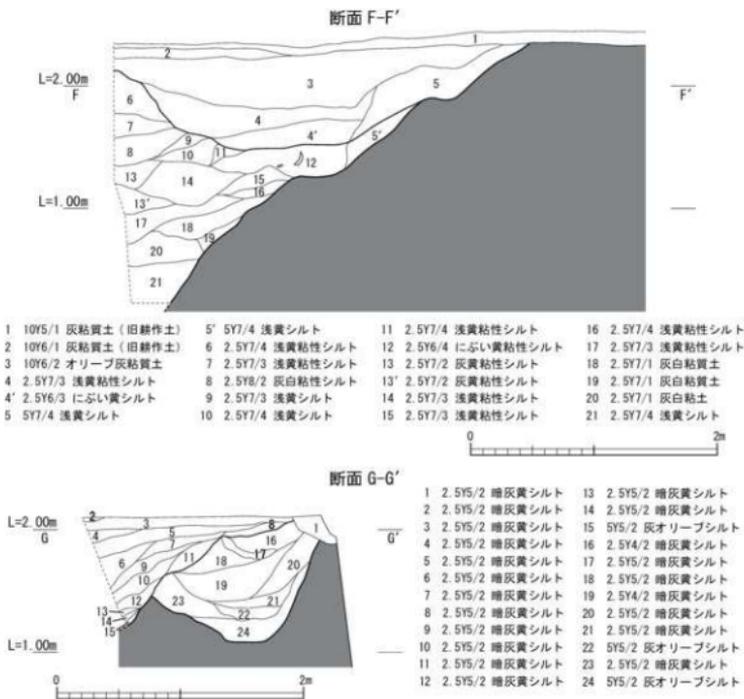
断面 D-D'



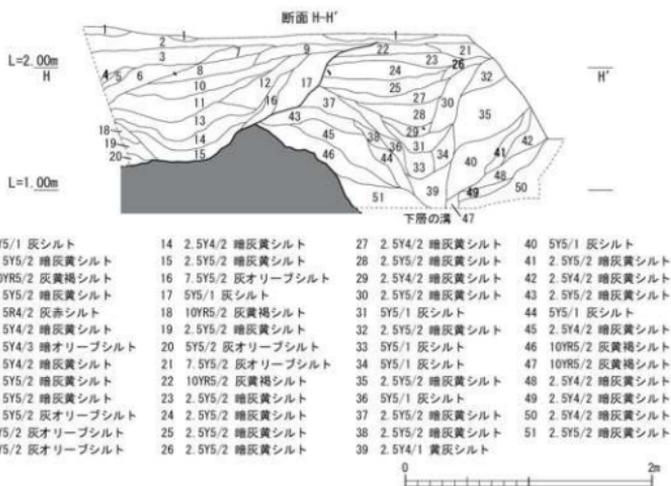
断面 E-E'



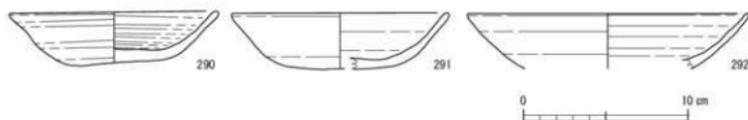
第112図 濠1004断面図(3)



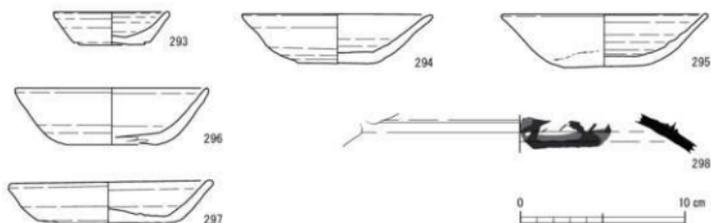
第 113 図 濠 1004 断面図 (4)



第114図 濠1004断面図(5)



第115図 濠1004 (3-VI区) 出土遺物実測図



第116図 濠1004 (13-I区) 出土遺物実測図

に格子目タタキが施される。体部は直立し、口縁上端部に弱い凹線が巡る。

301～304は漆器碗である。301は内外面とも朱塗り、302～304はいずれも外面黒地で、朱漆で文様を施す。303の体部には3か所孔が穿たれている。木取りはいずれも縦木取りである。

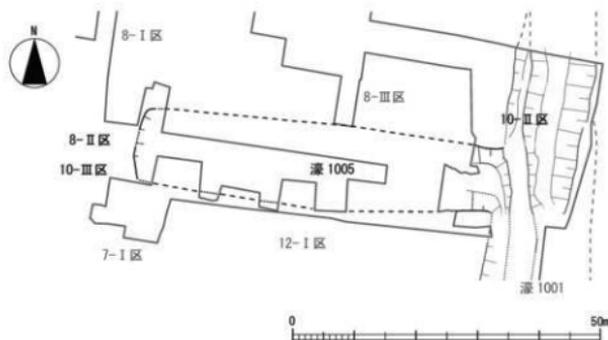
305は脚部である。長方形の板材の下部端部を丸く仕上げ、下辺から弧状に削り込む。上部に穿孔が1か所、木釘が1か所確認される。

306は柄部と思われる。断面は長径3.5cm、短径1.9cmの楕円形を呈する。

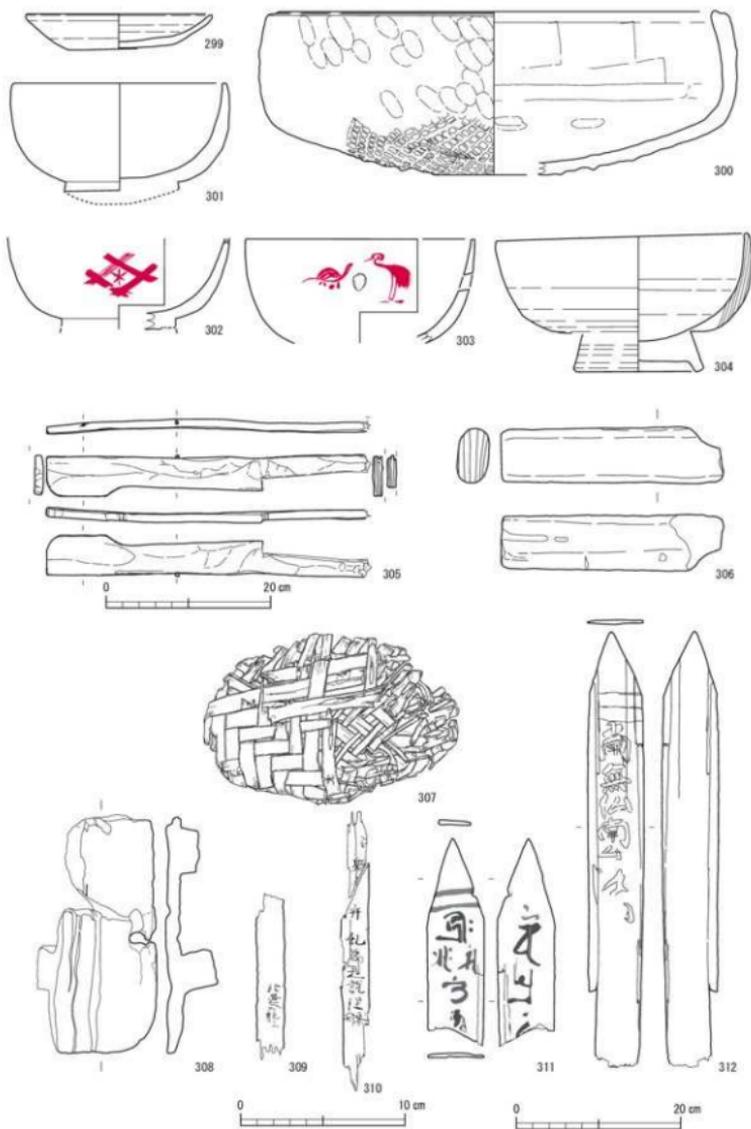
307は植物性素材で、網代編みで編まれた籠の一部である。

308は連菌下駄で、高さ2cm程度の菌が削り出される。

309・310はこけら経で、それぞれ「我遣天龍王」、「衆苦所惱亂為是説涅槃」の墨書が見える。妙法蓮華経を書写したものである。311・312は卒塔婆で、上部が山形に切られる。311は表面の上部に二重線が引かれ、その下に阿弥陀三尊を表す種子である「キリーク」・「サ」・「サク」、裏面には大日如来を表す種子である「バン」が見える。312は表面上部の二重線の下には「南無仏南ム…」の文字が見える。



第117図 澤 1005 平面図



第 118 图 濠 1005 出土遗物实测图

L=1.80m



- 1 5Y5/1 灰
- 2 5Y5/1 灰
- 3 5Y5/1 灰
- 4 7.5Y5/1 灰
- 5 5Y5/1 灰
- 6 7.5Y5/1 灰
- 7 5Y5/1 灰
- 8 5Y5/1 灰

L=2.00m

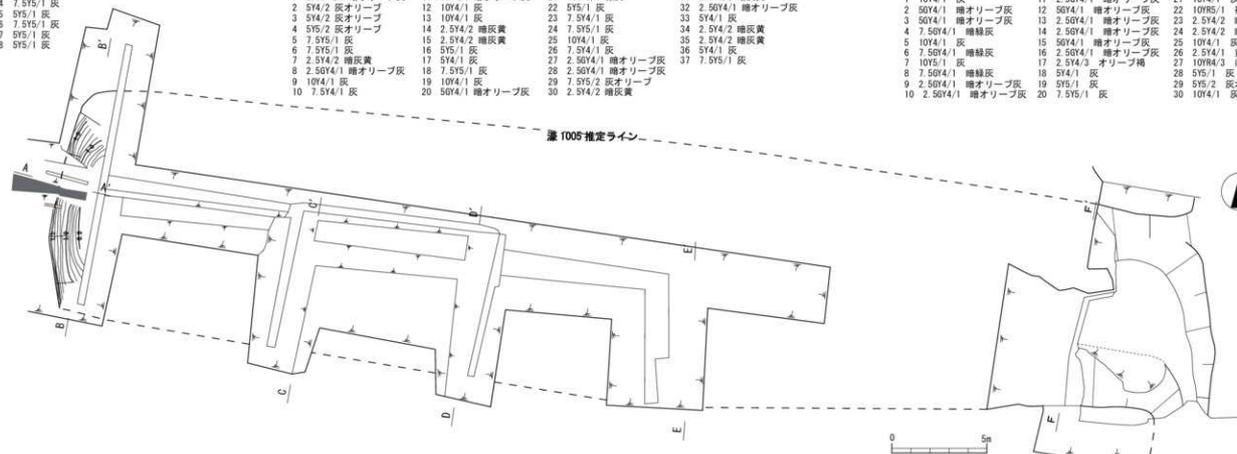


- |                   |                  |                    |                    |
|-------------------|------------------|--------------------|--------------------|
| 1 2.50Y4/1 暗オリーブ灰 | 11 50Y4/1 暗オリーブ灰 | 21 100Y5/1 緑灰      | 31 2.5Y4/2 暗炭灰     |
| 2 5Y4/2 灰オリーブ     | 12 10Y4/1 灰      | 22 5Y5/1 灰         | 32 2.50Y4/1 暗オリーブ灰 |
| 3 5Y4/2 灰オリーブ     | 13 10Y4/1 灰      | 23 7.5Y4/1 灰       | 33 5Y4/1 灰         |
| 4 5Y5/2 灰オリーブ     | 14 2.5Y4/2 暗炭灰   | 24 7.5Y5/1 灰       | 34 2.5Y4/2 暗炭灰     |
| 5 7.5Y5/1 灰       | 15 2.5Y4/2 暗炭灰   | 25 10Y4/1 灰        | 35 2.5Y4/2 暗炭灰     |
| 6 7.5Y5/1 灰       | 16 5Y5/1 灰       | 26 7.5Y4/1 灰       | 36 5Y4/1 灰         |
| 7 2.5Y4/2 暗炭灰     | 17 5Y4/1 灰       | 27 2.50Y4/1 暗オリーブ灰 | 37 7.5Y5/1 灰       |
| 8 2.50Y4/1 暗オリーブ灰 | 18 7.5Y5/1 灰     | 28 2.50Y4/1 暗オリーブ灰 |                    |
| 9 10Y4/1 灰        | 19 10Y4/1 灰      | 29 7.5Y5/2 暗炭灰     |                    |
| 10 7.5Y4/1 灰      | 20 50Y4/1 暗オリーブ灰 | 30 2.5Y4/2 暗炭灰     |                    |

L=2.00m



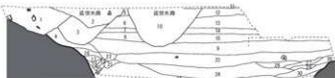
- |                    |                    |                |
|--------------------|--------------------|----------------|
| 1 10Y4/1 灰         | 11 2.50Y4/1 暗オリーブ灰 | 21 10Y4/1 灰    |
| 2 50Y4/1 暗オリーブ灰    | 12 50Y4/1 暗オリーブ灰   | 22 10Y5/1 暗炭灰  |
| 3 50Y4/1 暗オリーブ灰    | 13 2.50Y4/1 暗オリーブ灰 | 23 2.5Y4/2 暗炭灰 |
| 4 7.50Y4/1 暗炭灰     | 14 2.50Y4/1 暗オリーブ灰 | 24 2.5Y4/2 暗炭灰 |
| 5 10Y4/1 灰         | 15 50Y4/1 暗オリーブ灰   | 25 10Y4/1 灰    |
| 6 7.50Y4/1 暗炭灰     | 16 2.50Y4/1 暗オリーブ灰 | 26 2.5Y4/1 炭灰  |
| 7 10Y5/1 灰         | 17 2.5Y4/3 オリーブ褐   | 27 10Y4/3 赤い黄褐 |
| 8 7.50Y4/1 暗炭灰     | 18 5Y4/1 灰         | 28 5Y5/1 灰     |
| 9 2.50Y4/1 暗オリーブ灰  | 19 5Y5/1 灰         | 29 5Y5/2 灰オリーブ |
| 10 2.50Y4/1 暗オリーブ灰 | 20 7.5Y5/1 灰       | 30 10Y4/1 灰    |



濠 1005 推定ライン



L=2.00m



- |                  |                 |                  |                  |
|------------------|-----------------|------------------|------------------|
| 1 10Y5/1 灰       | 11 5Y4/1 灰      | 21 10Y5/2 炭黄褐    | 31 10Y5/1 灰      |
| 2 7.50Y5/1 緑灰    | 12 10Y4/1 灰     | 22 7.5Y5/2 灰オリーブ | 32 50Y4/1 暗オリーブ灰 |
| 3 50Y5/1 オリーブ灰   | 13 10Y5/1 灰     | 23 2.5Y4/1 炭灰    |                  |
| 4 7.50Y4/1 暗炭灰   | 14 10Y5/1 灰     | 24 7.5Y4/1 炭灰    |                  |
| 5 50Y4/1 暗オリーブ灰  | 15 7.5Y5/1 灰    | 25 7.5Y4/1 炭灰    |                  |
| 6 50Y5/1 オリーブ灰   | 16 26 7.5Y5/1 灰 | 26 7.5Y5/1 灰     |                  |
| 7 50Y5/1 オリーブ灰   | 17 10Y4/1 褐灰    | 27 10Y5/1 灰      |                  |
| 8 7.5Y5/1 灰      | 18 2.5Y4/1 炭灰   | 28 2.5Y4/2 暗炭灰   |                  |
| 9 7.5Y5/1 灰      | 19 10Y5/2 炭黄褐   | 29 5Y4/2 灰オリーブ   |                  |
| 10 50Y4/1 暗オリーブ灰 | 20 5Y4/1 灰      | 30 7.5Y5/1 灰     |                  |



L=1.50m



- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| 1 10Y4/1 灰    | 11 10Y5/1 灰     |
| 2 7.5Y4/1 灰   | 12 2.5Y3/1 黄褐   |
| 3 10Y4/1 暗炭灰  | 13 7.50Y4/1 暗炭灰 |
| 4 7.5Y4/1 灰   | 14 5Y5/1 灰      |
| 5 7.5Y4/1 灰   | 15 7.5Y4/1 灰    |
| 6 7.5Y4/1 灰   | 16 7.5Y4/1 灰    |
| 7 7.5Y4/1 灰   | 17 10Y5/2 炭黄褐   |
| 8 7.5Y5/2 暗炭灰 |                 |
| 9 5Y4/1 灰     |                 |
| 10 5Y5/1 灰    |                 |

L=1.00m



- |                 |                  |               |               |
|-----------------|------------------|---------------|---------------|
| 1 7.5Y4/1 灰     | 11 5Y4/1 灰       | 21 5Y5/1 灰    | 31 5Y5/1 灰    |
| 2 10Y4/1 灰      | 12 2.5Y4/1 炭灰    | 22 5Y5/1 灰    | 32 2.5Y4/1 炭灰 |
| 3 7.50Y4/1 暗炭灰  | 13 2.5Y4/1 炭灰    | 23 7.5Y5/1 灰  | 33 2.5Y4/1 炭灰 |
| 4 7.5Y4/1 灰     | 14 50Y4/1 暗オリーブ灰 | 24 7.5Y4/1 炭灰 | 34 10Y4/1 炭灰  |
| 5 7.5Y4/1 灰     | 15 10Y4/1 灰      | 25            | 35 5Y4/1 灰    |
| 6 7.5Y4/1 灰     | 16 2.5Y4/1 炭灰    | 26 10Y3/2 黄褐  | 36 5Y4/1 灰    |
| 7 50Y5/1 オリーブ灰  | 17 7.5Y5/1 灰     | 27 10Y4/1 灰   | 37 5Y4/1 灰    |
| 8 5Y5/1 灰       | 18 2.5Y4/1 炭灰    | 28 5Y5/1 灰    |               |
| 9 7.5Y4/2 灰オリーブ | 19 2.5Y4/1 炭灰    | 29 5Y5/1 灰    |               |
| 10 2.5Y4/1 炭灰   | 20 2.5Y4/1 炭灰    | 30 2.5Y4/1 炭灰 |               |

第 119 図 濠 1005 平・断面図

## 濠 1-6 [濠 1006]

(検出地点)

11-I 区 [中グリッド (c-10)・小グリッド (F-3~6, G-3~6)]

(形態等)

濠 1003 から分岐し、北に延びる。軸は $4^{\circ}$ ~ $5^{\circ}$ 西に振る。濠幅は、断面形状等から 10 m 以上とすることが推定され、深さは約 1.5 m である。濠法面は黄褐色粘質土と黒褐色粘質土がブロック状に含まれた土で成形されており、法面の崩落等により再構築していることがうかがわれる。最終的には約  $30^{\circ}$  の勾配となっている。濠底には有機質粘土層が堆積しており、常時帯水していたものと思われる。

(出土遺物) (第 123 図)

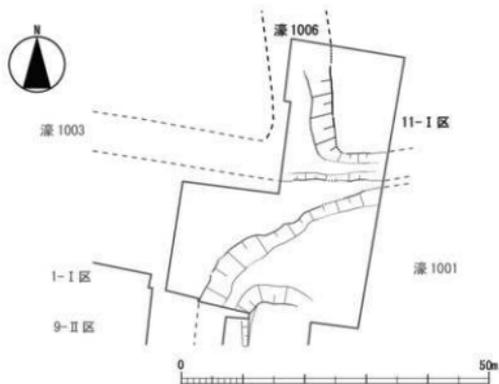
313~321 は手づくね成形による土師質土器皿である。313~317 は口径が 8~9 cm となる。内面に「の」の字状のナデ上げ痕が認められ、底部は突き上げ底となっている。色調は灰白色系を呈する。317 の口縁部にはタールが付着しており、灯明皿である。318 は口径が 10.9 cm に復元され、内底面端はやや強くヨコナデされ、弱い凹線が巡る。色調は橙色系を呈する。319~321 は口径が 14.5 cm 前後に復元される。

322~325 はロクロ成形による土師質土器皿で、底部にはヘラ切りおよび板目の痕跡を留める。

326 は瀬戸美濃焼の捏ね鉢である。直線的に開きながら立ち上がる体部を持ち、口縁端部は内側に折り返され、内面に凸帯を形成する。凸帯の中央は、指圧により深く凹む。体部内外面の上半部に灰釉が施される。外底面には 3 か所に貼付の脚部を持ち、外底面には「福半？」という墨書が認められる。

327・328 は備前焼播鉢である。327 はやや内傾する口縁帯に弱い凹線が巡る。328 は直立した口縁帯に弱い凹線が巡り、内面に 11 条 / 2.8 cm の播目が認められる。いずれも間壁編年の V 期に相当する製品である。

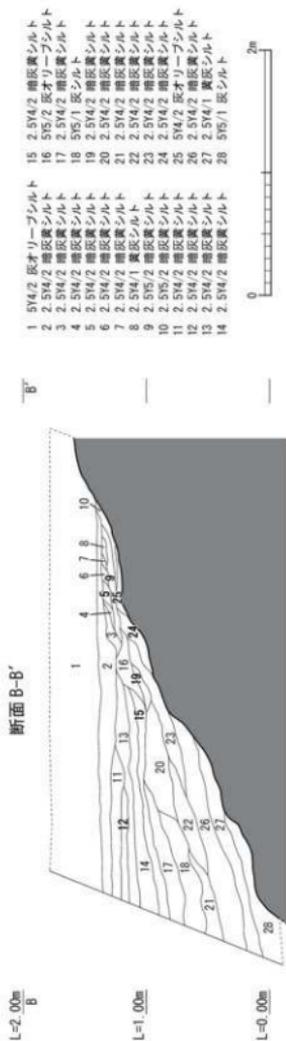
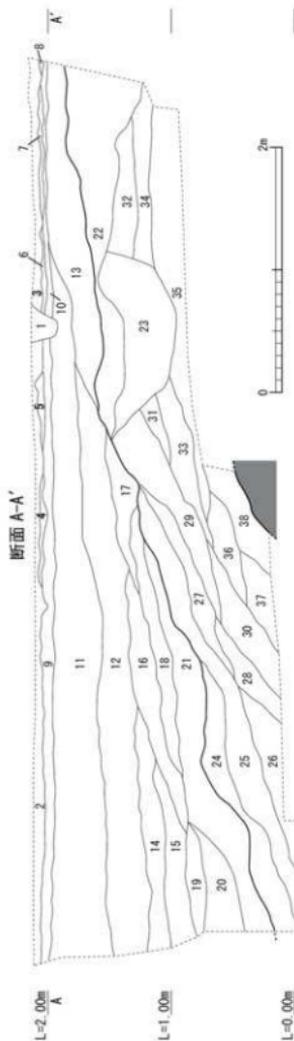
329 は青磁碗である。外面には線描の連弁文が認められ、剣頭は連弁を意識せずに描かれている。上田分類の B IV 類に相当する。330・331 は、端反りの白磁皿で、森田分類の E2 類である。332 は粗製の青花碗で漳州窯系の製品と思われる。外面に芭蕉葉文が描かれ、内底面には「福」の文字が認められる。



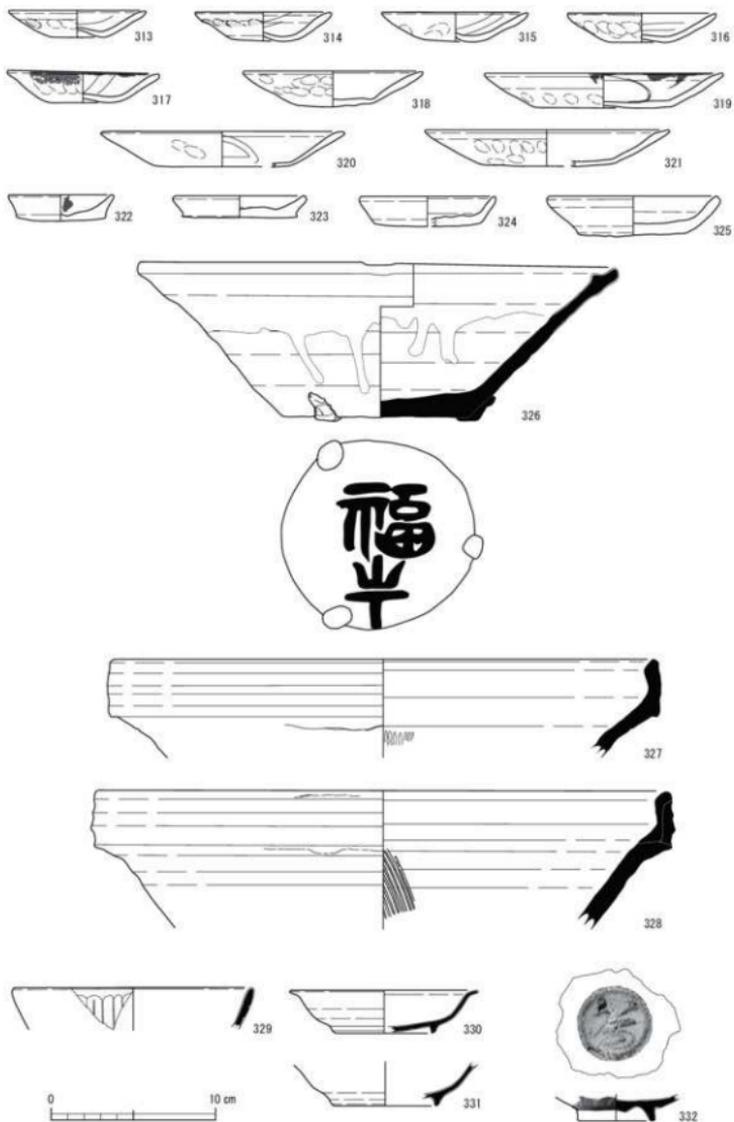
第 120 图 濠 1006 平面图 (1)



第 121 图 濠 1006 平面图 (2)



第 122 図 溝 1006 断面図



第 123 图 濠 1006 出土遺物実測図

## ②庭園

### 庭園 1-1 [庭 1001]

(検出地点)

1-Ⅱ区、2-Ⅰ区、3-V区 [中グリッド (b-8~9)・小グリッド (E-20・1、F-20・1)]

(形態等)

後述する建物 1-1 (SB1001) の南側で、12 石の 50cm~1 m 程度の石を中心とした庭園と考えられる遺構を検出した。庭園の形式としては枯山水庭園と思われるが、12 石を組み合わさずに単独で配置する特徴的なつくりである。

石材については、徳島大学総合科学部教授石田啓祐氏に御教示いただいた。12 石のうち 5 石が徳島市南部の大神子海岸付近で採取される緑色片岩、通称「大神子石」と呼ばれる石で、①・②・⑤・⑥・⑩がこれにあたる。③は秩父北帯に産する千枚岩質チャート、④は波蝕痕を有する和泉砂岩で、鳴門市の彌山付近のものである。⑦はおそらく點噴川系で採取される枕状溶岩が起源の点紋緑色片岩、⑧は點噴川系で採取される緑簾石片岩、⑨は和泉砂岩である。⑬の地点には點噴川系の緑色片岩や、葦ノ浦海岸系の和泉泥質岩の円礫が敷き詰められた状態で検出されており、これも庭の景色の一部であろう。

景石群から東側と西側に向かって落ち込んだ地形となっており、庭園の景色として凹凸が造られている。庭園が造られた場所は、主石と考えられる①がSB1001の南端から約3mにあり、SB1001から眺めるには絶好の位置である。

(周辺の出土遺物) (第 131 ~ 135 図)

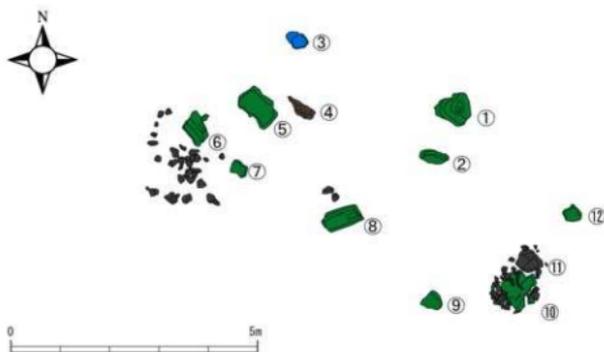
333 ~ 343 は手づくね成形による土師質土器皿である。333・334 は橙色系を呈する。口径は 8 cm 強で、つくりがやや雑である。335 ~ 338 は口径 8.5cm 程度で、色調は灰白色系である。339・340 は口径が 10cm 程度で、内底面端に強いヨコナデによる凹線が認められる。色調は橙色系を呈する。341 は口径 11.0cm を測り、色調は橙色系である。内底面端をやや強く撫でる。342・343 は口径がそれぞれ 14.2cm、17.6cm を測る大型の皿で、色調は灰白色系である。

344 ~ 348 はロクロ成形による土師質土器皿で、底部には静止糸切りの痕跡を留める。やや内彎する体部を持つもの (344・348)、直線的に外方に延びる体部を持つもの (345 ~ 347) がある。349 ~ 361 はロクロ成形による土師質土器皿で、底部に回転ヘラ切りの痕跡を留める。平らな底部を持ち、直線的に外方に開きながら立ち上がるもの (349 ~ 356)、底面端を撫でて丸く仕上げ、器高がやや高くなる深型のもの (357 ~ 361) がある。

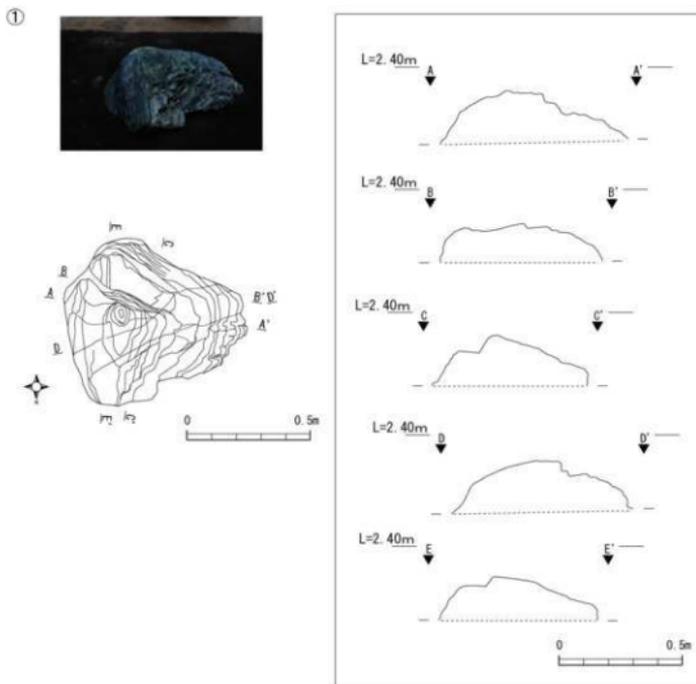
362・363 は土師質土器鍋である。口径部と鈿部が形骸化した形状を持ち、口径は復元値でそれぞれ 27.0cm、27.4cm を測る。

364 は瓦質土器釜の脚部である。365 は瓦質土器の火鉢で、平面方形もしくは長方形を呈し、四隅に脚が付くものと思われる。口径部は内側に水平に折れ曲がり、外面には凸帯が巡る。

366 は瀬戸美濃焼の盤である。灰釉が施され、口径端部を内側に肥厚させる形状を持つ。367 は瀬戸美濃焼の天目茶碗。直線的に開く体部を持ち、口径部はほぼ直立し、端部は外反する。

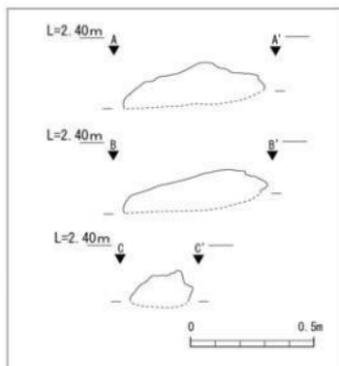
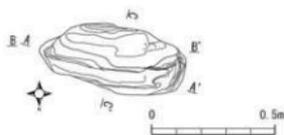


第 124 图 庭 1001 平面图

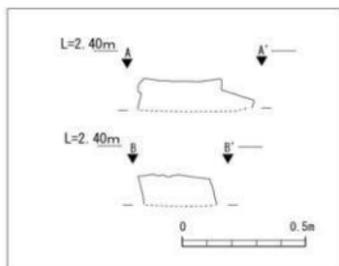
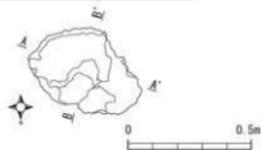


第 125 图 庭 1001 景石断面图 (1)

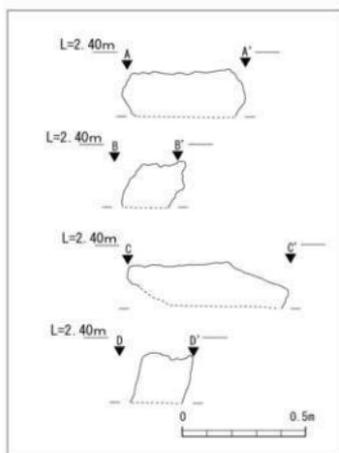
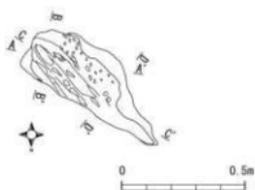
②



③

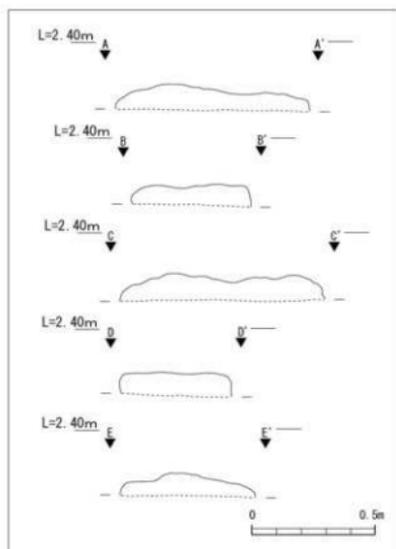


④

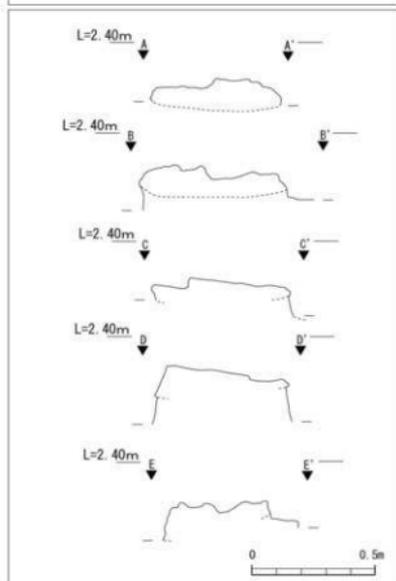
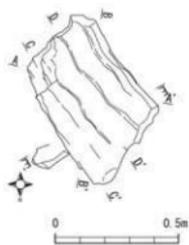


第 126 图 庭 1001 景石断面图 (2)

⑤

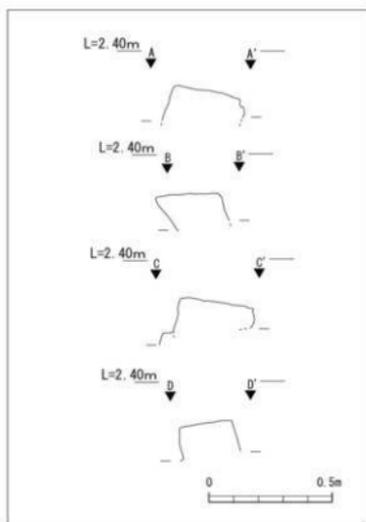
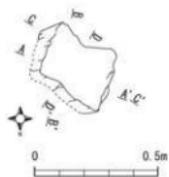


⑥

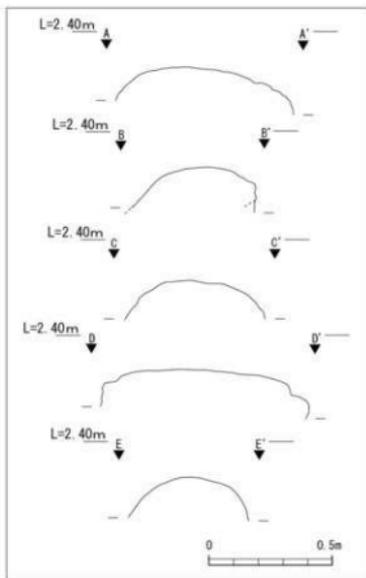
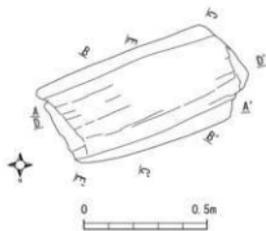


第 127 图 庭 1001 景石断面图 (3)

⑦

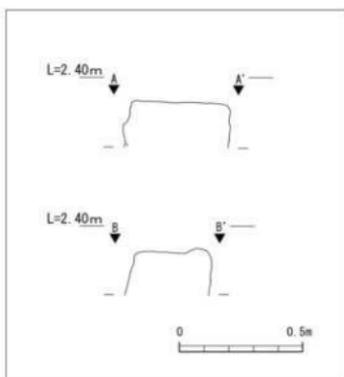
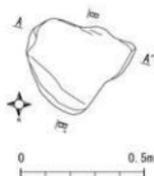


⑧

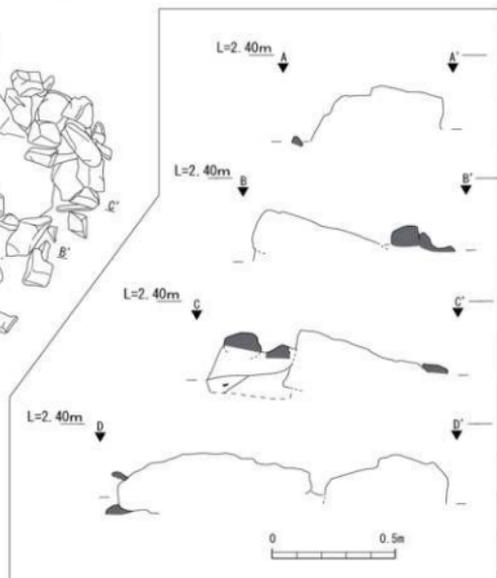


第 128 图 庭 1001 景石断面图 (4)

⑨

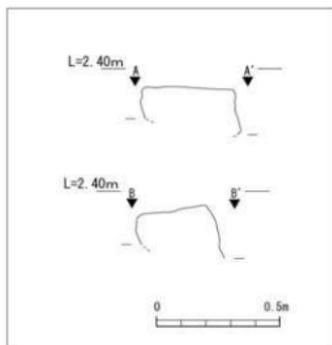
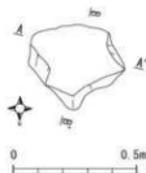


⑩ ⑪



第129图 庭1001景石断面图(5)

⑫



第130図 庭1001景石断面図(6)

368～371は備前焼播鉢で、口径は30cm前後に復元される。372は口径48cm程度に復元される備前焼甕である。内外面には板ナデの痕跡が認められ、口縁は玉縁状に収める。

373は青磁香炉である。口縁端部が内側へ肥厚する形状を有する。374・375は青磁皿である。375は稜花皿で、内面に稜花に沿って櫛彫りの文様が施される。376～385は青磁碗である。376・377は体部が内彎する上田分類のE類に相当する。378は筋連弁が施されており、B II類、379～384は線描連弁文が施されており、B IV類に相当する。

386～389は白磁皿。386は厚めの白磁軸が施されており、森田分類のD群に相当する。387・388は端反りの皿でE2群、389は輪花皿でE4群に相当する。

390～394は青花皿である。390は小野分類のC群、391～394はB群に相当する。395～397は青花碗。395は端反りの碗で、小野分類のB1群、396・397はいわゆる蓮子碗で、C群に相当する。

398は焼締陶器の壺である。器壁は薄く、焼きは良好である。中国南部の製品である。

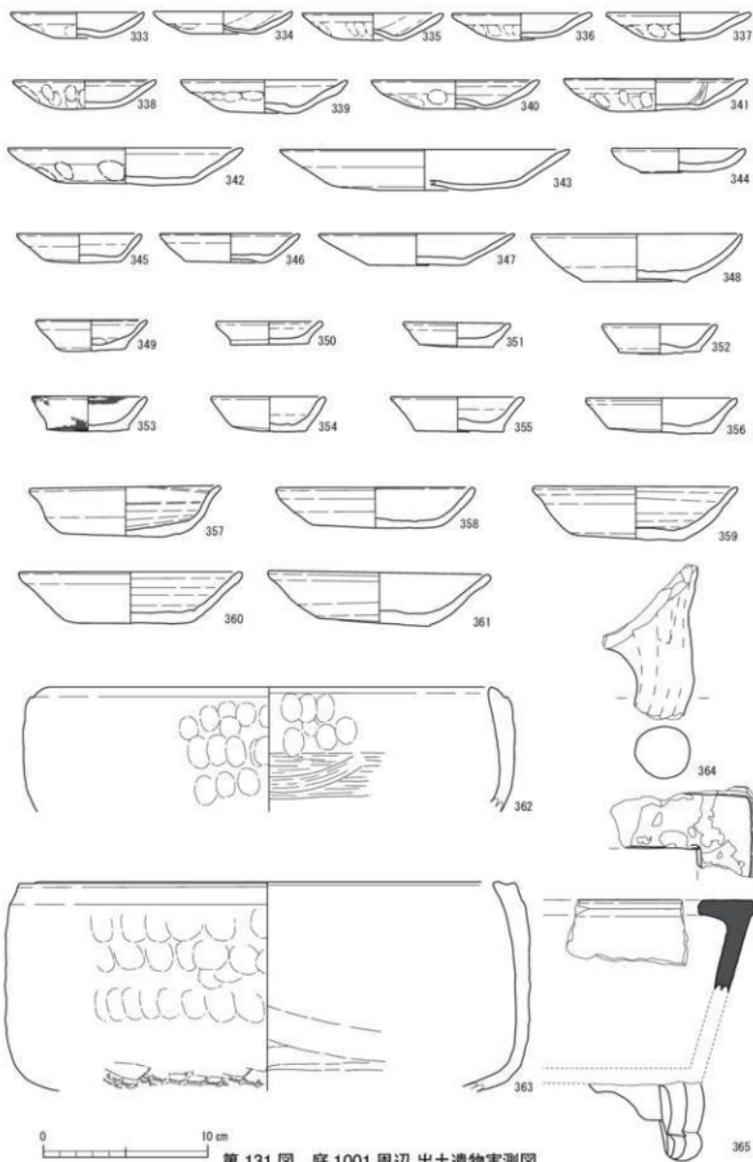
399は土錘である。長さ4.1cm、幅2.2cmを測り、中心部に直径5mm程度の穴が貫通する。

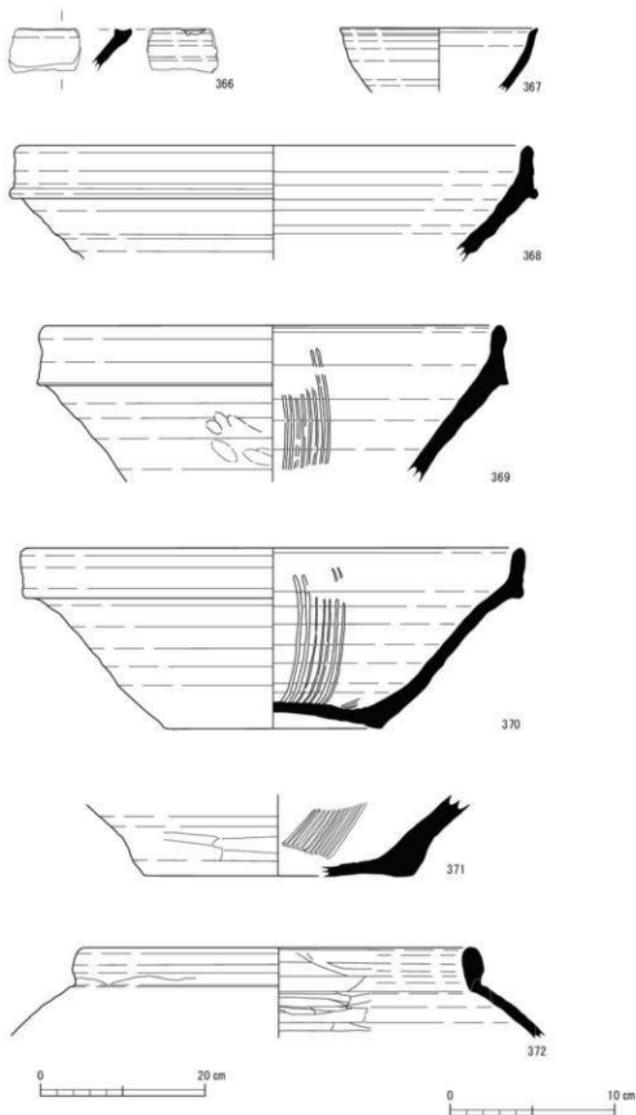
400～402は銅製品である。400は飾金具。薄く仕上げられており、釘穴が穿たれている。401は足金物、402は二重折釘である。

403は鉄製の火箸。断面は4mm程度の方角を呈し、長さは37.3cmを測る。柄の端部を環状に仕上げ、二本を鎖で繋いでいる。

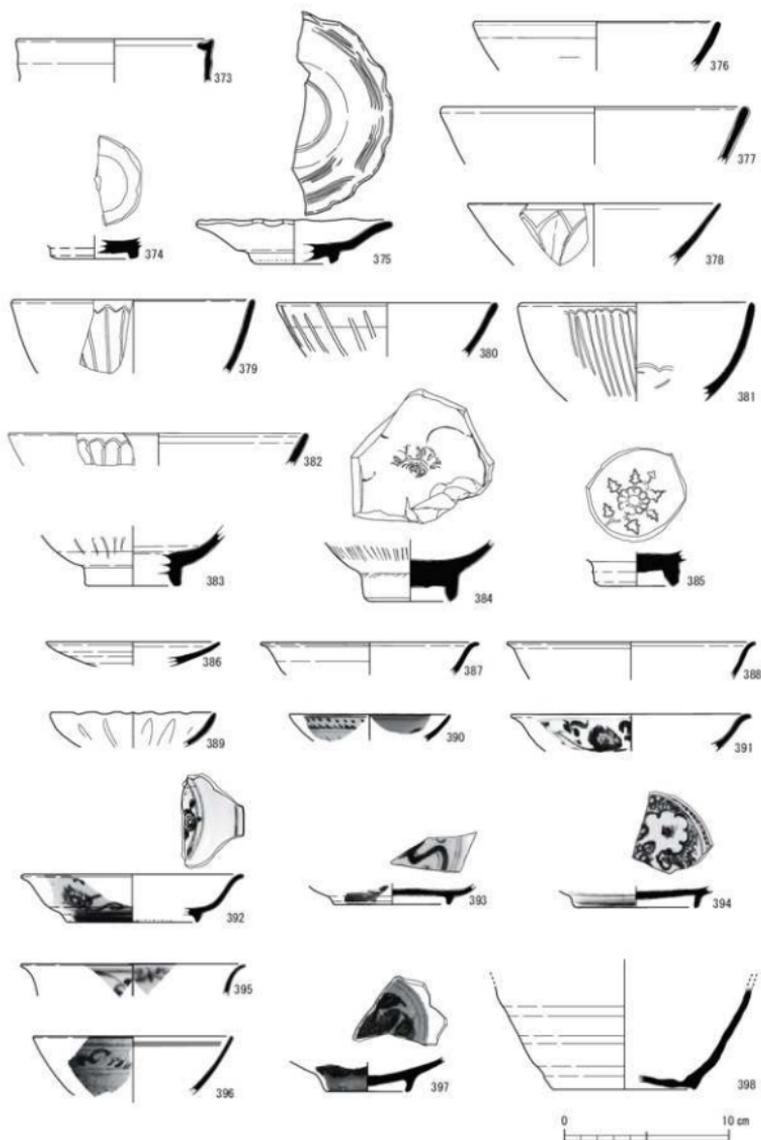
404は凝灰岩製の砥石である。

405～419は銭である。405は太平通寶で976年初鋳、406は祥符元寶、407は祥符通寶で1009年初鋳、408は天禧通寶で1017年初鋳、409は真書体、410は篆書体の皇宋通寶で1038年初鋳、

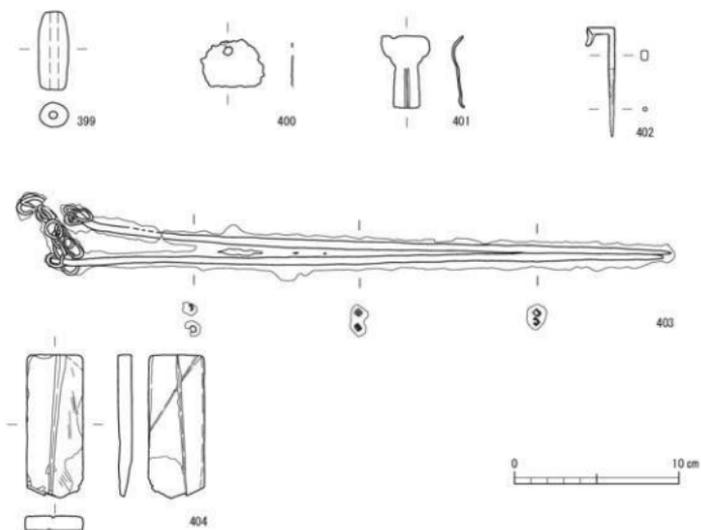




第 132 图 庭 1001 周边 出土物实测图

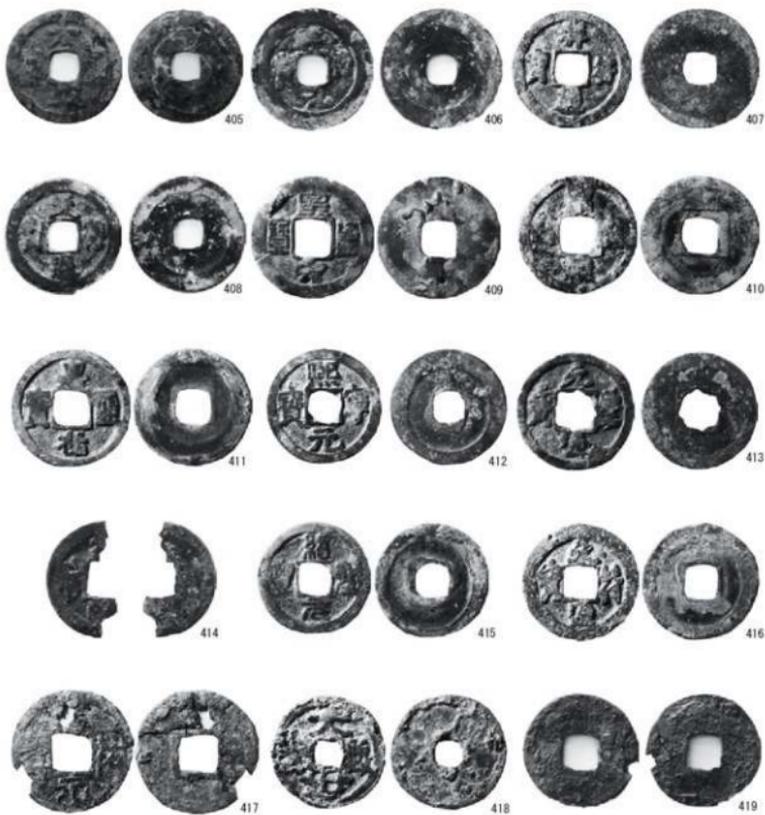


第 133 图 庭 1001 周边 出土遺物実測図



第134図 庭1001周辺出土遺物実測図

411は真書体の嘉祐通寶で1056年初鑄、412真書体の熙寧元寶で1068年初鑄、413は行書体の元豐通寶で1078年初鑄である。412の郭穴は不整形、413の郭穴は四辺を加工し、星形となっている。414は篆書体の元豐通寶、415は篆書体の紹聖元寶で1094年初鑄、416は行書体の元符通寶で1098年初鑄である。405～416は北宋銭である。417は1241年初鑄の淳祐元寶で南宋銭、418は1454年初鑄の大世通寶で琉球銭である。419は四文字や外縁の名残があるが、ほとんど分からない。模鑄銭である。



第 135 图 庭 1001 周边 出土遗物实测图

### ③建物 (SB)

建物は、礎石建物が5棟、掘立柱建物が1棟確認された。

#### 建物 1-1 [SB1001]

〈検出地点〉

1-Ⅱ区、2-Ⅰ区、7-Ⅰ区〔中グリッド (b-9)・小グリッド (F-2~5、G-2~4、H-2~4)〕

〈形態等〉

礎石建ての南北棟の建物で、棟方向はN-17°-Eと若干東に振る。規模は最大で桁行七間(約14m)、梁間四間半(約9m)である。

礎石は整地層上面に据えられるが、明瞭な掘り方や割石の敷き込み等は見られない。礎石には砂岩川原石が用いられており、身舎柱を支えたとみられる50cm大のものや側柱、床束を支えたとみられる20~30cm大のものがある。身舎柱は一・九通とイ・ホ・ル通とみられ、柱間寸法は六尺五寸(1.97m)前後である。十通も南北方向に礎石が配されているが、いずれも身舎柱に対して小振りであり、東石と考えられる。なお、ヲ~ヨ通にも部分的に小礫の配置が見られ、何らかの構造物が想定できる。検出時の礎石上面のレベルは最大15cmの差があり、建物の不同沈下があったと推定される。特に六通の沈下が著しく、ハ六・ホ六の上面では浮いた柱との間に敷き込んだと思われる割石を確認した。六通の下層には第2遺構面の溝2-1(SD2001)があり、この部分が建物の重みで沈下したためと考えられる。調査時点では第一層上面で検出した20cm以上の石を礎石として図示し検討したが、柱通りの揃わないものがあり、後世の移動を考慮してもなお、役割の不明な石が残るのは今後の検討課題である。

建物の基本的な構造として、現状では五間半×四間半の身舎と庭園に面したおよそ一間半×四間半の付属部に大別できると考える。従って、身舎の北側妻はイ通、南側はル通となる。現段階で身舎の間取りを推定するならば、まず50cm大の礎石が並ぶホ一~ホ七、ホ七~ル七、ル七~ル一、ル一~ホ七で囲まれた三間×三間の空間が復元できる(部屋①)。当建物の主室となる広間であろう。ホ六、ル六の位置に配されているのは、もしかすると広間の西側のこの位置に床があったのかもしれない。部屋①の西側には一間×三間の空間が想定できる(部屋②)。また、六通にはホ六から北に一間毎に50cm大の礎石が配されており、ここを西辺とする二間×二間半の空間が復元できる(部屋③)。さらにこの西側にも一間半×二間の空間が想定される(部屋④)。なお、イ一~ル一及びホ七~ル五付近で焼けた壁土片を集中して検出したことから、建物の東側と部屋①の西側には土壁が塗られていた可能性が高い。壁土はスサをほとんど含まないきめの細かい粘土で、厚さ3cmほどに復元される薄いものである。十通には小礫がほぼ一間間隔で配置されていることから、落縁状の施設が考えられる。さらに西側には3~5cm大の石英質の白色円礫を幅0.5mで敷き詰めた集石帯を長さ5.5mにわたり検出した。これは軒先の雨落ちと考えられるが、身舎の北側妻と考えられるイ通からさらに一間ほど北側に延びており、ここに何らかの架構物の存在

が推定できる。

身舎の南側には小礫の部分的な配置が認められる。このうちヲ通は東西方向に直線的な配列であり、西側の落緑と続く落緑と推定できる。さらに、落緑から南側の庭園に向けてヲ二・五～ヨ二・五には一間半四方の張出が復元できる。礎石は小さく不規則な配置であることから、臨時的な棧敷状の施設とも考えられる。ここから景石までの距離はおよそ3m、庭園を眺めるには格好の位置であろう。

ところで、ワ九・ヨ九・ヨ十・タ十は身舎柱の礎石と同等の大きさであるが、一・二列にはこれに対応する礎石は見られない。ワ九・ヨ九は建物の西辺につながる袖屋根の礎石として考える案もあるが、ル通以南の構造については今後の検討の余地が残る。

(周辺の出土遺物) (第141～146図)

420～439は土師質土器皿である。420～432は手づくね成形によるもので、色調は灰白色系を呈する。口径は、420～423が9cm前後、424～427が11cm前後、428～432は12cm～14cmの大型のものである。

433～439はロクロ成形によるもので、433～437は底部に静止糸切り、438・439は回転ヘラ切りの痕跡を留める。433の口縁部にはタールが付着しており、灯明皿である。

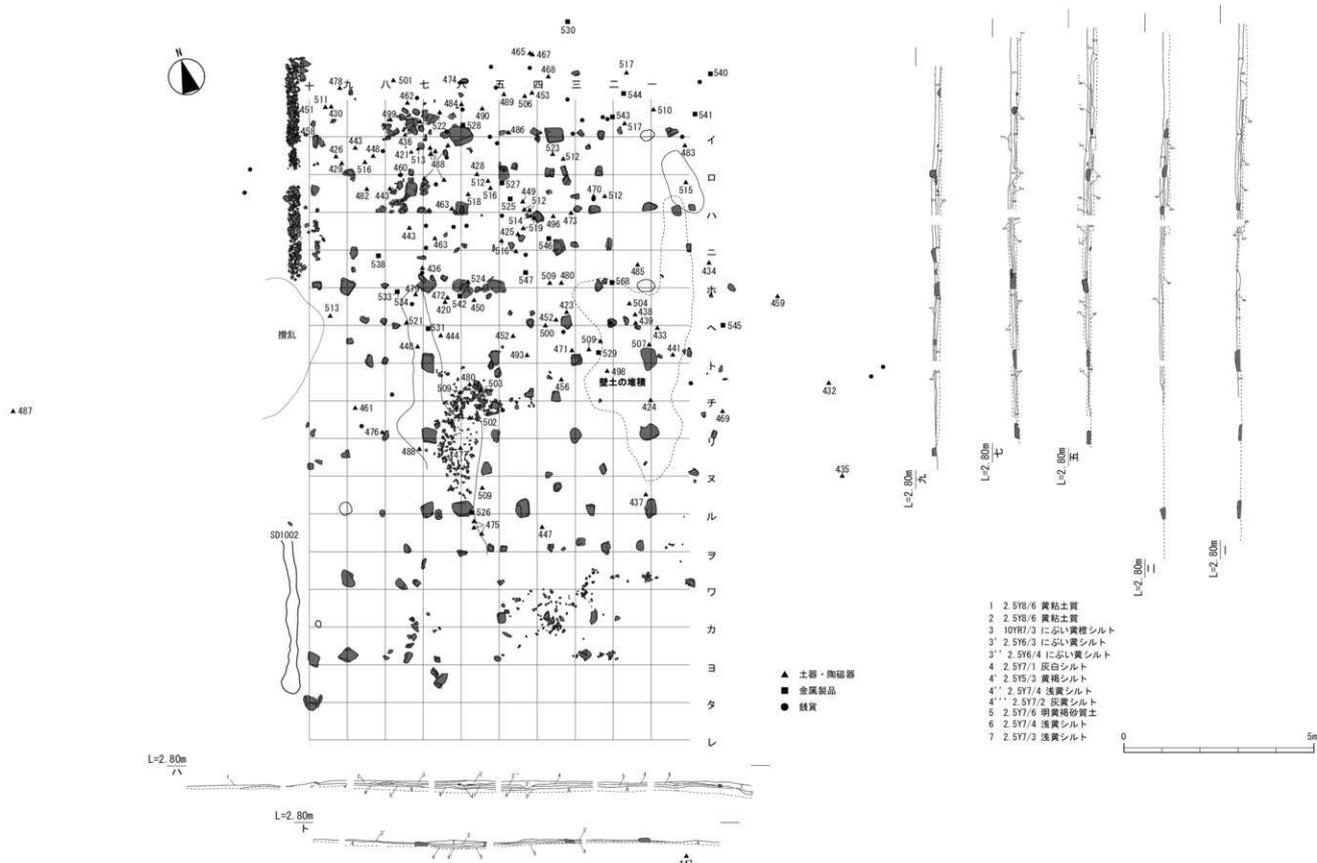
440～449は瀬戸美濃焼である。440は、受け口状の口縁部を持ち、体部は直立する。筒形の容器と思われる。441は肩部が大きく張り出した大海茶入れで、短い頸部を持つ。442～446は天目茶碗である。442は口径が7.6cmに復元される小型の製品。443は口縁部から下方に筋状に鉄軸が削り取られ、菊花のような文様を見せる。447は鉄軸の平碗、448は灰釉の平碗である。449は灰釉の丸碗で、体部外面にはスタンプによる線連弁文が施される。

450～452は備前焼播鉢である。大きく拡張した口縁帯はやや内傾し、外面には凹線が巡る。間壁編年のV期の製品である。

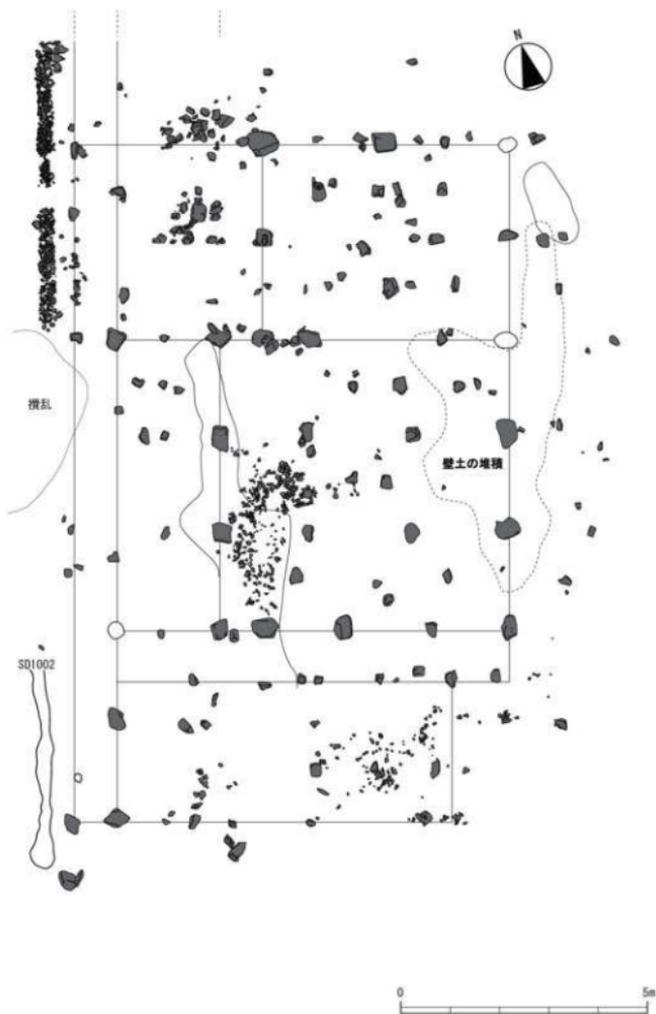
453～469は青磁である。453は薄い器壁を持つ小皿で、体部は内彎し、端部はやや尖り気味に取める。454～456は稜花皿である。457は碗の底部で、見込に花文のスタンプが認められる。458は口縁部が外反する上田分類のD類である。459は、体部外面に丸彫りの連弁文、460～463は体部外面に線描連弁文が施されている。それぞれ、BⅢ類、BⅣ類である。464は口縁部と体部内面に雷文帯が見える。C類である。465～468は無文の碗で、E類である。469は青磁盤。口縁部を大きく外に折り曲げ、弧圏線を巡らせ稜縁とする。体部内面には丸彫りの角陰連弁文が施される。

470～488は白磁である。470・471は小坏。472は口縁が菊花状になる小皿である。473はやや内彎する体部を持つ皿で、端部はやや尖り気味に取める。474～487は森田分類のE2群に相当するもので、体部が外反するもの(474・475)と、端反りのもの(476～481)がある。488は朝鮮産の白磁と思われる。胎土は陶器質で釉は乳白色から黄白色に発色し、全面に微細な貫入がみられる。

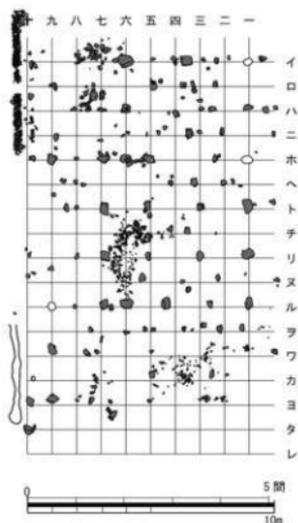
489～508は青花皿である。489～496は端反りの皿で、小野分類の皿B1群に相当する。外面



第136図 SB1001平・断面図



第 137 図 SB1001 平面図



第138図 SB1001簡易図



第139図 SB1001復元案模式図

には牡丹唐草、見込には玉取獅子などが見られる。497～500は基筒底の皿で、皿C群に相当する。498は粗製品で漳州窯系の製品と思われる。501の体部はやや外反し、502の体部はやや内彎する。503～508は粗製品で、漳州窯系の製品と思われる。端部が外反し、見込の軸をドーナツ状に掻き落とす。

509～520は青花碗である。509は端反りの碗で、小野分類の碗B1群に相当する。510は口縁部を外側に強く屈曲させ、鐔状とする。511は直口縁となる。512～516は蓮子碗で、碗C群に相当する。517はやや直立した口縁を持つもので碗D群か。518～520は碗E群で、内底面が盛り上がった饅頭心の碗である。

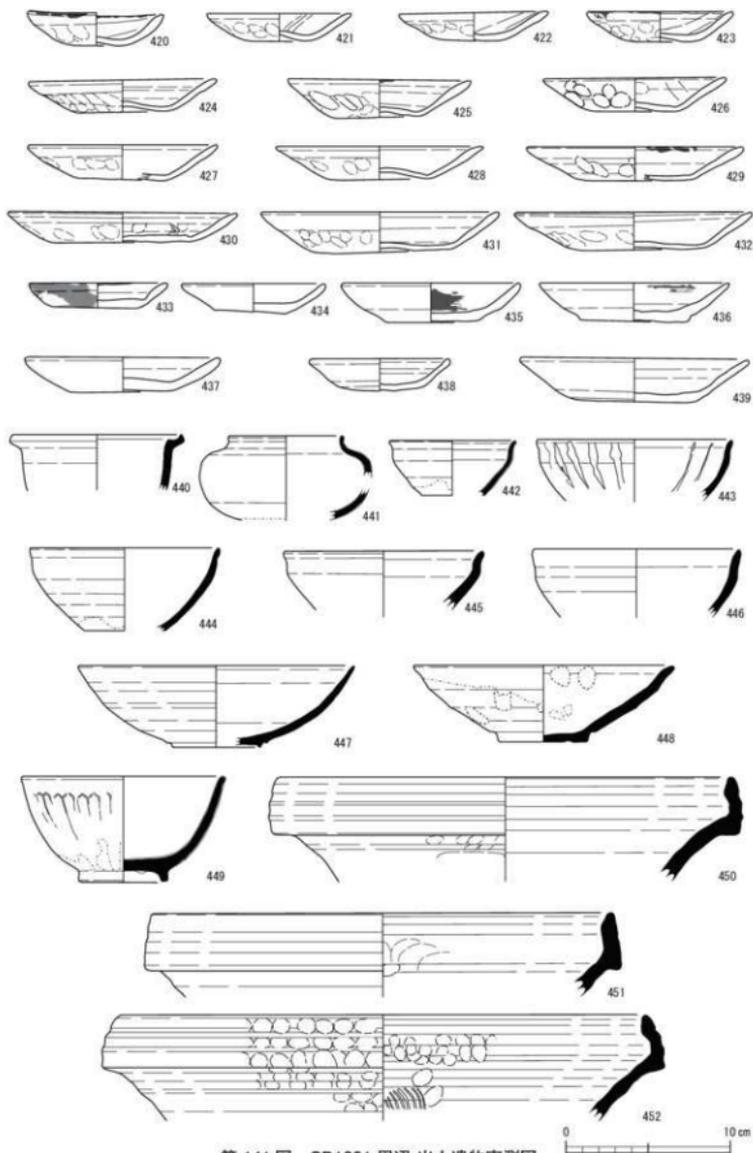
521は青花合子の蓋である。花形の窓に四方樺文や草花文を描く。

522は黄褐色の釉薬のかかった陶器鉢である。体部はやや内彎し、端部を外側に小さく折り曲げ、断面を「て」の字状とする。中国製と思われる。523は陶器の破片で、器種や産地は不明である。赤褐色の胎土に乳白色の釉薬がかけられ、黒色の釉薬で文様を描く。赤色の釉薬で着色されている部分もある。524は朝鮮産の舟徳利である。

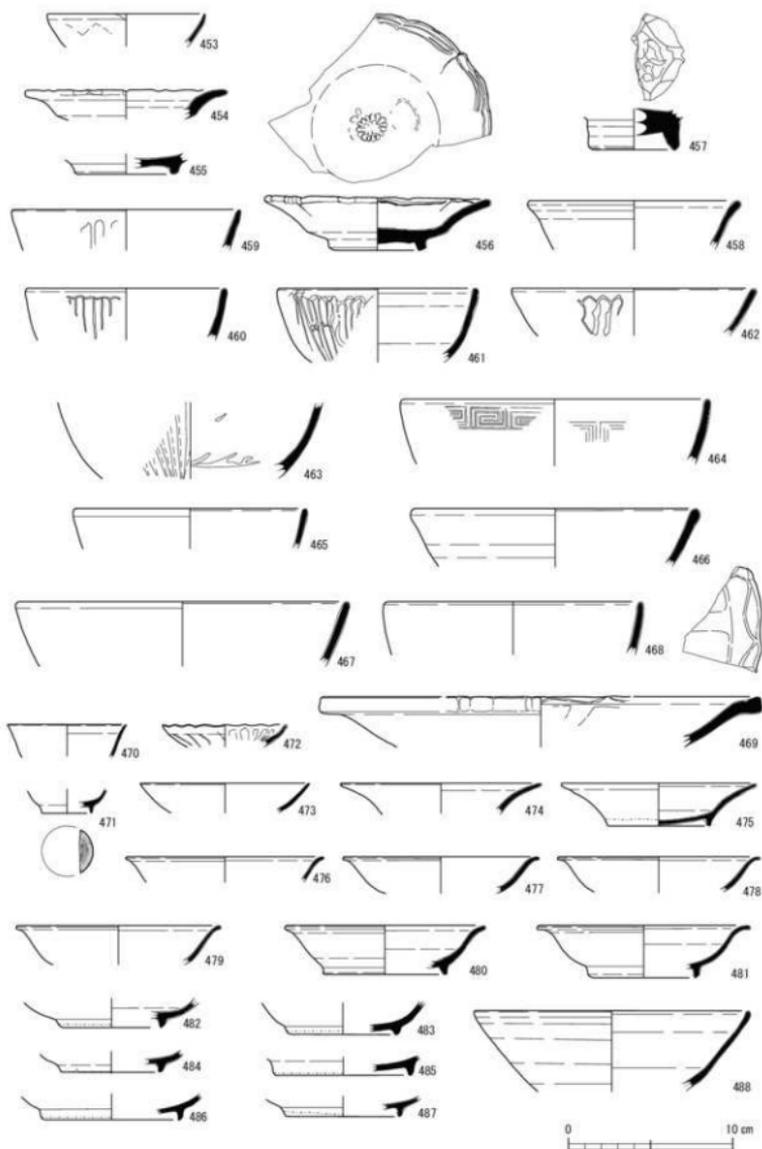
525～539は銅製品である。525は丸みを帯びた銅製のフックに鉄鎖が取り付く吊り金具である。526は罫り止め。丸棒状の一端をL次状に、一端を輪状に加工し、ここに板状の別の材を差し込みU字状に折り曲げて可動部としている。527・528は、型抜きして作られた傘形の銅板2枚のう



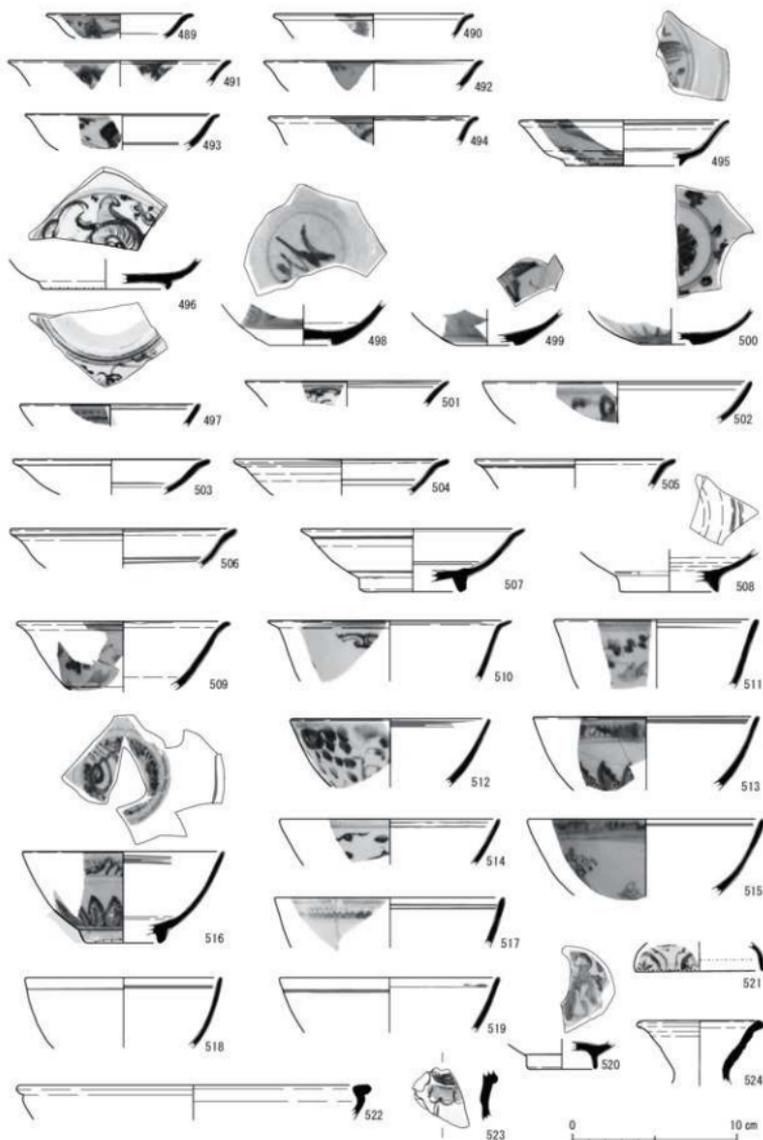
第 140 図 SB1001 と庭 1001



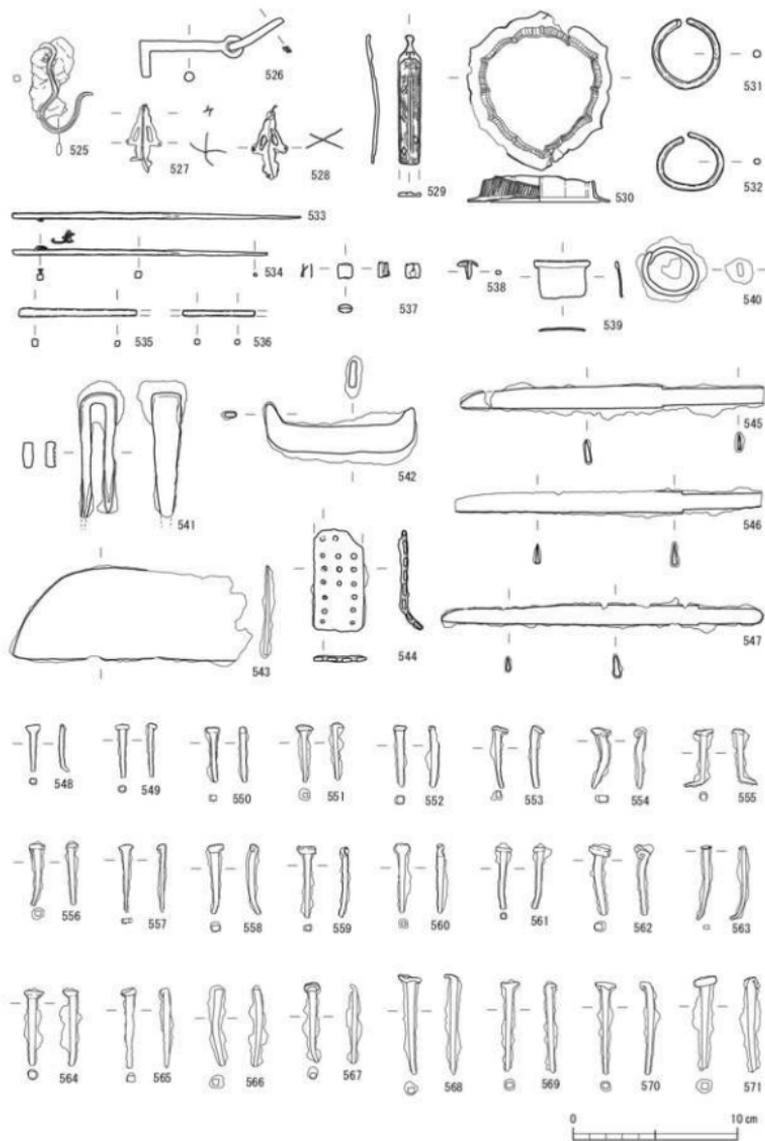
第 141 图 SB1001 周边 出土遗物实测图



第 142 图 SB1001 周边 出土遗物实测图



第 143 图 SB1001 周边 出土遗物实测图



第 144 图 SB1001 周边 出土遗物实测图

ち、1枚は頂部に、1枚は下部に切り込みを入れ、両者を断面十字形に組み合わせたもので、天蓋あるいは軒先などの軒先に垂下する垂飾品の一部であると考えられる。529は斧である。表面は魚子地に花菱6個を彫る。530は環状の飾り金具である。用途不明であるが、変形の六弁の稜花を象つたものである。531・532は環状の銅製品である。533～536は銅製の火箸で表面には金箔が施される。533・534は插って出土した。基部から1.4cmの位置に輪が付き、これに繊細な銅鎖を通して2本を連結していたようである。座敷飾りに使用された香関係の火箸と考えられる。537は金箔が施された飾り金具である。538は鋏で、頭部は丸く金箔が施される。539は鐘と思われる。

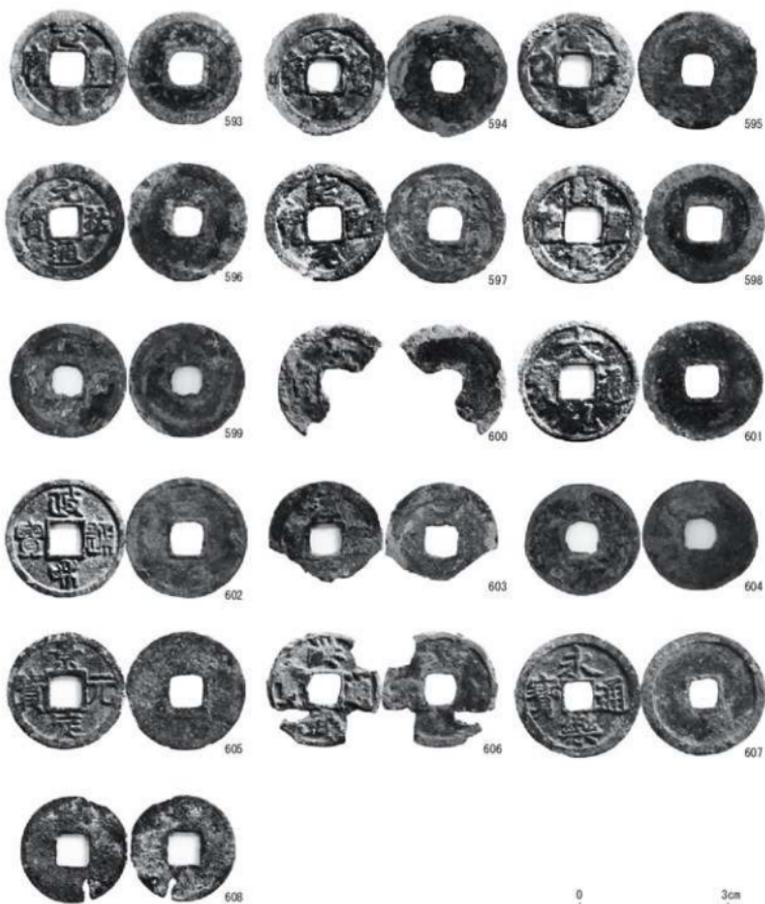
540～547は鉄製品である。540は環状を呈する。541は厚さ5mm程度の鉄板の両端を尖らせ、U字状に折り曲げた製品である。542は火打金。543は舟底形の鉄板で、厚さは2mm程度である。544は小札である。長辺は残存長で6.0cm、短辺は3.0cmの長方形で、17の孔が確認できる。545～547は刀子である。

548～571は鉄釘である。断面は四角形で、全長は5～10cmを測る。建物の床材や屋根材を固定したものであろう。建物平面と重複しながら、北側から東側にかけて特に濃密に出土しており、建物が北東方向に向かい倒壊した可能性が考えられる。

572～608は銭である。572・573は開元通寶で621年初鑄の唐銭である。573の背面上には「月」が見られる。574～602は北宋銭である。574は宋通元寶で960年初鑄、575は太平通寶で976年初鑄、576は淳化元寶で990年初鑄、577は至道元寶で995年初鑄、578は景德元寶で1004年初鑄、579は祥符元寶で1009年初鑄、580は天禧通寶で1017年初鑄、581は篆書体、582は真書体の天聖元寶で1023年初鑄、583は景祐元寶で1034年初鑄、584は真書体、585は篆書体の皇宋通寶で1038年初鑄、586は至和元寶で1054年初鑄、587は真書体、588は篆書体の嘉祐通寶で1056年初鑄、589は治平通寶で1064年初鑄、590・591は真書体、592は篆書体の熙寧元寶で1068年初鑄である。591の郭孔は四辺を加工し、星形となっている。593は篆書体、594は行書体の元豊通寶で1078年初鑄、595は篆書体、596は真書体の元祐通寶で1086年初鑄、597は真書体、598は篆書体の紹聖元寶で1094年初鑄、599は元符通寶で1098年初鑄、600は聖宋通寶で1101年初鑄、601は大觀通寶で1107年初鑄、602は政和通寶で1111年初鑄である。603～605は南宋銭で、603は淳熙元寶で1174年初鑄、604は淳祐元寶で1241年初鑄、605は景定元寶で1260年初鑄である。606は洪武通寶で1368年初鑄、607は永樂通寶で1408年初鑄。いずれも明銭である。608は無文銭で、やや赤く錆が出ており、薄い仕上がりの模鑄銭である。



第 145 图 SB1001 周边 出土遗物实测图



第 146 图 SB1001 周边 出土遗物实测图

## 建物 1-2 [SB1002]

(検出地点)

6-I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (I-17～18、J-16～19、K-17～19)]

(形態等)

礎石建ての南北棟の建物で、棟方向はN-11°-Eと若干東に振る。規模は最大で桁行六間(約12m)、梁間三間(約6m)、北東部に半間×二間半の張出部が付随すると考える。礎石は盛土整地層上面に据えられるが、掘り方は確認することはできず、礎石を据えながら整地したものと考えられる。礎石には和泉砂岩が用いられており、身舎柱を支えたとみられる50cm大のものや、側柱・床束を支えたとみられる20～30cm大のものがあり、柱間は六尺五寸(約197cm)を測る。身舎柱はヲ・タ通、二・六通とみられ、ここに二間×二間の一室が想定できる。さらにその西側には八通までの一間幅の空間もある。北側はり通に一列に並んだ礎石が認められるが、そこから北側は後世に耕作などの影響を大きく受けたと考えられ、礎石の座りがあまり良くない。建物の東辺は基本的には二通であるが、二通からり通までは半間東側の一通に礎石とみられる石の列が認められる。ここには張り出しが設けられている。

SB1002の建築の際には建物部分に盛土が施されており、東側には30cmほどの段差ができている。

## 建物 1-3 [SB1003]

(検出地点)

6-I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (H-17、I-17～19)]

(形態等)

SB1002の西側約3mに礎石と思われる上面の平たい50cm大の砂岩が一間(六尺五寸=約197cm)幅で並び、さらに北側に一間幅で礎石の抜き取り痕(EP1～5)が5基確認できる。その一間北側にはまた礎石と考えられる上面の平たい50cm大の砂岩がある。建物の軸はSB1002と同じくN-11°-Eと若干東に振る。SB1003は、礎石に被熱痕が認められることや、周辺に焼土や炭化物が分布することなどから焼失家屋であると考えられる。おそらくSB1002に先行する建物であろう。

(周辺の出土遺物) (第148～154図)

SB1002・1003周辺から出土した遺物をまとめて紹介する。

609～611は手づくね成形による土師質土器皿である。609・610は口径がそれぞれ8.2cm、9.1cmを測り、やや突上げ底となる。色調は灰白色系を呈する。609は、口縁部の一部を抉り、その部分にタールが付着しており、灯明皿である。611は口径が13.9cmに復元される。内底面端に強いヨコナデによる凹線が巡る。612～616は口径8cm前後、617～620は口径11～12cmを測るロクロ成形による土師質土器皿である。底部切り離し技法は静止糸切りで、直線的に外傾する体部を持つ。体部境が角張ったもの(612・613・618・619)と、丸く仕上げるもの(614～617・620)

がある。621～625は土師質土器杯である。口縁成形によるもので、底部切り離し技法は静止糸切りである。

626は土師質土器鍋である。体部外面はユビオサエ、内面はユビオサエの後に板ナデの痕跡を留めており、端部には凹線が巡る。同一個体の底部と思われる破片には格子目タタキがほどこされる。煤などは付着しておらず、未使用品の可能性がある。627は土師質土器皿の底部を二次加工した円盤状の土製品で、長径2.2cm、短径2.0cm、厚さ3mmを測る。中心に直径2mmの孔が穿たれている。628は厚さ7～10mmの器壁を持つ土師質土器の製品で、口径は18.4cmを測る。体部外面には二条の凹線が巡り、その間に菊花状の文様が施される。手埴りなどの火器と思われる。

629は瓦質土器で、口径11.6cmに復元される。内埴した体部を持ち、外面にはミガキの痕跡が顕著に認められる。二条の沈線と断面三角形を呈した格子目状の刻みが見られる。

630は鉄軸の肩衝茶入れである。囊胴状に張り出した胴部に工具による一条の沈線が巡る。

631～634は瀬戸美濃焼である。631は天目茶碗で、やや内埴気味に立ち上がる体部を持ち、口唇部はほぼ直立、端部は外反する。632は鉄軸の平碗。口縁部を内側に三角形に押し込んだ部分があり、輪花状となると思われる。633・634は灰軸丸皿で、口縁は12.0cmに復元される。内埴した体部を持ち、端部は外反する。

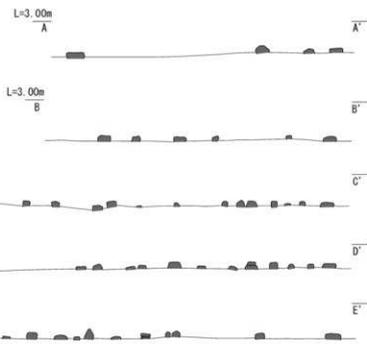
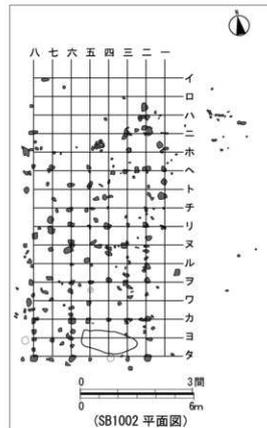
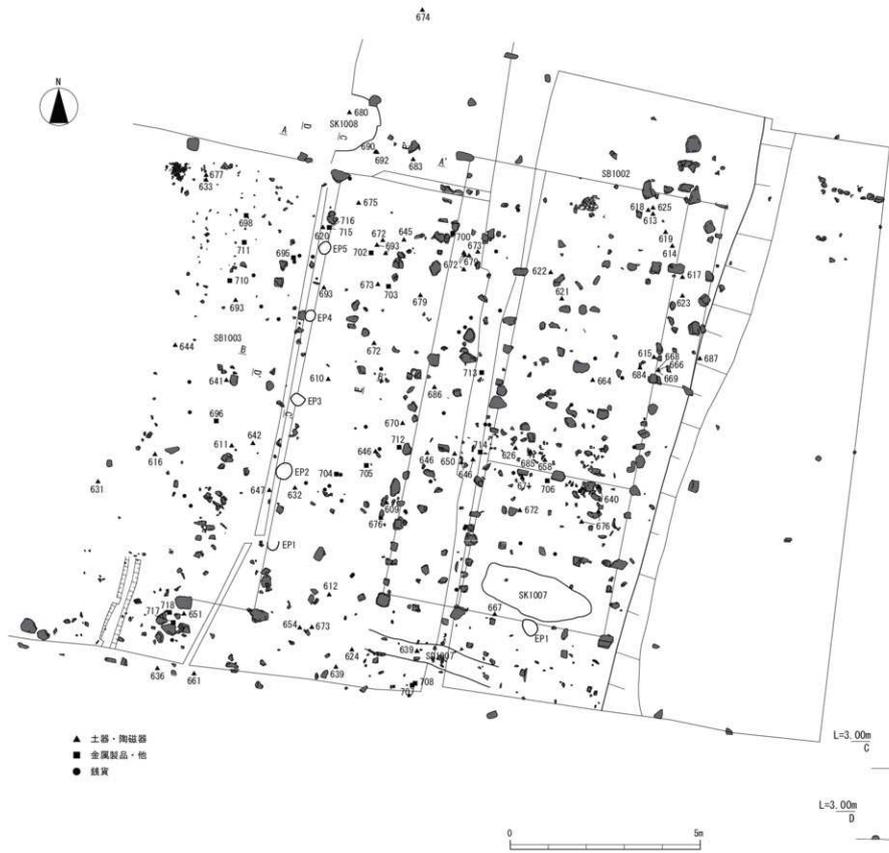
635～639は備前焼鉢である。内埴した体部を持ち、外面下部はヘラケズリの痕跡を留める。640は備前焼鉢で、肩部が張り、口縁部を小さく上方につまみ上げた形状を有する。641・642は備前焼甕の破片で、工具による窯印が認められる。643・644は備前焼の水屋甕。口縁部は短く立ち上がり、端部は外方に小さく拡張されて面をなす。

645は、焼締陶器の壺あるいは甕の口縁部の破片で、玉縁状を呈する。646～648は朝鮮産の舟徳利。やや上げ底となる底部からやや外側に張り出して丸みを持った胴部を形成し、頸部を細く絞る。外面には雑軸が施される。649は中国産の焼締陶器の壺の底部である。外面には雑軸が施される。650はベトナム産の焼締陶器で、長胴壺の底部である。平坦な底部からほぼ垂直に立ち上がる体部を持つ。胎土は緻密で断面はなめらかである。

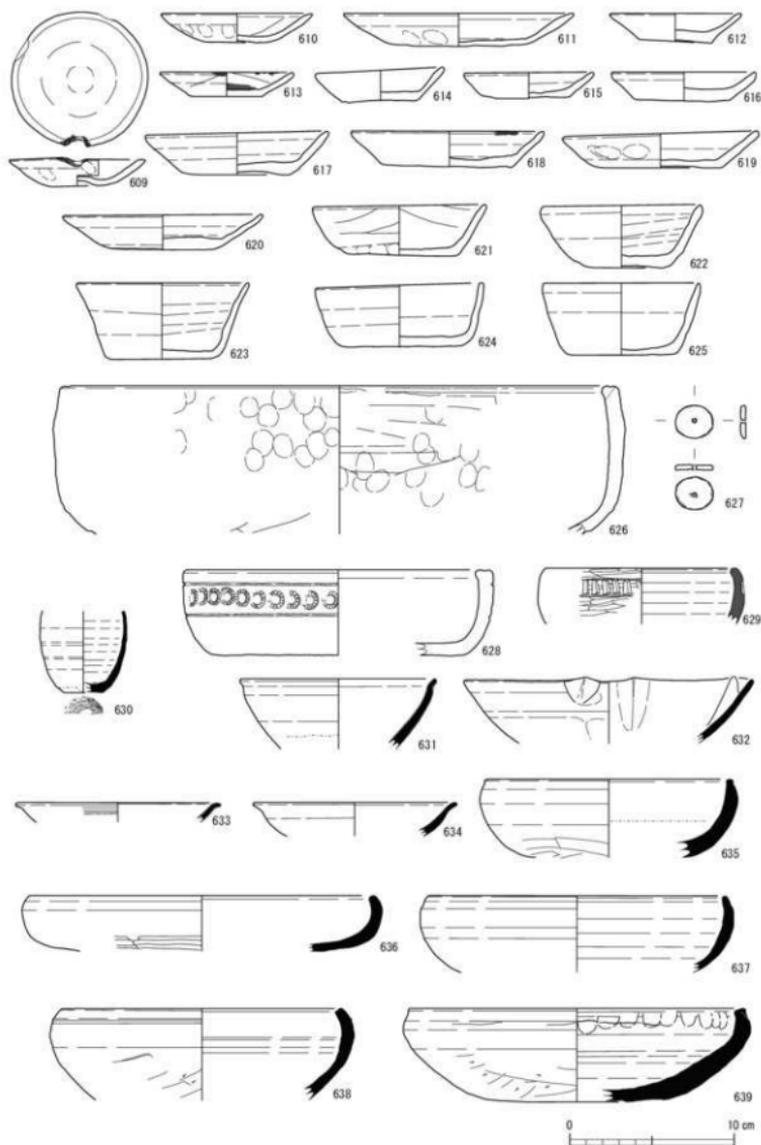
651～657は青磁碗である。651は内埴する体部を持ち、端部をやや尖り気味に仕上げる。水色がかった軸が薄くかかっている。景德鎮系の青磁である。652・653は体部外面に線描の連弁文が施される。上田分類のBⅣ類である。654は口縁外面に沈線が1条巡る。E類に相当する。655～657は外方に直線的に開く体部を持つ。656は透明感のある軸、657はやや乳白色がかかった軸がかげられているが、いずれも体部外面には横方向のケズリの痕跡が明瞭に認められる。

658は青磁皿。内外面に線描の連弁が認められ、口縁端部には等間隔で抉りが入る。輪花皿であろうか。659は、菊花形の形状を持つ皿で、水色がかった軸が薄くかかる。景德鎮系の青磁である。660は小型の酒海壺の破片で、小さく立ち上がる頸部を持つ。水色がかった軸が厚くかかる。661は青磁花瓶の耳部で、龍の形状を呈する。662は花瓶の頸部で、水色がかった軸が厚くかかる。

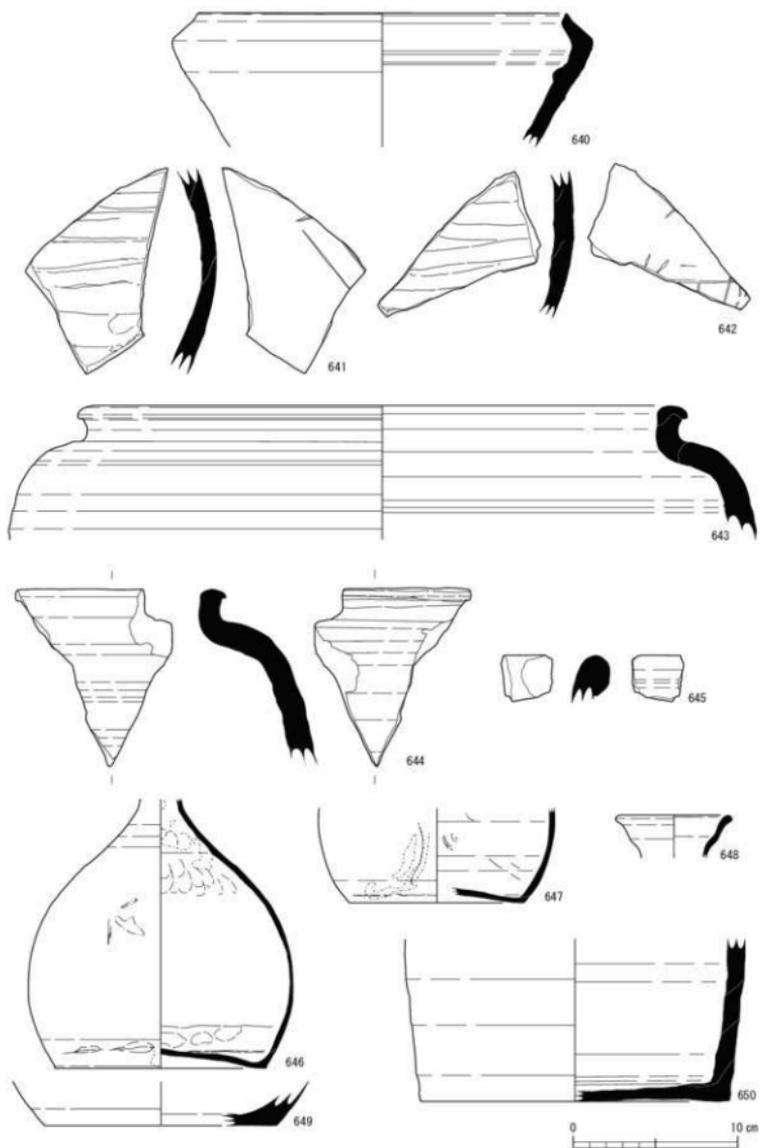
663～675は白磁である。663・664は小杯である。663は内埴する体部を持ち、小さい高台が付く。664はやや腰が張った形状で体部は外反し、見込みは円形に軸を掻き落とす。665はやや厚



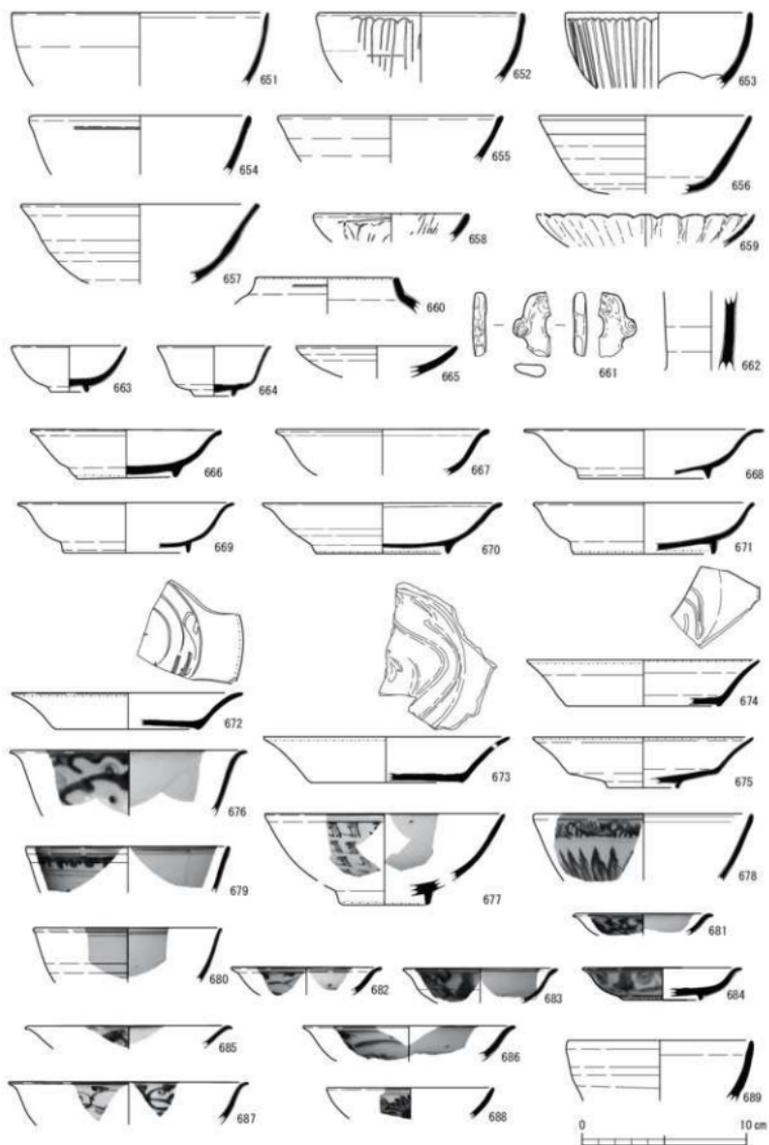
第 147 図 SB1002・1003 平断面図



第 148 图 SB1002·1003 周边 出土遗物实测图



第 149 图 SB1002·1003 周边 出土物实测图



第 150 图 SB1002·1003 周边 出土遗物实测图

い器壁に白色の釉がかかる。森田分類のD群である。666～671は端反りの皿で、E2群である。畳付は露胎で砂が付着する。672～674は碁笥底で、体部が外反した口禿の皿である。見込みには片切彫りによる陰刻文様が施される。胎土が精緻で焼き上がりが白いもの(672・673)と、胎土がやや粗く焼き上がりがやや黄ばんでいるもの(674)がある。675は、高台を持ち、腰が張った形状で、体部が外反した口禿の皿である。胎土はやや粗く、やや黄ばんだ色調を呈する。

676～680は青花碗である。676は端反りの碗で、小野分類の碗B群である。体部外面には唐草文が施される。677・678は連子碗で、碗C群である。679は直口縁の碗で、口縁部外面には波濤文帯が施される。680は比較的直線的に上方に伸びる体部を持つ碗で、碗E群である。

681～688は青花皿である。681～687は端反りの皿で、外面に唐草文が施される。小野分類の皿B群である。688はやや内彎する体部を持つ。皿E群である。

689は、天目茶碗である。端部から約7mmは錆軸で、恐らく覆輪が付けられていたことが考えられる。胎土には細かい黒色粒が認められ、中国産と思われる。

690～692は青白磁梅瓶である。胴部外面には柳描による渦文が施され、全面に貫入が入る。3点はそれぞれ接合しないが、同一個体の可能性がある。付近ではSK1008からも梅瓶の破片が出土している。

693は三彩の水滴で、桃形の型で成形されたものである。桃の胴部中程で上下を接合している。全体に緑釉がかかり、体部の葉をかたどった部分と注ぎ口となっている茎の部分は紫釉、上面には黄釉がかかる。底部は碁笥底で、露胎である。インドネシアのスラウェシ島などで多く出土例があり、桃形の製品の上には猿や鳥、人物をかたどった飾りが付く。

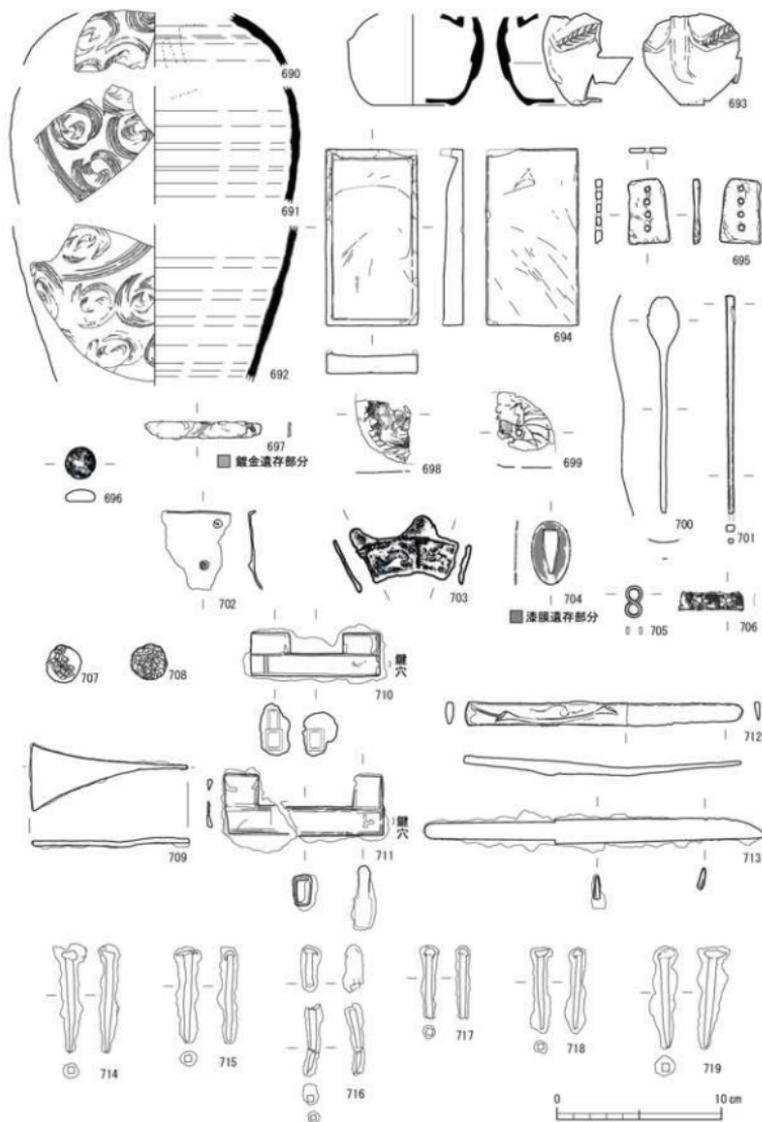
694は硯である。陸の部分は中央部が凹んでおり、使用痕が認められる。695は砥石である。両面に使用痕が認められ、製品の中央部には直径2mm程度の孔が4カ所穿たれている。

696はガラス玉で、直径1.8～1.9cm、厚さ0.7cm、重さ3.40gを測る。色調は青色を呈する。

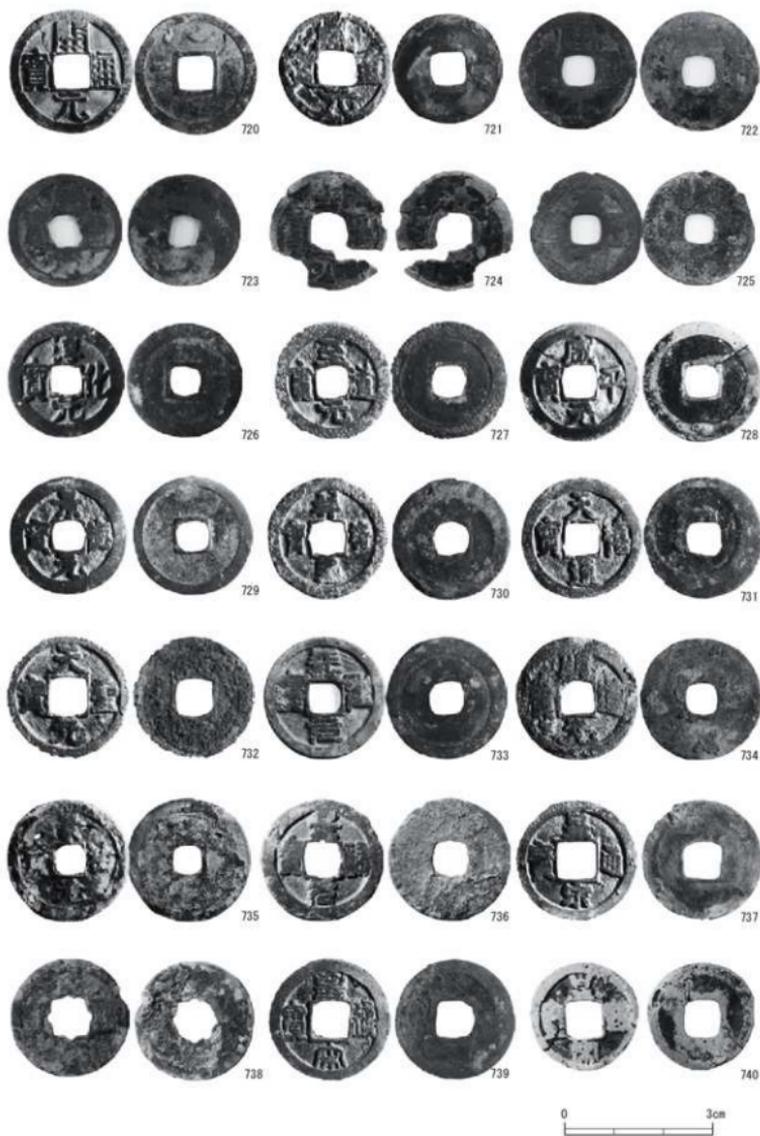
697は両側が花先形となった銅製の飾り金具で、金が施されている。698・699は厚さ0.5mm程度の銅製の飾り金具で、直径7cm程度の円形に復元される。いずれも金が施されており、これらは同一個体である可能性もある。表面には細かい魚子目が認められ、文様が陰刻される。699は中心から少し外れたところに直径4mm程度の孔が穿たれている。700・701は銅製の香匙と箸で、香道具である。香匙は厚さ1mm以下で非常に薄い仕上がりとなっており、箸も最大で5mm程度といずれも華奢なつくりとなっている。702は銅製の香炉と考えられる。直立した体部を持ち、端部を内側に折り曲げる。体部には飾りとしての鋸がうたれている。703は鬘鬘文風の文様が施された銅製品である。704は切羽。周囲に細かな刻みが施され、表面には漆が塗布されている。705は黄靴と考えられる。幅4mm程度の銅製の板を「8」字形に仕上げる。706は筭である。表面には細かい魚子目が認められ、牡丹の彫金が施される。

707・708は鉛玉で、鉄砲玉である。直径2.2cm、重量は50g前後を測る。

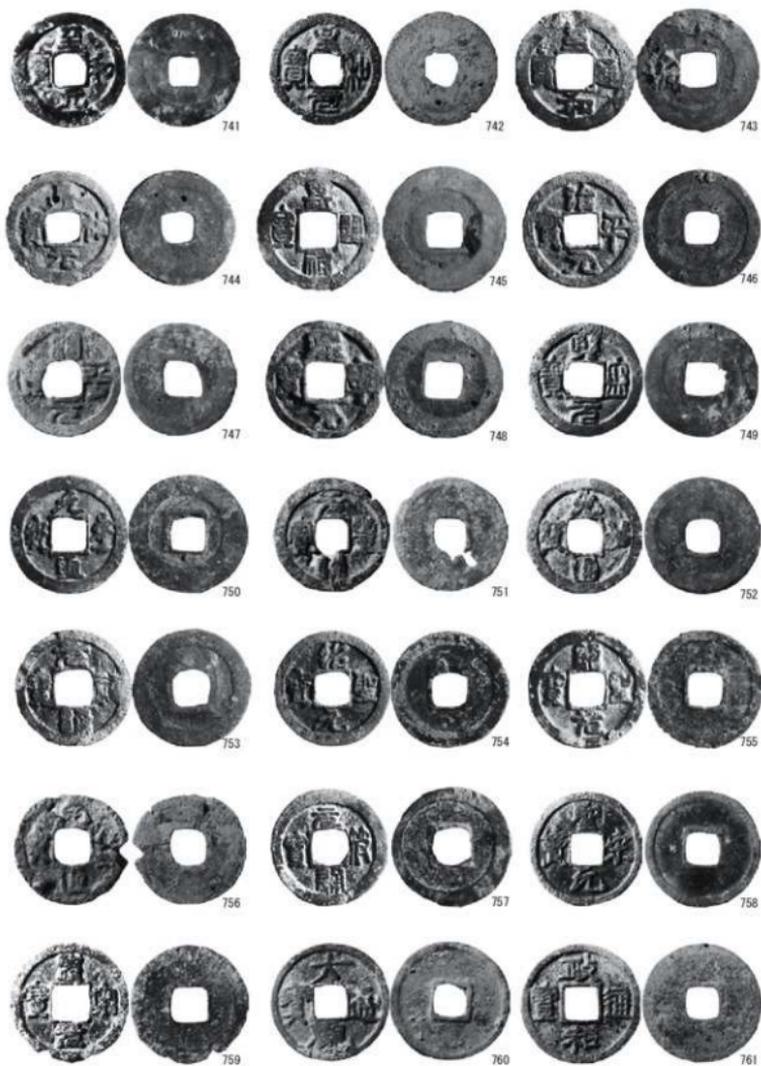
709は厚さ3mm程度の撥形をした用途不明の鉄板である。710・711は鉄製の錠前で、いずれも靴金具である。712・713は刀子で、712には文様が線刻された小柄が付く。714～719は鉄釘で



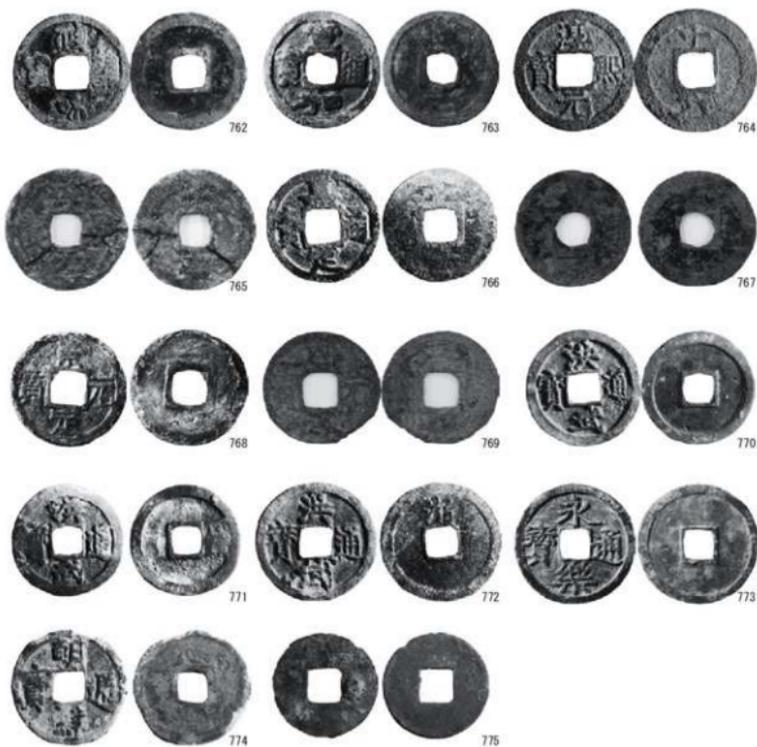
第 151 图 SB1002·1003 周边 出土遗物实测图



第 152 图 SB1002·1003 周边 出土遗物实测图



第 153 图 SB1002·1003 周边 出土文物实测图



第 154 图 SB1002·1003 周边 出土遺物実測図

ある。

720～775は銭である。SB1001周辺と同様に大量の銭が出土した。

720は背面上に「月」が見られる開元通寶で621年初鑄、721は乾元重寶で758年初鑄の唐銭である。722～724は、それぞれ背面に「梓」・「鄂」・「洛」の文字が見える開元通寶である。これらは、武宗の会昌5年(845)に補鑄したもので、会昌開元と称される類いである。725～764は北宋銭で、725は宋通元寶(960年初鑄)、726は淳化元寶(990年初鑄)、727は至道元寶(995年初鑄)、728は咸平元寶(998年初鑄)、729は景德元寶(1004年初鑄)、730は祥符元寶(1009年初鑄)、731は天禧通寶(1017年初鑄)、732は真書体、733は篆書体の天聖元寶(1023年初鑄)、734は明道元寶(1032年初鑄)、735は真書体、736は篆書体の景祐元寶(1034年初鑄)である。737～740は、1038年初鑄の皇宋通寶で、737・738は真書体、739・740は篆書体である。738は郭孔が星形に加工されており、740は磨輪銭で径が小さくなっている。741は真書体、742は篆書体の至和元寶(1054年初鑄)である。743は真書体の至和通寶(1054年初鑄)で、背面の外縁内径がやや小さく、郭外径がやや大きくなっている闊縁である。744は真書体の嘉祐元寶、745は篆書体の嘉祐通寶でいずれも1056年初鑄、746は真書体、747は篆書体の治平通寶(1064年初鑄)、748は真書体、749は篆書体の熙寧元寶(1068年初鑄)、750は行書体、751は篆書体の元豐通寶(1078年初鑄)、752は真書体、753は篆書体の元祐通寶(1086年初鑄)、754は行書体、755は篆書体の紹聖元寶(1094年初鑄)、756は真書体、757は篆書体の元符通寶(1098年初鑄)、758は行書体、759は篆書体の聖宗通寶(1101年初鑄)、760は大觀通寶(1107年初鑄)、761は真書体、762は篆書体の政和通寶(1111年初鑄)、763は宣和通寶(1119年初鑄)である。764～769は南宋銭で、764・765は淳熙元寶(1174年初鑄)で、背面にそれぞれ「十六」・「十二？」の文字が見える。766・767は嘉定通寶で背面にそれぞれ「十一」・「七」、768は景定元寶(1260年初鑄)で背面に「七」、769は咸淳元寶で背面に「二」の文字が見える。770～772は洪武通寶(1368年初鑄)で、771の背面には「一銭」、772の背面には「浙」の文字が見える。773は永樂通寶(1408年初鑄)。これらは明銭である。774は朝鮮王朝時代の銭で1423年初鑄の朝鮮通寶である。775は無文銭。

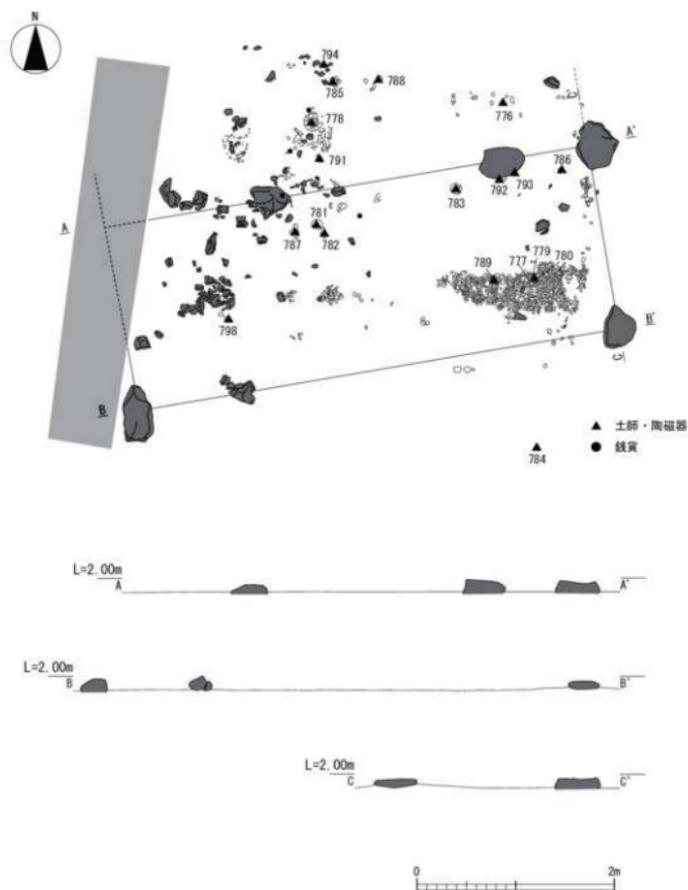
#### 建物 1-4 [SB1004]

〈検出地点〉

11-I区 [中グリッド(c-9)・小グリッド(G-5、H-5)]

〈形態等〉

礎石建ての建物で、東西二間半、南北一間半で検出されたが、調査区の北東隅で検出されており、全容は調査区外へ広がるのが推定される。柱間は一間＝六尺五寸(約197cm)を測る。建物の主軸はN-9°-Wと若干西に振る。建物跡の周辺には焼土や炭化物が大量に確認できることから、SB1004は焼失した可能性も考えられる。



第 155 図 SB1004 平断面図

〈周辺の出土遺物〉(第156図)

776～780は手づくね成形の土師質土器皿である。口径が13cm以上となる大型のもので、最大で780は21.9cmに復元される。内底面端にはやや強いヨコナデの痕跡が認められる。781～784はロクロ成形による土師質土器皿で、底部にはヘラ切りの痕跡を留める。やや粗い胎土で厚い器壁を持つ粗製品で、口径は11cm前後を測る。785は、ロクロ成形による土師質土器杯で、底部にはヘラ切りの痕跡を留める。口径は11.2cmに復元され、器高は3.4cmを測る。

786は瀬戸美濃焼灰釉丸碗で、外面には線描の蓮弁文が認められる。剣頭は、山形のスタンプが施される。

787は備前焼擂鉢。直立した口縁帯で、口径は32.9cmに復元される。

788は青磁碗で、体部はやや内彎する。口縁部外面には3条の弱い凹線が巡る。789は青磁皿の底部で、高台内面まで軸がかかり、外底面の軸は削り取られている。790～793は端反りの白磁皿で、森田分類のE2群である。794は青花皿で、端反りの形状を持つ。小野分類の皿B1群である。見込みに十字花纹、外面には唐草文が描かれる。795は瑠璃釉の製品で、水注等の小型の袋物と思われる。外面に瑠璃釉、内面に白磁釉が施される。796は交趾三彩の菊花形合子の身部で、体部下方に黄色、上方に緑色の釉が施される。内面には薄く透明釉が施され、蓋との合わせ部及び底部は露胎である。

799～801は北宋銭。799は真書体の太平通寶で976年初鑄、800は行書体の淳化元寶で990年初鑄、801は行書体の元祐通寶で1086年初鑄である。802は淳熙元寶で1174年初鑄の南宋銭、803は永樂通寶で1408年初鑄の明銭である。

## 建物1-5 [SB1005]

### 〈検出地点〉

11-I区〔中グリッド(c-9)・小グリッド(D-16～17、E-16～17)〕

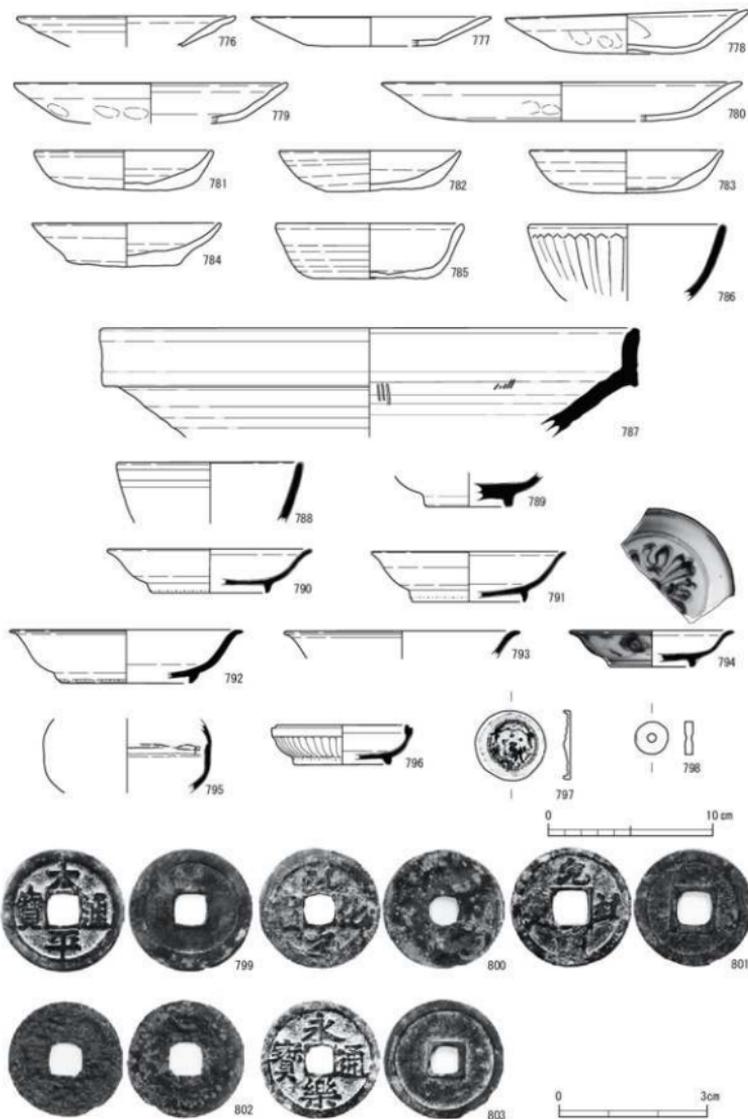
### 〈形態等〉

二間四方の礎石建ての建物で、柱間は一間＝六尺五寸(約197cm)を測る。建物の主軸はN-7-Wと若干西に振る。この軸方向は、東側で検出されている礎石建物と一致しており、関連する建物である可能性が高い。

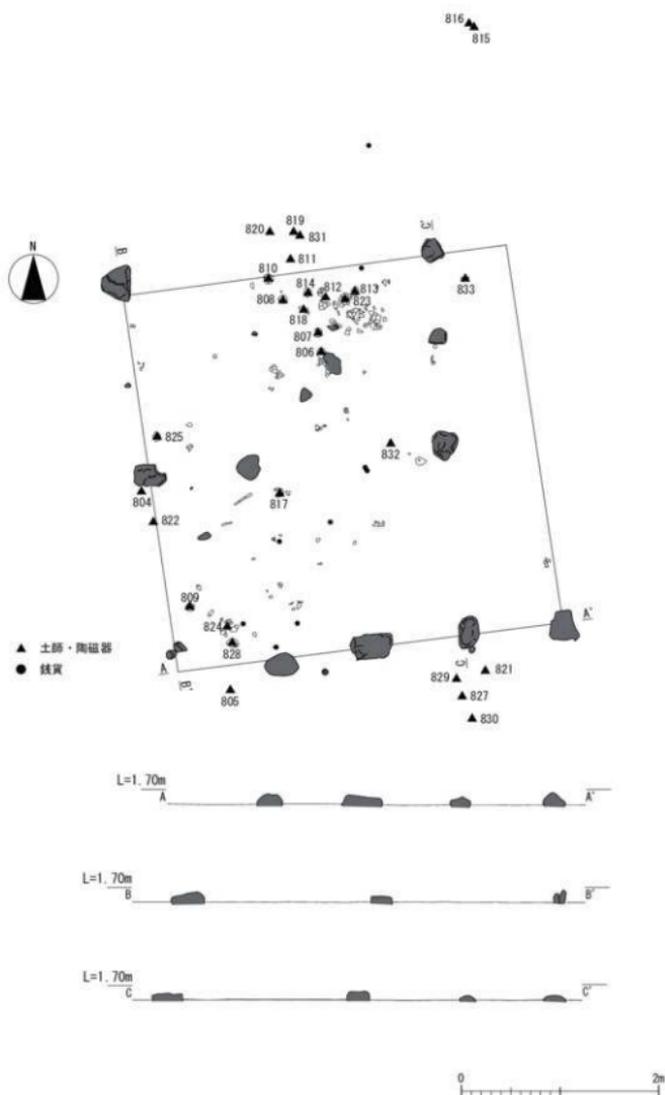
SB1005は、南から延びてきた濠1001が東へ曲がる地点で検出された。東へ曲がった濠1001から分岐してSB1005の東側にも濠が確認されており、濠で囲まれた小区画に建てられた建物であると思われる。SB1005の西側で濠1001の濠幅は狭くなり、濠の法面には杭跡が検出されていることから、この地点に橋が架かっていたことが考えられる。

### 〈周辺の出土遺物〉(第158～159図)

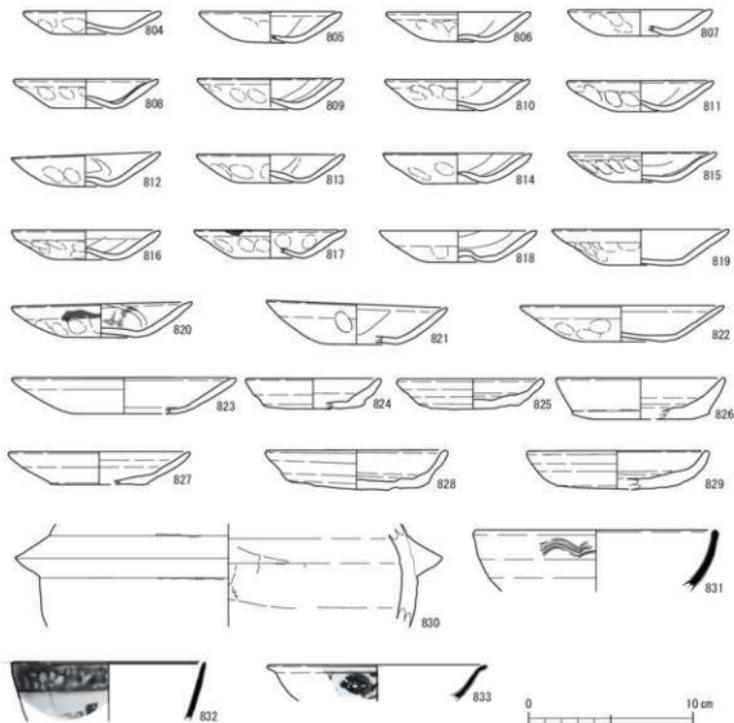
804～823は手づくね成形による土師質土器皿である。色調は灰白色系を呈する。804～817は口径が9cm前後で、基本的には底部は突き上げ底となっており、内面をヨコナデの後、「の」の字状にナデ上げる痕跡を留めるが、812はこのサイズのもので唯一「2」の字状にナデ上げる。818



第156图 SB1004周边出土遗物实测图



第 157 図 SB1005 平・断面図



第158図 SB1005周辺 出土遺物実測図

は口径9.5cmに復元されるもので、内底面を強くヨコナデする。819～821は口径11cm前後、822は口径12.4cmに復元され、内底面端にやや強いヨコナデと「2」の字状のナデ上げ痕が認められる。823は口径13.5cmに復元される。824～829はロクロ成形による土師質土器皿で、底部には回転ヘラ切りの痕跡を留めている。胎土が粗く、器壁が厚い粗製品である。

830は、羽釜の体部の破片である。内面には板ナデ、外面にはナデの痕跡が認められ、断面三角形の罫が貼り付けられる。

831は白磁碗。口縁部外面に櫛描きによる波状文が認められる。胎土はやや粗い。832は青花碗で、口縁に波濤文が施される。833は端反りの青花皿で、小野分類の皿B群に相当する。体部外面に牡丹唐草文が施される。



第 159 図 SB1005 周辺 出土遺物実測図

834～846は銭である。834は真書体の開元通寶で621年初鑄の唐銭である。835～840は北宋銭。835は真書体の天禧通寶で1017年初鑄、836は真書体、837は篆書体の皇宋通寶で1038年初鑄、838は紹聖元寶で1094年初鑄、839は聖宗元寶で1101年初鑄、840は大觀通寶で1107年初鑄である。841～846は明銭で、841～844は洪武通寶で1368年初鑄、845・846は永樂通寶で1408年初鑄である。

### 建物 1-6 [SB1006]

〈検出地点〉

14-I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (E-16~17, F-16~17)]

〈形態等〉

掘立柱建物で、東西一間、南北二間で検出された。調査区の南西隅で検出されており、全容は調査区外へ広がるとと思われる。建物の軸は SB1002 や SB1003 と同じく N-11°-E と若干東に振る。

〈出土遺物〉(第 161 図)

847 は EP2 の掘り方から出土した備前焼播鉢で、掘り目は 8 条 / 2.7cm を一単位とする。口縁帯はやや内傾し外面には凹線が巡る。間壁福年の V 期に相当する。848 は EP4 の直上で出土した備前焼壺である。玉縁状の口縁を有し、口径 13.6cm に復元される。肩部には拂描波状文が施される。

### ④溝 (SD)

幅 10m を越す大規模な溝によって区画された内部をさらに分ける溝や、溝で区画される以前の屋敷地の区画と考えられる溝が 71 条確認された。特に区画の端にあたると考えられる地点では何度も掘り直しが行われており、かなりの切り合いが認められた箇所もある。

### 溝 1-1 [SD1001]

〈検出地点〉

1-I 区 [中グリッド (b-9~c-9)・小グリッド (T-19~A-19)]

〈形態等〉

東西方向に延びる溝で、延長が 1.10m、幅が 0.07~0.14m、深さが 0.04m の規模で検出した。方位は N-70°-E で、断面形状は皿形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器皿・杯、釘の小片の出土が見られたが、図化できるものは無い。

### 溝 1-3 [SD1003]

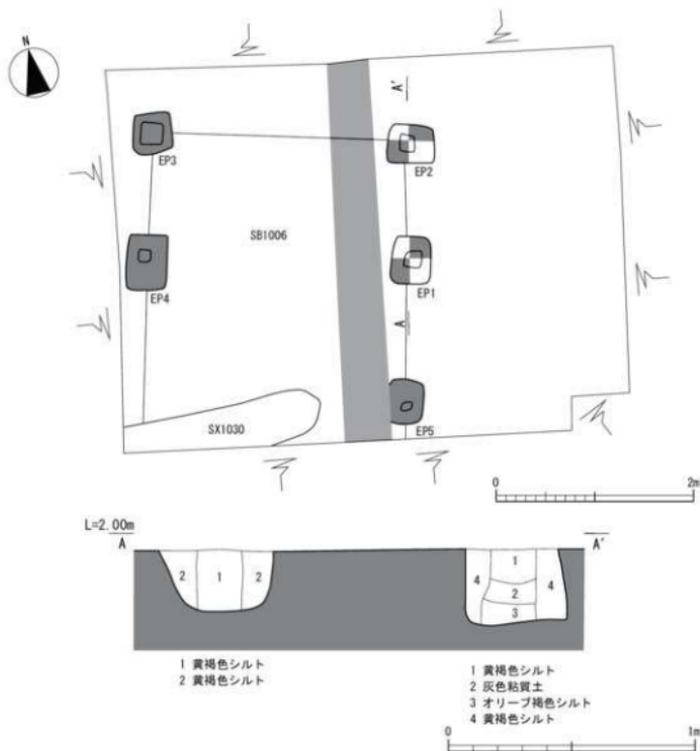
〈検出地点〉

2-I 区、12-I 区 [中グリッド (b-8~9)・小グリッド (T-19~20, T-1~4)]

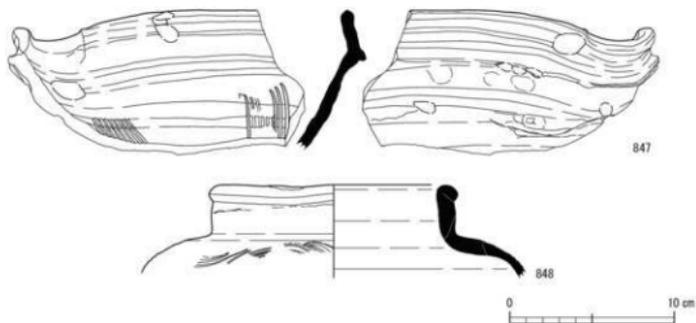
〈形態等〉

南北方向に延びる溝で、延長が 26.00m、幅が 1.00~2.20m、深さが 0.52m の規模で検出した。方位は N-2°-E で、断面形状は逆台形を呈する。遺構の掘削はしていないが、平面及び確認トレンチの断面で確認した。

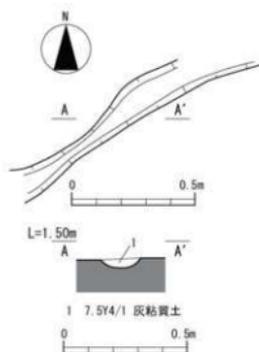
平面検出に止めているが、この溝とはほぼ同規模で、同方向に延びる SD1014、SD1017 の二条の溝が西側に確認されている。これらの溝は約 14m の等間隔で掘られている。最終段階の建物であ



第 160 図 SB1006 平・断面図



第 161 図 SB1006 出土遺物実測図



第 162 図 SD1001 平・断面図

る SB1001 の建物軸が N-17°-E であり、これに伴う溝が同じ主軸方向の SD1018 であると考えられること、SD1003 の東側の肩が濠 1001 によって切られていることをあわせて考えると、これらの溝は前段階の溝と考えられ、この場所には小規模な屋敷区画があったことが考えられる。勝瑞城館は、こうした小規模な区画を統合して拡張したのであろう。

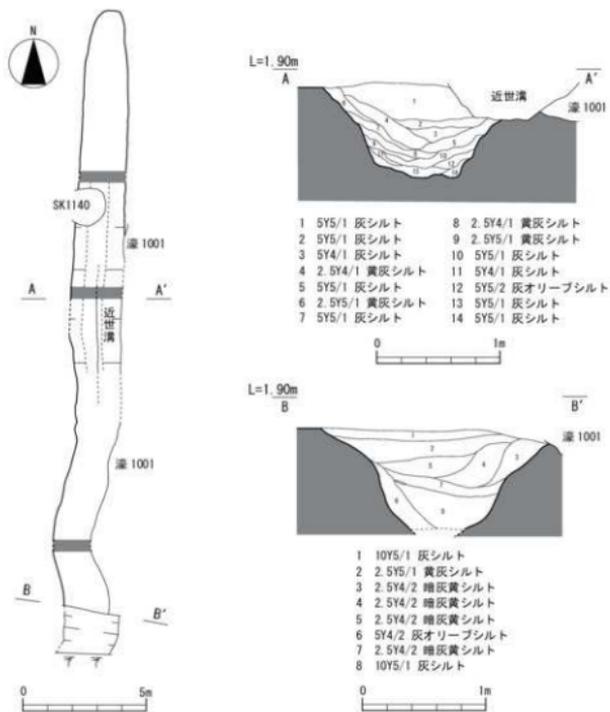
〈出土遺物〉(第 164 図)

849～852 は手づくねで成形された土師質土器皿で、色調は橙色系を呈する。外面にはユビオサエの痕跡が認められる。

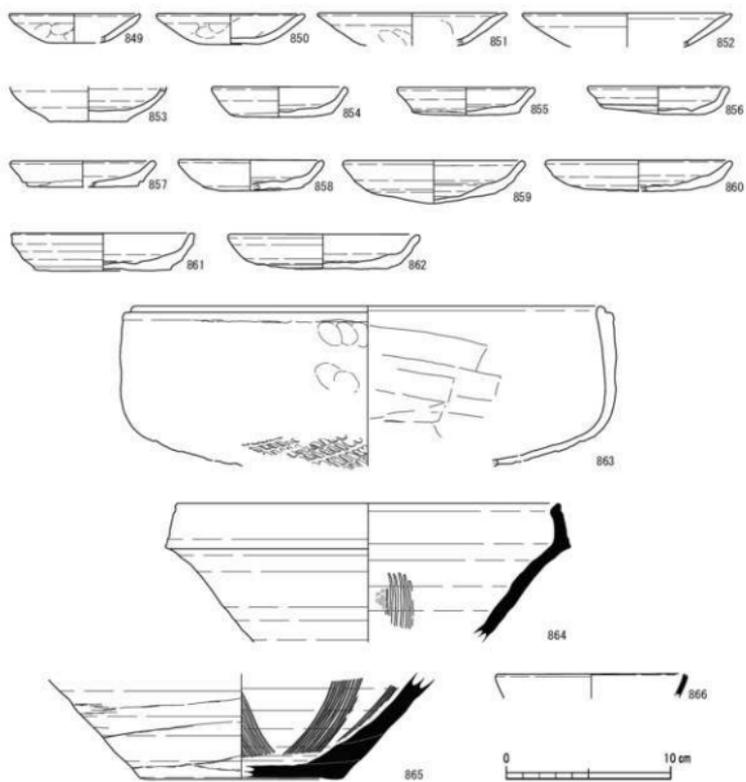
853～862 はロクロ成形による土師質土器皿である。底部切り離し技法は、853 は静止糸切り、854～862 は回転ヘラ切りである。

863 は土師質土器鍋である。口縁部と鈎部が形骸化した形状を持ち、端部に弱い凹線が巡る。864、865 は備前焼播鉢である。864 はやや内傾する口縁部に弱い凹線が巡る。間壁編年の V 期に相当する製品である。

866 は青磁碗である。



第 163 図 SD1003 平・断面図



第 164 图 SD1003 出土遺物実測図

## 溝 1-5 [SD1005]

〈検出地点〉

6-I区、14-IV区 [中グリッド (b-9~10)・小グリッド (H-20、I-1~4)]

〈形態等〉

南北方向に延びる溝で、延長が18.00 m、幅が0.70~1.20 m、深さが0.48 mの規模で検出した。方位はN-11°-Eで、断面は船底形を呈する。

〈出土遺物〉(第166図)

867、868は手づくね成形の土師質土器皿、869はロクロ成形の土師質土器皿である。869の底面にはヘラ切り痕が認められる。

870は、土師質土器香炉である。底部には台形状の貼付の脚部を持ち、内面には煤が付着している。

871は、土師質土器十能である。中空の把手がつき、体部は円形に、底部は平らに仕上げる。把手は貼り付けられたもので、ヘラで丁寧にナデつけた痕跡が認められる。木製の柄を把手の中空部に差し込んでいたことが考えられ、柄を止めたと思われる釘が貫通する。

872、873は瓦質風炉である。872は奈良の火鉢座で製作されたものと考えられる。873は三つの円錐台形の脚部が付き、やや内彎気味に立ち上がる体部を持つ。

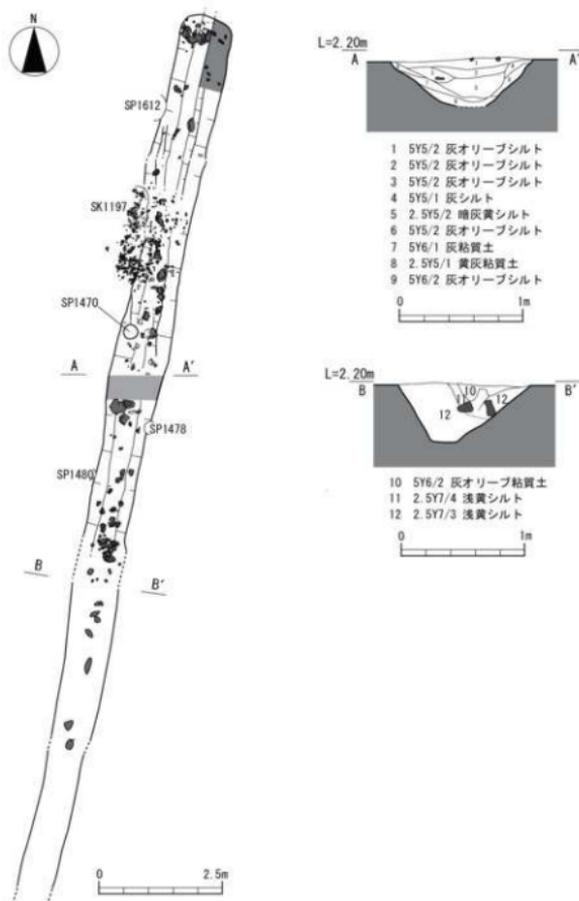
874は備前焼壺である。

875は青磁盤で、精緻な白色の胎土に緑色の釉が厚くかかる。前面に施釉後、外底の釉葉を削り取っている。見込みに印花文が認められる。876は端反りの白磁皿である。森田分類のE2群に相当する。

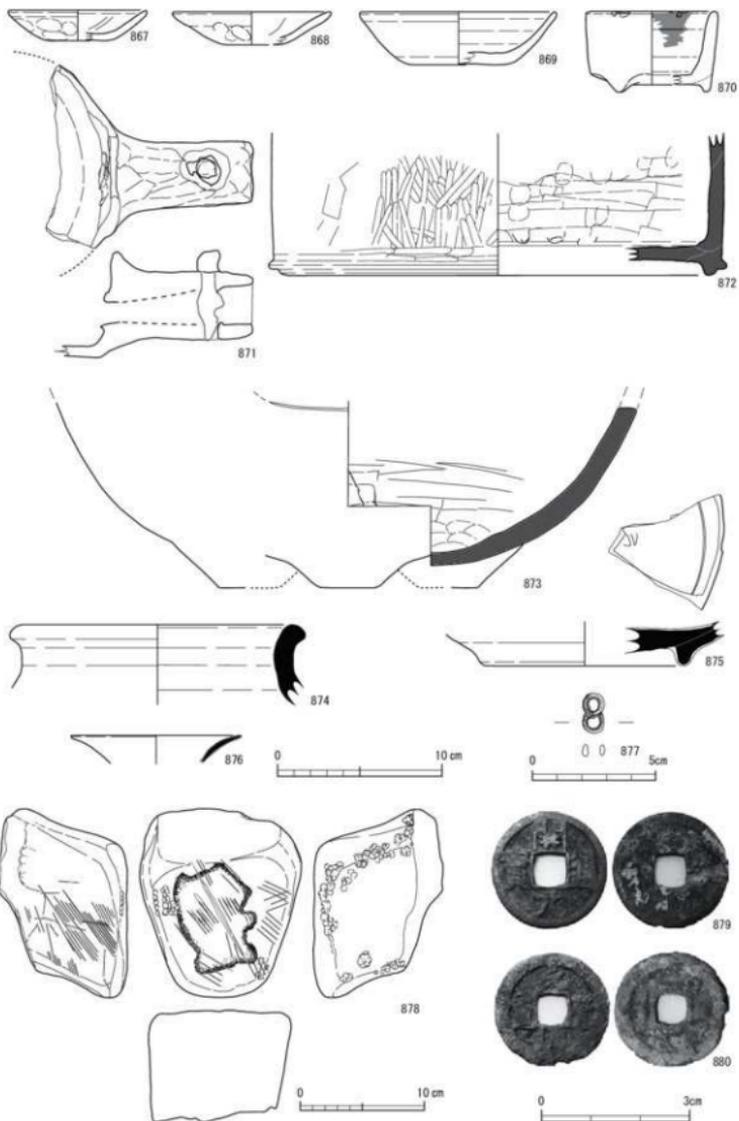
877は8の字状の銅製品で、黄鉄と思われる。

878は砂岩の砥石である。表面に擦痕が認められる。

879は開元通寶で621年初鑄の唐銭、880は元豊通寶で1078年初鑄の北宋銭である。



第 165 図 SD1005 平・断面図



第 166 图 SD1005 出土遺物実測図

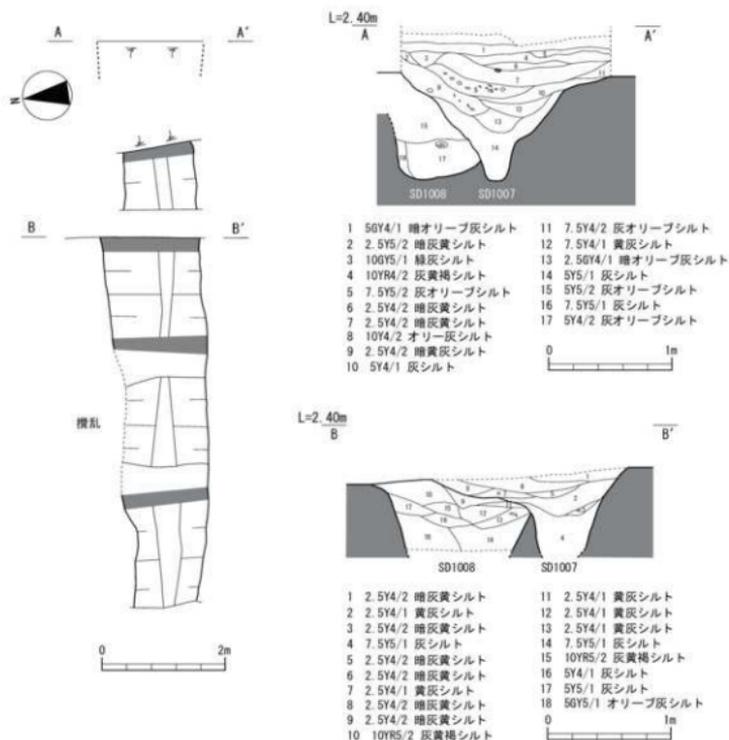
### 溝 1-7 [SD1007]

〈検出地点〉

10-Ⅲ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (F-6、G-6、H-6)]

〈形態等〉

東西方向に延びる溝で、延長が8.2 m、幅が1～1.6 m、深さが0.76 mの規模で検出された。方位はN-82°-Wで、断面はV字からU字形を呈する。先行する溝にSD1008があり、北側の肩を切っている。



第 167 図 SD1007・SD1008 平・断面図

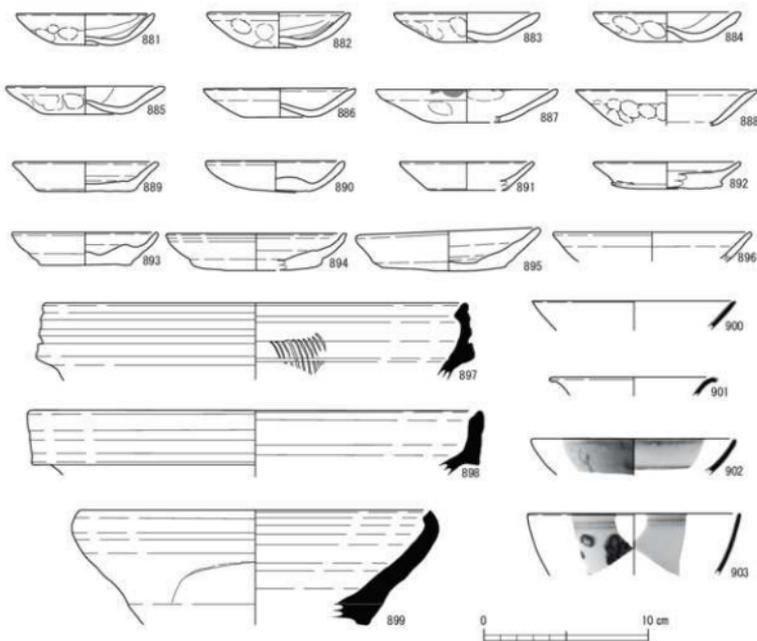
〈出土遺物〉(第168図)

881～888は手づくね成形の土師質土器皿である。881～886はやや突き上げ底に仕上げる。887は口縁部に煤が付着しており、灯明皿である。

889～896はロクロ成形による土師質土器皿。底部切り離し技法は889・890が静止糸切り、891～896が回転ヘラ切りである。

897、898は備前焼播鉢、899は備前焼鉢である。

900は景德鎮系の青磁皿、901は端反りの白磁皿、902は漳州窯系の青花皿である。933は青花碗で、小野分類の碗E群に相当する。



第168図 SD1007 出土遺物実測図

## 溝 1-9 [SD1009]

〈検出地点〉

10-Ⅱ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-10~11)]

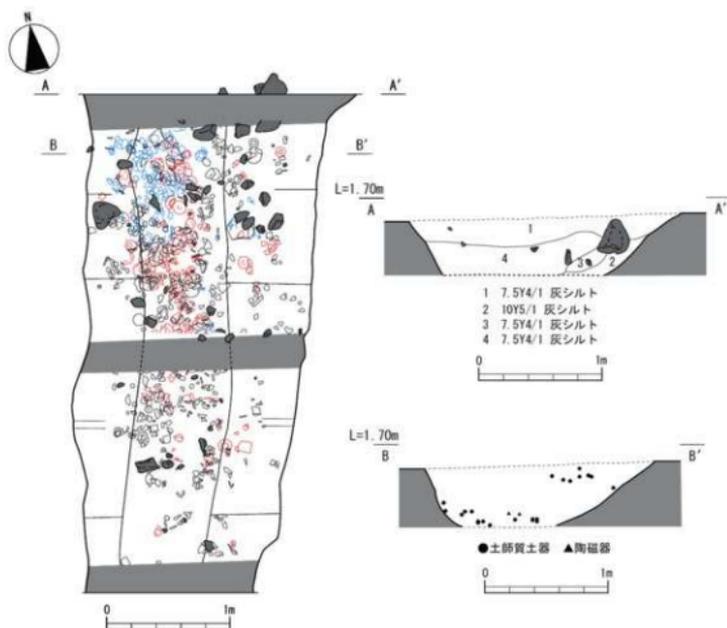
〈形態等〉

南北方向に延びる溝で、延長が4.3m、幅が1.5~2.3m、深さが0.7mの規模で検出された。方位はN-12°-Eで、断面は舟底形を呈する。

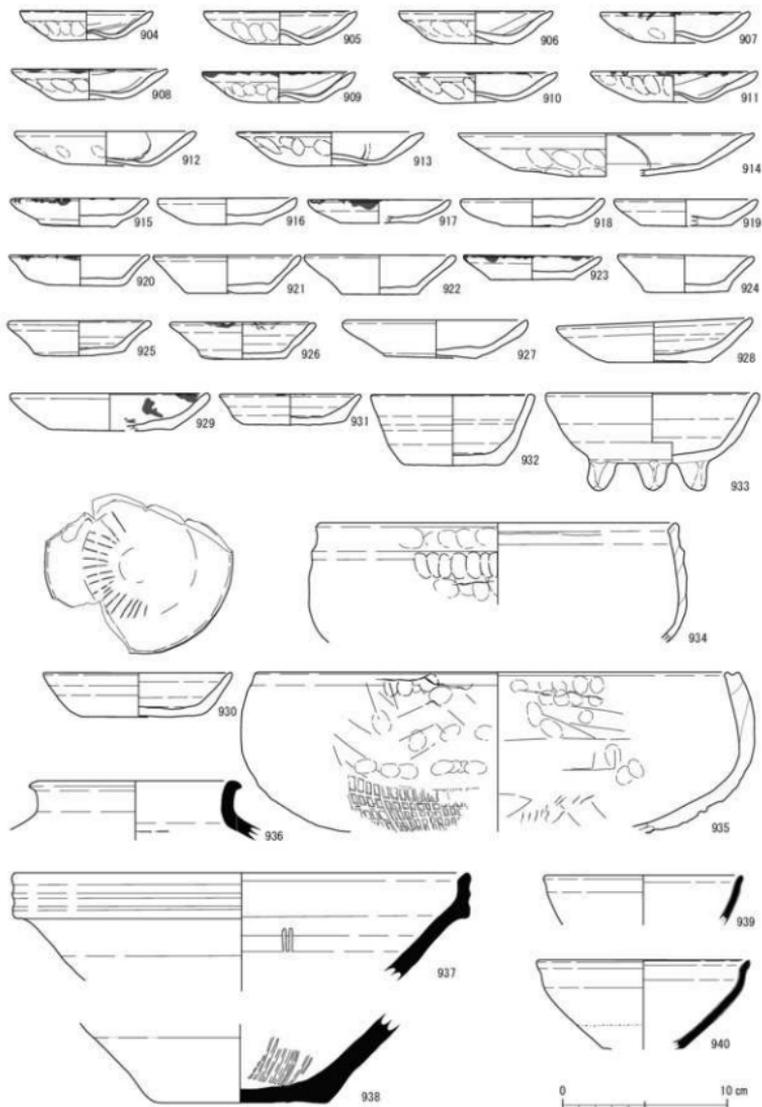
〈出土遺物〉(第170~173図)

904~914は手づくね成形の土師質土器皿で、色調は灰白色系を呈する。904~911は内面に「の」の字状のナデ上げ痕が認められ、底部がやや突き上げ底となる。912~914には内底面端をやや強くナデた後に「2」の字状のナデ上げた痕跡が認められる。914は口径が18.0cmに復元される大型の製品である。

915~931はロクロ成形の土師質土器皿である。915~930は底部切り離し技法が静止糸切り、931はヘラ切りとなっている。930の内底面にはヘラによる放射状の文様が描かれている。932は



第169図 SD1009 平・断面図



第 170 图 SD1009 出土遗物实测图

土師質土器杯である。

933は土師質土器香炉。静止糸切りによる底部に脚部を三箇所貼り付ける。

934は播磨型、935は讃岐系の土師質土器鍋。

936は備前焼壺、937・938は備前焼播鉢である。

939・940は瀬戸美濃焼天目茶碗。

941～946は青磁碗。941は体部が外反し、内面に丸彫りで除蓮弁文を連刻する。942は上田分類のE類に相当する。943～946は細蓮弁文の碗で、BⅣ類に相当する。945と946は内底面にスタンプを有する。

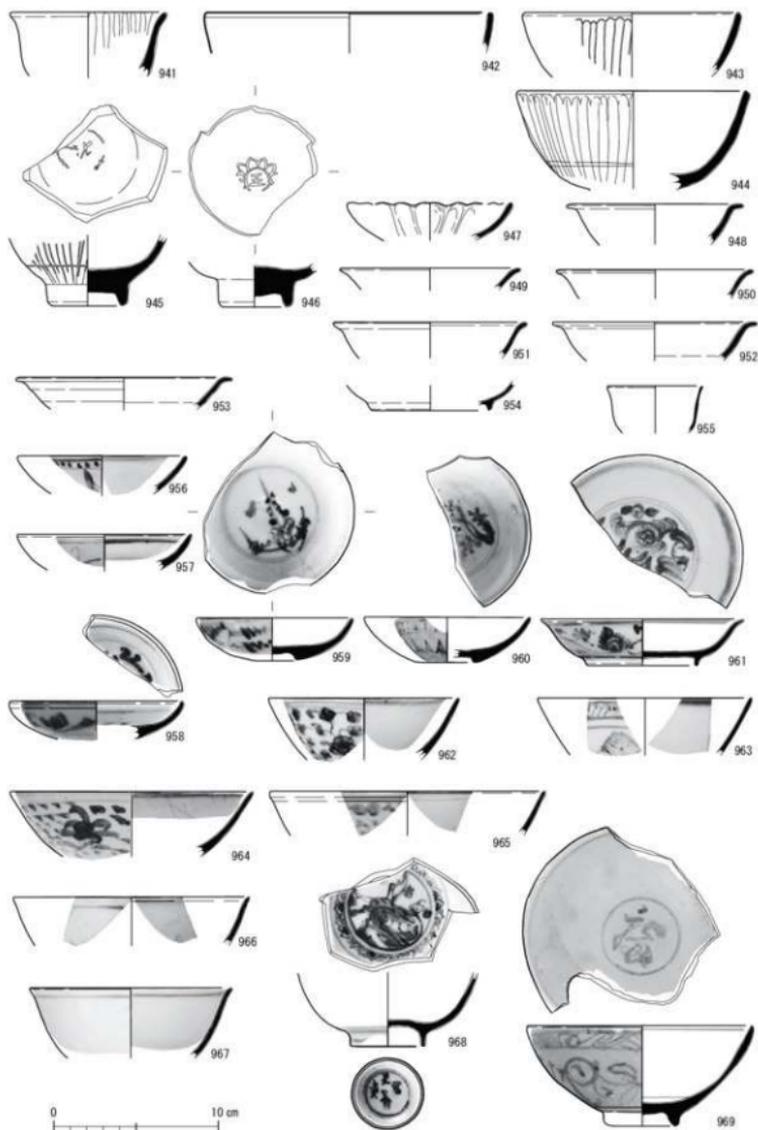
947～955は白磁。947は白磁の菊皿で森田分類のE4群に相当する。948～954は端反りの形状を持つE2群に相当する製品である。955は小坏。

956～969は青花。956～960は菖筍底の皿で、小野分類の皿C群に相当する。961は端反りの皿で、外面には牡丹唐草、内底面に玉取り獅子が描かれる。皿B1群である。962～965は蓮子碗で碗C群、966～968は饅頭心の碗の一群で碗E群、969は粗製の碗で、漳州窯系の製品である。

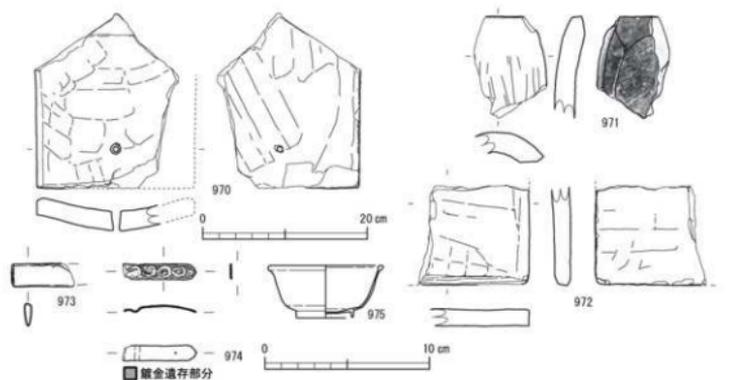
970は平瓦、凹面の調整痕は丁寧にナデ消している。端部に釘穴を有する。971は全体に丸みを帯びており、聳かれた部位は不明である。凹面にはコビキAの痕跡が明瞭に残る。972は反りのない瓦で磚と思われる。片面のみ丁寧に調整をナデ消している。

973は銅製の小柄。974は花先形の鍍金された銅製飾り金具で、魚々子地に蕨手文が描かれる。975は銅製の小碗である。

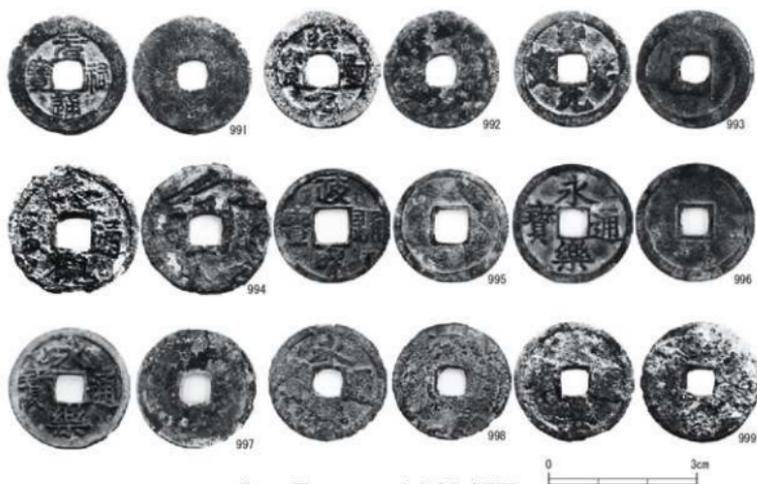
976～999は銭である。976は開元通寶で621年初鑄の唐銭である。977～995は北宋銭。977は草書体の至道元寶で995年初鑄、978は咸平元寶で998年初鑄、979は祥符元寶で1009年初鑄、980は天禧通寶で1017年初鑄、981は真書体の景祐元寶で1034年初鑄、982は真書体、983は篆書体の皇宋通寶で1038年初鑄、984は真書体の至和元寶で1054年初鑄、985は真書体の治平元寶で1064年初鑄、986は真書体、987は篆書体の熙寧元寶で1068年初鑄、988は行書体の元豐通寶で1078年初鑄、989は行書体、990・991は篆書体の元祐通寶で1086年初鑄、991は關縁である。992は行書体の紹聖元寶で1094年初鑄、993は行書体の聖宋元寶で1101年初鑄、994は大觀通寶で1107年初鑄、995は篆書体の政和通寶で1111年初鑄である。996～999は永樂通寶で、1408年初鑄の明銭であるが、997～999は背の彫りが浅く不鮮明となっており、私鑄銭の可能性がある。



第 171 图 SD1009 出土遗物实测图



第 172 図 SD1009 出土遺物実測図



第 173 図 SD1009 出土遺物実測図

#### 溝 1-10 [SD1010]

〈検出地点〉

10-II区〔中グリッド (b-9)・小グリッド (Q-10～11, R-10～11)〕

〈形態等〉

南北方向に延びる溝で、延長が 4.1 m、幅が 0.9～1.0 m、深さが 0.26 m の規模で検出された。方位は N-3°-E で、断面は箱形を呈する。

〈出土遺物〉(第 175 図)

小片遺物が多数出土したが、図化可能な遺物は 1 点のみである。1000 は白磁皿で、森田分類の D 群に相当する。

#### 溝 1-12 [SD1012]

〈検出地点〉

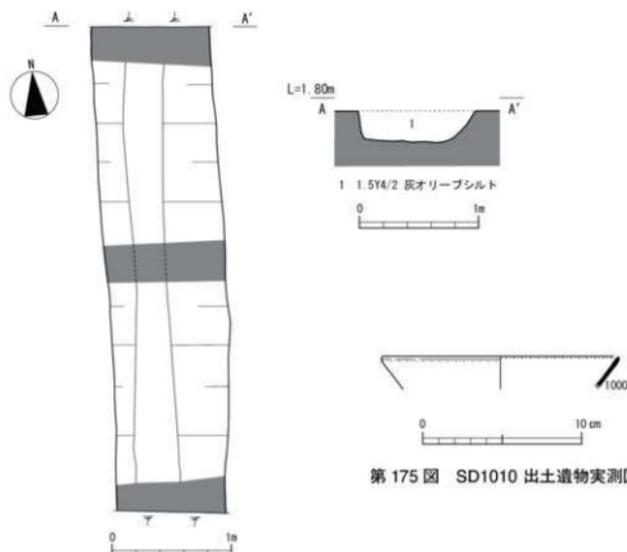
10-I区〔中グリッド (b-9)・小グリッド (N-11～13)〕

〈形態等〉

南北方向に延びる溝で、延長が 9.3 m、幅が 1.6～1.8 m、深さが 0.89 m の規模で検出された。方位は N-10°-E で、断面は舟底形を呈する。

〈出土遺物〉(第 177 図)

1001～1004 は手づくね成形の土師質土器皿。



第175図 SD1010 出土遺物実測図

第174図 SD1010 平・断面図

1001 は色調が赤色系を呈するもので、口径は復元値で 9.6cm を測る。1002 ~ 1004 は色調が灰白色を呈するもので、口径は復元値で 13.2cm ~ 13.6cm を測る。

1005 ~ 1007 はロクロ成形の土師質土器皿で、底部には静止糸切りの痕跡を留める。ロクロの回転方向が左方向のもの (131) と右回転のもの (132・133) がある。

1008 は土師質土器鍋。口縁上部に凹線が巡り、外底面に格子目タタキを施す。

1009 は瓦質土器の行燈。

1010・1011 瀬戸美濃焼灰軸丸碗。体部外面には線描きの蓮弁文が施され、剣頭はスタンプによる。

1012 は備前焼播鉢。やや内傾した口縁帯に凹線が巡っており、内壁編年の V 期に相当する製品である。

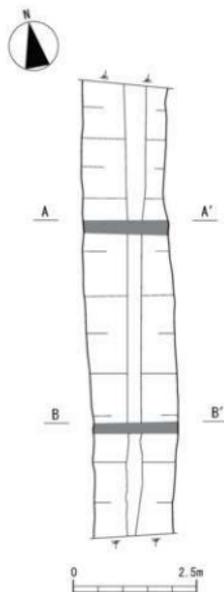
1013 は青磁碗の底部。前面に施軸した後、外底面の軸を削り取っている。内面見込には花文のスタンプが認められる。

1014・1015 は青花皿で、小野分類の皿 C 群に相当する製品である。

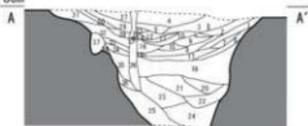
1016 は滑石裂石鍋。断面台形の鐙が付き、口縁は斜め上方に立ち上がる。

1017 は銅製の火箸。膠が部分的に残っており、鍍金されていたことが考えられる。

1018 は篆書体の政和通寶で、1111 年初鑄の北宋銭である。



L=1.80m



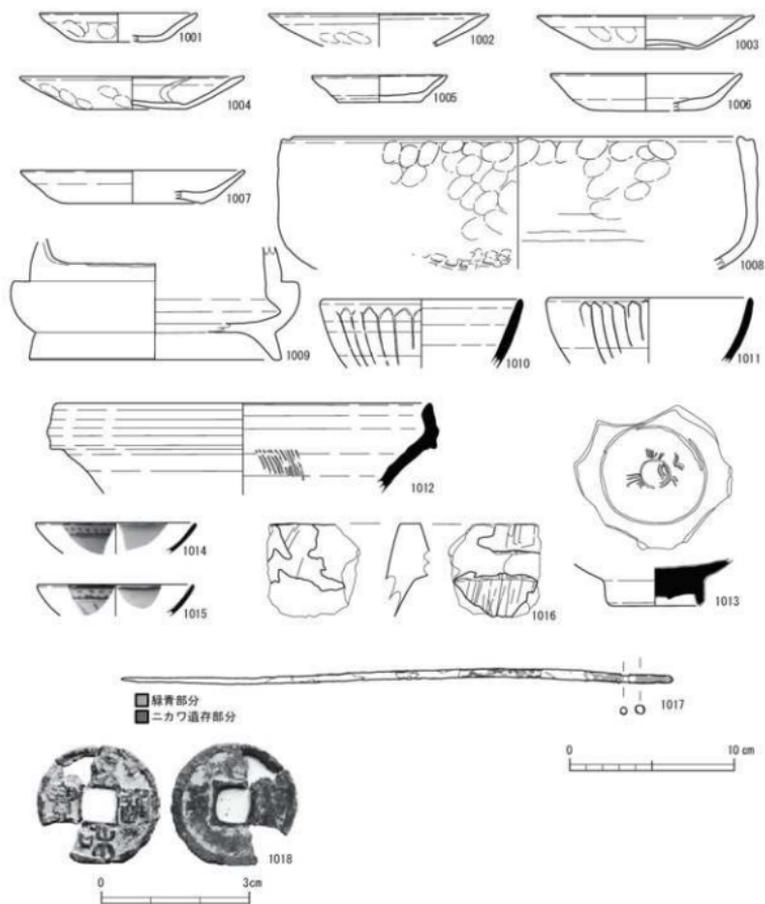
- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| 1 2.5Y5/2 暗灰黄シルト    | 21 2.5Y4/2 暗灰黄シルト     |
| 2 10YR5/2 灰黄褐シルト    | 22 7.5Y4/1 灰シルト       |
| 3 2.5Y5/2 暗灰黄シルト    | 23 2.5Y4/2 暗灰黄シルト     |
| 4 2.5Y5/2 暗灰黄シルト    | 24 2.5Y4/2 暗灰黄シルト     |
| 5 2.5Y4/2 暗灰黄シルト    | 25 5Y4/2 灰オリーブシルト     |
| 6 2.5Y5/1 黄灰シルト     | 26 50/1 暗緑灰シルト        |
| 7 5Y5/2 灰オリーブシルト    | 27 5Y5/2 灰オリーブシルト     |
| 8 7.5Y4/1 灰シルト      | 28 7.5Y5/2 灰オリーブシルト   |
| 9 7.5Y5/2 灰オリーブシルト  | 29 5Y5/2 灰オリーブシルト     |
| 10 7.5Y5/1 灰シルト     | 30 2.5Y4/2 暗灰黄シルト     |
| 11 7.5Y5/1 灰シルト     | 31 7.5Y4/2 灰オリーブシルト   |
| 12 7.5Y5/1 灰シルト     | 32 7.5Y5/1 灰シルト       |
| 13 5Y5/2 灰オリーブシルト   | 33 2.5Y4/2 暗灰黄シルト     |
| 14 5Y5/1 灰シルト       | 34 2.5Y4/2 暗灰黄シルト     |
| 15 7.5Y4/2 灰オリーブシルト | 35 10YR4/2 灰黄褐シルト     |
| 16 7.5Y5/1 灰シルト     | 36 7.5Y4/1 灰シルト       |
| 17 10Y4/1 灰シルト      | 37 2.50Y4/1 暗オリーブ灰シルト |
| 18 5Y4/1 灰シルト       | 38 2.5Y4/2 暗灰黄シルト     |
| 19 7.5Y4/1 灰シルト     |                       |
| 20 2.5Y4/2 暗灰黄シルト   |                       |

L=1.80m



- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1 2.5Y5/2 暗灰黄シルト    | 21 5Y4/2 灰オリーブシルト   |
| 2 7.5Y5/1 灰粘土       | 22 5Y4/3 暗オリーブ粘土    |
| 3 5Y5/2 灰オリーブシルト    | 23 7.5Y5/1 黄灰粘土     |
| 4 5Y5/2 灰オリーブシルト    | 24 2.5Y3/2 黒褐粘土     |
| 5 7.5Y5/2 灰オリーブシルト  | 25 7.5Y5/2 灰オリーブシルト |
| 6 5Y5/2 灰オリーブシルト    | 26 5Y5/2 灰オリーブシルト   |
| 7 2.5Y4/2 暗灰黄シルト    | 27 7.5Y5/2 暗灰黄シルト   |
| 8 7.5Y5/2 灰オリーブシルト  | 28 5Y4/1 灰シルト       |
| 9 2.5Y5/2 暗灰黄シルト    | 29 2.5Y5/2 暗灰黄シルト   |
| 10 7.5Y5/2 灰オリーブシルト | 30 5Y5/2 灰オリーブシルト   |
| 11 5Y5/2 灰オリーブシルト   | 31 2.5Y4/2 暗灰黄シルト   |
| 12 7.5Y5/2 灰オリーブシルト | 32 5Y4/1 灰シルト       |
| 13 5Y5/1 灰シルト       | 33 5Y5/1 灰シルト       |
| 14 7.5Y4/2 灰オリーブシルト | 34 5Y5/1 灰シルト       |
| 15 2.5Y4/2 暗灰黄シルト   |                     |
| 16 5Y4/1 灰シルト       |                     |
| 17 5Y4/4 暗オリーブシルト   |                     |
| 18 10YR4/2 灰黄褐シルト   |                     |
| 19 2.5Y4/2 暗灰黄シルト   |                     |
| 20 2.5Y4/4 オリーブ褐シルト |                     |

第176図 SD1012 平・断面図



第 177 図 SD1012 出土遺物実測図

### 溝 1-13 [SD1013]

〈検出地点〉

10-Ⅲ区〔中グリッド (b-9)・小グリッド (F~H-7)〕

〈形態等〉

東西方向に延びる溝で、延長が14.0 m、幅が1.3~1.6 m、深さが0.92 mの規模で検出された。方位はN-80°-Wで、断面は半円形を呈する。

〈出土遺物〉(第179図)

1019~1026は手づくね成形の土師質土器皿。口径が9cm前後のもの(1019~1022)や11cm前後のもの(1023・1024)、13cm前後のもの(1025・1026)がある。色調は灰白色を呈する。

1027~1041はロクロ成形の土師質土器皿。底部に静止糸切り痕が認められ、口径が8~9cmのもの(1027~1031)、11~12cmのもの(1032~1040)がある。1041は回転ヘラ切りである。

1042は瀬戸美濃焼灰釉丸碗、1043は備前焼播鉢である。

1044は白磁端反皿で、森田分類のE2群に相当する。

1045は青花水注で、体部最大径8.2cmに還元される扁平な球形をした体部から注口が長く伸びる。

1046は漳州窯系の青花碗。

1047は永楽通宝で、1408年初鑄の明銭である。

### 溝 1-14 [SD1014]

〈検出地点〉

12-I区〔中グリッド (b-8~9)・小グリッド (Q-19~20、Q-1~4)〕

〈形態等〉

南北方向に延びる溝で、延長が24.8 m、幅が1.3~1.9 mの範囲で検出された。平面で検出し、断面で一部確認したのみで遺構掘削は行っていない。方位はほぼ真北を向く。

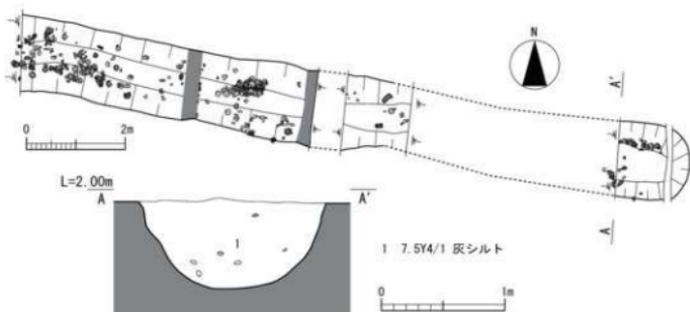
〈出土遺物〉(第181図)

1048~1054が手づくね成形の土師質土器皿。1048~1051は口径8cm~9cmで、色調は橙色系を呈する。1052は灰白色を呈し、底部はやや突き上げ底である。1053・1054は口径が12~13cmで、色調は橙色系を呈する。内底面端に強いナデによる凹線が巡り、「2」の字のナデ上げ痕が認められる。

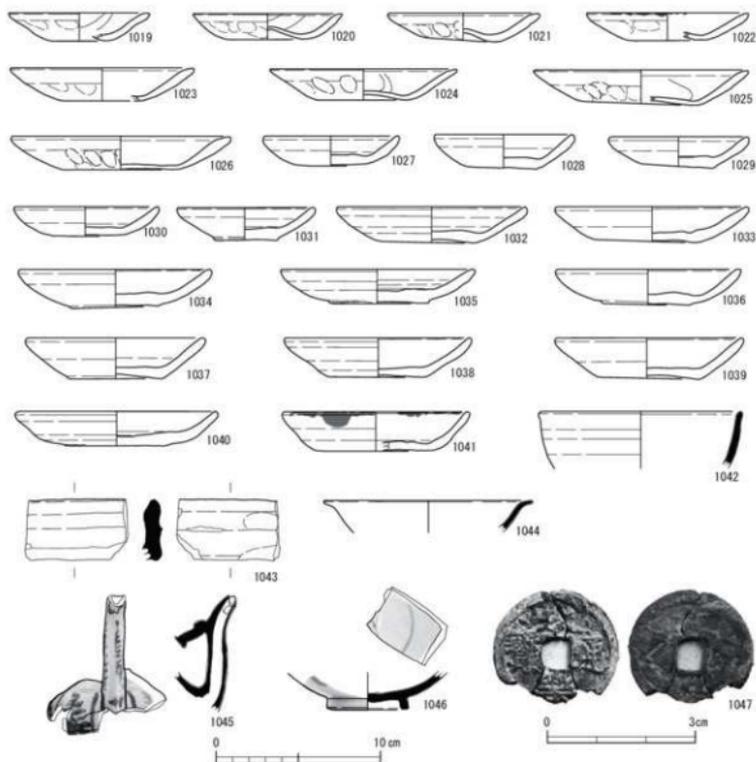
1055~1058はロクロ成形の土師質土器皿で、いずれも底部に回転ヘラ切りの痕跡を留める。1055は口径8.0cmで体部が小さく立ち上がり、輪積み痕が顕著に残る。1056は口縁端部が外反する。1057・1058は深型の皿で、口径はそれぞれ12.9cm・15.4cmを測る。

1059は備前焼播鉢で、口縁帯はやや内傾する。間壁編年のⅣ期に相当する。

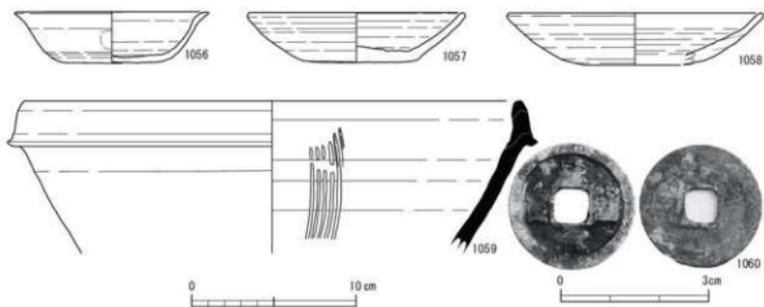
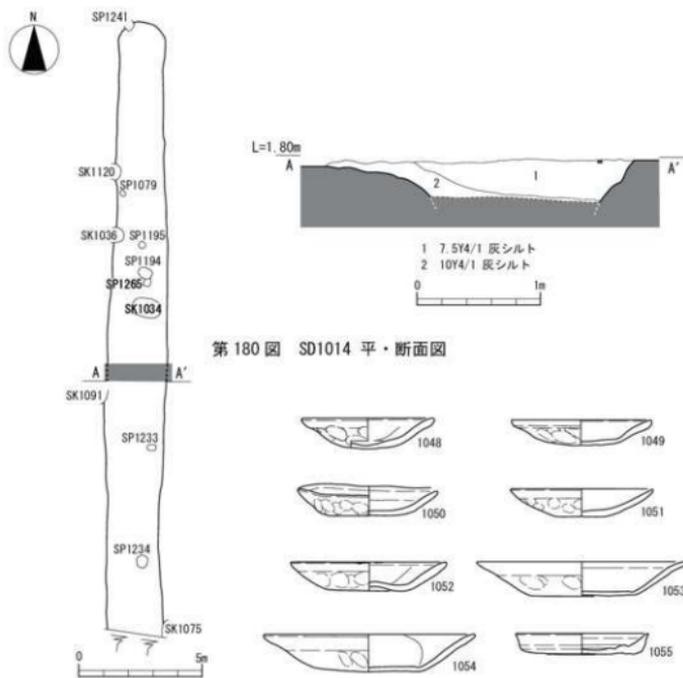
1060は真書体の皇宋通寶で、1038年初鑄の北宋銭である。



第178図 SD1013 平・断面図



第179図 SD1013 出土遺物実測図



## 溝 1-17 [SD1017]

〈検出地点〉

12-1区 [中グリッド (b-8~9)・小グリッド (N-18~20, N-1~2, O-18~20, O-1~2)]

〈形態等〉

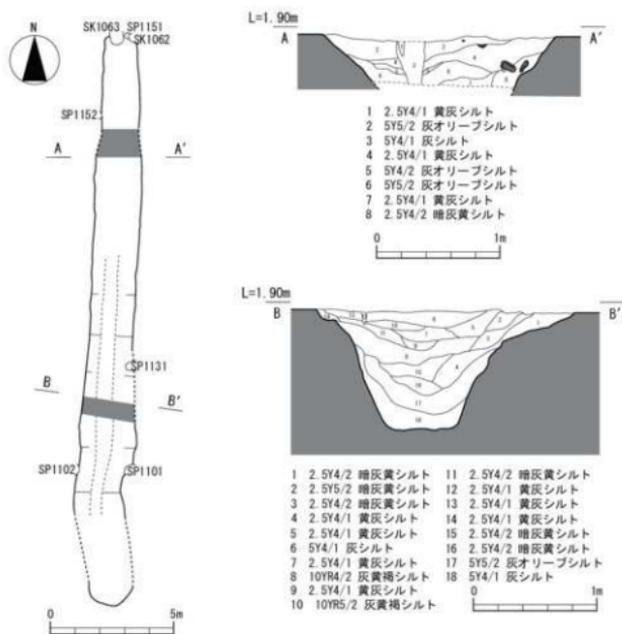
南北方向に延びる溝で、延長が19.5m、幅が1.3~2.4m、深さが0.96mの規模で検出された。方位はN-1°-Eで、断面は舟底形を呈する。

〈出土遺物〉(第183図)

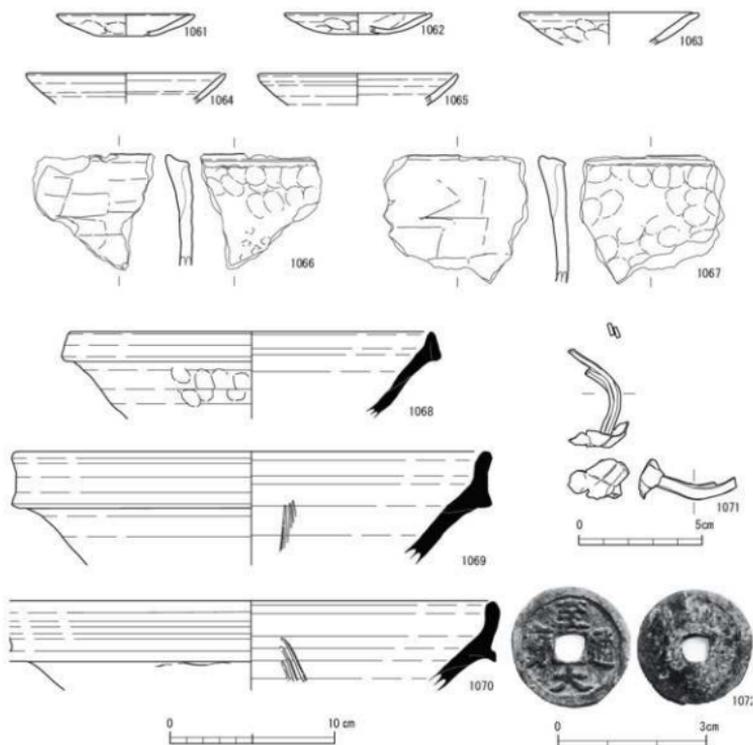
1061~1065は土師質土器皿。1061~1063は手づくね成形によるもので、口径はそれぞれ8.3cm、8.9cm、10.3cmに復元され、色調は橙色を呈する。1064・1065は口クロ成形で、口径は12.0cmに復元される。

1066・1067は土師質土器鍋。口縁上部に弱い凹線が巡る。

1068は東播系須恵器のこね鉢、1069・1070は間壁編年のIV期に相当する備前焼插鉢である。



第182図 SD1017 平・断面図



第 183 図 SD1017 出土遺物実測図

1071 は銅製の飾り金具である。花菱の頭部に割ピン状の脚部がつく。

1072 は至大通寶で、1310 年初鑄の元銭である。

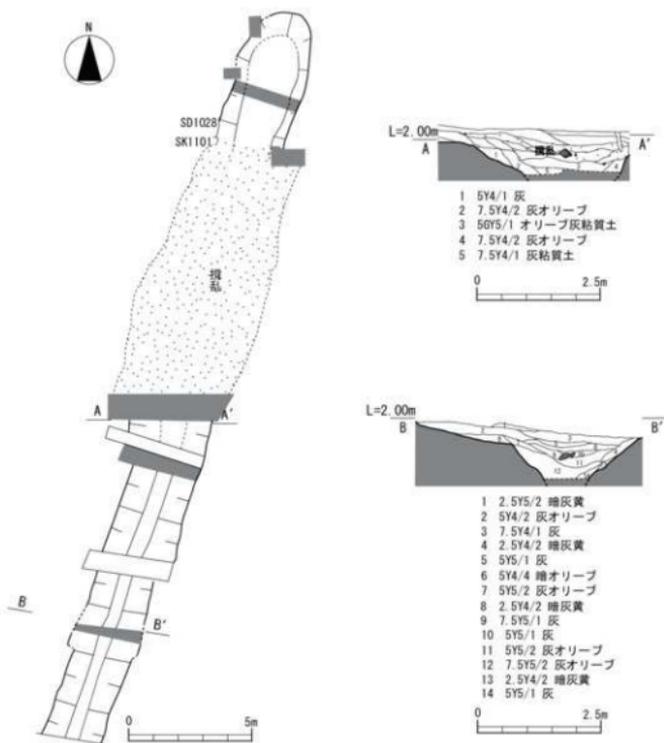
#### 溝 1-18 [SD1018]

〈検出地点〉

12-1 区 [中グリッド (b-8~9)・小グリッド (K-18、L-18~20、M-19~20、L-1~2、M-1~4、N-2~5)]

〈形態等〉

南北方向に延びる溝で、延長が 37.75 m、幅が 2.2~2.8 m、深さが 1 m 以上の規模で検出された。溝より西側は盛土されており、溝の東側が標高約 1.8 m であるのに対して、西側は標高約 2.0



第184図 SD1018 平・断面図

mと遺構面は高くなる。

方位はN-17°-Eで、断面は舟底形を呈する。西側にあるSB1001と軸を同じくしており、これに伴うものと考え。この溝によって館内の空間が画されていたことが考えられる。

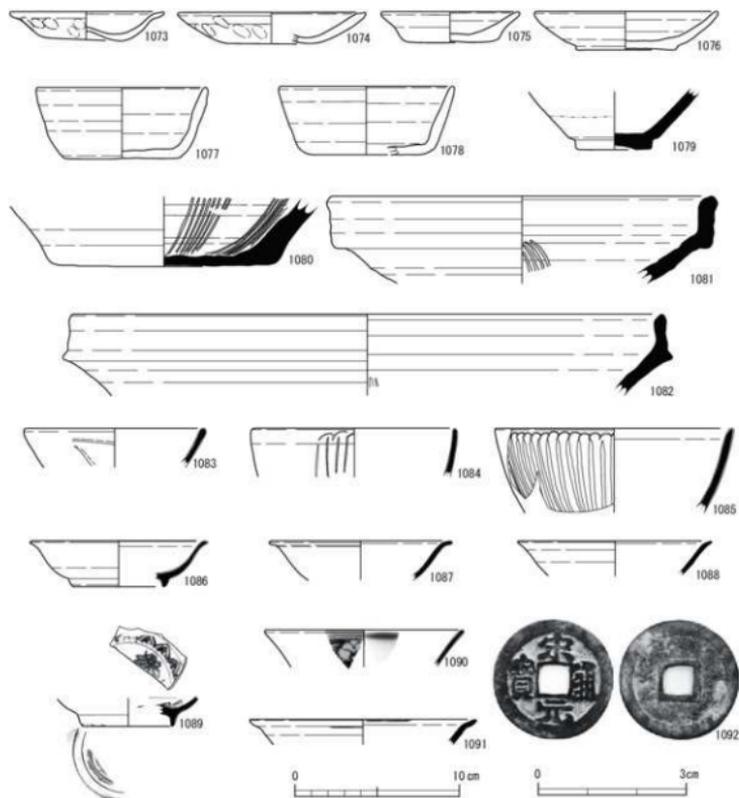
〈出土遺物〉(第185図)

1073・1074は手づくね成形された土師質土器皿で、色調は灰白色を呈する。1075・1076はロクロ成形された土師質土器皿である。底部切り離し技法は1075が回転ヘラ切り、1076が静止糸切りである。

1077・1078は土師質土器杯。ロクロ成形されたもので、底部にヘラ切りの痕跡を留める。

1079は瀬戸美濃焼天目茶碗である。直線的に開く体部を持ち、体部下方には錆軸が施される。

1080～1081は備前焼播鉢で、間壁編年のV期に相当するもので、ほぼ直立する口縁帯に弱い



第 185 図 SD1018 出土遺物実測図

凹線が認められる。1080 の内面には 7 条 /2.3cm の描り目が施される。

1083 ～ 1085 は青磁碗。体部外面には 1083 は片切彫りによる蓮弁文、1084・1085 は線描蓮弁文が描かれる。

1086 ～ 1088 は白磁の端反皿で、森田分類の E2 群である。

1089 は見込みが盛り上がる「饅頭心」の青花碗で、見込に菊が描かれる。1090 はやや外反する体部を持つ青花碗、1091 は粗製の青花皿である。

1092 は宋通元寶で、960 年初鑄の北宋銭。

### 溝 1-23 [SD1023]

〈検出地点〉

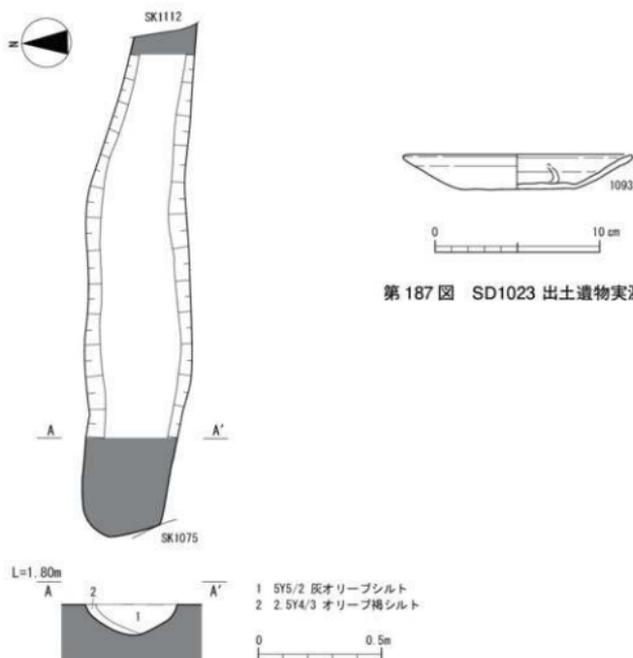
12- I 区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (R-19)]

〈形態等〉

東端はSK1112に切られるが、そこからN-83°Wの方角で西に約2.2m延びて収束する。検出した総延長は2.2m、幅は0.25～0.42m、深さは0.12mを測る。断面は舟底形を呈する。

〈出土遺物〉(第187図)

1093は手づくね成形による土師質土器皿で、橙色系である。口径14.2cm、器高は2.1cmを測る。内底面端に強いヨコナデが認められ、「2」の字状にナデ上げる。



第 187 図 SD1023 出土遺物実測図

第 186 図 SD1023 平・断面図

#### 溝 1-24 [SD1024]

〈検出地点〉

12- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (P~Q-2)]

〈形態等〉

東端は SD1014 に切られるが、そこから N-85°W の方位で西に約 5 m 延び、南へ 105° 曲がる。検出した総延長は 7 m、幅は 0.3 ~ 0.5 m、深さは 0.11 m を測る。断面は舟底形を呈する。

〈出土遺物〉(第 189 図)

1094 は紹聖元寶で、1094 年初鑄の北宋銭である。

#### 溝 1-42 [SD1042]

〈検出地点〉

12- I 区 [中グリッド (b-8~9)・小グリッド (S-19, S-1~2)]

〈形態等〉

南北方向に延びる溝で、延長が 5.56 m、幅が 0.6 ~ 0.9 m、深さが 0.31 m の規模で検出された。方位は N-3°-E である。平面で検出したのみであるが、溝覆土内と思われる地点で多数の遺物が出土した。

〈出土遺物〉(第 191 図)

1095 ~ 1102 は手づくね成形の土師質土器皿で、色調は灰白色系を呈する。口径は 8cm 前後のものから最大で 14cm を越えるものもある。

1103 ~ 1112 はロクロ成形の土師質土器皿。1103 ~ 1106 は底部切り離し技法が静止糸切り、1107 ~ 1112 は回転ヘラ切りである。いずれも 8cm 前後のもの と 11cm 前後のものがある。

1113 は開元通寶で、初鑄年代が 621 年の唐銭である。

#### 溝 1-43 [SD1043]

〈検出地点〉

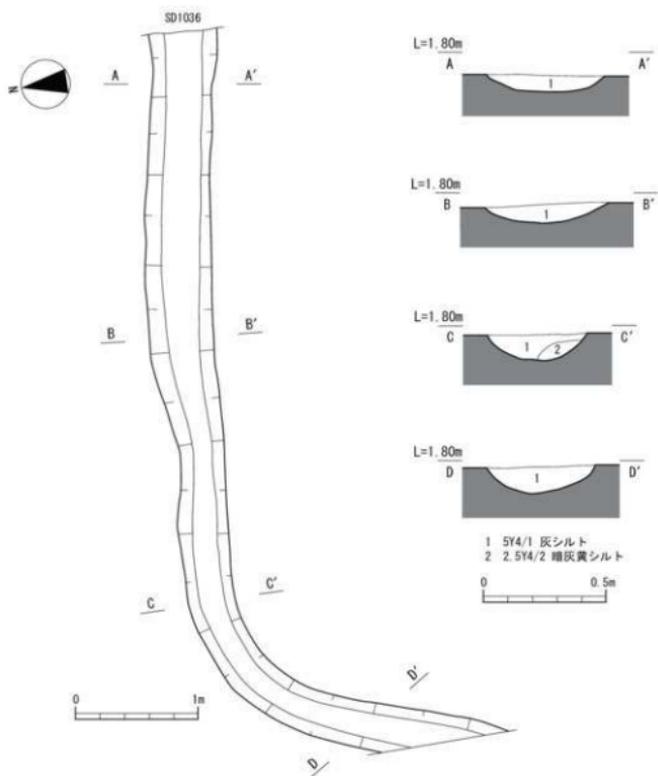
13- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (B-5~6)]

〈形態等〉

南北方向に延びる溝で、延長が 2.36 m、幅が 0.24 ~ 0.34 m、深さが 0.12 m の規模で検出された。方位は N-3°-W で、断面は舟底形を呈する。溝内には平面円形で直径 0.15 m、深さ 0.04 m の小穴 EP1 も検出されている。

〈出土遺物〉

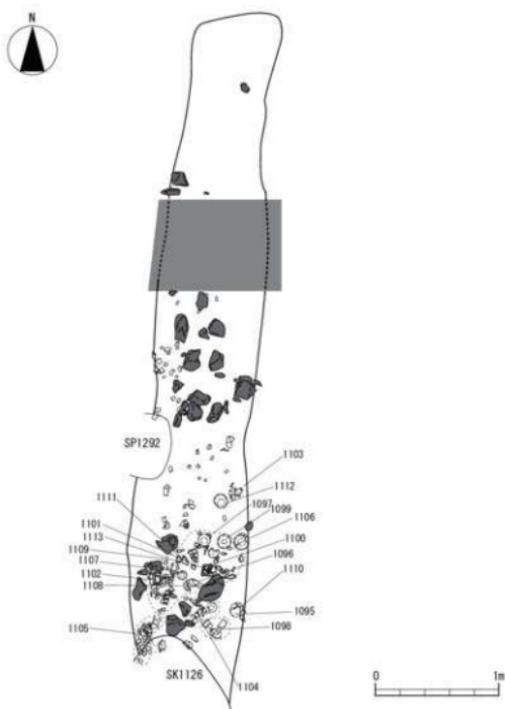
土師質土器皿や鍋の破片が見られるが、図化できるものは無かった。



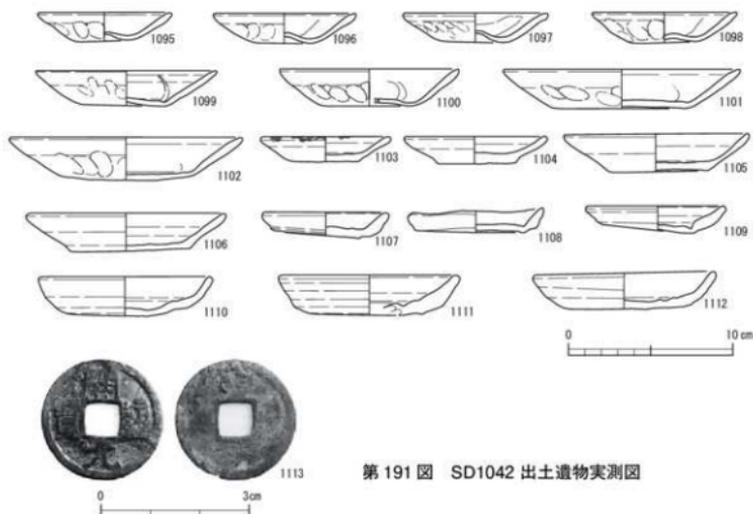
第 188 図 SD1024 平・断面図



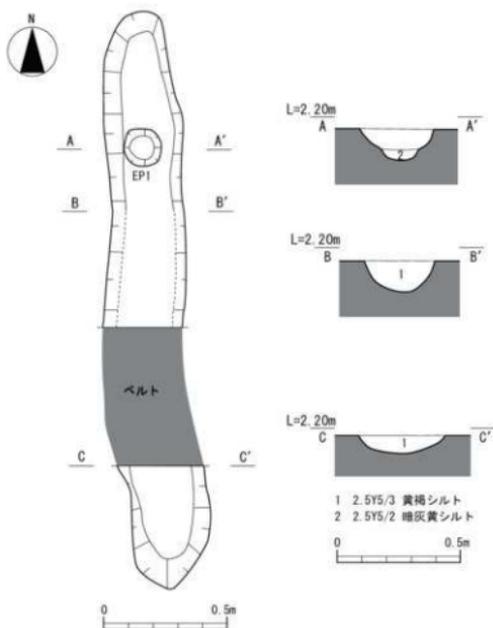
第 189 図 SD1024 出土遺物実測図



第 190 图 SD1042 平面图



第 191 図 SD1042 出土遺物実測図



第 192 図 SD1043 平・断面図

#### 溝 1-57 [SD1057]

〈検出地点〉

14-Ⅳ区〔中グリッド (b-10)・小グリッド (H-2～4、I-4)〕

〈形態等〉

南北方向に延びる溝で、延長が10.20 m、幅が2.68～2.86 mで検出された。断面形はテストトレンチで舟底形を呈することが確認され、深さは0.83 mである。

〈出土遺物〉(第194図)

1114・1115は手づくね成形による土師質土器皿。口径はそれぞれ復元値で7.9cm、10.8cmを測り、色調は橙色系を呈する。1116はロクロ成形による土師質土器皿。底部には静止糸切りの痕跡が認められる。

#### 溝 1-58 [SD1058]

〈検出地点〉

14-Ⅳ区〔中グリッド (b-10)・小グリッド (E-2～3、F-2～3)〕

〈形態等〉

14-Ⅳ区中央部西端付近から西方向に溝状に延びる形状が検出された。延長が2 m、幅が0.84～1.10 mである。断面形はテストトレンチで舟底形を呈することが確認され、深さは0.22 mである。

〈出土遺物〉(第196図)

1117は手づくね成形による土師質土器皿。口径は14.8cmに復元されるもので、色調は灰白色を呈する。1118・1119はロクロ成形による土師質土器皿。底部は静止糸切りの痕跡を留める。1118の底部と体部の境に段が認められる。

1120は青磁碗。口縁部外面に雷文帯が施され、見込みに人物が陰刻された人形手の碗である。遺構中からは破片が出土したが2-Ⅰ区の第1遺構面の遺構内及び6-Ⅰ区の包含層〔小グリッド・R-1(日本測地系)〕で出土した破片と接合した。出土地点はそれぞれ15～20 m離れており、館内における整地土の移動を考える上で興味深い出土状況を示している。

1121は真書体の皇宋通寶で、1038年初鑄の北宋銭である。

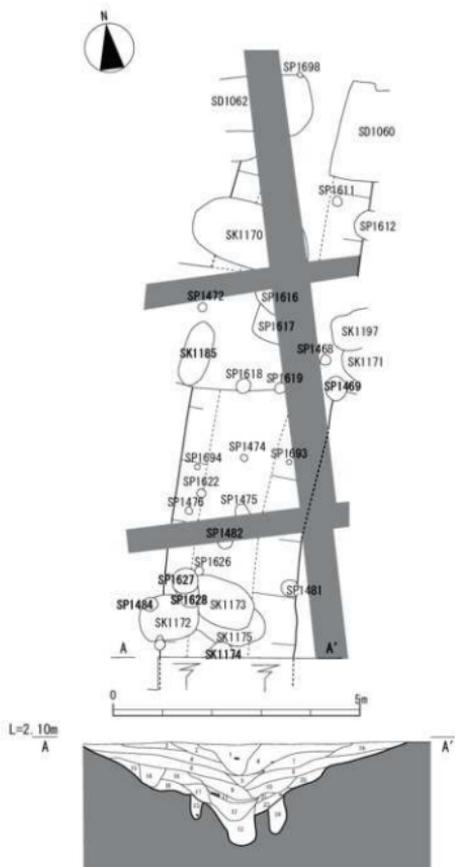
#### 溝 1-60 [SD1060]

〈検出地点〉

14-Ⅲ区〔中グリッド (b-10)・小グリッド (I-4、J-3～4、K-3～4、L-3～4)〕

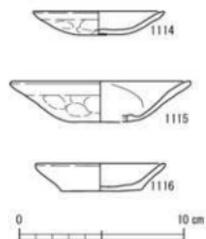
〈形態等〉

N-69°-Wの方向を基準として、やや湾曲しながら東西方向に延びる溝。幅1.1～2.2 m、深さ0.70 mを測る。数カ所設定した確認トレンチでは、下層にも溝2-7(SD2007)が確認できる。下層の溝とは埋土も類似しており、その一部を埋め戻して、あるいは掘り直して利用していたこ

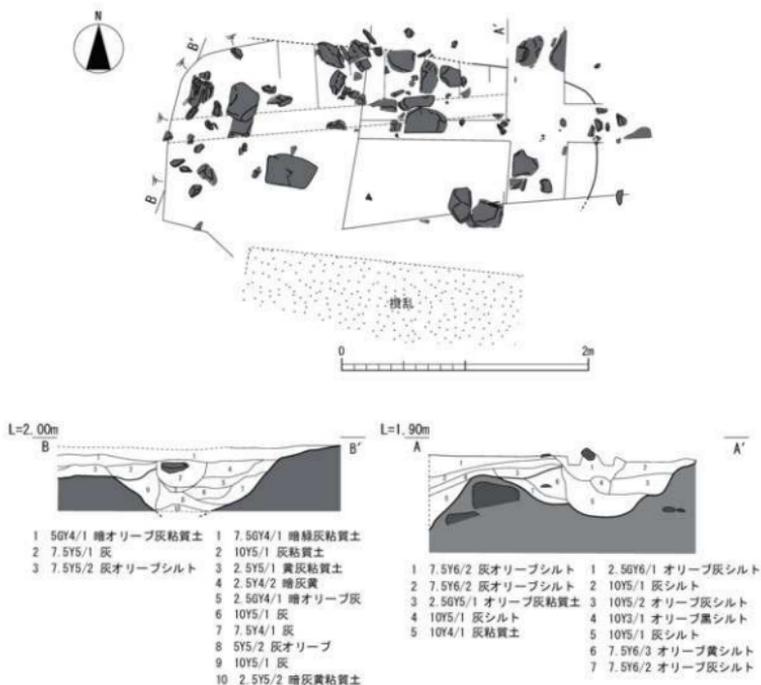


- |                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| 1 2.5Y5/2 増灰黄      | 16 10YR5/2 灰黄褐粘质土 |
| 2 10YR5/2 灰黄褐      | 17 5Y4/1 灰粘土      |
| 3 10YR5/2 灰黄褐      | 18 5Y5/1 灰        |
| 4 2.5Y5/2 増灰黄      | 19 2.5Y5/2 増灰黄    |
| 5 5Y5/1 灰粘质土       | 20 2.5Y4/2 増灰黄    |
| 6 2.5Y4/2 増灰黄      | 21 2.5Y4/2 増灰黄粘质土 |
| 7 10YR5/2 灰黄褐      | 22 7.5Y5/1 灰粘质土   |
| 8 2.5Y5/2 増灰黄      | 23 7.5Y5/1 灰粘质土   |
| 9 7.5Y5/1 灰粘质土     | 24 10Y4/1 灰粘质土    |
| 10 2.5Y5/2 増灰黄粘质土  |                   |
| 11 2.5Y4/1 黄灰粘质土   |                   |
| 12 5Y5/1 灰粘质土      |                   |
| 13 10Y5/2 オリーブ灰粘质土 |                   |
| 14 2.5Y4/1 黄灰粘土    |                   |
| 15 2.5Y5/2 灰黄褐     |                   |

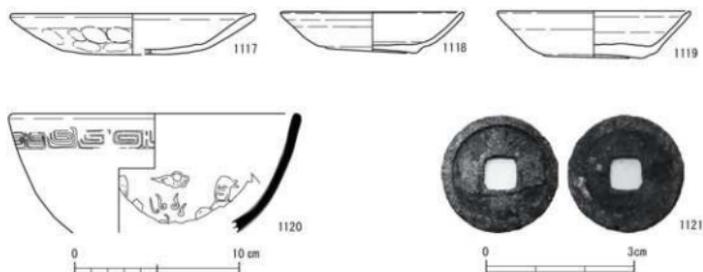
第 193 図 SD1057 平・断面図



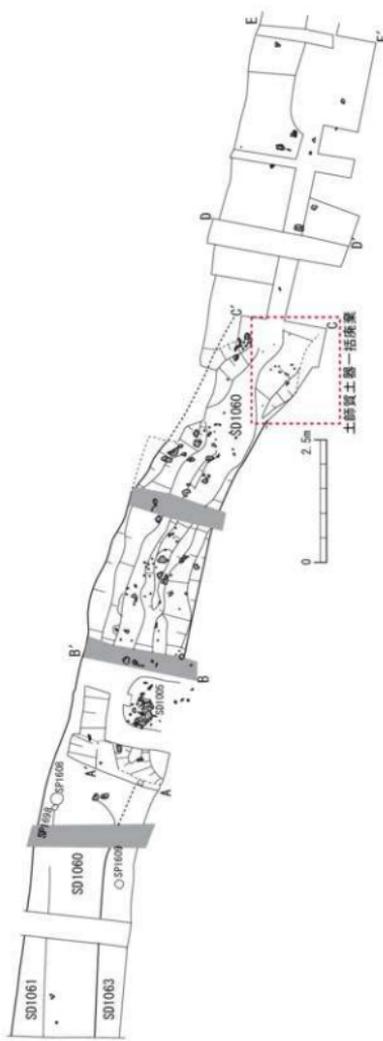
第 194 図 SD1057 出土遺物実測図



第 195 図 SD1058 平・断面図

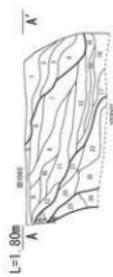


第 196 図 SD1058 出土遺物実測図



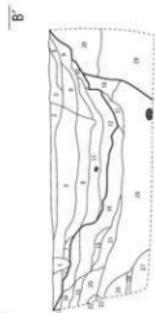
- |    |         |           |    |         |          |    |         |            |
|----|---------|-----------|----|---------|----------|----|---------|------------|
| 1  | 1076/3  | にぶい黄褐色シルト | 11 | 2.515/3 | 黄褐色シルト   | 21 | 2.515/2 | 暗灰黄粘性シルト   |
| 2  | 2.514/4 | オリーブ褐色シルト | 12 | 2.515/4 | 黄褐色シルト   | 22 | 515/2   | 灰オリーブ粘シルト  |
| 3  | 2.514/4 | オリーブ褐色シルト | 13 | 2.515/3 | 黄褐色シルト   | 23 | 515/2   | 灰オリーブ粘性シルト |
| 4  | 2.515/3 | 黄褐色シルト    | 14 | 515/2   | 灰オリーブ粘質土 | 24 | 515/2   | 灰オリーブ粘質土   |
| 5  | 2.514/4 | オリーブ褐色シルト | 15 | 2.515/2 | 暗灰黄粘性シルト | 25 | 2.515/2 | 灰オリーブ粘質土   |
| 6  | 514/4   | 暗オリーブシルト  | 16 | 2.515/2 | 暗灰黄粘質土   | 26 | 2.515/4 | 黄褐色粘質シルト   |
| 7  | 2.515/3 | 黄褐色シルト    | 17 | 2.515/2 | 暗灰黄粘質土   |    |         |            |
| 8  | 2.515/4 | 黄褐色シルト    | 18 | 2.514/2 | 暗灰黄粘性シルト |    |         |            |
| 9  | 2.515/4 | 黄褐色シルト    | 19 | 2.515/3 | 黄褐色シルト   |    |         |            |
| 10 | 2.515/3 | 黄褐色シルト    | 20 | 2.515/2 | 暗灰黄粘性シルト |    |         |            |

土留質土器一括調査



L=1.80m

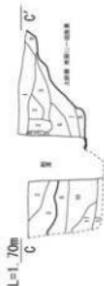
- |    |         |          |    |         |          |    |         |           |
|----|---------|----------|----|---------|----------|----|---------|-----------|
| 1  | 1076/3  | 灰オリーブ砂質土 | 11 | 516/1   | 灰粘土      | 21 | 2.517/4 | 透黄砂質土     |
| 2  | 515/3   | 灰オリーブシルト | 12 | 2.515/2 | 暗灰黄粘土    | 22 | 2.515/2 | 暗灰黄粘質シルト  |
| 3  | 516/3   | オリーブ黄シルト | 13 | 2.515/2 | 暗灰黄粘質シルト | 23 | 2.515/2 | 暗灰黄粘質シルト  |
| 4  | 516/3   | オリーブ黄シルト | 14 | 2.515/2 | 暗灰黄粘質シルト | 24 | 2.515/2 | 暗灰黄粘質土    |
| 5  | 2.514/3 | オリーブ粘質土  | 15 | 2.517/4 | 透黄砂質土    | 25 | 2.514/3 | オリーブ粘質シルト |
| 6  | 3       | 黒目土団粒団子  | 16 | 2.517/4 | 透黄砂質土    | 26 | 515/2   | 灰オリーブ粘土   |
| 7  | 2.517/3 | 透黄砂質土    | 17 | 2.517/4 | 透黄砂質土    | 27 | 2.514/3 | オリーブ粘質土   |
| 8  | 2.515/4 | 黄褐色シルト   | 18 | 2.517/4 | 透黄砂質土    | 28 | 2.517/4 | 透黄砂質土     |
| 9  | 6       | 黒目土団粒団子  | 19 | 2.517/4 | 透黄砂質土    | 29 | 2.514/3 | オリーブ粘質土   |
| 10 | 2.517/4 | 透黄砂質土    | 20 | 2.517/4 | 透黄砂質土    |    |         |           |



L=2.00m

第197図 SD1060 平・断面図

- 1 5Y5.3 灰オリーブ粘質土
- 2 粘壤土
- 3 2.5Y5.3 灰オリーブシルト
- 4 2.5Y5.3 灰オリーブシルト
- 5 2.5Y5.3 灰オリーブシルト
- 6 5Y4.2 灰オリーブシルト
- 7 2.5Y4.3 オリーブ粘シルト
- 8 2.5Y4.3 オリーブ粘シルト
- 9 2.5Y5.2 黄褐色シルト
- 10 2.5Y5.4 黄褐色シルト
- 11 2.5Y5.2 黄褐色シルト
- 12 2.5Y5.3 灰オリーブ粘性シルト



L=1:90m  
D



- 1 グライ
- 2 2.5Y5.3 黄褐色砂質土
- 3 2.5Y4.4 に近い赤褐色シルト
- 4 5Y4.4 暗オリーブ砂質土
- 5 5Y4.3 灰オリーブシルト
- 6 5Y4.4 暗オリーブ砂質土
- 7 2.5Y4.1 黄褐色砂質土
- 8 5Y4.2 灰オリーブシルト
- 9 2.5Y4.3 オリーブ粘シルト
- 10 2.5Y4.3 オリーブ粘シルト
- 11 2.5Y4.3 オリーブ粘シルト
- 12 5Y5.4 オリーブシルト
- 13 5Y5.4 オリーブシルト
- 14 5Y5.4 オリーブシルト
- 15 2.5Y5.4 黄褐色シルト
- 16 2.5Y4.4 黄褐色シルト
- 17 2.5Y4.4 オリーブ粘性シルト
- 18 2.5Y4.2 灰褐色シルト
- 19 16層とほぼ同じ
- 20 2.5Y5.4 黄褐色シルト
- 21 2.5Y5.4 黄褐色シルト
- 22 2.5Y5.4 黄褐色シルト
- 23 2.5Y5.4 黄褐色シルト
- 24 2.5Y5.4 黄褐色シルト
- 25 2.5Y5.3 暗灰質シルト
- 26 2.5Y5.2 暗灰質シルト
- 27 2.5Y5.4 黄褐色シルト
- 28 2.5Y5.4 黄褐色シルト
- 29 2.5Y5.4 黄褐色シルト
- 30 2.5Y4.4 に近い暗褐色シルト
- 31 28層とほぼ同じ
- 32 28層とほぼ同じ
- 33 28層とほぼ同じ
- 34 2.5Y5.2 暗灰質シルト
- 35 2.5Y5.2 暗灰質粘質土

L=1:80m  
E



- 1 10Y4.1 灰グライ
- 2 2.5Y5.1 黄褐色砂質土
- 3 2.5Y5.1 黄褐色砂質土
- 4 10Y5.2 灰黄褐色粘質グライ
- 5 2.5Y5.2 暗灰質粘質グライ
- 6 2.5Y5.1 オリーブ粘質グライ
- 7 5Y5.1 灰砂質じり
- 8 5Y5.1 灰シルトやや粘質
- 9 5Y4.1 灰やや粘質
- 10 2.5Y5.2 暗灰質砂質じり
- 11 2.5Y5.2 暗灰質砂質じり
- 12 2.5Y4.2 暗灰質やや強い砂質じり
- 13 2.5Y5.2 暗灰質砂質じり
- 14 2.5Y5.2 暗灰質シルト
- 15 2.5Y5.2 暗灰質砂質じり
- 16 2.5Y5.2 暗灰質砂質じり
- 17 2.5Y5.2 暗灰質シルト
- 18 2.5Y5.2 暗灰質軟弱
- 19 7.5Y5.1 灰粘質

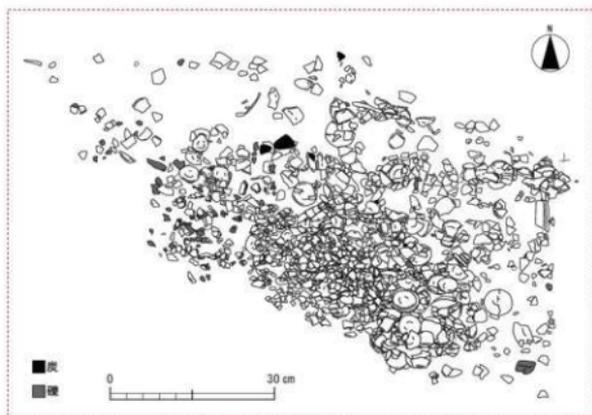


第 198 図 SD1060 断面図

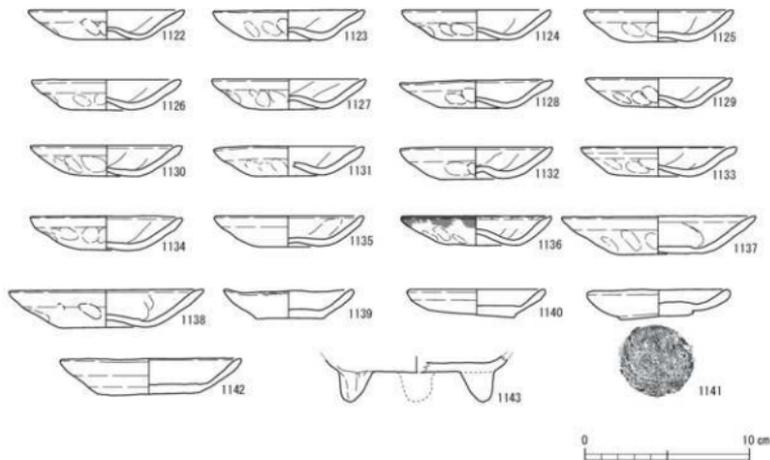
とが考えられる。

〈出土遺物〉(第200～202図)

1122～1143は一括廃棄されたと考えられる土師質土器である。1122～1138は手づくね成形による土師質土器皿で、1122～1136は口径9～9.4cm、器高1.8～2.0cmを測り、内面を横ナデの後、



第199図 SD1060 土師質土器一括廃棄状況図



第200図 SD1060 出土遺物実測図(一括廃棄)

「の」の字にナデ上げる。1137・1138 は口径 11.8cm、器高 2.3cmを測り、内面端をやや強くヨコナデした後、「2」の字にナデ上げた痕跡が残る。1139～1142 はロクロ成形による土師質土器皿である。底部切り離し技法は静止糸切りで、1139～1141 は口径 7.9cm～8.3cm、器高 1.6cm～1.8cm、1142 は口径 11cm、器高 2.2cmを測る。1136 と 1139 の口縁には煤の付着が見られ、灯明皿である。1143 はロクロ成形による土師質土器皿に脚が付くことから香炉として使用されたものと思われる。底部切り離し技法は静止糸切りである。

1144～1192 は一括廃棄以外から出土した遺物である。1144～1148 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。1147 の口縁には煤が付着しており、灯明皿である。1149～1160 はロクロ成形による土師質土器皿で、底部に静止糸切りの痕跡を留める。1152 は全面が黒化しており、底部には板目痕が見られる。また、1158 の底部ほぼ中央部には径 5mm の孔が外側面から穿たれている。さらに、1151 の底部には草木文様とも思える陰刻が施されている。1151・1159・1160 は煤が付着しており、灯明皿と考えられるが、1160 は煤とともにタール状の付着物が内外面に見られる。1161～1165 は土師質土器杯で、口径は 10cm前後、器高は 4cm強を測る。底部には静止糸切りの痕跡が認められる。

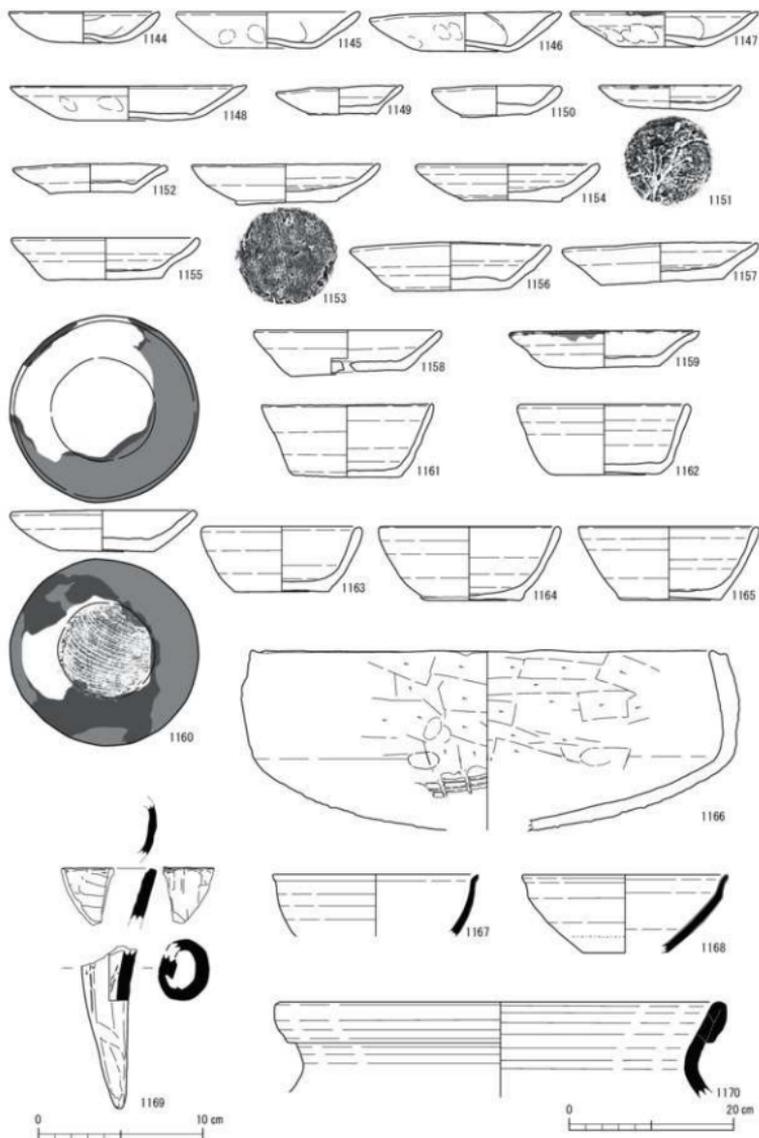
1166 は土師質土器鍋で、口縁部と鈔部が形骸化した形状を有し、口径 28.1cmを測る。内外面に幅 18mm の板ナデ痕が見られ、底部外面には格子目タタキが施される。

1167・1168 は瀬戸美濃焼天目茶碗。1167 はやや内彎気味に、1168 は直線的に立ち上がる体部を持ち、口縁端部は外反する。

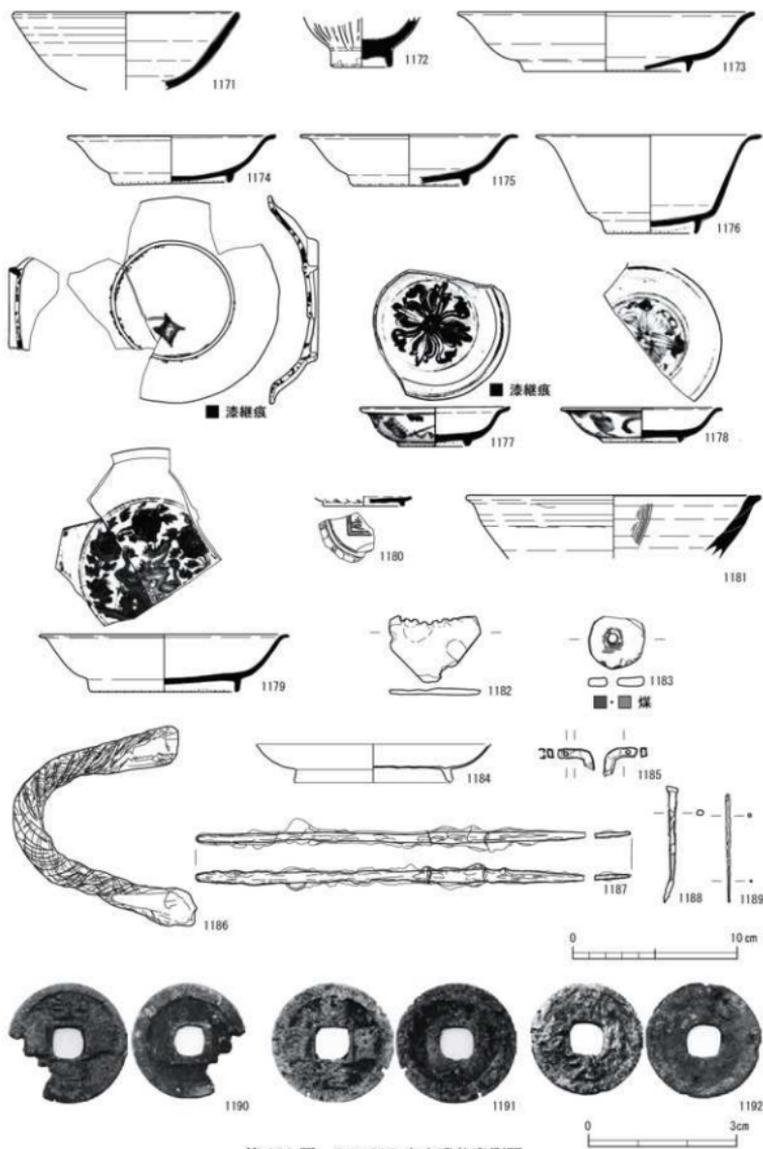
1169 は備前焼角形花生地で、板状の粘土を板ナデ後、丸めて成形したものと思われる。外面にはケズリ後ナデが施され、自然軸がかかる。1170 は備前焼甕で、口径 53cmに復元される。口縁は扁平な玉縁状に仕上げ、弱い凹線が巡る。

1171 は青磁碗で口径は 13.6cmに復元される。見込端に沈線が巡り、体部の上部外面にはロクロ目が顕著に認められる。素地は灰白色で焼が甘く、透明度の高い青みがかった灰白色の軸が施され、貫入が多く入る。1172 は龍泉窯系の青磁小碗で、体部外面には線描蓮弁文が施される。1173～1175 は白磁の端反り皿で、森田分類の E2 群に相当する。1174 には漆漉の痕跡が認められる。1176 は白磁の杯で、端反りの形状を持つ。1177・1178 は端反りの青花皿で、小野分類の皿 B1 群に属するものである。見込には十字花文、外面には牡丹唐草文が描かれる。1179 は口径 15cmに復元される端反りの青花皿である。見込には 2 条の界線の内側に牡丹が描かれ、中央に太湖石を配し、その左右に孔雀が向かい合う構図となっている。顕著な使用痕も確認できる遺物である。実測図は二つの磁器片を接合したものであるが、1 片は SD1060 から、もう 1 片は約 25 m離れた SX2001 から出土した。1180 は漳州窯系の翡翠軸菊花小皿である。型押しによって成形されたもので、高台径は 5cmに復元される。残存する底部外面にはスタンプによる二重方圏内に「造」の字が見える。

1181 は産地不明の焼締陶器の破片で、口径は 16.8cmに復元される。やや内彎する体部を持ち、端部を外に小さく折り曲げる形状を持つ。内面には 4 条 / 1cm の襷目がある。



第 201 図 SD1060 出土遺物実測図



第 202 図 SD1060 出土遺物実測図

1182 は手づくね成形による土師質土器皿の底部を二次加工した土製品で、端部を鋸歯状に刻み込んでいる。1183 は円平状の土製品で、中央に6mm大の孔が穿たれ、両面に煤が付着する。灯心押さえてあろうか。

1184 は内外面ともに朱塗りの漆器皿である。木質部分は遺存しておらず、保存処理後に実測を行った。1185 は朱漆が塗布された部材片と考えられるが、木質部分が遺存していない。それぞれ「く」の字状の形状で、2.5mm、2mmの孔が穿たれている。

1186 は漆漉布である。布を固く絞った状態で出土しており、遺存状態は良好である。

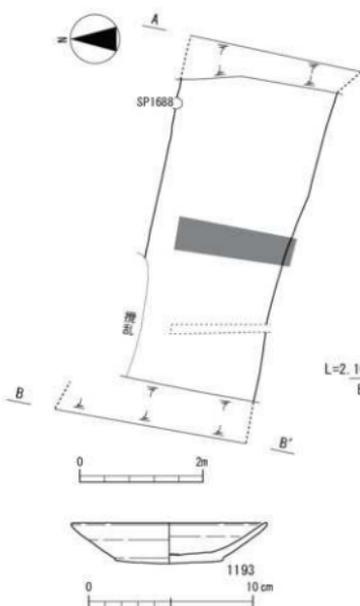
1187 は鉄製の火箸で長さ25.5cm、重さ44.88gを測る。1188 は鉄釘で、長さ7.1cmを測る。1189 は針状の銅製品である。

1190～1192 は北宋銭。1190 は篆書体の天聖元寶で1023年初鑄、1191 は紹聖元寶で1094年初鑄、1192 は聖宋元寶で1101年初鑄である。

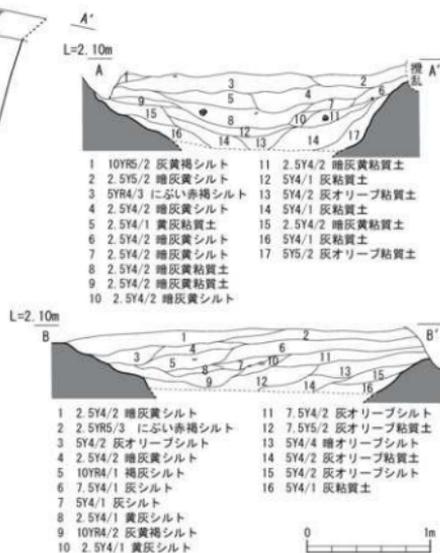
## 溝 1-66 [SD1066]

〈検出地点〉

14-Ⅳ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (E-17～18、F-17～18)]



第 203 図 SD1066 出土遺物実測図



第 204 図 SD1066 平・断面図

〈形態等〉

14-Ⅳ区南端付近で調査区を東西に横断する溝が検出された。延長が5.2m、幅が2.1～2.5mである。断面形はトレンチで舟底形を呈することが確認され、深さは0.82m以上である。

〈出土遺物〉

1193はロクロ成形による土師質土器皿で、底部に静止糸切りの痕跡を留める。口径は11.8cmに復元され、底径6.4cm、器高2.5cmを測る。

## ⑤井戸 (SE)

### 井戸 1-1 [SE1001]

〈検出地点〉

14-Ⅳ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (F-20)]

〈形態等〉

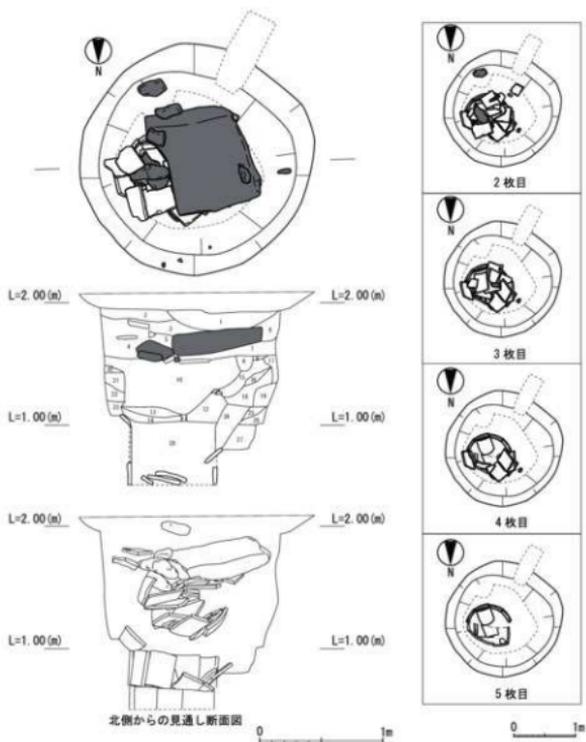
積み上げ式瓦組型井戸である。井戸上部に1m大の砂岩が封をするように配置されていた。掘削範囲では最上段の瓦列は倒壊していると思われるが、二段目、三段目の瓦列は部分的に遺存していた。上段の瓦列の合わせ目と下段の瓦列の合わせ目をずらす形で組み上げている。井戸枠の平面形状は、土圧などにより変形が見られ、正円ではなく楕円状であった。この形式の井戸は、県内の今までの調査では幕末以降からしか見られなかったが、SE1001の井戸枠内覆土からは中世期の遺物しか確認されておらず、出土遺物からは16世紀後半のものと考えられる。積み上げ式瓦組井戸は、堺では15世紀頃から見られ、16世紀では堺や淡路で類例が見られる。三好氏の勢力範囲との関連が想定され、興味深い。

〈出土遺物〉(第205図)

1194は、手づくね成形による土師質土器皿で、口径17.1cmに復元される。色調は灰白色系を呈する。1195は、ロクロ成形の土師質土器皿で、口径12.4cm、底径7.3cm、器高2.3cmに復元される。底部には静止糸切りの痕跡を留める。

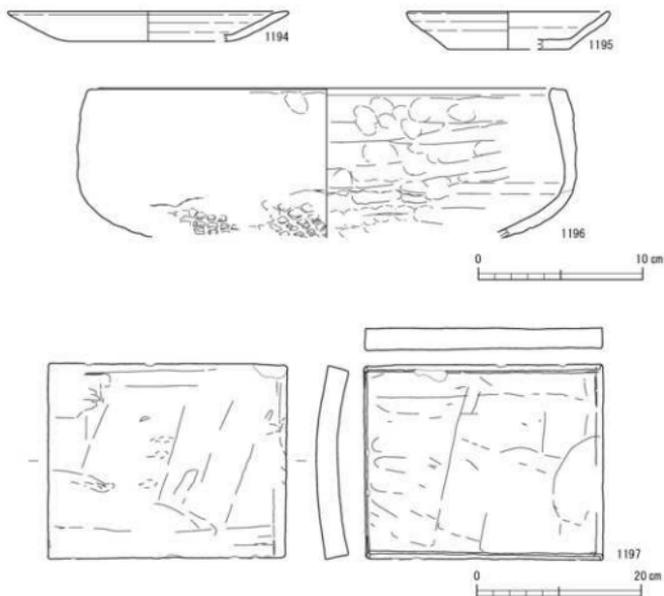
1196は土師質土器鍋。口縁部と頸部が形骸化した形状を有し、口径27.4cmに復元される。底部には格子目タタキが施される。

1197は、井戸瓦である。長さ29.0cm、幅22.3cm、厚さ2.6cmを測る。井戸瓦としての使用目的から、凸面に比べて凹面に丁寧な調整が施されている。凸面には板ナデやケズリなどの調整痕が明瞭に見られるが、凹面ではミガキにより調整痕が消されている。取り上げた井戸瓦は法量的にまとまりが見られ、焼成も良好である。胎土には結晶片岩を含有するものもある。



- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 1 7.5Y4/1 灰やや粘質    | 16 5Y5/1 灰          |
| 2 5Y5/1 灰          | 17 2.5Y4/1 黄灰砂質土    |
| 3 5Y5/1 灰          | 18 2.5Y5/2 暗灰黄      |
| 4 2.5Y5/1 黄灰       | 19 5Y5/1 灰          |
| 5 7.5Y4/1 灰        | 20 2.5Y4/2 暗灰黄      |
| 6 2.5Y4/1 黄灰       | 21 2.5Y4/2 暗灰黄      |
| 7 7.5Y4/2 灰オリーブ粘質土 | 22 2.5Y5/2 暗灰黄      |
| 8 10YR5/2 灰黄褐      | 23 5Y4/2 灰オリーブ粘性シルト |
| 9 2.5Y4/2 暗灰黄      | 24 黄褐粘質土            |
| 10 2.5Y4/2 暗灰黄     | 25 黄褐粘質土            |
| 11 黄褐粘質土           | 26 黄褐粘質土            |
| 12 5Y5/1 灰         | 27 5Y4/2 灰オリーブ      |
| 13 黄褐粘質土           | 28 2.5Y5/3 黄褐粘質土    |
| 14 灰黄褐粘質土          |                     |
| 15 2.5Y4/2 暗灰黄     |                     |

第 205 図 SE1001 平・断面図



第206図 SE1001 出土遺物実測図

#### ⑥ 杭列 (SG)

多くの小穴が検出された12-I区において、一定の間隔で並んでいるものと考えられる小穴列が確認された。

#### 杭列 1-1 [SG1001]

〈検出地点〉

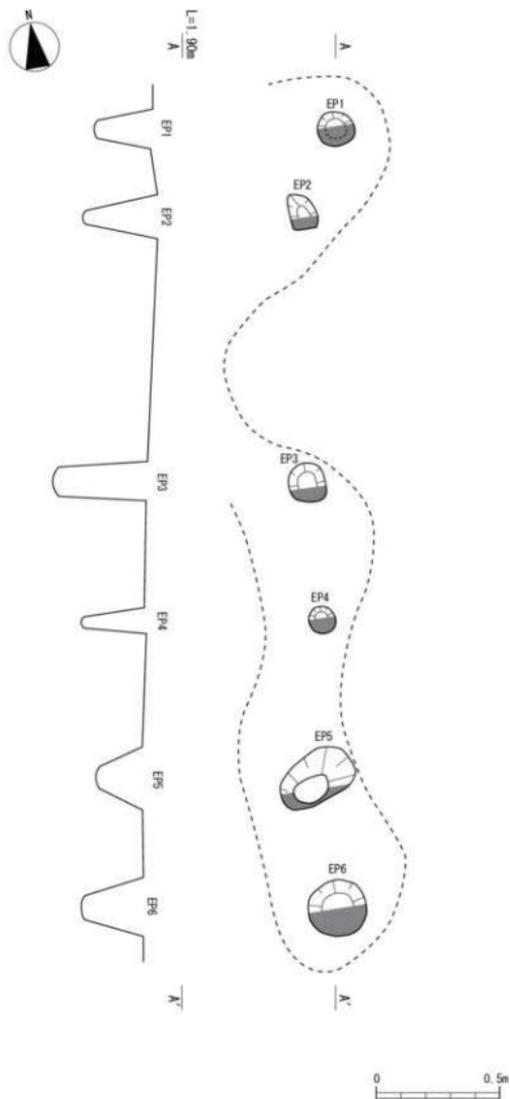
12-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (O-3)]

〈形態等〉

南北方向に並んだ直径10～20cm大の小穴列が検出された。N-2-Eとやや東に振る。SD1017沿いであり、軸方向もほぼ一致するため、SD1017とともに屋敷地等の区画のために設けられた杭列、あるいは柵列等の痕跡と考えられる。

〈出土遺物〉

出土遺物は、土師質土器皿や青磁碗の小片があったが、図化できるものはない。



第 207 图 SG1001 平·断面图

## ⑦土坑 (SK)

### 土坑 1-1 [SK1001]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

直径約1mの円形を呈する。深さは15cmで、断面形状は逆台形である。

〈出土遺物〉(第209図)

1198は手づくね成形による土師質土器皿で、口径は9.4cmに復元される。色調は橙色系を呈する。1199はロクロ成形による土師質土器皿。器壁は全体的に厚く、ロクロ目を顕著に残す。底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。

### 土坑 1-2 [SK1002]

〈検出地点〉

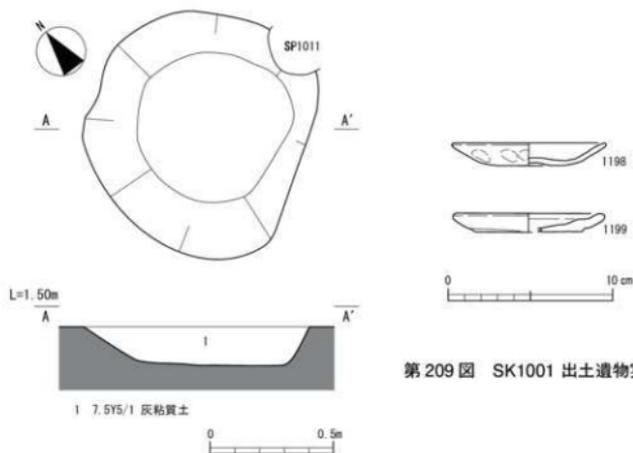
1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-18～19)]

〈形態等〉

長径112cm、短径50cmの東西方向に長い楕円形を呈する。断面形状は逆台形である。

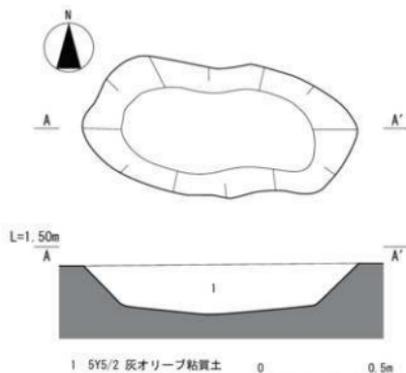
〈出土遺物〉(第211図)

1200はロクロ成形による土師質土器皿で、全体的に厚い器壁を持ち、ロクロ目を顕著に残す。

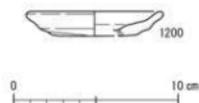


第209図 SK1001 出土遺物実測図

第208図 SK1001 平・断面図



第210図 SK1002 平・断面図



第211図 SK1002 出土遺物実測図

底部には回転ヘラ切りの痕跡及び板状厚痕が認められる。

#### 土坑1-8 [SK1008]

〈検出地点〉

6-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (I-19)]

〈形態等〉

直径約150cmの円形を呈する。深さは73cmで、断面形状は碗形である。

〈出土遺物〉(第214図)

1201～1215は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系を呈する。1201～1209は口径が9cm前後で、内面にはヨコナデと「の」の字のナデ上げが認められ、底部はやや突き上げ底となる。1210～1212は口径が11cm前後で、内底面端にやや強いヨコナデが認められ、1212には「2」の字のナデ上げが認められる。1213～1215は口径が12cm以上となる。口縁がやや肥厚し、端部を細く仕上げる形状を持つ。内底面端にはやや強いヨコナデによる凹線が認められる。

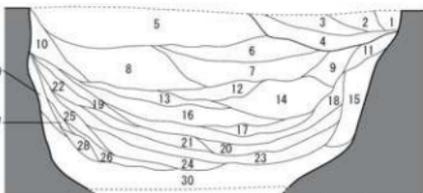
1216～1223はロクロ成形による土師質土器皿である。1216・1217は口径が8.5cm前後である。やや厚い器壁を持ち、底部には静止糸切りの痕跡を留める。1218は口径11.6cmで、静止糸切りによる平らな底部から直線的に立ち上がる体部を持つ。1219～1223は、口径が11cm前後で、静止糸切りによる底部からやや内彎気味に立ち上がる体部を持つ。

1224・1225は土師質土器杯である。静止糸切りによる底部からやや内彎気味に立ち上がる体部を持つ。

1226は見込みが緩やかに盛り上がった「饅頭心」の青花碗で、小野分類のE群である。高台内



L=2.10m

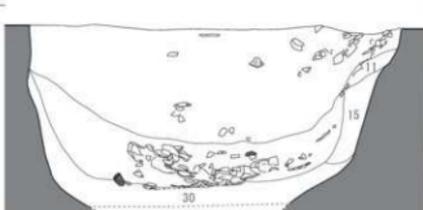


- |                     |                    |                    |
|---------------------|--------------------|--------------------|
| 1 2.5Y6/3 にぶい黄シルト   | 11 2.5Y7/2 灰黄粘質土   | 21 2.5Y7/1 灰白粘質土   |
| 2 5Y7/1 灰白シルト       | 12 2.5Y5/4 黄褐シルト   | 22 2.5Y6/2 灰黄粘質シルト |
| 3 5Y7/1 灰白シルト       | 13 2.5Y6/3 にぶい黄シルト | 23 2.5Y7/1 灰白粘質土   |
| 4 2.5Y7/1 灰白粘質土     | 14 2.5Y7/3 透黄シルト   | 24 7.5Y7/1 灰白粘質土   |
| 5 2.5Y7/3 透黄シルト     | 15 2.5Y7/1 灰白粘質土   | 25 2.5Y7/2 灰黄粘質土   |
| 6 2.5Y7/4 透黄シルト     | 16 2.5Y7/4 透黄シルト   | 26 7.5Y7/1 灰白粘質土   |
| 7 2.5Y7/6 明黄褐シルト    | 17 2.5Y7/4 透黄シルト   | 27 2.5Y6/2 灰黄シルト   |
| 8 2.5Y6/4 にぶい黄粘質シルト | 18 7.5Y7/1 灰白粘質土   | 28 2.5Y7/2 灰黄粘質土   |
| 9 2.5Y7/4 透黄シルト     | 19 2.5Y6/4 にぶい黄シルト | 29 7.5Y7/1 灰白粘質土   |
| 10 2.5Y7/2 灰黄粘質シルト  | 20 2.5Y7/2 灰黄シルト   | 30 7.5Y7/1 灰白粘質土   |

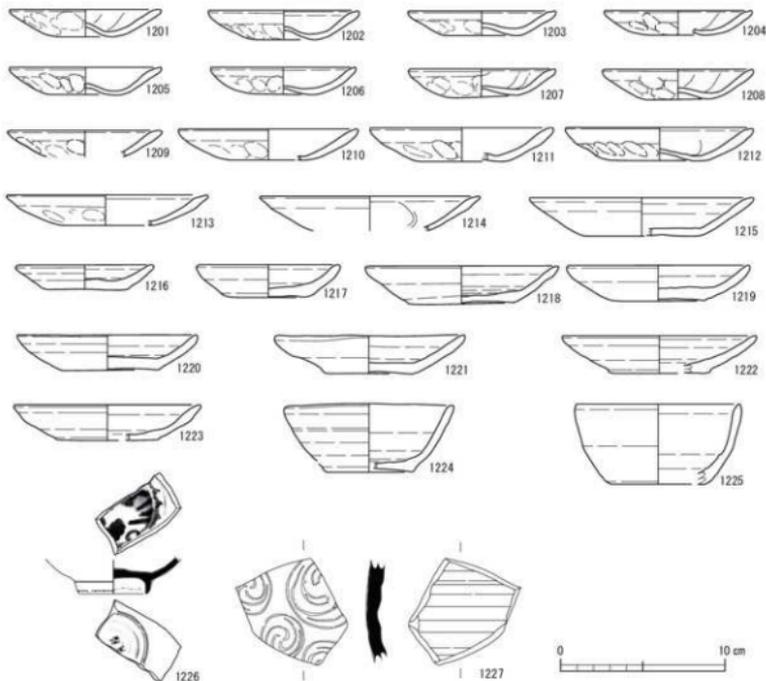


第212図 SK1008 平・断面図

L=2.10m



第213図 SK1008 立面図



第 214 図 SK1008 出土物実測図

には「福」と「同」の文字が見える。「萬福紋同」か。

1227 は白磁の梅瓶で、胴部に巴文が陰刻される。

#### 土坑 1-16 [SK1016]

〈検出地点〉

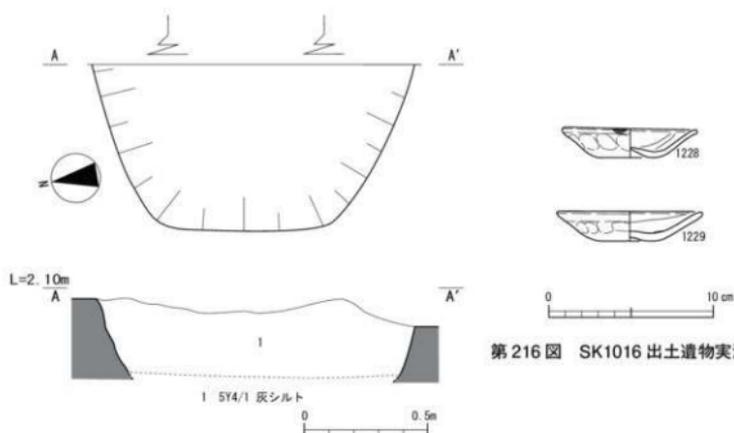
10-Ⅲ区〔中グリッド (b-9)・小グリッド (H-5)〕

〈形態等〉

直径 130cm、深さは 30cm 以上を測り、断面は碗形を呈する。

〈出土遺物〉(第 216 図)

1228・1229 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。内面にはヨコナデの後、「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。底部はやや突き上げ底となる。1228 の口縁部に



第 215 図 SK1016 平・断面図

第 216 図 SK1016 出土遺物実測図

はタールが付着しており、灯明皿であろう。

#### 土坑 1-19 [SK1019]

〈検出地点〉

8-II区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-18)]

〈形態等〉

直径約 140cm の円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約 10cm である。

〈出土遺物〉 (第 218 図)

1230 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系を呈する。口径は 9.6cm に復元される。1231 はロクロ成形による土師質土器皿。厚い器壁を持ち、底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。

1232・1233 は端反りの白磁皿で、森田分類の E2 群に相当する。

1234 は砂岩の砥石。

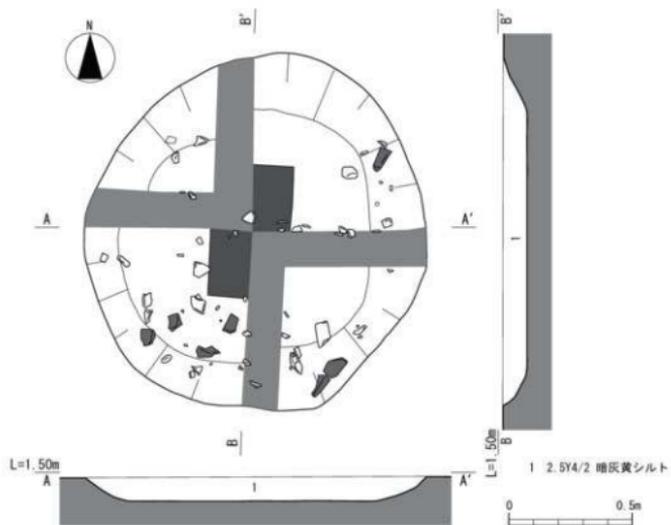
#### 土坑 1-20 [SK1020]

〈検出地点〉

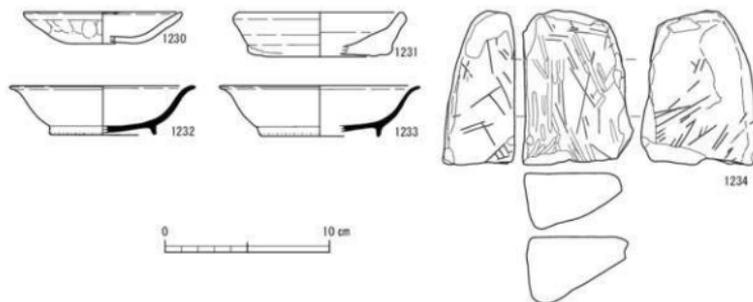
10-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-10)]

〈形態等〉

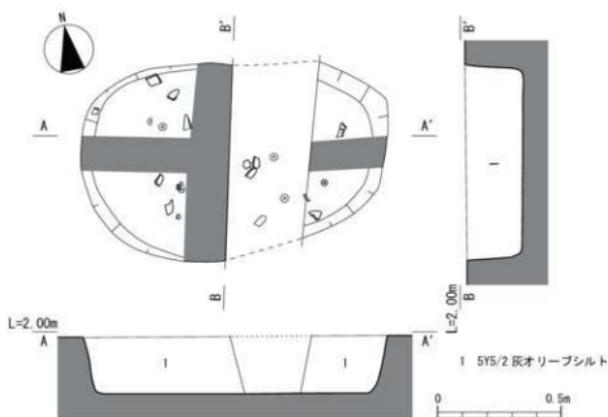
長径 122cm、短径 90cm の東西に長い楕円形を呈する。断面形状は逆台形で、深さは約 18cm であ



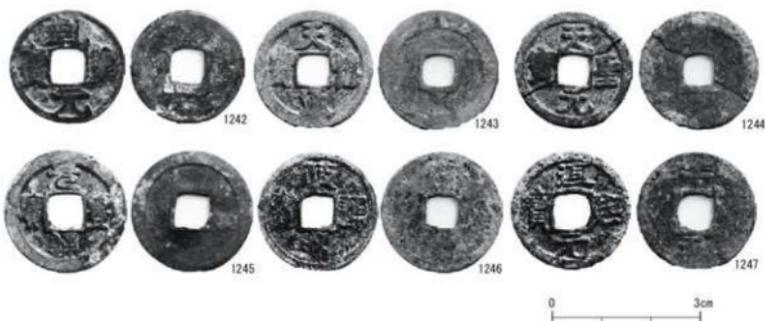
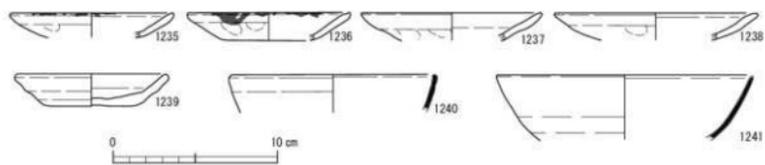
第 217 図 SK1019 平・断面図



第 218 図 SK1019 出土遺物実測図



第 219 図 SK1020 平・断面図



第 220 図 SK1020 出土物実測図

る。

〈出土遺物〉(第220図)

1235～1238は手づくね成形による土師質土器皿。口径が10cm前後から12.4cmに復元されるもので、色調は灰白色系を呈する。1239はロク口成形による土師質土器皿で、底部には回転ヘラ切り及び板状の圧痕を留める。

1240は青磁碗。口縁部外面をやや強くナデており、若干の凹みを持つ。1241は白磁碗である。器壁は薄く、胎土も精緻である。

1242は札元重寶で758年初鑄の唐錢である。1243は天禧通寶で1017年初鑄、1244は天聖元寶で1023年初鑄、1245は天豊通寶で1071年初鑄、1246は政和通寶で1111年初鑄。いずれも北宋錢である。1247は淳熙元寶で背面には「十五」の文字が見える。南宋の淳熙15年(1188)年に鑄造された錢貨である。

**土坑1-29 [SK1029]**

〈検出地点〉

12-I区〔中グリッド(b-9)・小グリッド(S~T-2)〕

〈形態等〉

長軸183cm、短軸112cmの東西に長い隅丸の長方形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約20cmである。

〈出土遺物〉(第222図)

1248～1256は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系である。口径9cm前後から14.0cmのものがあり、バリエーションに富む。

1257は備前焼堯で、口径33.4cmに復元される。口縁端部を折り曲げ、玉縁状に仕上げられる。

1258は端反りの白磁皿。

**土坑1-30 [SK1030]**

〈検出地点〉

12-I区〔中グリッド(b-9)・小グリッド(S-2)〕

〈形態等〉

長径86cm、短径78cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約15cmである。

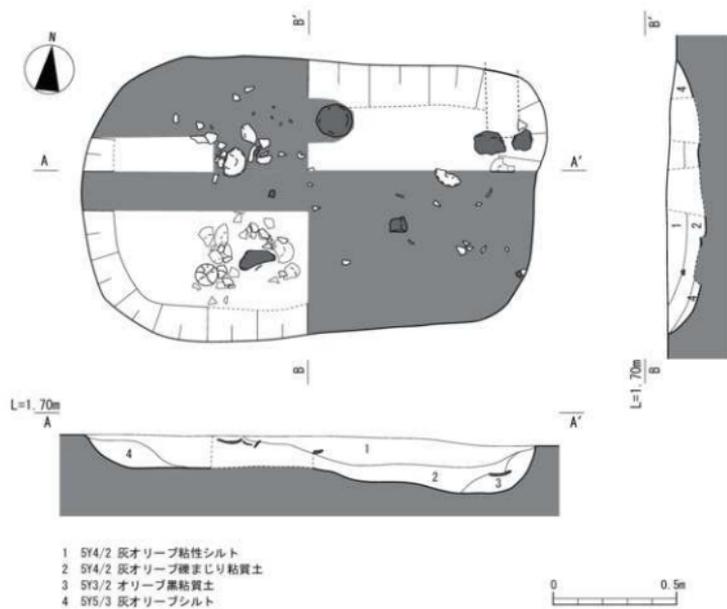
〈出土遺物〉

土師質土器の小片、瓦質土器の小片が出土したが、図化できるものは無い。

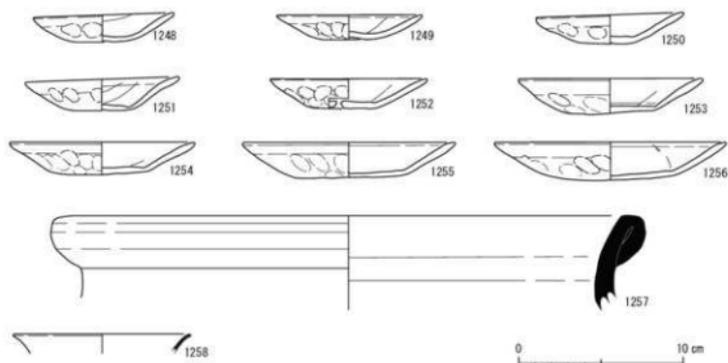
**土坑1-31 [SK1031]**

〈検出地点〉

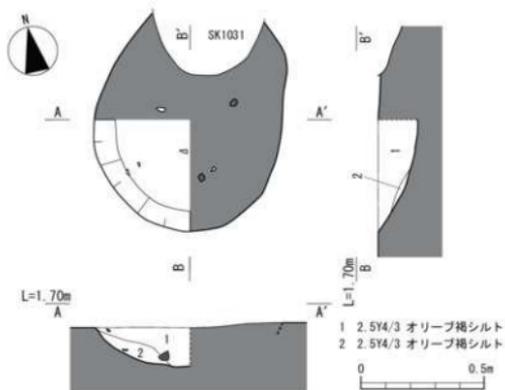
12-I区〔中グリッド(b-9)・小グリッド(S-2)〕



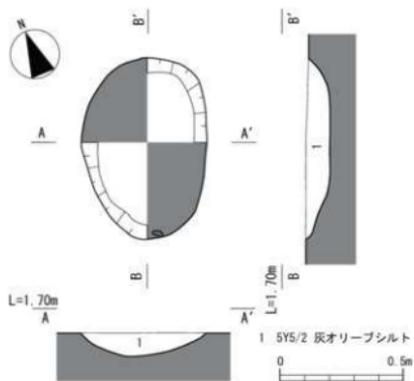
第 221 図 SK1029 平・断面図



第 222 図 SK1029 出土遺物実測図



第 223 図 SK1030 平・断面図



第 224 図 SK1031 平・断面図

〈形態等〉

長径 74cm、短径 50cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約 10cmである。

〈出土遺物〉

土師質土器の小片が出土しているが、図化できるものは無い。

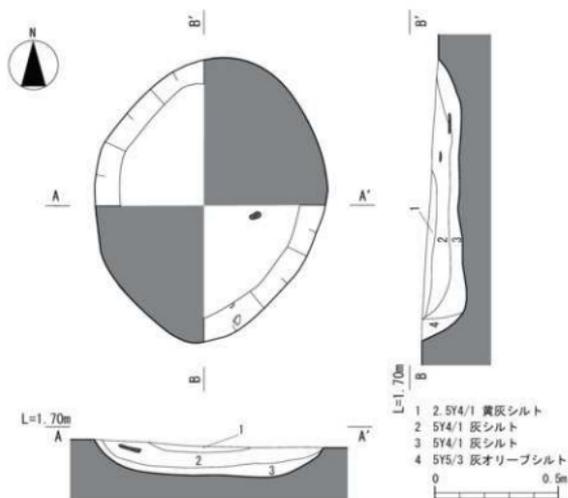
### 土坑 1-32 [SK1032]

〈検出地点〉

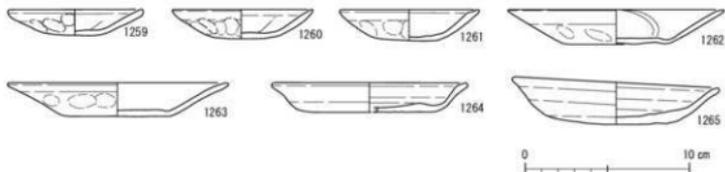
12-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (R-3)]

〈形態等〉

長径 116cm、短径 92cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約 16cmである。



第 225 図 SK1032 平・断面図



第 226 図 SK1032 出土遺物実測図

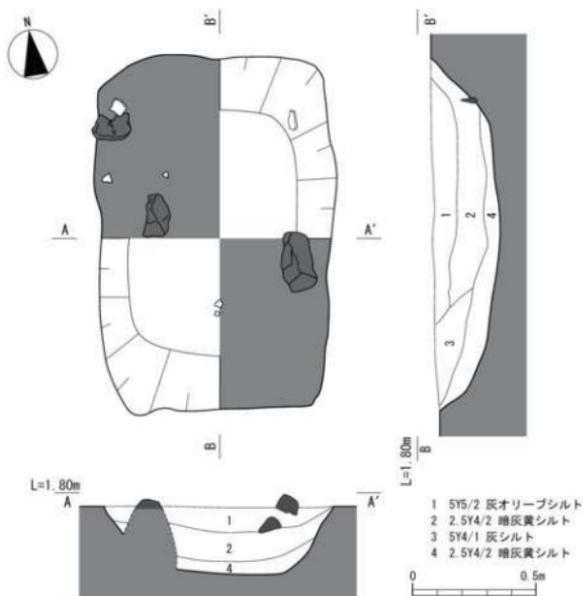
〈出土遺物〉(第226図)

1259～1263は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系を呈する。1259～1261は口径8.5cm前後、1262・1263は口径13cmを越えるものである。1264・1265はロクロ成形による土師質土器皿。底部には回転ヘラ切りの痕跡と板目痕を留める。

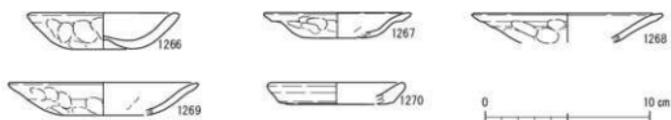
### 土坑 1-33 [SK1033]

〈検出地点〉

12-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (R-2)]



第227図 SK1033 平・断面図



第228図 SK1033 出土遺物実測図

〈形態等〉

長軸 144cm、短軸 94cmの隅丸長方形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約 28cmである。

〈出土遺物〉(第 228 図)

1266 から 1269 は手づくね成形による土師質土器皿。1266 の色調は灰白色を呈し、形状は底部がやや突き上げ底である。1267 は口径 8.9cmに復元され、色調は橙色系を呈する。1268・1269 は口径 11.4cmに復元され、色調は橙色系を呈する。1270 はロクロ成形による土師質土器皿。厚い胎土を持ち、底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。

#### 土坑 1-34 [SK1034]

〈検出地点〉

12- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (Q-2)]

〈形態等〉(第 230 図)

長径 102cm、短径 79cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約 8cmである。

〈出土遺物〉

1271 ~ 1278 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系を呈する。口径が 8.5cm前後のもの (1271・1272)、10cm前後のもの (1273 ~ 1275)、12cm以上の大型のもの (1276 ~ 1278) がある。1279・1280 はロクロ成形による土師質土器皿。胎土はやや粗く、底部には回転ヘラ切りの痕跡及び板状厚痕が認められる。

1281 は篆書体の皇宋通寶で、1038 年初鑄の北宋銭である。

#### 土坑 1-35 [SK1035]

〈検出地点〉

12- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (Q-3)]

〈形態等〉

長径 120cm、短径 86cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約 22cmである。

〈出土遺物〉(第 232 図)

1282 ~ 1285 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口径は 1282 が 9.6cm、1283 が 12.2cm、1284 が 12.7cm、1285 が 16.1cmに復元される。1286 はロクロ成形による土師質土器皿。底部には回転ヘラ切りの痕跡と板目痕が認められ、体部にはロクロ目が顕著に残る。

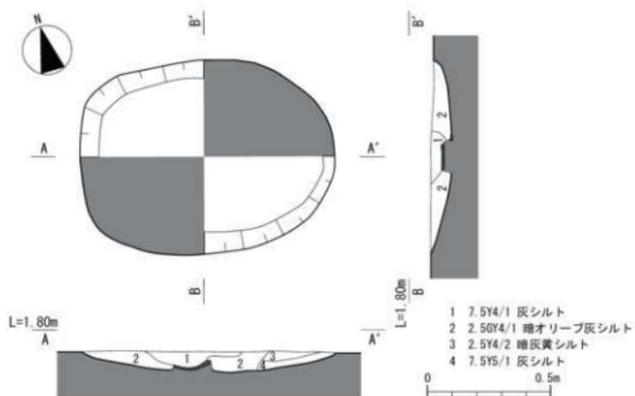
#### 土坑 1-37 [SK1037]

〈検出地点〉

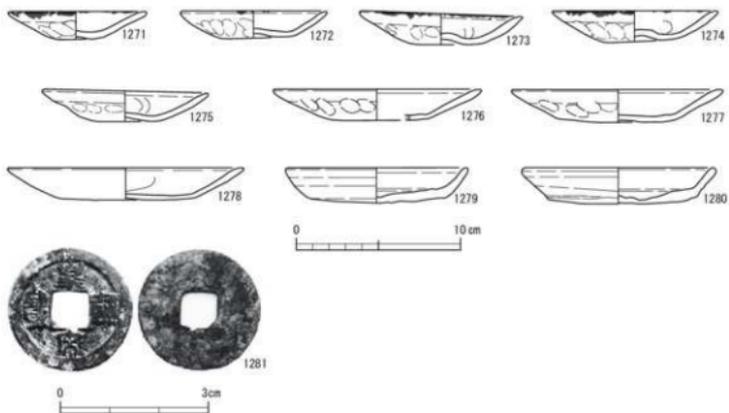
12- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (Q-1)]

〈形態等〉

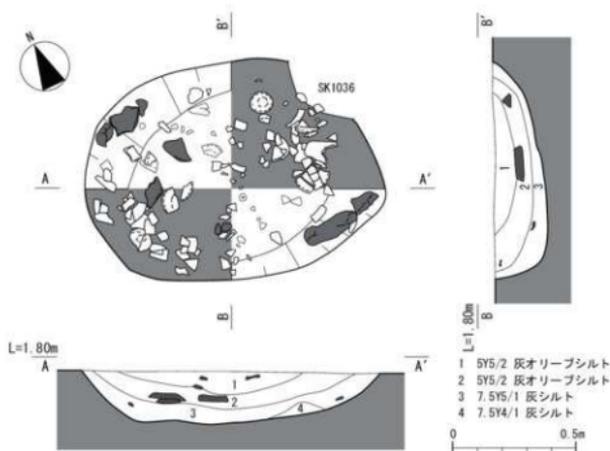
東西 140cm、南北 106cm以上の規模を有する。断面形状は皿形で、深さは約 21cmである。



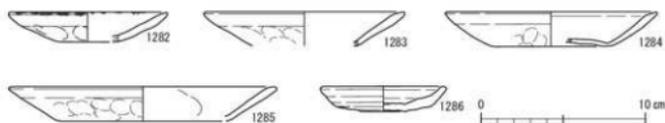
第 229 図 SK1034 平・断面図



第 230 図 SK1034 出土遺物実測図



第 231 図 SK1035 平・断面図



第 232 図 SK1035 出土遺物実測図

〈出土遺物〉(第 234 図)

1287 は手づくね成形による土師質土器皿で、口径 9.6cm に復元される。色調は橙色系である。

1288 はロクロ成形による土師質土器皿。

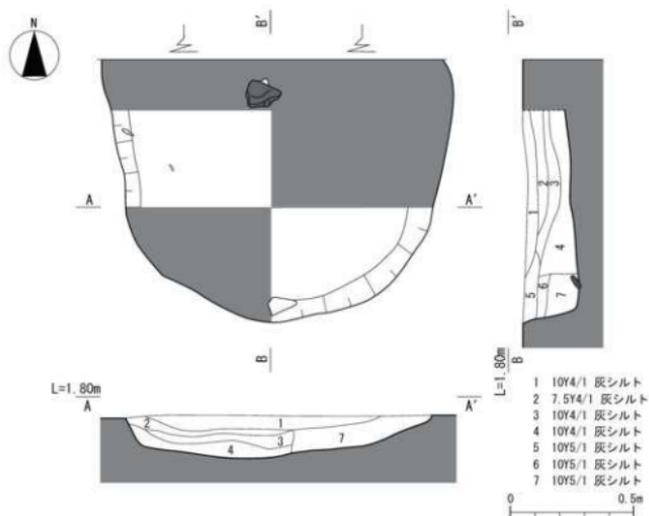
#### 土坑 1-38 [SK1038]

〈検出地点〉

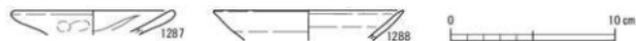
12-I 区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (Q~R-20)]

〈形態等〉

長径 105cm 以上、短径 44cm の南北に長い長楕円形を呈する。断面形状は舟底形で、深さは約 18cm である。



第 233 図 SK1037 平・断面図



第 234 図 SK1037 出土遺物実測図

〈出土遺物〉(第 236 図)

1289 は手づくね成形による土師質土器皿で、口径 12.6cm に復元される。色調は橙色系である。1290 はロクロ成形による土師質土器皿。底部には回転ヘラ切りの痕跡と板状厚痕が認められ、体部にはロクロ目が顕著に残る。口縁端部を端反りに仕上げる。

#### 土坑 1-39 [SK1039]

〈検出地点〉

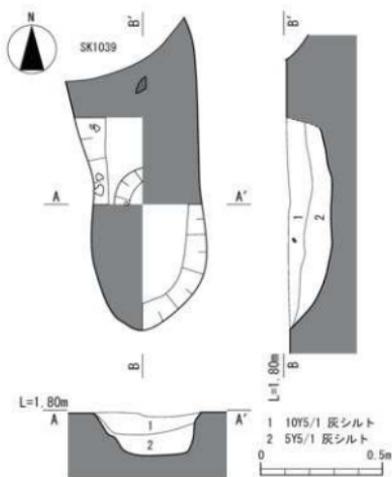
12-1 区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (Q-20)]

〈形態等〉

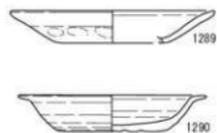
直径 100cm 前後のはほぼ円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約 10cm である。

〈出土遺物〉(第 238 図)

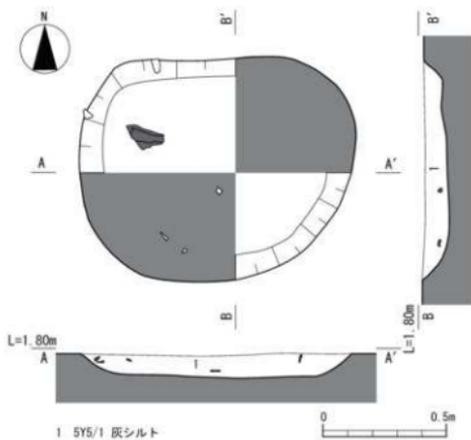
1291、1292 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系である。口径はそれぞれ 10.4



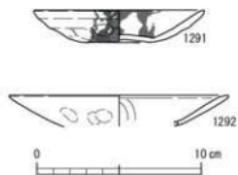
第235図 SK1038 平・断面図



第236図 SK1038 出土遺物実測図



第237図 SK1039 平・断面図



第238図 SK1039 出土遺物実測図

cm、13.4cmに復元される。

#### 土坑 1-42 [SK1042]

〈検出地点〉

12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (J-2)]

〈形態等〉

長軸 70cm以上、短軸 66cmの隅丸方形を呈する。断面形状は箱形で、深さは約 30cmである。

〈出土遺物〉 (第 240 図)

1293・1294 はロクロ成形による土師質土器皿で、口径はそれぞれ 8.8cm、11.7cmに復元される。底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。1295 はロクロ成形による土師質土器杯。やや内彎気味に立ち上がる体部を持ち、口径 12.3cmに復元される。底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。

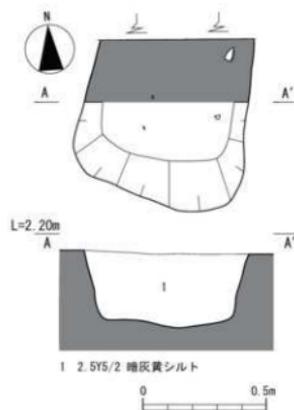
#### 土坑 1-43 [SK1043]

〈検出地点〉

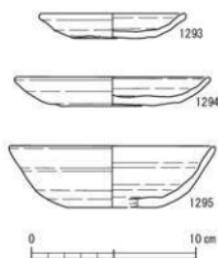
12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (J-2)]

〈形態等〉

長軸 84cm、短軸 48cm以上の隅丸方形を呈する。断面形状は箱形で、深さは約 19cmである。SK1042に切られる。



第 239 図 SK1042 平・断面図



第 240 図 SK1042 出土遺物実測図

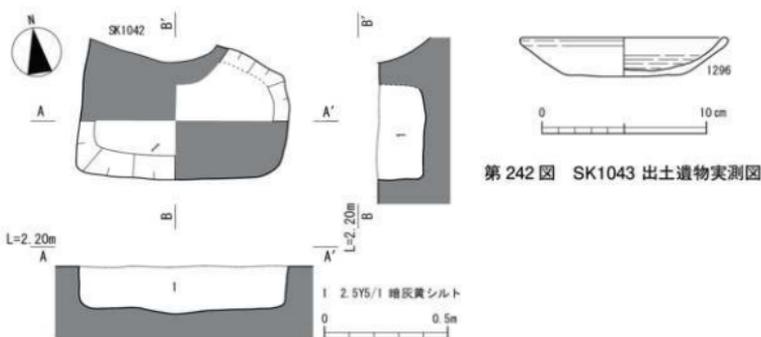
〈出土遺物〉(第242図)

1296はロクロ成形による土師質土器皿で、口径は12.3cmに復元される。底部に回転ヘラ切りの痕跡を留め、逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる体部を持つ。

### 土坑1-44 [SK1044]

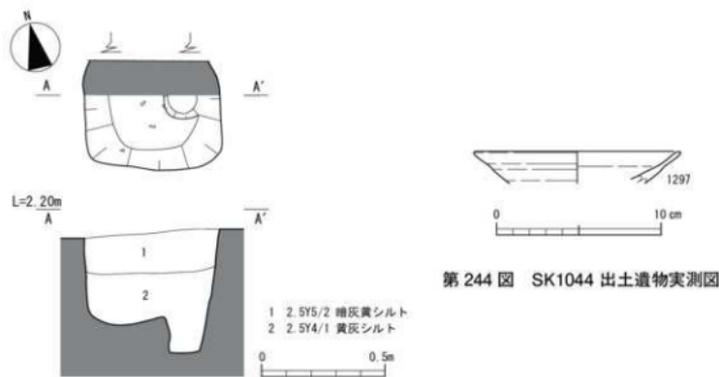
〈検出地点〉

12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (J-2)]



第242図 SK1043 出土遺物実測図

第241図 SK1043 平・断面図



第244図 SK1044 出土遺物実測図

第243図 SK1044 平・断面図

〈形態等〉

一辺が50cm程度の隅丸方形状を呈する。断面形状は箱形で、深さは約35cmである。内部東側中央部に小穴が検出されているが、恐らく柱跡であろう。SK1045の内部にも小穴が検出されているが、これとの距離は約2mである。

〈出土遺物〉(第244図)

1297はロクロ成形による土師質土器皿。口径は12.4cmに復元される。

### 土坑 1-45 [SK1045]

〈検出地点〉

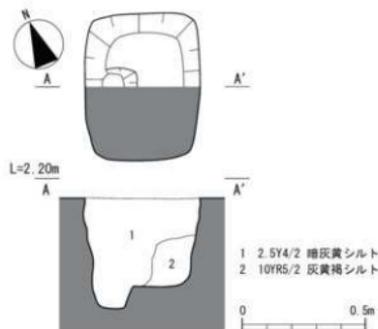
12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (J-2)]

〈形態等〉

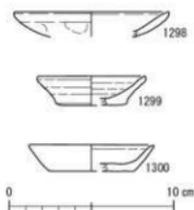
東西46cm、南北60cmの隅丸方形状を呈する。断面形状は箱形で、深さは約45cmである。内部東側中央部に小穴が検出されているが、SK1044と同様に恐らく柱跡であろう。SK1045内の小穴とSK1044内の小穴を結んだラインはN-20°-Eとやや東に振る。

〈出土遺物〉(第246図)

1298は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系である。口径は9.4cmに復元される。1299、1300はロクロ成形による土師質土器皿。1299は口径6.6cmに復元され、底部に回転ヘラ切りの痕跡を留める。1300は口径7.6cmに復元され、底部に静止糸切りの痕跡を留める。



第245図 SK1045 平・断面図



第246図 SK1045 出土遺物実測図

## 土坑 1-46 [SK1046]

〈検出地点〉

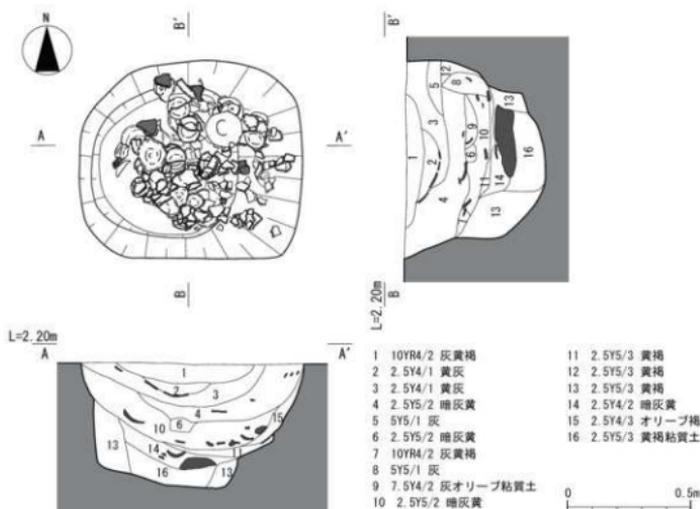
12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (J-1)]

〈形態等〉

東西 90cm、南北 80cmの隅丸方形を呈する。断面形状は歪んだU字形で、深さは約 50cmである。

〈出土遺物〉 (第 248 図)

1301 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口径は 14.8cmに復元される。内底面端に強いヨコナデを施し、「2」の字状のナデ上げ痕を有する。1302～1321 は底部切り離し技法が回転ヘラ切りのロクロ成形による土師質土器皿である。1302～1310 は、平らな底部から逆「八」の字状に直線的に立ち上がる体部を持ち、口径は 6.4cm～9.0cmとなる。1311～1313 は、外底部端をヘラケズリし、体部は湾曲しながら立ち上がる形状で、口径は 8cm前後である。1314～1318 は、ヘラ切りした底部にやや段を持ち、口径は 8～9cmとなる。1319・1320 はやや内彎しながら立ち上がる体部を持ち、口径は 11.5cm前後、1321 は体部が直線的からやや外反気味に立ち上がり、口径は 14.4cmである。1322～1328 は底部切り離し技法が回転ヘラ切りのロクロ成形による深型の土師質土器皿である。口径は 13～15cm、器高は 3.5cm前後を測る。



第 247 図 SK1046 平・断面図

1329は底部切り離し技法が静止糸切りのロクロ成形による土師質土器皿で、外方に開きながら直線的に立ち上がる体部を持ち、口縁部はやや外反する。

### 土坑 1-50 [SK1050]

〈検出地点〉

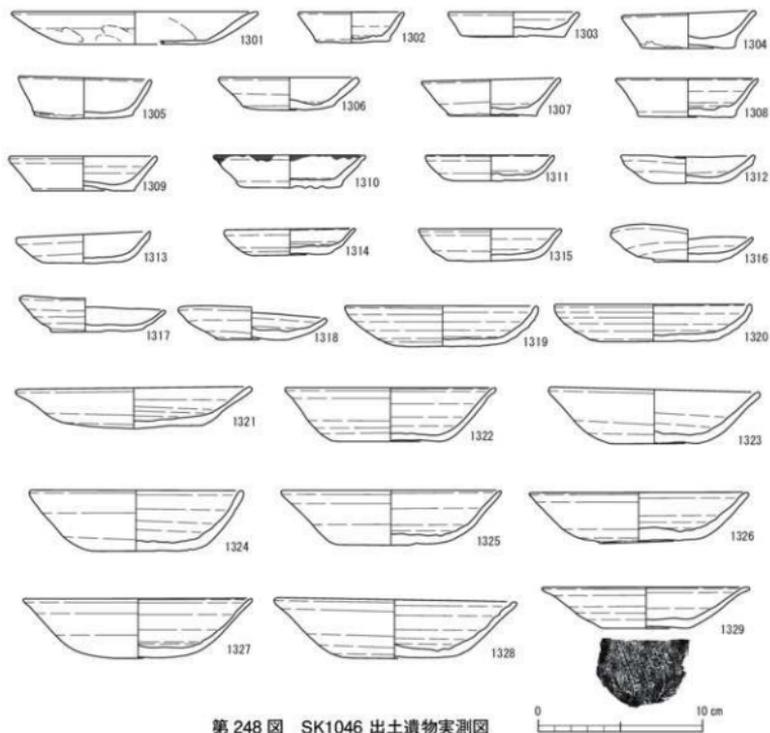
12-I区〔中グリッド(b-9)・小グリッド(K-1)〕

〈形態等〉

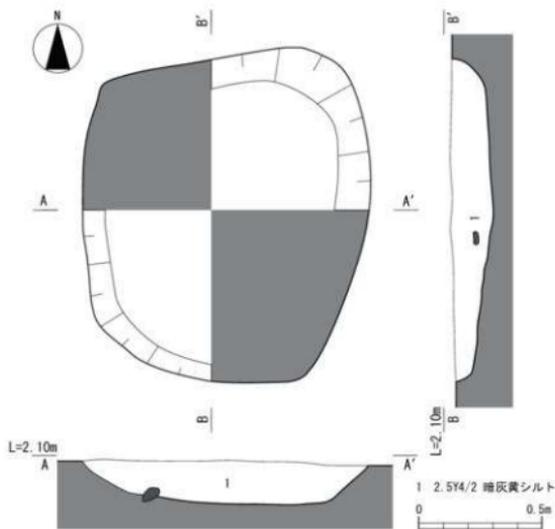
長径132cm、短径116cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約17cmである。

〈出土遺物〉(第250図)

1330は、手づくね成形による土師質土器皿で、橙色系を呈する。口径は8.3cmに復元される。口縁部にはタールが付着しており、灯明皿である。



第248図 SK1046 出土遺物実測図



第 249 図 SK1050 平・断面図



第 250 図 SK1050 出土遺物実測図

#### 土坑 1-51 [SK1051]

〈検出地点〉

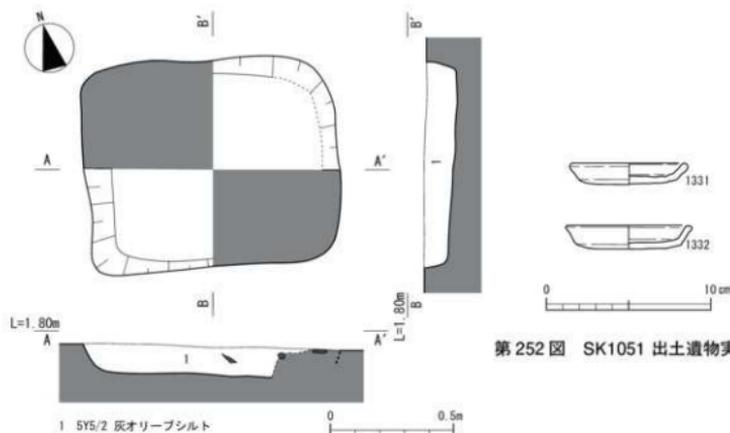
12-I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (N-1)]

〈形態等〉

東西 104cm、南北 84cm の隅丸方形を呈する。断面形状は箱形で、深さは約 12cm である。

〈出土遺物〉 (第 252 図)

1331、1332 は、ロクロ成形による土師質土器皿で、口径はそれぞれ 7.2cm、7.6cm を測る。底部には回転ヘラ切り及び板目の痕跡が認められる。



第252図 SK1051 出土遺物実測図

第251図 SK1051 平・断面図

#### 土坑 1-52 [SK1052]

〈検出地点〉

12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (N-1)]

〈形態等〉

直径90cm前後のほぼ円形を呈する。断面形状は箱形で、深さは約21cmである。

〈出土遺物〉(第254図)

1333は、ロクロ成形による土師質土器皿で、口径7.0cmに復元される。底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。

#### 土坑 1-53 [SK1053]

〈検出地点〉

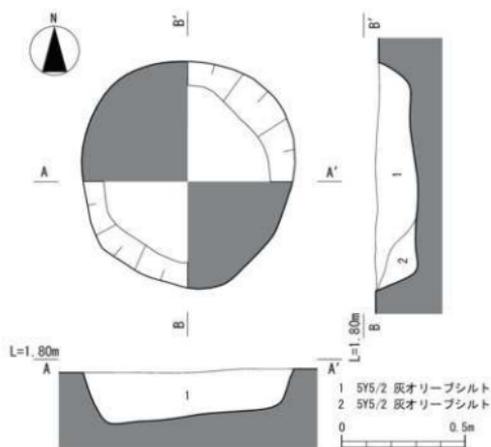
12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (N-1)]

〈形態等〉

一边が80cm前後の隅丸方形を呈する。断面形状は箱形で、深さは約12cmである。SP1122、SP1123、SP1124に切られている。

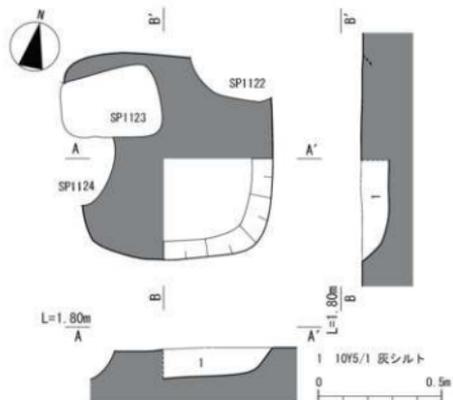
〈出土遺物〉(第256図)

1334は、ロクロ成形による土師質土器皿で、口径6.9cmに復元される。底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。



第 253 図 SK1052 平・断面図

第 254 図 SK1052 出土遺物実測図



第 255 図 SK1053 平・断面図

第 256 図 SK1053 出土遺物実測図



土坑 1-54 [SK1054]

〈検出地点〉

12-1区 [中グリッド (b-8~9)・小グリッド (O-20~1)]

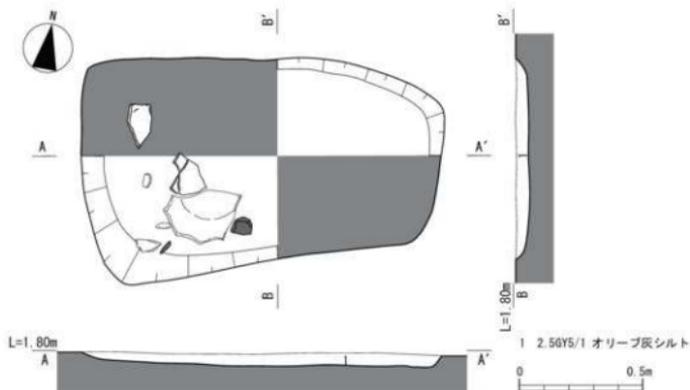
〈形態等〉

長径 146cm、短径 82cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約 5cmである。備前焼堯の底部が出土した。

〈出土遺物〉(第 258 図)

1335 は、ロクロ成形による土師質土器皿で、口径 12.2cm に復元される。やや内彎気味に立ち上がる体部を持ち、端部を尖り気味に収める。

1336 は備前焼堯の底部。



第 257 図 SK1054 平・断面図



第 258 図 SK1054 出土遺物実測図

土坑 1-59 [SK1059]

〈検出地点〉

12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (O-3)]

〈形態等〉

長径 73cm、短径 61cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約 15cmである。毛抜きや釘の他、スラグが出土している。

〈出土遺物〉(第 260 図)

1337 は鉄製の毛抜きで、全長 8.7cm、重さ 8.13g を測る。口幅 9mm のいろは毛抜きである。

土坑 1-61 [SK1061]

〈検出地点〉

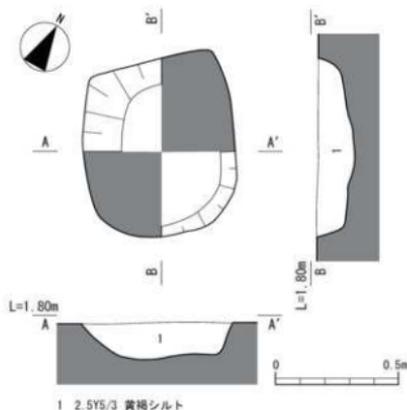
12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (O-3)]

〈形態等〉

長径 60cm、短径 30cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約 10cmである。

〈出土遺物〉(第 262 図)

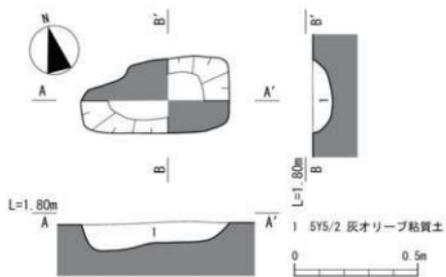
1338 はロクロ成形による土師質土器皿で、口径は 12.5cm に復元される。底部には回転ヘラ切りと板目の痕跡が認められる。



第 259 図 SK1059 平・断面図



第 260 図 SK1059 出土遺物実測図



第 261 図 SK1061 平・断面図



第 262 図 SK1061 出土遺物実測図

### 土坑 1-64 [SK1064]

〈検出地点〉

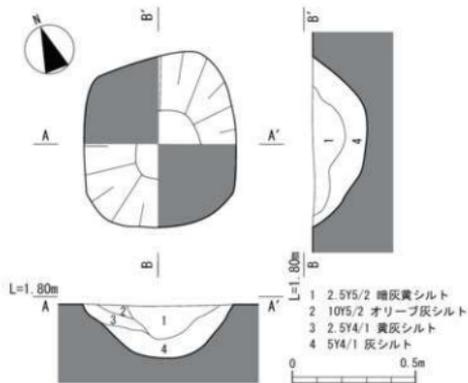
12-1区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (P-20)]

〈形態等〉

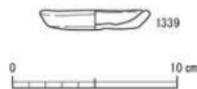
東西 60cm、南北 70cm の隅丸方形を呈する。断面形状は碗形で、深さは約 21cm である。

〈出土遺物〉 (第 264 図)

1339 はロクロ成形による土師質土器皿で、口径は 6.7cm を測る。底部切り離し技法は回転ヘラ切りで、厚い体部が短く立ち上がり、端部を丸く収める。



第 263 図 SK1064 平・断面図



第 264 図 SK1064 出土遺物実測図

土坑 1-71 [SK1071]

〈検出地点〉

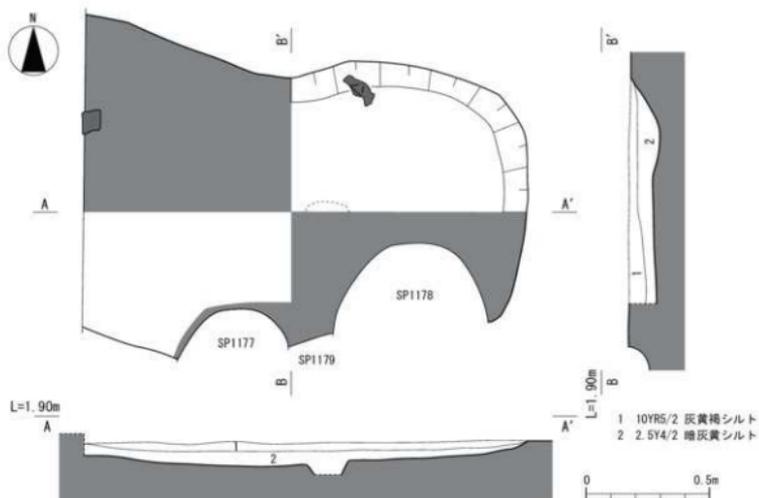
12- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (P-1)]

〈形態等〉

長径約 180cm、短径 110cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは約 13cmである。

〈出土遺物〉(第 266 図)

1340 は備前焼播鉢。やや内傾した口縁帯を持ち、外面はヨコナデで取める。間壁編年のIV期に相当する製品である。



第 265 図 SK1071 平・断面図



第 266 図 SK1071 出土遺物実測図

### 土坑 1-79 [SK1079]

〈検出地点〉

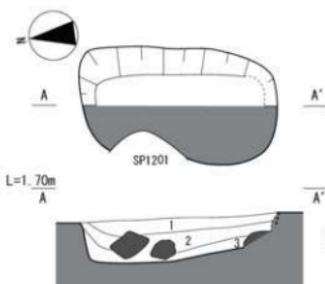
12-I区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (R-18)]

〈形態等〉

長径 80cm、短径 46cmの楕円形を呈する。断面形状は碗形で、深さは約 18cmである。

〈出土遺物〉(第 268 図)

1341 は手づくね成形による土師質土器皿で、口径は 7.2cm に復元される。色調は橙色系である。

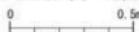


第 267 図 SK1079 平・断面図



第 268 図 SK1079 出土遺物実測図

- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐砂質土
- 2 2.5Y5/3 黄褐砂まじりシルト
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐砂まじりシルト



### 土坑 1-83 [SK1083]

〈検出地点〉

12-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (N-4)]

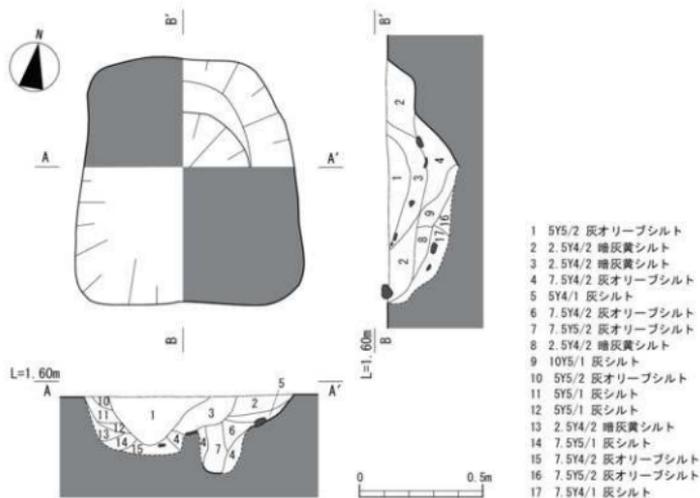
〈形態等〉

東西約 85cm、南北約 100cmの隅丸長方形を呈する。断面形状は碗形で、深さは 31cm以上である。

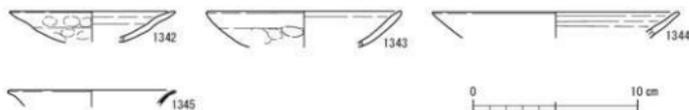
〈出土遺物〉(第 270 図)

1342・1343 は手づくね成形による土師質土器皿で、口径はそれぞれ 10.1cm、11.8cm に復元される。色調は 1342 が橙色系、1343 は灰白色系である。1344 はロクロ成形による土師質土器皿。口径は 15cm に復元される。

1345 は端反りの白磁皿。森田分類の E2 群に相当する。



第 269 図 SK1083 平・断面図



第 270 図 SK1083 出土遺物実測図

### 土坑 1-110 [SK1110]

〈検出地点〉

12-1 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (P-3)]

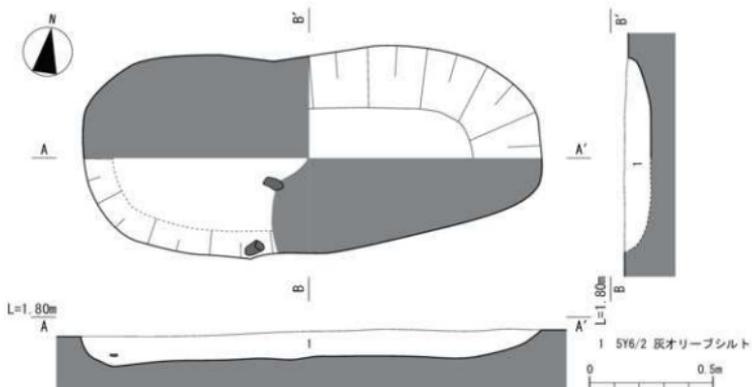
〈形態等〉

長径 186cm、短径 80cmの長円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは 12cmである。

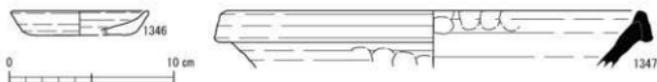
〈出土遺物〉(第 272 図)

1346 はロク口成形による土師質土器皿で、口径は 8.4cmに復元される。底部には回転ヘラ切り、板目の痕跡が認められる。

1347 は東播系須恵器こね鉢。口縁端部が大きく上下に拡張される第Ⅲ期第 2 段階の製品である。下層の遺物が混入したと思われる。



第271図 SK1110 平・断面図



第272図 SK1110 出土遺物実測図

#### 土坑 1-112 [SK1112]

〈検出地点〉

12-I区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (R-19)]

〈形態等〉

東西 78cm、南北 90cmの隅丸方形を呈する。断面形状は逆台形で、深さは 28cmである。

〈出土遺物〉(第274図)

1348、1349は手づくね成形による土師質土器皿で、口径はそれぞれ 8.5cm、13.3cmに復元される。色調は橙色系である。

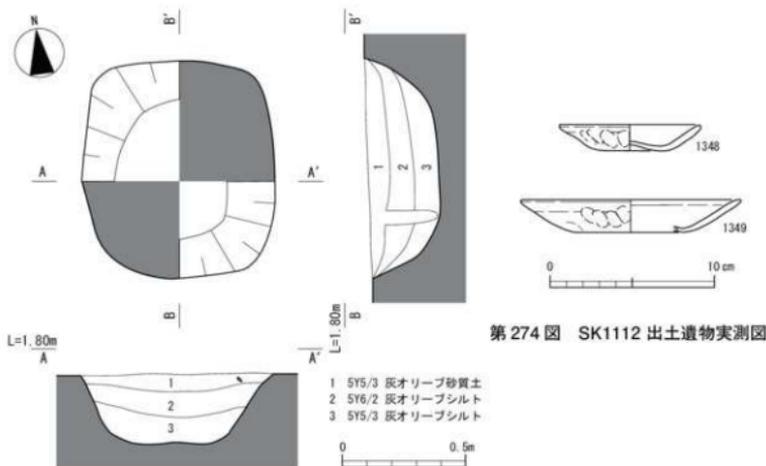
#### 土坑 1-114 [SK1114]

〈検出地点〉

12-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (K-1)]

〈形態等〉

長径 230cm、短径 45cmの長円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは 21cmである。



第274図 SK1112 出土遺物実測図

第273図 SK1112 平・断面図

〈出土遺物〉(第276図)

1350～1357は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系である。1350～1354は口径8cm前後、1355～1357は口径13～14cmを測る。1358は耳皿。1359はロク口成形による土師質土器皿。底部切り離し技法は静止糸切りで、平らな底部から逆ハの字状に直線的に立ち上がる体部を持つ。

1360は土鈴と考えられる。体部を形取った後、上部をつまみ上げ、ややひねりを加えて閉じる。外面はナデによって仕上げられ、鈕には直径2.5mmの穴が穿たれる。

1361は瓦質羽釜。丸い体部にやや内傾する口縁部を持ち、端部は丸く収める。体部上方に丸い孔が穿たれ、孔の下には把手状のものが付けられている。

1362は元祐通寶で、1086年初鑄の北宋銭である。

#### 土坑1-117 [SK1117]

〈検出地点〉

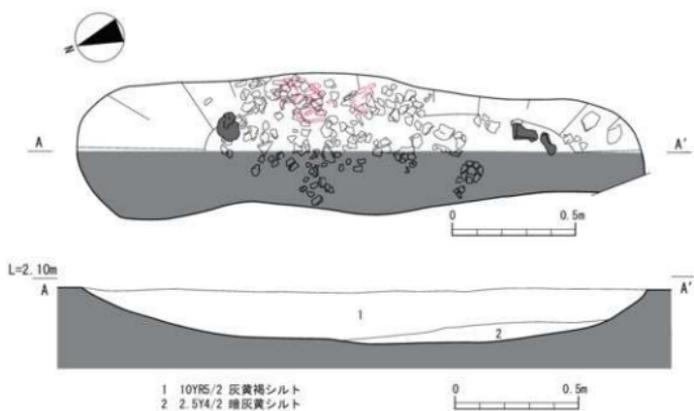
12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (Q-3)]

〈形態等〉

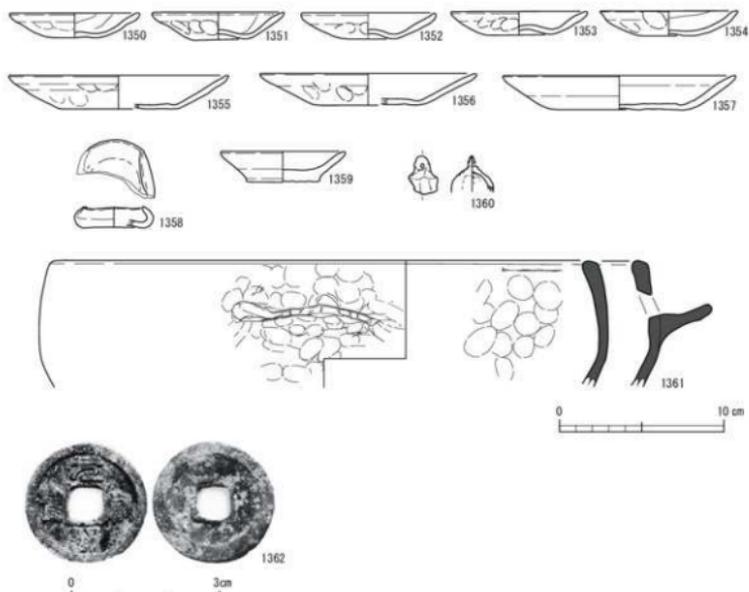
長径90cm、短径74cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは20cmである。

〈出土遺物〉(第278図)

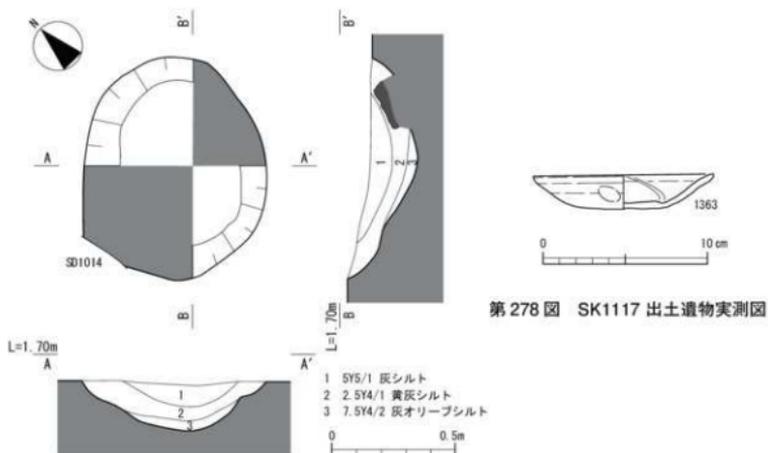
1363は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系である。口径は11.0cmで、内底面端



第 275 図 SK1114 平・断面図



第 276 図 SK1114 出土物実測図



第 277 図 SK1117 平・断面図

を強くヨコナデした後、「2」の字状にナデ上げる。

#### 土坑 1-126 [SK1126]

〈検出地点〉

12- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-1)]

〈形態等〉

長径 130cm、短径 96cmの楕円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは 28cmである。

〈出土遺物〉(第 280 図)

1364～1367はロクロ成形による土師質土器皿で、底部切り離し技法が1364は静止糸切り、それ以外は回転ヘラ切りである。1365～1367は厚い体部を持つ粗製品で、胎土に結晶片岩が含まれる。

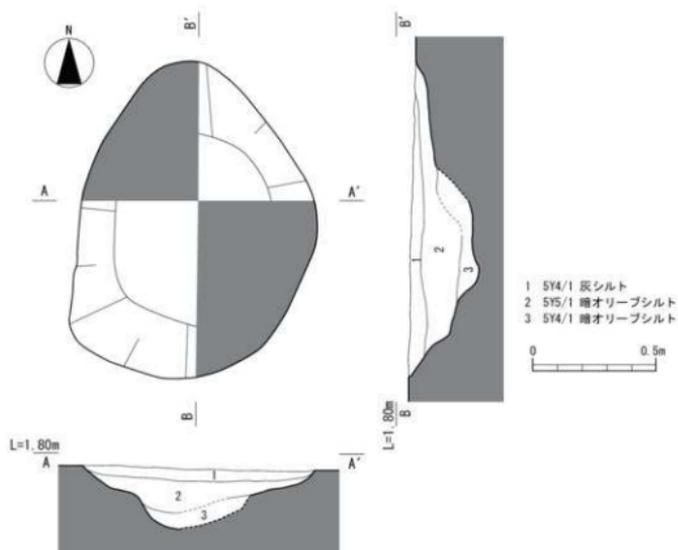
#### 土坑 1-128 [SK1128]

〈検出地点〉

12- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-1)]

〈形態等〉

長径 116cm、短径 84cmの楕円形を呈する。断面形状は碗形で、深さは 28cmである。



第279図 SK1126 平・断面図



第280図 SK1126 出土遺物実測図

〈出土遺物〉(第282図)

1368は切羽。銅製で、長径4.0cm、短径2.7cm、厚さ0.05cmを測る

### 土坑1-149 [SK1149]

〈検出地点〉

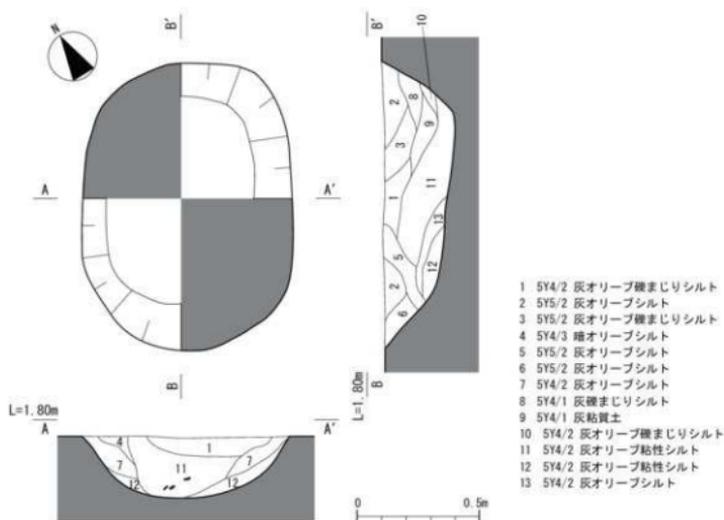
12-I区〔中グリッド(b-9)・小グリッド(J-2~3、K-2~3)〕

〈形態等〉

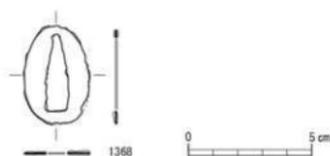
長径550cm、短径370cmの楕円形を呈する。断面形状は碗形で、深さは100cm程度となる。埋土最下層には植物遺体を含む粘質土が堆積し、遺構外縁部では鉄分の沈着が見られた。

遺構の南西部分では土師質土器皿の一括廃棄が見られた。

〈出土遺物〉(第284~285図)

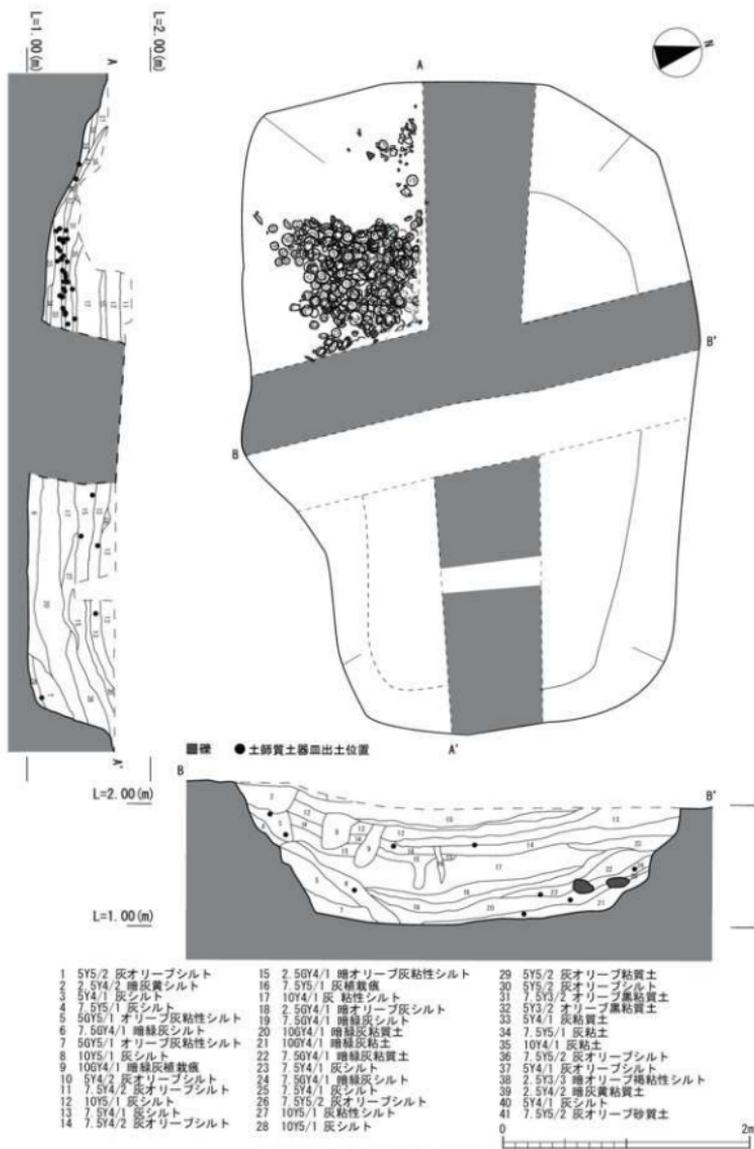


第 281 図 SK1128 平・断面図

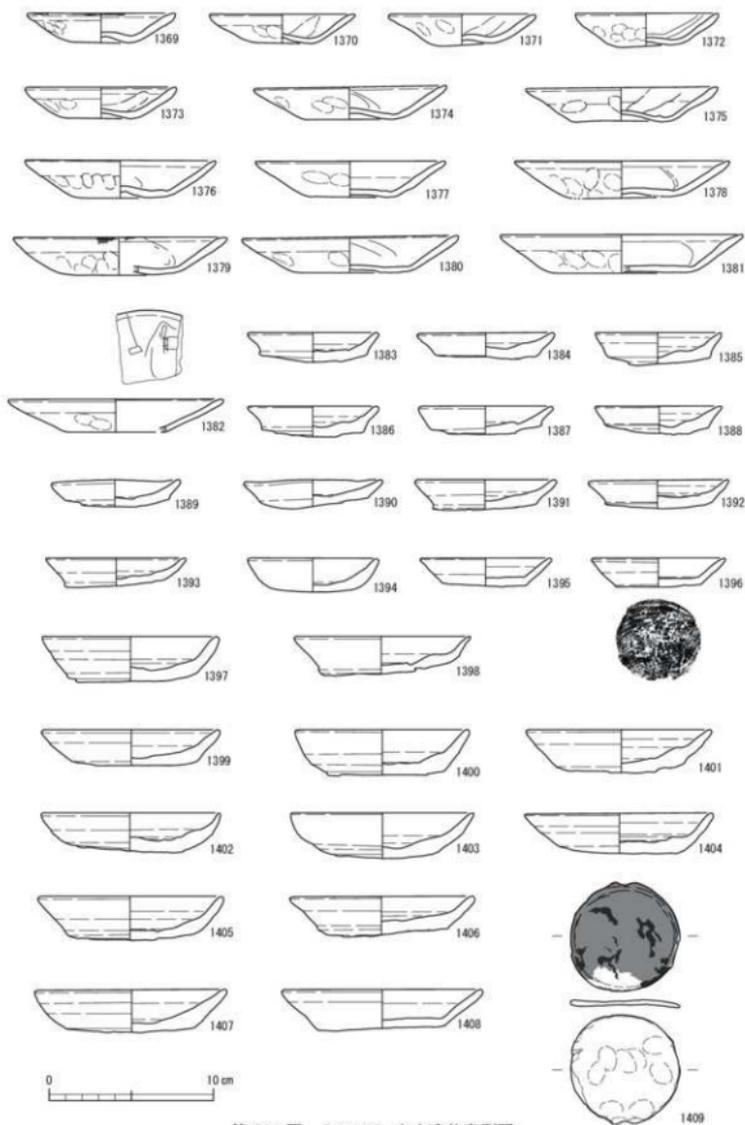


第 282 図 SK1128 出土遺物実測図

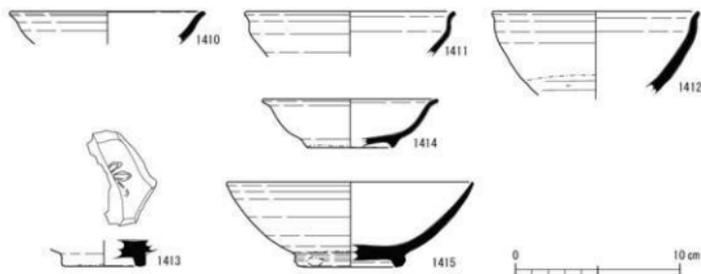
1369～1382は手づくね成形による土師質土器皿。1369～1373は口径が9cm前後、1374～1377は口径が11cm程度、1378～1381は口径が13cm程度からそれ以上となる大型の製品で、色調は灰白色系である。1382は、口径が13.0cmに復元され、色調は橙色系である。内面に線刻が見られる。1383～1408はロクロ成形による土師質土器皿。1383～1394は口径が8cm前後で、厚い体部を持ち、底部には回転ヘラ切りと板目の痕跡が認められる。1394は体部を丸く仕上げるモノで、底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。1395・1396は底部切り離し技法が静止糸切りである。1397～1407は口径が11cm前後で、厚い体部を持ち、底部には回転ヘラ切りと板目の痕跡が認められる。1408は底部に静止糸切りの痕跡を留める。1409は手づくね成形による土師質土器皿の底部を円盤状に加工した二次製品である。内面にタールの付着が見られる。



第283図 SK1149平・断面図



第 284 图 SK1149 出土遺物実測図



第 285 図 SK1149 出土遺物実測図

1410 は瀬戸美濃焼灰軸皿で、端反りの形状を有する。1411、1412 は瀬戸美濃焼の天目茶碗である。

1413 は青磁皿で、内底面に花文を彫刻する。1414 は端反りの白磁皿。1415 は白磁碗で、体部外面に回転ケズリの痕跡が顕著に残る。

#### 土坑 1-150 [SK1150]

〈検出地点〉

12-1区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (I~J-20)]

〈形態等〉

長径 170cm、短径 78cmの楕円形を呈する。断面形状は碗形で、深さは 50cm程度となる。埋土は焼土層、炭化物層、灰層、側壁には焼土面が見られる。底からは被熱痕のある礫が出土し、その上面には炭化物層が厚く堆積していた。

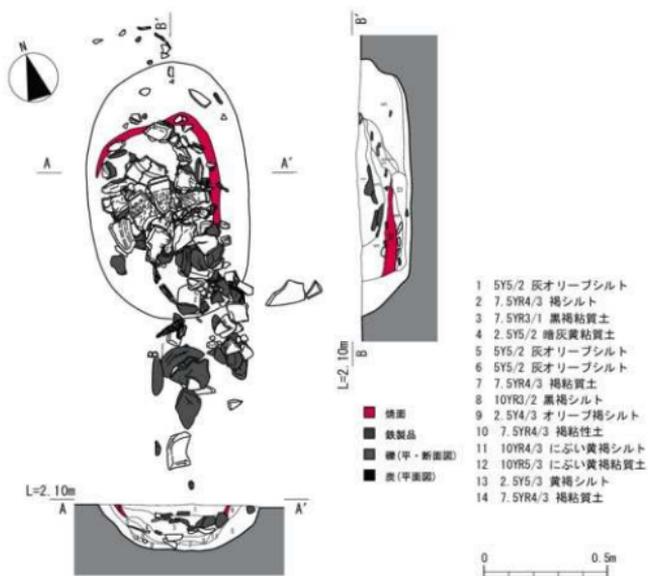
遺構周辺の盛土整地層は汚れが顕著で、炭化物等を含み南へ傾斜した堆積が見られた。

〈出土遺物〉(第 287~288 図)

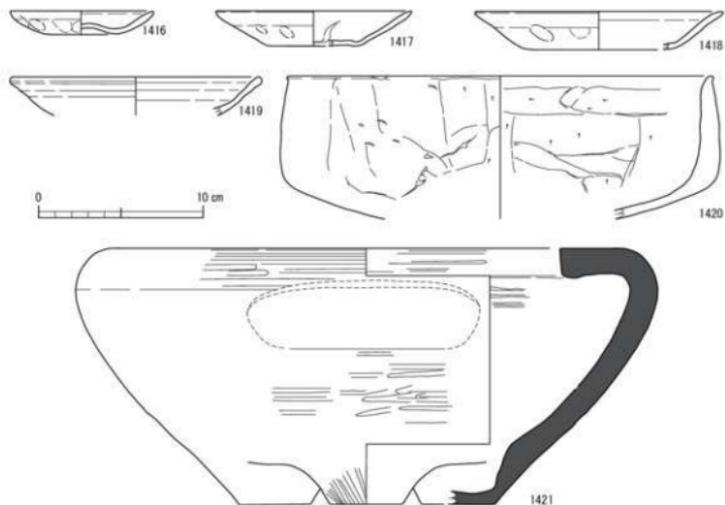
1416~1418 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系である。口径はそれぞれ 8.7cm、11.9cm、15.1cmに復元される。1419 はロクロ成形による土師質土器皿。口径は 15.0cmに復元される。

1420 は口径が 25.8cmに復元される土師質の製品である。体部はほぼ直立し、端部はやや外につまみ出しながらヨコナデによって仕上げる。体部内外面には板ナデによる調整痕が認められる。鍋状の形状を有するが、直接火にかけられた痕跡はなく、器壁も 1.2cm程度と他の鍋等と比較すると厚いため、火鉢のような用途で使用されたものと考えられる。

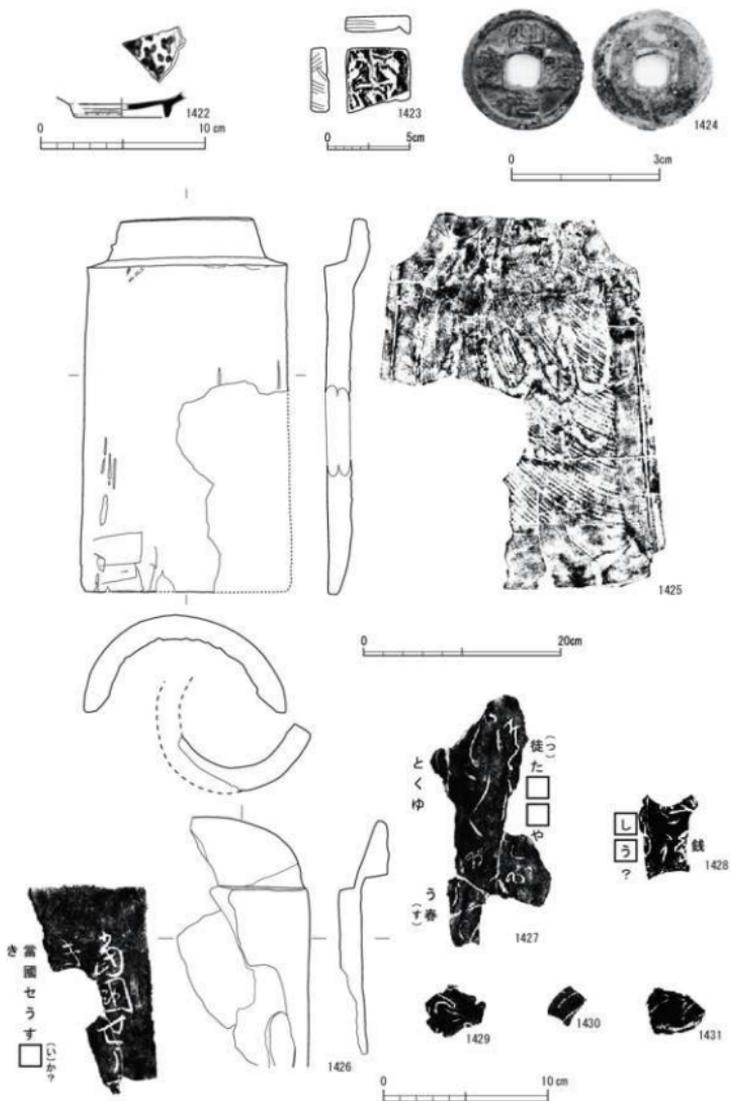
1421 は瓦質風炉である。3つの脚部を持ち、体部はやや内彎気味に立ち上がる。体部中央よりやや上方が最大径となり 35.4cmに復元され、この部分に前面と背面に大小の風穴が穿たれている。



第 286 図 SK1150 平・断面図



第 287 図 SK1150 出土遺物実測図



第 288 図 SK1150 出土遺物実測図

調整は、内面が板ナデ、外面はミガキで仕上げる。

1422 は青花碗で、いわゆる蓮子碗である。見込みに丸を三つ結合した文様が描かれる。

1423 は用途不明の土師質の製品で、一面に文様のようなものが刻まれ、他の面はミガキで仕上げる。

1424 は明道元寶で、1032 年初鋳の北宋銭である。

1425 は丸瓦で、凹面にはコピキ A 痕と共に吊紐痕が認められる。幅 20.5cm、長さ 38.5cm を測る大型の製品である。1426 ~ 1431 は刻字瓦である。1426 には「當國せうす□」「き」、1427 には「徒た□□や」「とくゆ」「う春（す）」、1428 には「銭」「しう（？）」等の文字が刻まれる。

### 土坑 1-153 [SK1153]

〈検出地点〉

12- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (O-3 ~ 4)]

〈形態等〉

ほぼ 320cm 四方の方形を呈する。断面形状は碗形で、深さは 90cm 以上となる。埋土は粘性の強い粘質土で、下層には植物遺体の堆積も見られた。

〈出土遺物〉(第 290 図)

1432 は灰白色系、1433 ~ 1435 は橙色系の手づくね成形による土師質土器皿である。1432・1433 は口径が 9cm 前後、1434・1435 は口径が 13cm 前後に復元される。

1436 は備前焼甕の口縁部である。端部を玉縁状に収める。

1437 は白磁皿。森田分類の D 群に相当する。

### 土坑 1-161 [SK1161]

〈検出地点〉

13- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (C-2)]

〈形態等〉

直径 110cm 程度の円形を呈する。断面形状は碗形で、深さは 52cm である。

〈出土遺物〉(第 292 図)

1438 は、手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口径は 11.2cm に復元される。

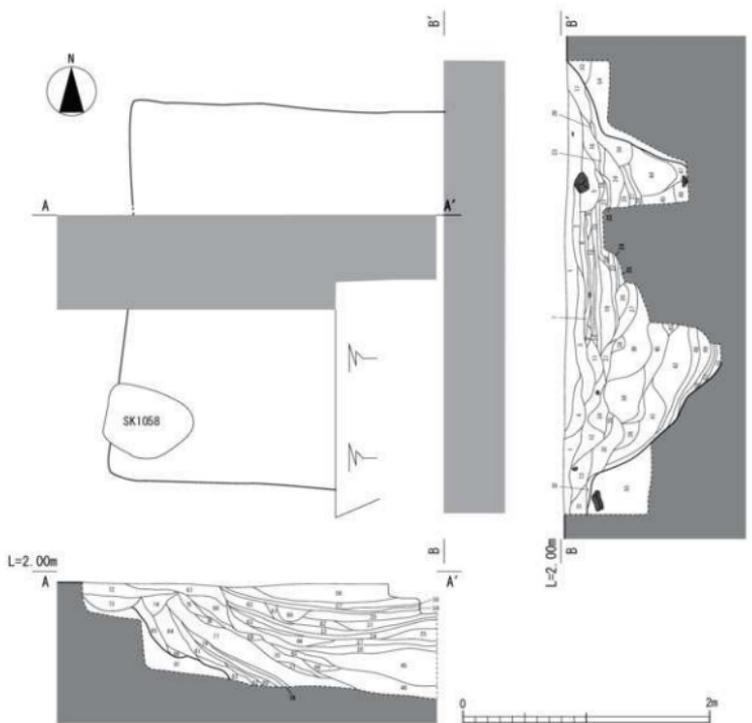
### 土坑 1-162 [SK1162]

〈検出地点〉

13- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (B-3)]

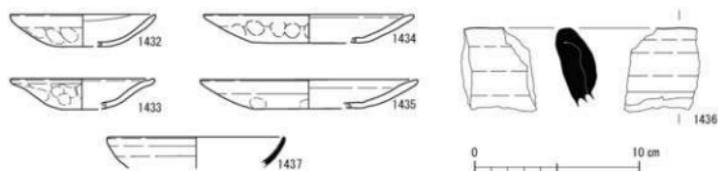
〈形態等〉

平面形状は明らかではないが、深さが 68cm 以上となる土坑と思われる。

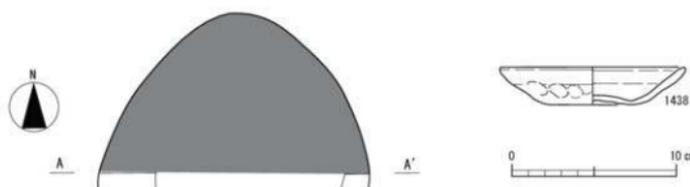


1 10Y5/2 オリブ灰シルト	23 2.50Y4/1 暗オリブ灰シルト	45 2.5Y4/2 暗灰黄シルト	67 10Y5/2 オリブ灰シルト
2 7.5Y5/2 灰オリブシルト	24 5Y5/2 灰オリブシルト	46 2.5Y5/2 暗灰黄シルト	68 5Y4/2 灰オリブシルト
3 7.5Y4/3 暗オリブシルト	25 2.5Y4/2 暗灰黄シルト	47 5Y4/1 灰シルト	69 2.5Y4/2 暗灰黄シルト
4 10Y5/2 オリブ灰シルト	26 7.5Y5/1 灰シルト	48 10Y8/4/1 褐灰粘質土	70 2.5Y4/2 暗灰黄シルト
5 10Y5/2 オリブ灰シルト	27 2.5Y5/2 暗灰黄シルト	49 10Y4/1 灰シルト	71 2.5Y4/2 暗灰黄シルト
6 5Y4/4 暗オリブシルト	28 2.5Y4/2 暗灰黄シルト	50 2.50Y4/1 暗オリブ灰シルト	72 7.5Y4/1 灰シルト
7 7.5Y5/2 灰オリブシルト	29 10Y4/2 灰オリブシルト	51 7.5Y4/2 灰オリブシルト	73 10Y4/2 オリブ灰シルト
8 10Y5/2 オリブ灰シルト	30 7.5Y5/2 灰オリブシルト	52 2.5Y5/2 暗灰黄シルト	74 7.5Y4/2 灰オリブシルト
9 7.5Y4/2 灰オリブシルト	31 10Y5/2 オリブ灰シルト	53 5Y5/2 灰オリブシルト	75 10Y5/2 オリブ灰シルト
10 7.5Y5/2 灰オリブシルト	32 5Y4/2 灰オリブシルト	54 5Y4/2 灰オリブシルト	76 10Y5/2 オリブ灰シルト
11 7.5Y4/3 暗オリブシルト	33 5Y5/2 灰オリブシルト	55 2.5Y5/2 暗灰黄シルト	77 7.5Y5/1 灰シルト
12 10G5/1 緑灰シルト	34 2.5Y5/2 暗灰黄シルト	56 7.5Y5/2 灰オリブシルト	78 10Y4/1 灰シルト
13 7.5Y5/2 灰オリブシルト	35 2.5Y5/2 暗灰黄シルト	57 10Y4/2 オリブ灰シルト	79 5Y4/1 灰粘質土
14 10Y5/1 灰シルト	36 2.5Y4/2 暗灰黄シルト	58 7.5Y5/1 灰シルト	80 5Y4/1 灰シルト
15 5Y5/2 灰オリブシルト	37 2.5Y5/2 暗灰黄シルト	59 5Y5/2 灰オリブシルト	81 7.5Y5/2 灰オリブシルト
16 10G6/1 緑灰シルト	38 2.5Y4/1 黄灰シルト	60 7.5Y5/2 灰オリブシルト	82 5Y5/1 灰シルト
17 10Y5/2 オリブ灰シルト	39 2.5Y4/2 暗灰黄シルト	61 5Y4/4 暗オリブシルト	83 2.5Y4/1 黄灰シルト
18 10Y5/2 オリブ灰シルト	40 2.5Y5/2 暗灰黄シルト	62 7.5Y4/2 灰オリブシルト	84 2.5Y4/2 暗灰黄シルト
19 7.5Y5/2 灰オリブシルト	41 5Y5/1 灰シルト	63 7.5Y5/2 灰オリブシルト	85 2.5Y5/2 暗灰黄シルト
20 7.5Y4/3 暗オリブシルト	42 2.5Y5/2 暗灰黄シルト	64 5Y5/2 灰オリブシルト	86 5Y4/1 灰シルト
21 5Y5/2 灰オリブシルト	43 2.5Y4/1 黄灰シルト	65 2.5Y4/2 暗灰黄シルト	87 2.5Y4/2 暗灰黄シルト
22 2.5Y4/2 暗灰黄シルト	44 2.5Y4/2 暗灰黄シルト	66 2.5Y5/2 暗灰黄シルト	

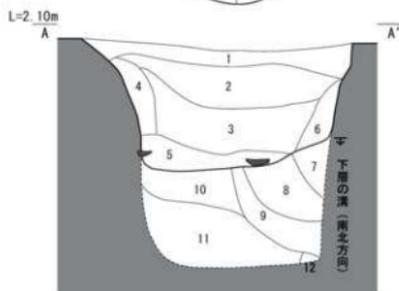
第 289 図 SK1153 平・断面図



第290図 SK1153 出土遺物実測図



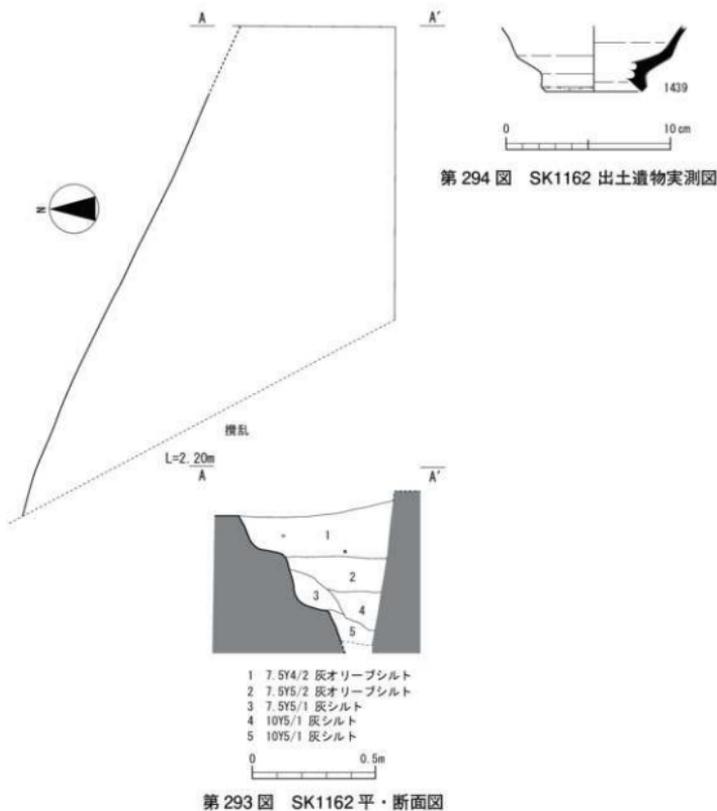
第292図 SK1161 出土遺物実測図



- |               |              |
|---------------|--------------|
| 1 5Y5/2 灰オリーブ | 7 5Y54/1 灰   |
| 2 5Y4/2 灰オリーブ | 8 10Y4/1 灰   |
| 3 5Y4/2 灰オリーブ | 9 5Y4/1 灰    |
| 4 2.5Y5/2 暗灰黄 | 10 5Y4/1 灰   |
| 5 5Y4/1 灰     | 11 7.5Y4/1 灰 |
| 6 2.5Y4/2 暗灰黄 | 12 10Y4/1 灰  |

0 0.5m

第291図 SK1161 平・断面図



〈出土遺物〉(第 294 図)

1439 は腰折れの白磁坯で、森田分類の E1 群に相当する。

#### 土坑 1-164 [SK1164]

〈検出地点〉

14-Ⅱ区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (I-18)]

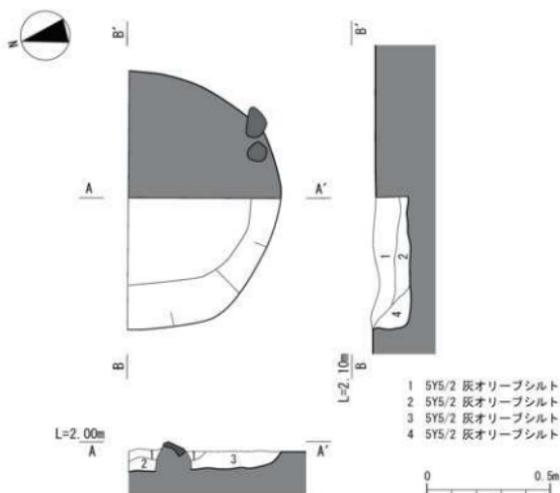
〈形態等〉

直径 120cm 程度の円形を呈する。断面形状は皿形で、深さは 14cm である。

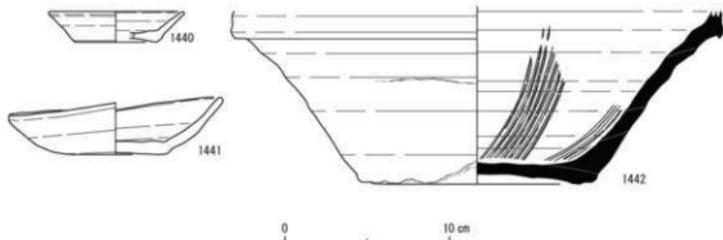
〈出土遺物〉(第296図)

1440はロクロ成形による土師質土器皿である。口径は8.0cmに復元される。底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。1441はロクロ成形による土師質土器皿で、口径は13.0cmを測る。底部には回転ヘラ切り、板目の痕跡が認められる。

1442は備前焼播鉢。内面に7条/2.7cmの播目がつけられる。少し残存する口縁帯には凹線が認められ、間壁編年のV期の製品と思われる。



第295図 SK1164 平・断面図



第296図 SK1164 出土遺物実測図

## 土坑 1-197 [SK1197]

〈検出地点〉

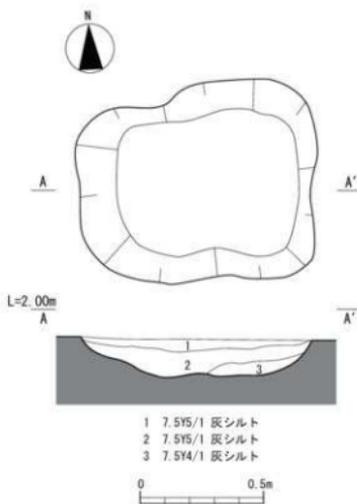
14-Ⅳ区 [中グリッド (b-10)・小グリッド (I-3)]

〈形態等〉

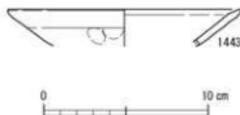
東西 94cm、南北 80cmの隅丸の方形を呈する。断面形状は皿形で、深さは 15cmである。

〈出土遺物〉(第 298 図)

1443 は、手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口径は 14.2cm に復元される。



第 297 図 SK1197 平・断面図



第 298 図 SK1197 出土遺物実測図

## ⑧池状遺構 (SL)

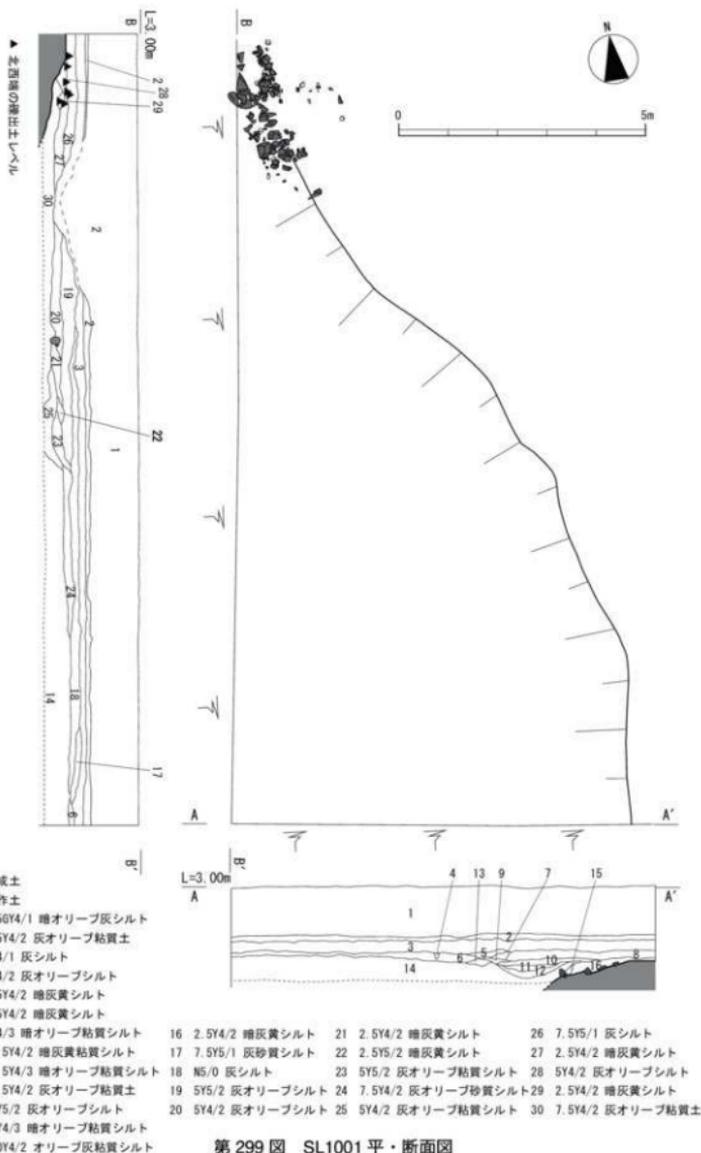
### 池状遺構 1-1 [SL1001]

〈検出地点〉

9-Ⅱ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (R-14~17, S-14~18, T-14~16)]

〈形態等〉

東西 9 m、南北 16.2 m の範囲で検出された。平面形状は、緩やかに弧を描き、検出範囲の北端部で池岸に集石が見られる。法面は約 15° の傾斜で、緩やかに落ち込む。



〈出土遺物〉(第300図)

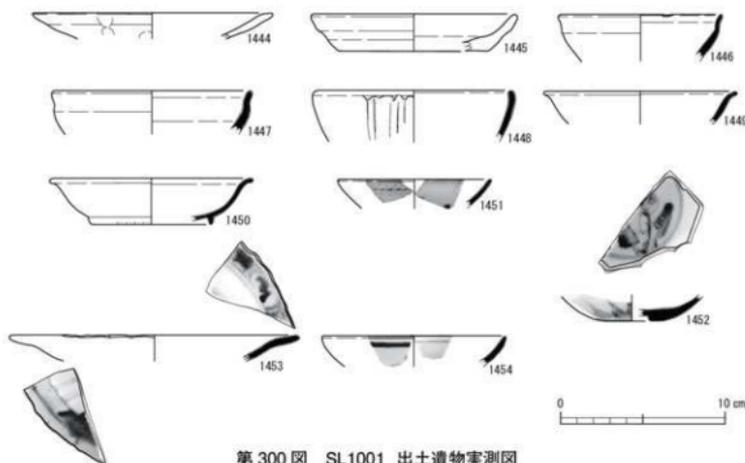
1444 は、手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口径は 14.6cm に復元される。1445 は、ロクロ成形による土師質土器皿。底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。厚い体部を持つ粗製品である。

1446・1447 は瀬戸美濃焼天目茶碗。

1448 は青磁碗で、体部外面には線描蓮弁文が施される。剣頭は蓮弁を意識せずに描かれている。上田分類の B IV 類に相当する。

1449・1450 は端反りの白磁皿。森田分類の E2 群に相当する。

1451～1454 は青花皿である。1451・1452 は小野分類の皿 C 群に相当する葎筋底の皿。1451 の口縁外面には波濤文、1452 の見込みには捻花文、体部外面には芭蕉葉文が描かれている。1453 は口縁が大きく外に折れる罅皿で、皿 F 群である。1454 は粗製の皿で漳州窯系の製品である。



第300図 SL1001 出土遺物実測図

### ⑨小穴 (SP)

小穴は、1-Ⅰ区、12-Ⅰ区の東側、13-Ⅰ区の北側、14-Ⅲ区北側、14-Ⅳ区中央部で集中して見つかっている。こうした箇所には掘立の構造物が想定できるが、検出した遺構群からは規則性はほとんど見いだすことはできず、今後の課題となっている。

#### 小穴 1-1 [SP1001]

〈検出地点〉

1-Ⅰ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

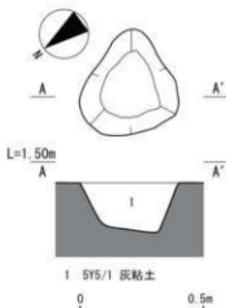
〈形態等〉

平面形は直径約 38cm の円形で、深さ 20cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。

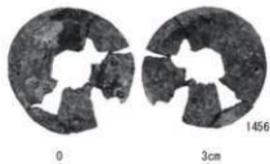
〈出土遺物〉(第 302 図)

1455 はロクロ成形による土師質土器皿である。底部切り離し技法は回転ヘラ切りで、厚い体部を持つ粗製品である。

1456 は皇宋通寶で、1039 年初鑄の北宋銭である。



第 301 図 SP1001 平・断面図



第 302 図 SP1001 出土遺物実測図

#### 小穴 1-2 [SP1002]

〈検出地点〉

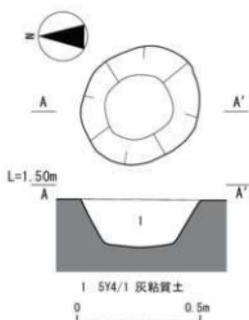
1-Ⅰ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

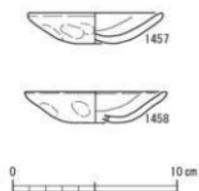
平面形は直径約 50cm の円形で、深さ 20cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉(第 304 図)

1457・1458 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口径はそれぞれ、



第 303 図 SP1002 平・断面図



第 304 図 SP1002 出土遺物実測図

8.2cm、8.5cmに復元される。底部はやや突き上げ底になっており、内底面をヨコナデした後に「の」の字状にナデ上げる。

#### 小穴 1-4 [SP1004]

〈検出地点〉

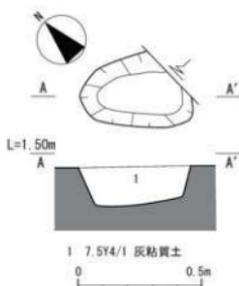
1-I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

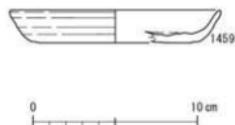
平面形は長径 40cm、短径 28cmの円形で、深さ 17cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉(第 306 図)

1459 はロクロ成形による土師質土器皿である。底部には回転ヘラ切りの痕跡が認められ、体部にはロクロ目が顕著に残る。



第 305 図 SP1004 平・断面図



第 306 図 SP1004 出土遺物実測図

### 小穴 1-9 [SP1009]

〈検出地点〉

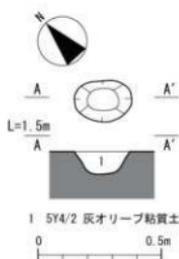
1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

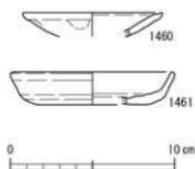
平面形は長径 20cm、短径 14cmの楕円形で、深さ 9cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉(第 308 図)

1460 は手づね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口径は 8.5cmに復元される。1461 は口クロ成形による土師質土器皿である。底部を回転ヘラ切りした後、底部端を板ナデし、やや丸みを持たせて仕上げる。



第 307 図 SP1009 平・断面図

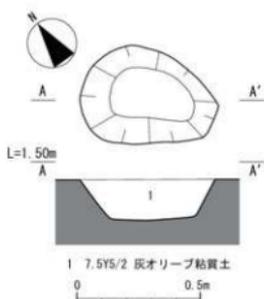


第 308 図 SP1009 出土遺物実測図

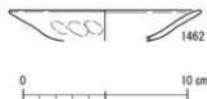
### 小穴 1-10 [SP1010]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]



第 309 図 SP1010 平・断面図



第 310 図 SP1010 出土遺物実測図

〈形態等〉

平面形は長径 56cm、短径 40cmの楕円形で、深さ 17cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉(第 310 図)

1462 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口径は 11.7cmを測る。

#### 小穴 1-11 [SP1011]

〈検出地点〉

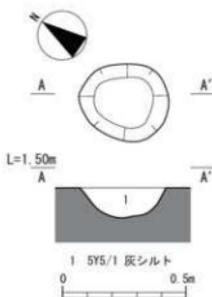
1-1 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径 35cm前後の円形で、深さ 12cmを測る。断面形状は碗形を呈する。

〈出土遺物〉(第 312 図)

1463 はロクロ成形による土師質土器皿で、口径は 9.0cmを測る。底部には回転ヘラ切り及び板目の痕跡が残る。



第 311 図 SP1011 平・断面図



第 312 図 SP1011 出土遺物実測図

#### 小穴 1-12 [SP1012]

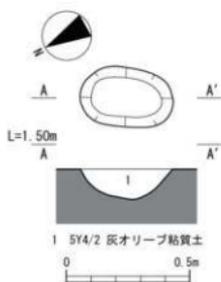
〈検出地点〉

1-1 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は直径 35cm前後の円形で、深さ 12cmを測る。断面形状は碗形を呈する。

SP1001、SP1002、SP1010、SP1011、SP1012 は一直線上に並ぶ小穴であり、SP1001 と SP1002、また SP1002 と SP1010 は 2 m 弱の間隔で等間隔に並んでいる。さらに、SP1010 と SP1012 の間は 4 m であり、これらの小穴は列となり、何らかの構造物の可能性もある。



第 313 図 SP1012 平・断面図



第 314 図 SP1012 出土遺物実測図

〈出土遺物〉(第 314 図)

1464 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口径は 14.6cm に復元される。

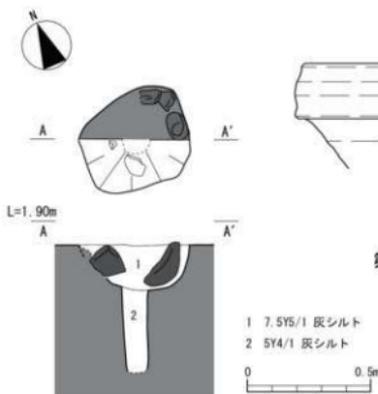
小穴 1-88 [SP1088]

〈検出地点〉

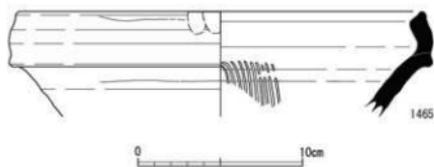
12-1 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-1)]

〈形態等〉

平面形は長径 45cm、短径 35cm の楕円形を呈する。中心部が筒状に深くなり、52cm 以上となる。



第 315 図 SP1088 平・断面図



第 316 図 SP1088 出土遺物実測図

〈出土遺物〉(第316図)

1465は備前焼鉢鉢で、内面に10条/3.2cmの挿目がつく。口径は24.5cmに復元され、口縁帯外面には弱い凹線が認められる。間壁編年のV期に相当する。

### 小穴1-91 [SP1091]

〈検出地点〉

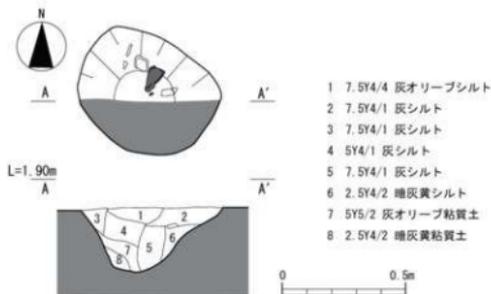
12-1区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (R-20)]

〈形態等〉

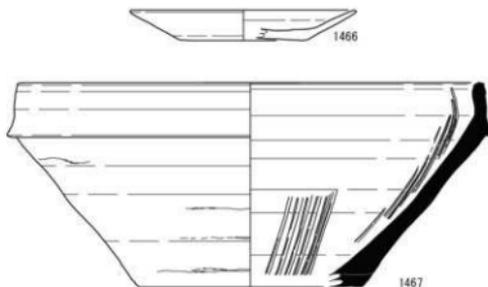
平面形は直径45cm程度の円形で、深さ26cmを測る。断面形状は舟底形を呈する。

〈出土遺物〉(第318図)

1466はロクロ成形による土師質土器皿で、底部に静止糸切りの痕跡を留める。直線的に大きく開いた体部の形状で、口径は13.8cmに復元される。



第317図 SP1091 平・断面図



第318図 SP1091 出土遺物実測図

1467は備前焼播鉢で、内面に6条/2.9cmの播目がつく。口縁帯は直立しており、端部を丸く取める。間壁編年のIV期に相当する。

### 小穴1-93 [SP1093]

〈検出地点〉

12-I区〔中グリッド(b-8)・小グリッド(Q-20)〕

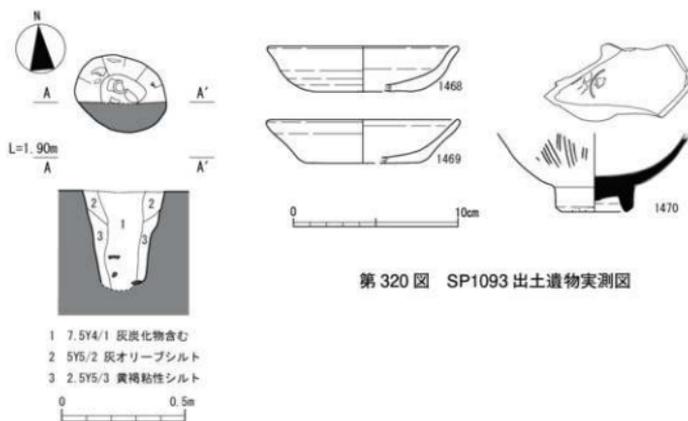
〈形態等〉

平面形は直径30cm前後の円形で、深さ40cm以上となる。中心部の1層は柱跡か。

〈出土遺物〉(第320図)

1468、1469はロクロ成形による土師質土器皿で、底部にはそれぞれ回転ヘラ切り、静止糸切りの痕跡が認められる。

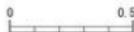
1470は青磁碗で、上田分類のB IV類に相当する。体部外面には櫛描による文様、内部見込みにはスタンプが認められる。



第320図 SP1093出土遺物実測図

第319図 SP1093平・断面図

- 1 7.5Y4/1 灰炭化物含む
- 2 5Y5/2 灰オリーブシルト
- 3 2.5Y5/3 黄褐色粘性シルト



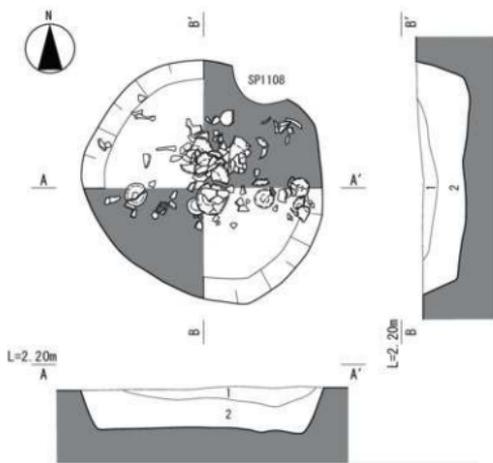
### 小穴1-105 [SP1105]

〈検出地点〉

12-I区〔中グリッド(b-9)・小グリッド(J-1)〕

〈形態等〉

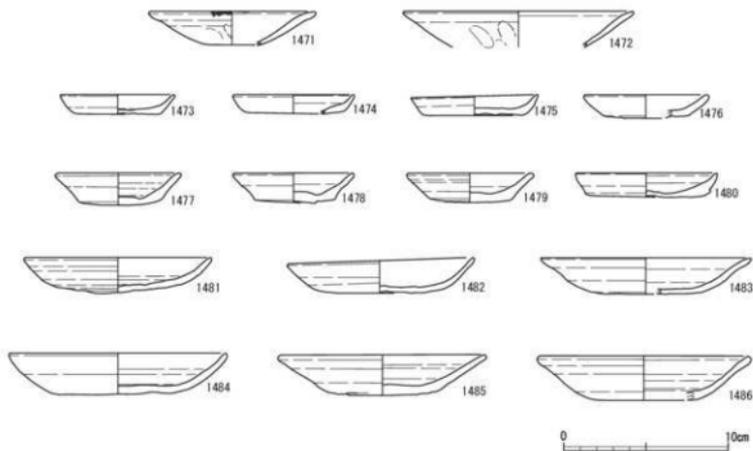
平面形は直径98cmの円形で、深さは20cmを測る。断面形状は箱形を呈する。



- 1 5Y5/1 灰シルト  
2 2.5Y5/2 暗灰黄シルト



第 321 図 SP1105 平・断面図



第 322 図 SP1105 出土遺物実測図

〈出土遺物〉(第322図)

1471、1472は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系である。口径はそれぞれ10.0cm、13.8cmに復元される。

1473～1486はロクロ成形による土師質土器皿で、底部に回転ヘラ切りの痕跡が認められる。1473～1475は体部が小さく立ち上がる浅形のタイプである。1476は外方に直線的に開く体部が小さく立ち上がり、外底部端をナデで丸く仕上げている。1477～1479は外方に直線的に立ち上がる体部を持ち、外底部端はシャープに仕上げる。1480は粗製の皿。1481～1484は口径が11.3cm～13.1cmとなるもので、器壁は薄く、外底部端を丸く仕上げている。1485、1486は口径が12.5cm前後、器高が2.5cm程度となるやや深型のものである。

### 小穴1-106 [SP1106]

〈検出地点〉

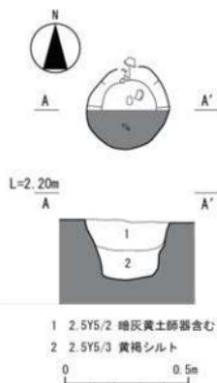
12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (I-2)]

〈形態等〉

平面形は直径約30cmの円形で、深さ26cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

〈出土遺物〉(第324図)

1487は銅銭であるが、残存状況が悪く文字は判読不可能である。背面が平坦となっており、模範銭の可能性が高い。



第323図 SP1106平・断面図



第324図 SP1106出土遺物

### 小穴 1-110 [SP1110]

〈検出地点〉

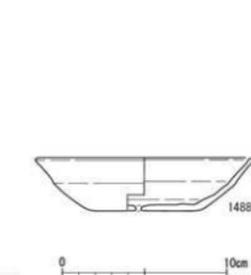
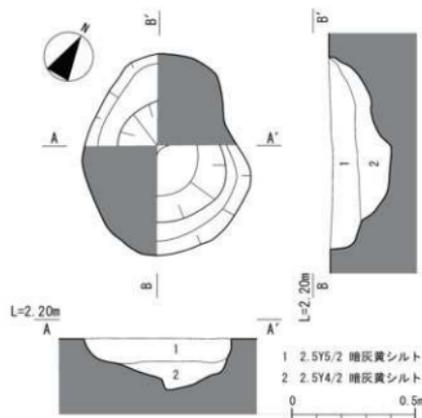
12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (I-2)]

〈形態等〉

平面形は長径 80cm、短径 60cmの楕円形で、深さ 24cmを測る。断面形状は碗形を呈する。

〈出土遺物〉(第 326 図)

1488 は土師質土器皿で、口径 13.3cmに復元される。底部に回転ヘラ切りの痕跡を留める。



第 326 図 SP1110 出土遺物実測図

### 小穴 1-112 [SP1112]

〈検出地点〉

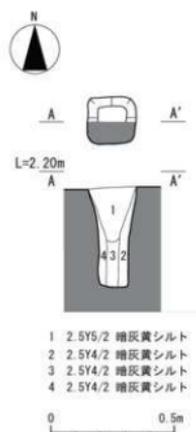
12-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (J-1)]

〈形態等〉

平面形は一辺が約 20cmの隅丸方形で、深さ 41cmを測る。断面観察によると、細長い堆積が見られ、杭等の痕跡の可能性が考えられる。

〈出土遺物〉

出土遺物は手づくね成形による土師質土器皿片があるが、図化できるものは無い。



### 小穴 1-142 [SP1142]

〈検出地点〉

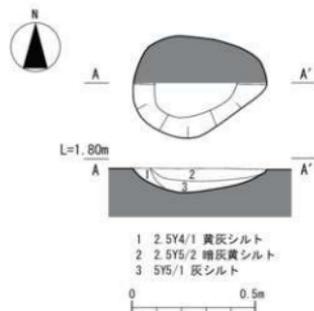
12-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (O-3)]

〈形態等〉

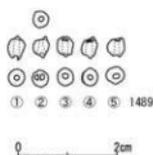
平面形は長径54cm、短径40cmの楕円形で、深さ10cmを測る。断面形状は皿形を呈する。

〈出土遺物〉(第329図)

1489はガラス玉である。色調は緑色を呈し、直径3.5mm程度の球形で、中心部に紐を通して1mm程度の孔が開いている。



第328図 SP1142 平・断面図



第329図 SP1142 出土遺物実測図

### 小穴 1-162 [SP1162]

〈検出地点〉

12-I区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (P-20)]

〈形態等〉

平面形は長径40cm、短径28cmの楕円形で、遺構内東側に直径18cm程度の柱状の小穴が確認できる。深さは50cm以上となる。第4層は柱痕あるいは杭痕の可能性はある。

〈出土遺物〉(第331図)

1490は森田分類のD群に相当する白磁皿である。

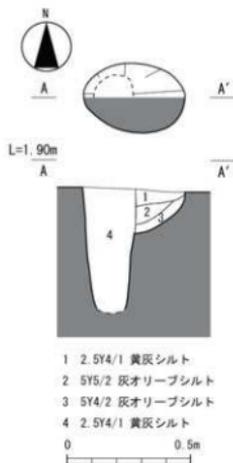
### 小穴 1-180 [SP1180]

〈検出地点〉

12-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (P-1)]

〈形態等〉

平面形は長径34cm、短径20cmの楕円形で、深さは35cm以上となる。断面形状は漏斗状に上部



第330図 SP1162 平・断面図

が開き、下部は細くなる。杭痕の可能性が考えられる。

〈出土遺物〉

土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。

#### 小穴1-182 [SP1182]

〈検出地点〉

12-1区 [中グリッド (b-9)・

小グリッド (P-2)]

〈形態等〉

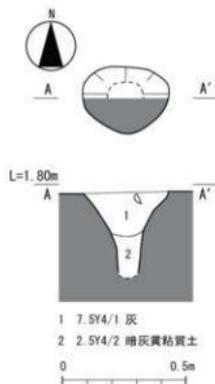
平面形は長径54cm、短径30cmの楕円形で、深さは30cm以上となる。遺構内ほぼ中央部に直径18cm程度の柱状の小穴が確認でき、柱痕の可能性が考えられる。

〈出土遺物〉

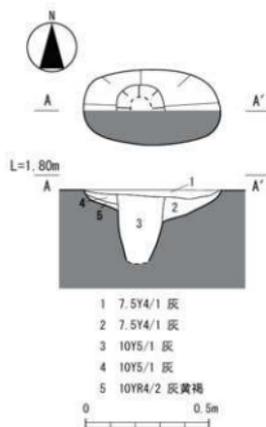
土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。



第331図 SP1162 出土遺物実測図



第332図 SP1180 平・断面図



第333図 SP1182 平・断面図

### 小穴 1-185 [SP1185]

〈検出地点〉

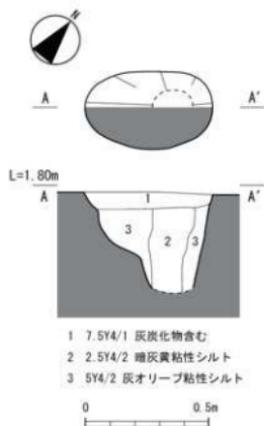
12- I 区 [中グリッド (b-9)・  
小グリッド (P-2)]

〈形態等〉

平面形は長径 50cm、短径 32cm の楕円形で、深さは 40cm 以上となる。断面観察によると、中心部に幅 12cm 程でほぼ垂直な第 2 層が確認できるが、柱痕の可能性が考えられる。

〈出土遺物〉

備前焼の小片が出土しているが、図化できるものは無い。



第 334 図 SP1185 平・断面図

### 小穴 1-193 [SP1193]

〈検出地点〉

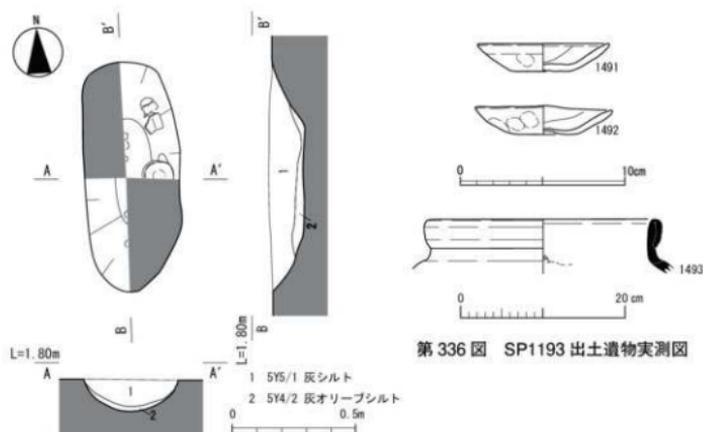
12- I 区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (Q-20)]

〈形態等〉

平面形は長径 86cm、短径 36cm の楕円形で、深さは 13cm を測る。断面形状は皿形を呈する。

〈出土遺物〉 (第 336 図)

1491・1492 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系である。口径は 8cm 程度で、内



第 335 図 SP1193 平・断面図

第 336 図 SP1193 出土遺物実測図

面に「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。

1493は備前焼甕。口縁はほぼ直立し、端部を玉縁状に取める。

#### 小穴 1-196 [SP1196]

〈検出地点〉

12-I区〔中グリッド (b-9)・小グリッド (P-3)〕

〈形態等〉

平面形は直径48cmの円形で、深さは42cmを測る。断面は上部が漏斗状に開く形状で、下部は直径10cm程の柱状の小穴となる。

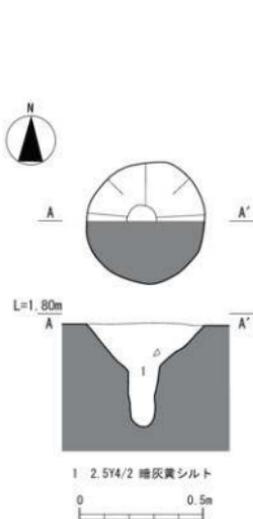
#### 小穴 1-210 [SP1210]

〈検出地点〉

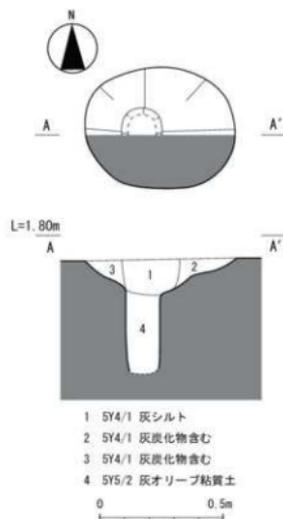
12-I区〔中グリッド (b-8)・小グリッド (P-20)〕

〈形態等〉

平面形は長径60cm、短径50cmの楕円形で、深さは47cm以上となる。断面形状は、上部は皿形を呈し、遺構内中央よりやや西寄りに直径14cm程度の柱状の小穴が認められる。柱痕あるいは杭痕の可能性が考えられる。



第 337 図 SP1196 平・断面図



第 338 図 SP1210 平・断面図

〈出土遺物〉

土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。

小穴 1-211 [SP1211]

〈検出地点〉

12-I区〔中グリッド (b-8)・小グリッド (Q-20)〕

〈形態等〉

平面形は直径 20cm 前後の円形で、深さは 30cm 以上となる。断面形状は箱形を呈する。柱痕あるいは杭痕の可能性が考えられる。

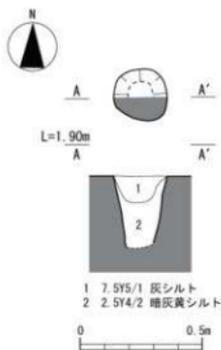
小穴 1-240 [SP1240]

〈検出地点〉

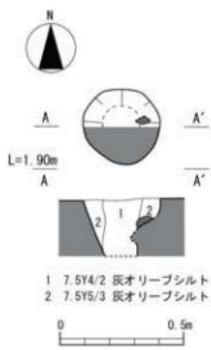
12-I区〔中グリッド (b-8)・小グリッド (R-20)〕

〈形態等〉

平面形は直径 30cm 前後の円形で、深さは 48cm 以上となる。断面形状は箱形を呈する。断面観察によると、中央部に幅 14cm 程でほぼ垂直な第 1 層が確認できるが、柱痕の可能性が考えられる。



第 339 図 SP1211 平・断面図



第 340 図 SP1240 平・断面図

### 小穴 1-246 [SP1246]

〈検出地点〉

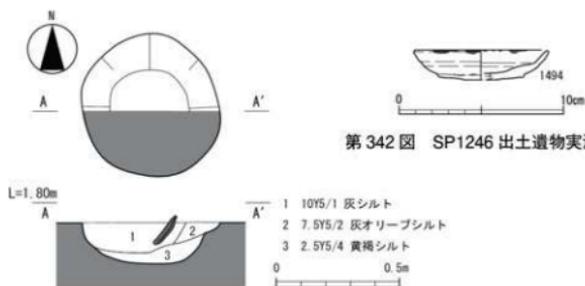
12- I 区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (R~S-20)]

〈形態等〉

平面形は直径 60cm 前後の円形で、深さは 17cm を測る。断面形状は、碗形を呈する。

〈出土遺物〉 (第 342 図)

1494 はロクロ成形による土師質土器皿で、底部に回転ヘラ切りの痕跡を留める。やや内彎気味に立ち上がる体部を持ち、口径は 8.2cm に復元される。口縁部にタールが付着しており、灯明皿である。



第 342 図 SP1246 出土遺物実測図

第 341 図 SP1246 平・断面図

### 小穴 1-248 [SP1248]

〈検出地点〉

12- I 区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (R~S-20)]

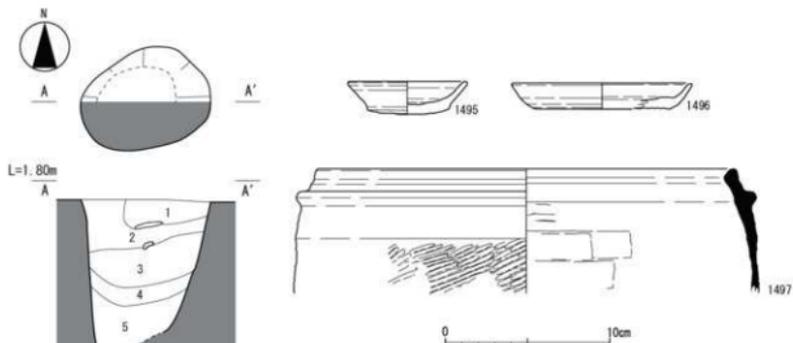
〈形態等〉

平面形は長径が 50cm、短径が 40cm の楕円形で、深さは 62cm 以上となる。断面形状は箱形を呈する。

〈出土遺物〉 (第 344 図)

1495・1496 はロクロ成形の土師質土器皿で、底部に回転ヘラ切りの痕跡を留める。1495 は口径 7.1cm の小皿で、逆ハの字状に直線的に立ち上がる体部を持つ。1496 は粗製の皿で、口径は 10.8cm に復元される。

1497 は土師質土器鍋。体部外面には斜め方向の並行タタキが見られる。



第344図 SP1248 出土遺物実測図

- 1 7.5Y5/2 灰オリーブシルト
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄シルト
- 3 7.5Y4/2 灰オリーブシルト
- 4 5Y4/1 灰シルト
- 5 5Y5/2 灰オリーブシルト

第343図 SP1248 平・断面図

#### 小穴 1-260 [SP1260]

〈検出地点〉

12-1区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (R-20)]

〈形態等〉

平面形は直径30cm程度の円形で、遺構内中央部に直径8cm程度の小穴が認められる。深さは23cmである。

〈出土遺物〉(第346図)

1498は端反りの白磁皿で、森田分類のE2群に相当する。



第346図 SP1260 出土遺物実測図

第345図 SP1260 平・断面図

- 1 5Y4/1 灰シルト
- 2 5Y4/1 灰シルト

小穴 1-261 [SP1261]

〈検出地点〉

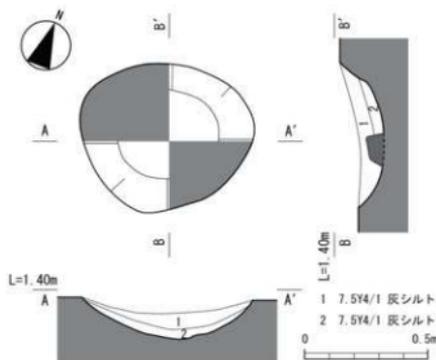
12-1区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (R~S-17)]

〈形態等〉

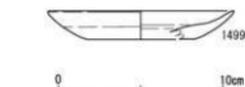
平面形は直径 65cm 前後の円形で、深さは 10cm を測る。断面は皿形を呈する。

〈出土遺物〉 (第 348 図)

1499 はロクロ成形による粗製の土師質土器皿で、底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。口径は 11.2cm に復元される。



第 347 図 SP1261 平・断面図



第 348 図 SP1261 出土遺物実測図

小穴 1-307 [SP1307]

〈検出地点〉

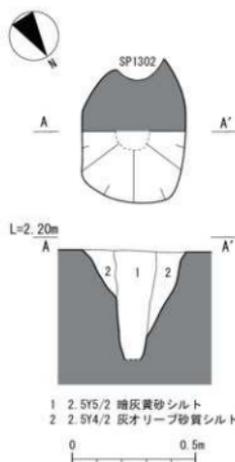
13-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (C-6)]

〈形態等〉

平面形は長径 58cm、短径 42cm 前後の楕円形で、深さは 45cm 以上となる。断面は台形を呈し、中央部に柱跡の可能性のある幅 14cm 程度の垂直方向の堆積が見られる。

〈出土遺物〉

土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。



第 349 図 SP1307 平・断面図

### 小穴 1-315 [SP1315]

〈検出地点〉

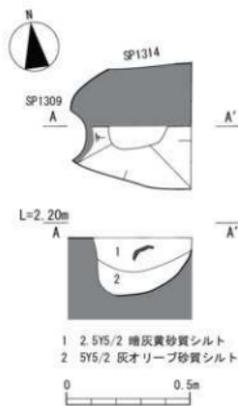
13- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (C-6)]

〈形態等〉

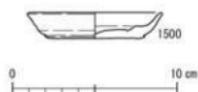
平面形は長径 60cm 程度、短径 52cm の楕円形で、深さは 24cm を測る。断面は碗形を呈する。

〈出土遺物〉(第 351 図)

1500 はロク口成形による粗製の土師質土器皿で、底部には回転ヘラ切り及び板目痕を留める。口径は 8.2cm に復元される。



第 350 図 SP1315 平・断面図



第 351 図 SP1315 出土遺物実測図

### 小穴 1-318 [SP1318]

〈検出地点〉

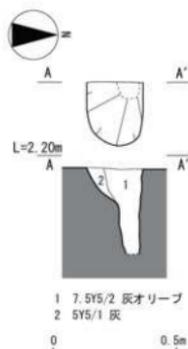
13- I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (C-6)]

〈形態等〉

平面形は長径 52cm 程度、短径 22cm の楕円形で、深さは 34cm 以上となる。断面観察によると、中央部に幅 8～14cm の垂直方向の堆積が見られるが、柱痕あるいは杭痕と考えられる。

〈出土遺物〉

土師質土器皿や瓦質土器の小片が出土しているが、図化できるものは無い。



第 352 図 SP1318 平・断面図

### 小穴 1-325 [SP1325]

〈検出地点〉

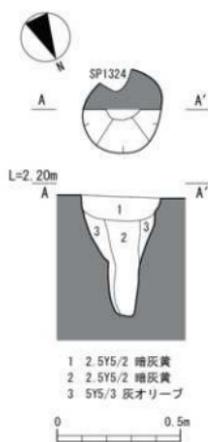
13-Ⅰ区〔中グリッド (b-9)・小グリッド (B-5)〕

〈形態等〉

平面形は直径 34cm 程度の円形で、深さは 48cm となる。断面観察によると、下層中央部に幅 10cm の垂直方向の堆積が見られるが、柱痕あるいは杭痕と考えられる。

〈出土遺物〉

土師質土器の破片が出土しているが、図化できるものは無い。



第 353 図 SP1325 平・断面図

### 小穴 1-334 [SP1334]

〈検出地点〉

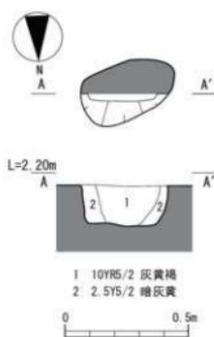
13-Ⅰ区〔中グリッド (b-9)・小グリッド (C-5)〕

〈形態等〉

平面形は長径 42cm、短径 24cm の楕円形で、深さは 16cm を測る。断面は箱形を呈する。

〈出土遺物〉(第 355 図)

1501 は手づくね成形による土師質土器で、口径は 14cm に復元される。色調は灰白色系である。



第 354 図 SP1334 平・断面図



第 355 図 SP1334 出土遺物実測図

### 小穴 1-337 [SP1337]

〈検出地点〉

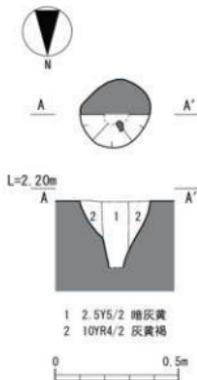
13-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (C-5)]

〈形態等〉

平面形は直径 28cm 程度の円形で、深さは 27cm 以上となる。断面観察によると、中央部に幅 10cm 程の垂直方向の堆積が見られるが、柱痕あるいは杭痕と考えられる。

〈出土遺物〉

土師質土器の破片が出土しているが、図化できるものは無い。



第 356 図 SP1337 平・断面図

### 小穴 1-340 [SP1340]

〈検出地点〉

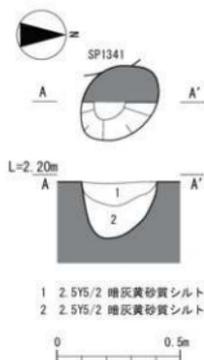
13-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (C-5)]

〈形態等〉

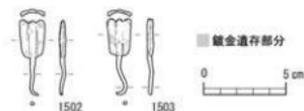
平面形は長径 30cm、短径 19cm の楕円形で、深さは 23cm を測る。断面は碗形を呈する。

〈出土遺物〉

1502、1503 は銅製品で、先端が鉤状に湾曲する棒状のものに矢羽根状の飾りが付く。表面には鍍金が施されている。左右対称で、異なる鑄型で鑄造されたものである。



第 357 図 SP1340 平・断面図



第 358 図 SP1340 出土遺物実測図

小穴 1-352 [SP1352]

〈検出地点〉

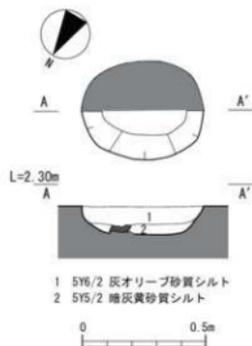
13-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (C-6)]

〈形態等〉

平面形は長径49cm、短径40cmの楕円形で、深さは11cmを測る。断面は碗形を呈する。

〈出土遺物〉 (第360図)

1504は備前焼罎鉢で、口径は35cmに復元される。口縁帯はほぼ直立し、弱い凹線が巡る。間壁編年のV期に相当する。



第359図 SP1352 平・断面図



第360図 SP1352 出土遺物実測図

小穴 1-389 [SP1389]

〈検出地点〉

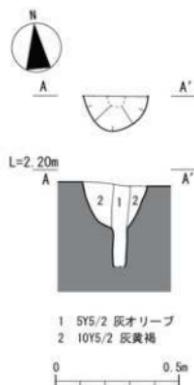
13-I区 [中グリッド (a-8)・小グリッド (R-19)]

〈形態等〉

平面形は直径25cm程度の円形である。断面観察によると、中央部に幅6cm程の垂直方向の堆積が見られ、深さは34cm以上となる。杭痕の可能性が考えられる。

〈出土遺物〉

土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。



第361図 SP1389 平・断面図

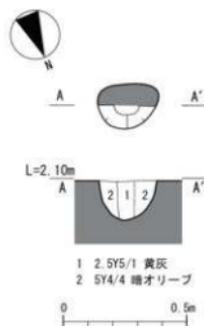
小穴 1-391 [SP1391]

〈検出地点〉

13-I区 [中グリッド (a-8)・小グリッド (R-19)]

〈形態等〉

平面形は長径 24cm、短径 18cmの楕円形で深さは 16cmを測る。断面は碗形を呈する。断面観察によると、中央部に幅 10cm程の垂直方向の堆積が見られるが、杭痕の可能性が考えられる。



第 362 図 SP1391 平・断面図

小穴 1-396 [SP1396]

〈検出地点〉

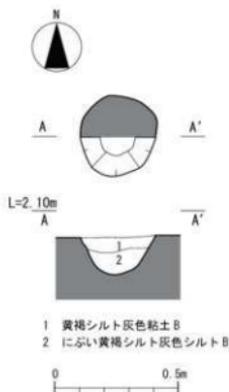
14-II区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (J-18)]

〈形態等〉

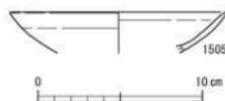
平面形は直径 30cm程度の方形で、深さは 15cmを測る。断面は碗形を呈する。

〈出土遺物〉

1505 はロクロ成形による土師質土器皿で、口径は 13.1cmに復元される。



第 363 図 SP1396 平・断面図



第 364 図 SP1396 出土遺物実測図

### 小穴 1-400 [SP1400]

〈検出地点〉

14-II区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (I-18)]

〈形態等〉

平面形は直径 27cm の円形で、深さは 15cm を測る。断面は碗形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。

### 小穴 1-401 [SP1401]

〈検出地点〉

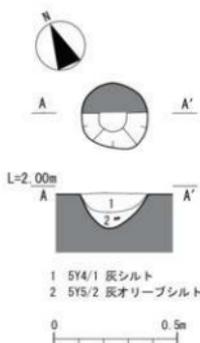
14-II区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (I-18)]

〈形態等〉

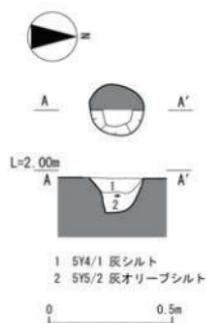
平面形は直径 20cm 程度の円形で、深さは 15cm を測る。断面は碗形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。



第 365 図 SP1400 平・断面図



第 366 図 SP1401 遺構平・断面図

### 小穴 1-402 [SP1402]

〈検出地点〉

14-II区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (I-18)]

〈形態等〉

平面形は直径 33cm の円形で、深さは 10cm を測る。断面は皿形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。

小穴 1-404 [SP1404]

〈検出地点〉

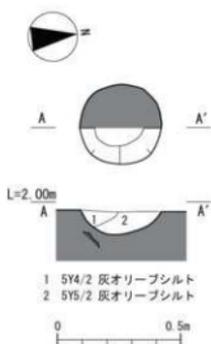
14-II区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (J-18)]

〈形態等〉

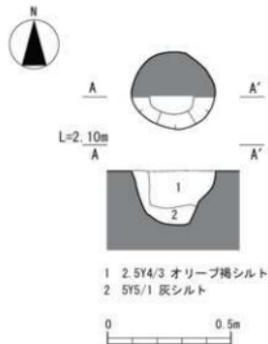
平面形は直径 32cm 程度の円形で、深さは 23cm を測る。断面は碗形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。



第 367 図 SP1402 遺構平・断面図



第 368 図 SP1404 遺構平・断面図

小穴 1-405 [SP1405]

〈検出地点〉

14-II区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (J-18)]

〈形態等〉

平面形は直径 30cm 程度の円形で、深さは 12cm を測る。断面は碗形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。

### 小穴 1-406 [SP1406]

〈検出地点〉

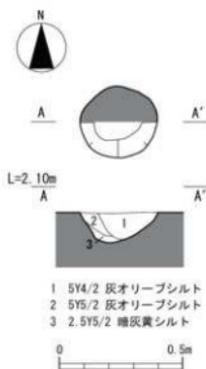
14-II区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (J-18)]

〈形態等〉

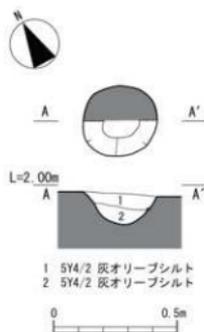
平面形は直径30cm程度の円形で、深さは13cmを測る。断面は碗形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。



第369図 SP1405 遺構平・断面図



第370図 SP1406 遺構平・断面図

### 小穴 1-407 [SP1407]

〈検出地点〉

14-II区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (J-18)]

〈形態等〉

平面形は直径28cm程度の円形で、深さは6cmを測る。断面は皿形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器皿の小片が出土しているが、図化できるものは無い。

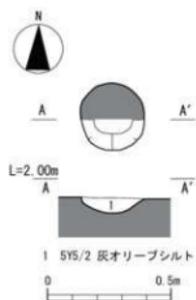
### 小穴 1-408 [SP1408]

〈検出地点〉

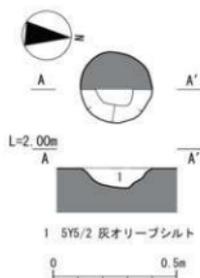
14-II区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (K-18)]

〈形態等〉

平面形は直径30cm程度の円形で、深さは8cmを測る。断面は皿形を呈する。



第371図 SP1407 遺構平・断面図



第372図 SP1408 遺構平・断面図

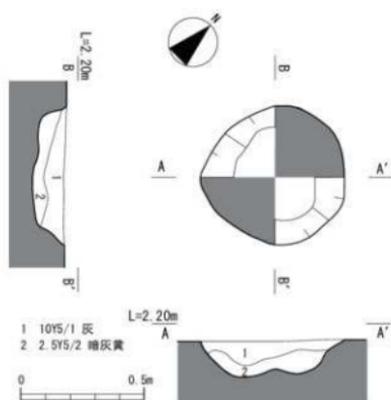
### 小穴 1-412 [SP1412]

〈検出地点〉

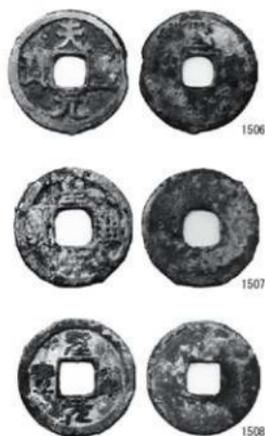
14-IV区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (F-20)]

〈形態等〉

平面形は直径58cm程度の円形で、深さは15cmを測る。断面は箱形を呈する。



第373図 SP1412 遺構平・断面図



第374図 SP1412 出土遺物



〈出土遺物〉(第374図)

1506は真書体の天聖元寶で初鑄年は1023年、1507は真書体の皇宋通寶で初鑄年は1038年、1508は篆書体の聖宋元寶で初鑄年は1101年であり、いずれも北宋銭である。

### 小穴 1-426 [SP1426]

〈検出地点〉

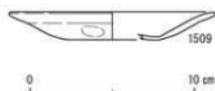
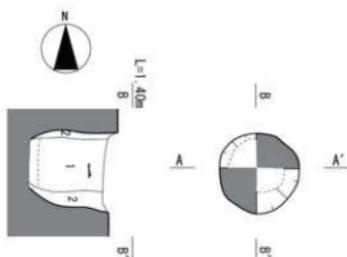
14-Ⅲ区〔中グリッド(b-10)・小グリッド(L-7)〕

〈形態等〉

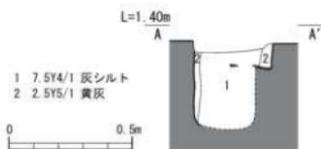
平面形は直径32cmの円形で、深さは31cm以上を測る。断面は箱形を呈する。

〈出土遺物〉(第376図)

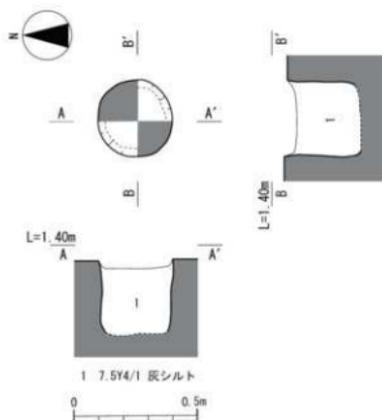
1509は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系である。口縁は12.6cmに復元される。



第376図 SP1426 出土遺物実測図



第375図 SP1426 平・断面図



第377図 SP1427 遺構平・断面図

### 小穴 1-427 [SP1427]

〈検出地点〉

14-Ⅲ区〔中グリッド(b-10)・  
小グリッド(L-7)〕

〈形態等〉

平面形は直径30cm程度の円形で、深さは27cm以上を測る。断面は箱形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器の小片が出土しているが、図化できるものは無い。

小穴 1-455 [SP1455]

〈検出地点〉

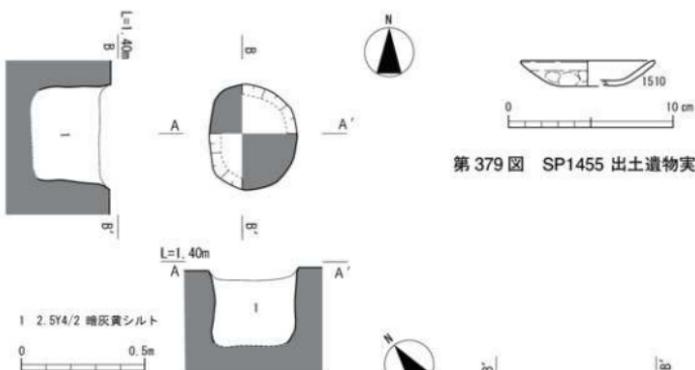
14-Ⅲ区〔中グリッド (b-10)・小グリッド (L-7)〕

〈形態等〉

平面形は直径 40cm 前後の円形で、深さは 28cm 以上を測る。断面は箱形を呈する。

〈出土遺物〉 (第 379 図)

1510 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口縁は 8.2cm に復元される。



第 379 図 SP1455 出土遺物実測図

第 378 図 SP1455 平・断面図

小穴 1-518 [SP1518]

〈検出地点〉

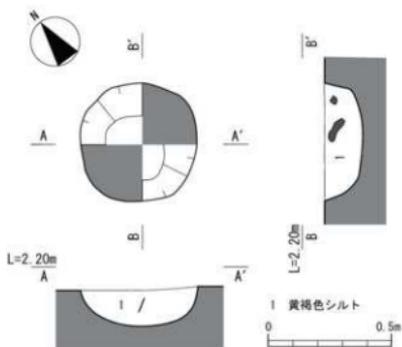
14-Ⅳ区〔中グリッド (b-9)・  
小グリッド (F-20)〕

〈形態等〉

平面形は直径 48cm の円形で、深さは 14 cm を測る。断面は箱形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器の小片が出土しているが、図化できるものは無い。



第 380 図 SP1518 遺構平・断面図

小穴 1-519 [SP1519]

〈検出地点〉

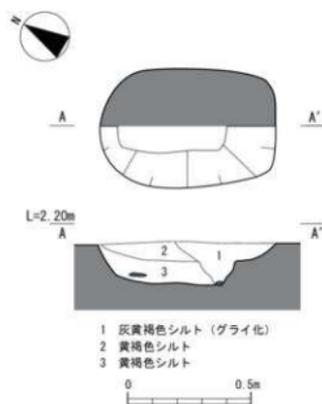
14-Ⅳ区 [中グリッド (b-9)・  
小グリッド (F-20)]

〈形態等〉

平面形は長径 72cm、短径 48cmの楕円形で、  
深さは 18cmを測る。断面は箱形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器の小片が出土しているが、図化  
できるものは無い。



第 381 図 SP1519 遺構平・断面図

小穴 1-520 [SP1520]

〈検出地点〉

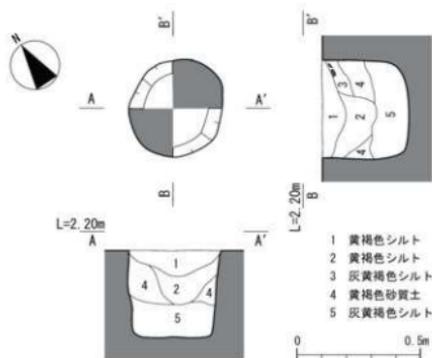
14-Ⅳ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (F-20)]

〈形態等〉

平面形は直径 40cm程度の円形で、深さは 35cmを測る。断面は箱形を呈する。

〈出土遺物〉

土師質土器の小片が出土しているが、図化できるものは無い。



第 382 図 SP1520 平・断面図

### 小穴 1-521 [SP1521]

〈検出地点〉

14-Ⅳ区 [中グリッド (b-10)・小グリッド (F-1)]

〈形態等〉

平面形は長径 35cm、短径 23cmの楕円形で、深さは 16cmを測る。断面は箱形を呈する。断面観察によると、遺構覆土中央部に幅 8cm程の垂直方向の堆積が見られる。

### 小穴 1-522 [SP1522]

〈検出地点〉

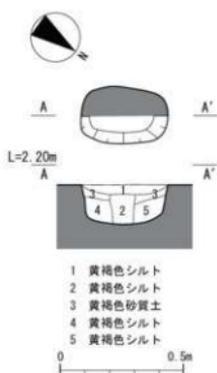
14-Ⅳ区 [中グリッド (b-10)・小グリッド (F-1)]

〈形態等〉

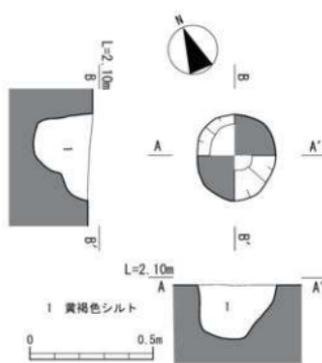
平面形は直径 35cm前後の円形で、深さは 22cmを測る。断面は箱形を呈する。

〈出土遺物〉

瓦の小片が出土しているが、図化できるものは無い。



第 383 図 SP1521 平・断面図



第 384 図 SP1522 平・断面図

### 小穴 1-563 [SP1563]

〈検出地点〉

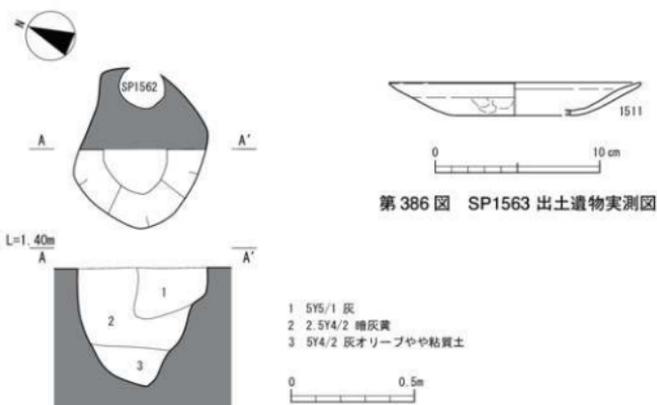
14-Ⅳ区 [中グリッド (b-10)・小グリッド (L-8)]

〈形態等〉

平面形は長径 63cm、短径 52cmの楕円形で、深さは 48cmを測る。断面はU字形を呈する。

〈出土遺物〉(第386図)

1511は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口縁は15.2cmに復元される。



第386図 SP1563 出土遺物実測図

第385図 SP1563 平・断面図

#### ⑩土墳墓 (ST)

9次調査では中世の墓を2基、14次調査では近世～近代の墓を1基確認した。このうち調査を行った中世の墓について報告する。

#### 土墳墓 1-1 [ST1001]

〈検出地点〉

9-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-15～16)]

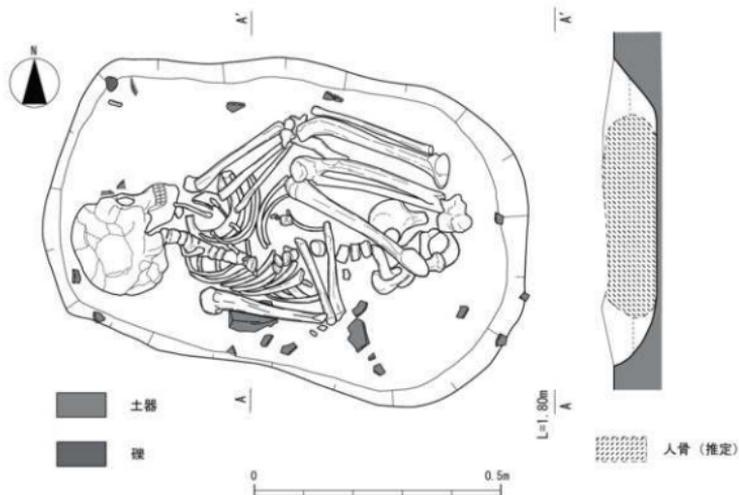
〈形態等〉

平面形は長径98cm、短径63cm、主軸方向はN-81°-Wと東西に長い楕円形を呈する。深さは6.5cmを測り、断面は皿形を呈する。土壌内からは、西頭位横臥屈葬の形態で埋葬された人骨が検出された。埋葬された人物は、身長130cm前後、年齢は17～18歳の若年女性と推定される。脊椎の乱れが無いことから、埋葬にあたっては木棺等に入れられたことが考えられる。詳細は第1分冊の西本豊弘『藍住町勝瑞館跡出土の埋葬人骨について』を参照されたい。

〈出土遺物〉(第388図)

1512は手づくね成形による土師質土器皿で、口径8.4cmを測る。色調は灰白色系を呈する。内面にはヨコナデの後、「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。

1513は鈴形の土製品である。



第387図 ST1001 平・断面図



第388図 ST1001 出土遺物実測図

1514、1515は篆書体の皇宋通寶で、初鑄年が1039年の北宋銭である。

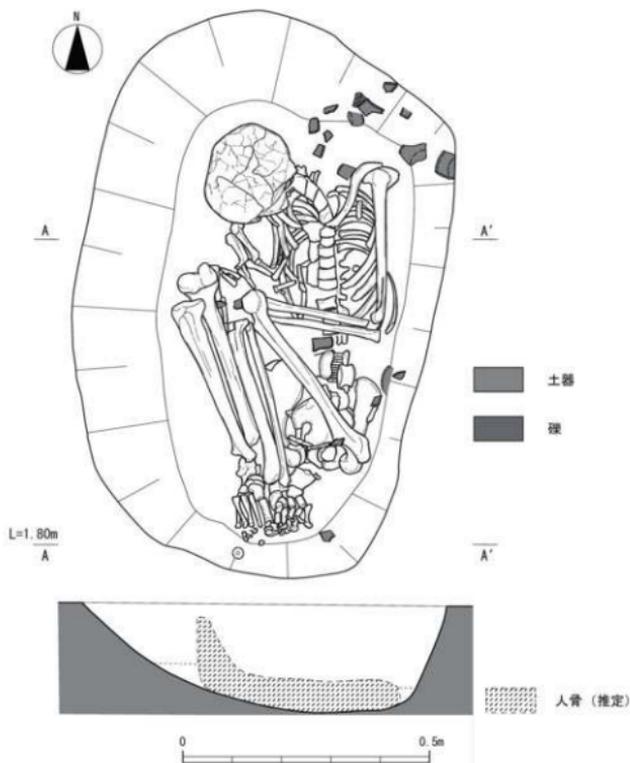
### 土墳墓 1-2 [ST1002]

〈検出地点〉

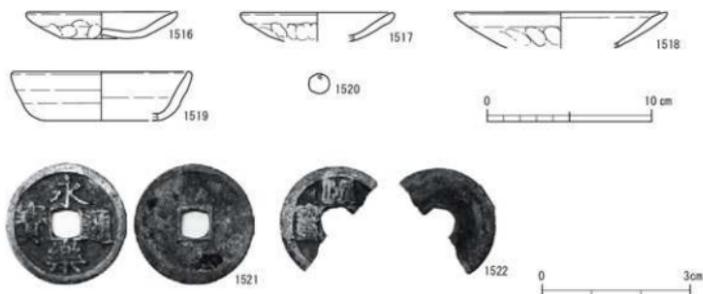
9-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-15～16)]

〈形態等〉

平面形は長径115cm、短径73cm、主軸方向はN-9°-Eと南北に長い楕円形を呈する。深さは16.7cmを測り、断面は深い皿形を呈する。土墳内からは、北頭位横臥屈葬の形態で埋葬された人



第389図 ST1002 平・断面図



第390図 ST1002 出土遺物実測図

骨が検出された。埋葬された人物は、身長165cm～170cm、年齢は60歳前後の成人男性と推定される。脊椎の乱れが無いことから、埋葬にあたっては木棺等に入れられたことが考えられる。詳細は第1分冊の西本豊弘「藍住町勝瑞館跡出土の埋葬人骨について」を参照されたい。

〈出土遺物〉(第390図)

1516～1518は手づくね成形による土師質土器皿である。1516は橙色系で、口径は9.1cmを測る。内面にはヨコナデの後「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。1517、1518は灰白色系で、口径はそれぞれ9.2cm、12.8cmに復元される。

1519は土師質土器杯で、口径10.6cmに復元され器高は3.0cmを測る。

1520は鉄砲玉で、直径約1.2cm、重量8.42gである。

1521は永楽通寶で、初鋳年が1411年の明銭、1522は約50%しか残存していないが、「熙」と「寶」の文字が読み取れる。熙寧元寶か。

## ⑪石敷遺構 (SU)

### 石敷遺構 1-1 [SU1001]

〈検出地点〉

14-IV区〔中グリッド(b-9)・小グリッド(E-18～19、F-17～20、G-17～19)〕

〈形態等〉

第1遺構面から約10°の傾斜でなだらかに約50cm落ち込み、その底部に1～15cm大の礫が敷き詰められた遺構で、検出範囲は東西10m、南北4m程である。礫の種類も様々で、館周辺以外から意図的に搬入されたものも含まれていると思われる。礫が敷かれた面は平坦ではなく凹凸が見られる。東側に礎石建物SB1002、SB1003が検出されており、関連が想定されるが、その性格は現時点では不明である。大内氏館跡第34次調査で類似した石敷遺構が報告されている。

〈出土遺物〉(第392図)

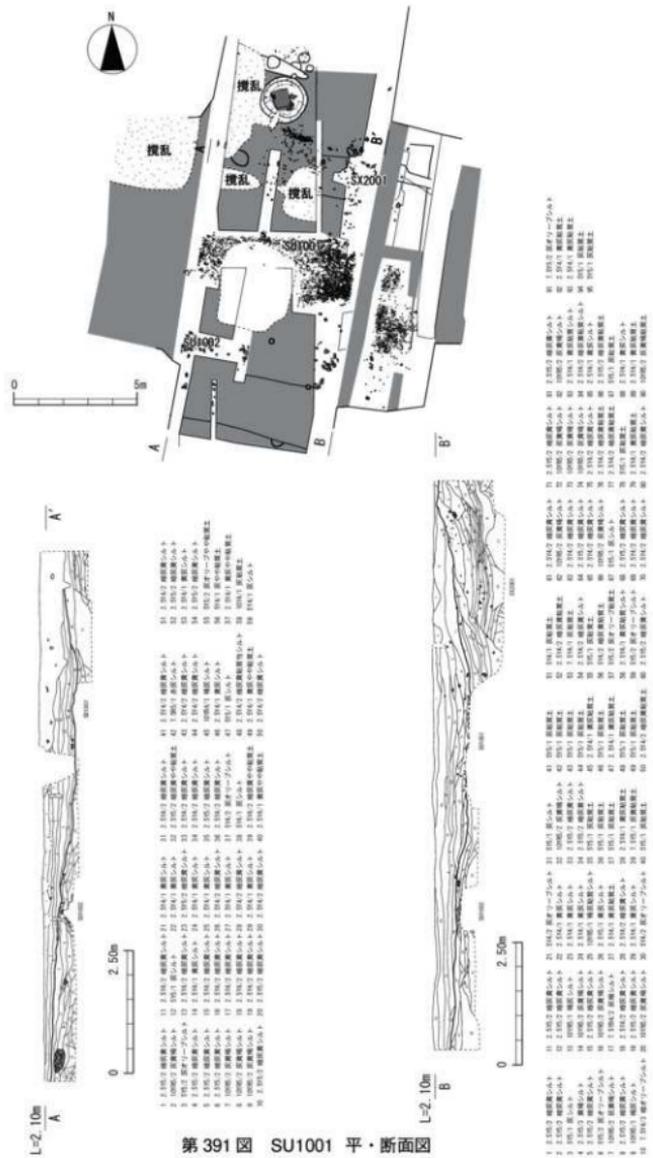
1523は手づくね成形の土師質土器皿で、色調は灰白色系である。口径は9.6cmに復元される。1524～1526はロクロ成形の土師質土器皿で、底部切り離し技法は静止糸切りである。口径はそれぞれ7.9cm、11.6cm、11.8cmに復元される。1524の底部には焼成後に穿たれた孔が見られる。

1527は瓦質土器である。ほぼ直立した体部を持ち、口縁を僅かに外方へ広げる。外面は幅12cmの板ナデ後、幅0.4cmのミガキが施される。火鉢の類いと思われる。

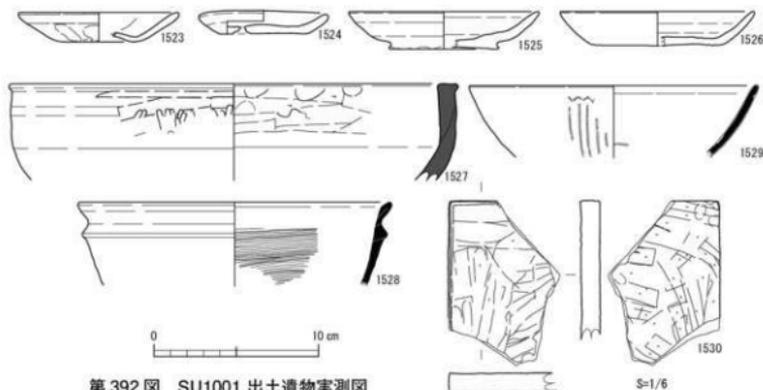
1528は焼締陶器である。体部は外方へ直線的に立ち上がり、鈔部を有する。内面には11条/13cmのハケ目が施される。色調は内面が橙色、外面が赤灰色で胎土には雲母や石英、砂岩を含有する。羽釜の形状に近いものであるが、陶器質である。

1529は線描蓮弁文の青磁碗。上田分類のBⅣ類に相当する。

1530は磚である。厚さ2.4cmを測り、両面に幅2.3cmの板ナデの調整痕が残っており、表面と思われる側はていねいにナデで仕上げている。



第 391 图 SU1001 平・断面图



第 392 図 SU1001 出土遺物実測図

## ⑫不明遺構 (SX)

### 不明遺構 1-18 [SX1018]

〈検出地点〉

9-I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-18)]

〈形態等〉

平面形は、長径 217cm 以上、短径 118cm 以上となる楕円形と推定され、深さは 90cm 以上となる。遺構の性格は不明である。

〈出土遺物〉(第 394 図)

1531 ~ 1533 はロクロ成形の土師質土器皿で、底部切り離し技法は回転ヘラ切りである。器壁は厚く、ロクロ目が顕著に残る粗製品である。1531 は器壁がやや薄い。

1534 は備前焼の壺である。体部最大径は 14.4cm に復元される。

1535 は白磁皿。内彎する体部を持ち、口径は 9.9cm に復元される。畳付の軸を掻き落とす。

### 不明遺構 1-19 [SX1019]

〈検出地点〉

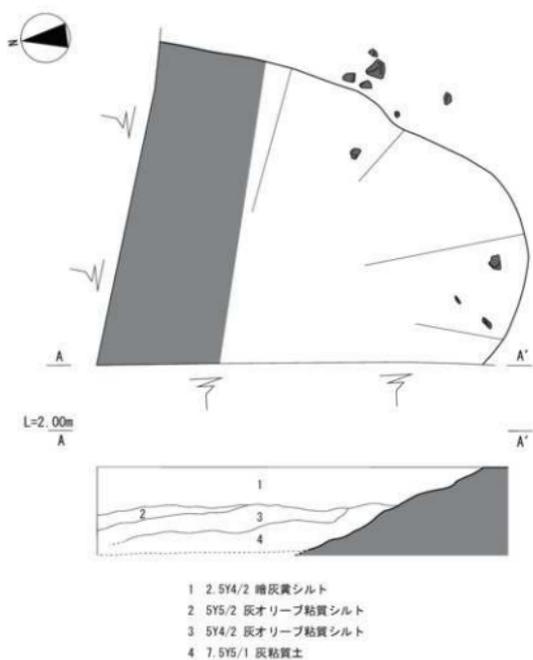
9-I 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (L-3 ~ 5, M-3 ~ 5)]

〈形態等〉

平面形は、長径 10.5 m、短径 3.6 m の楕円形で、深さは 90cm 以上となる。遺構の性格は不明である。

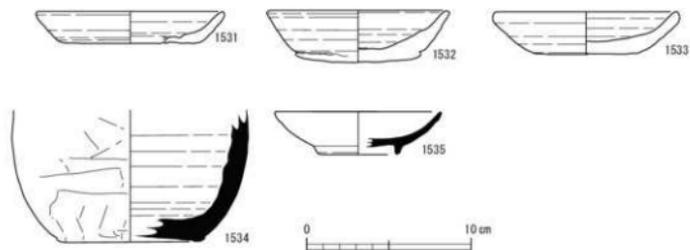
〈出土遺物〉(第 396 図)

1536 ~ 1557 は土師質土器皿で、1536 ~ 1541 は手づくね成形、1542 ~ 1551 はロクロ成形後回

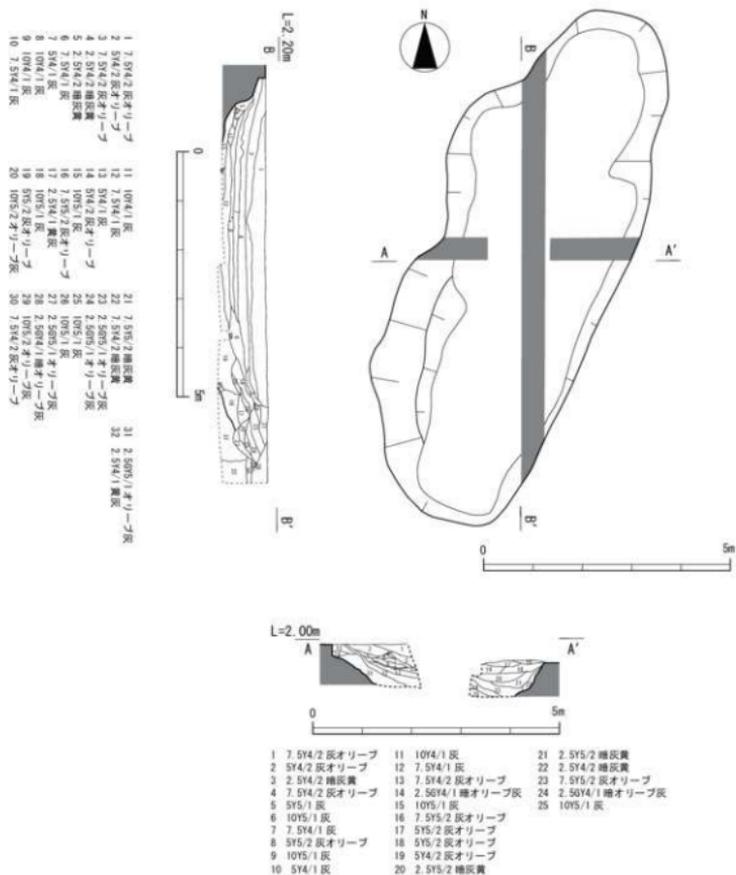


- 1 2.5Y4/2 増灰黄シルト
- 2 5Y5/2 灰オリーブ粘質シルト
- 3 5Y4/2 灰オリーブ粘質シルト
- 4 7.5Y5/1 灰粘質土

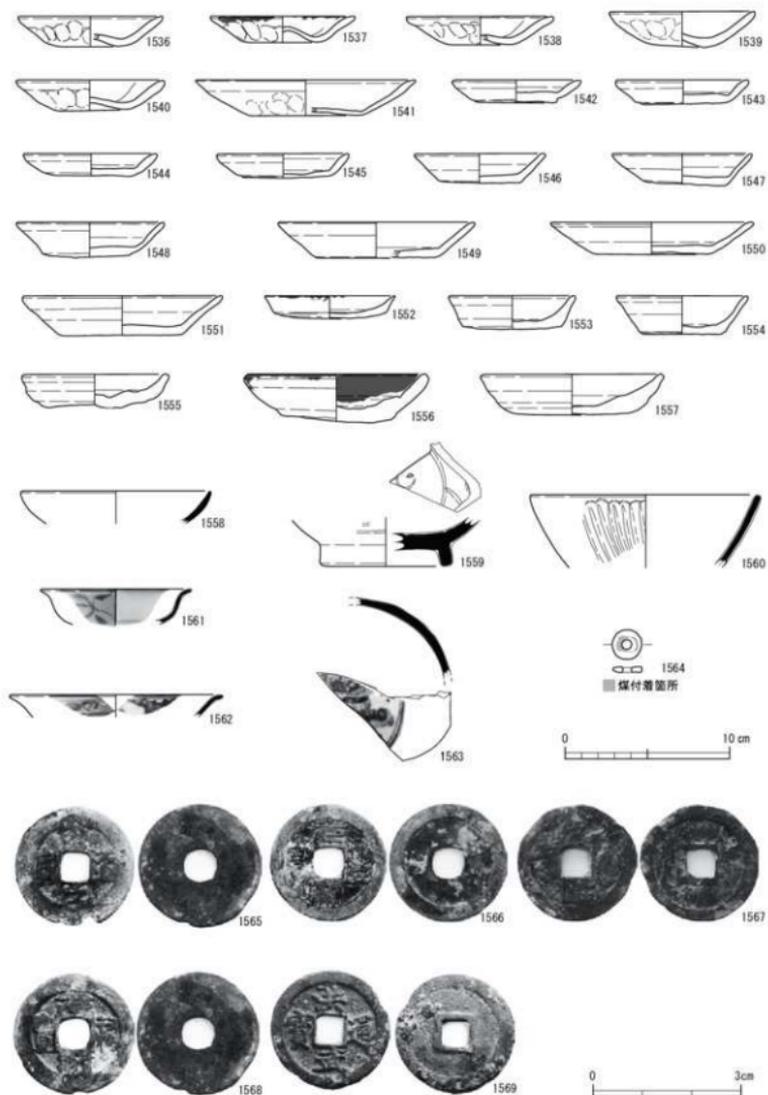
第 393 図 SX1018 平・断面図



第 394 図 SX1018 出土遺物実測図



第 395 図 SX1019 平・断面図



第 396 図 SX1019 出土遺物実測図

転糸切り、1552～1557はロクロ成形後回転ヘラ切りの痕跡を留める。1536～1540は口径9cm前後、1541は口径13.3cmに復元され、色調は灰白色である。1542～1545は底部端をナデて、やや丸く仕上げる皿で、体部は短く立ち上がる。1546～1548は底部端が角張っており、体部は直線的に逆「ハ」の字状に立ち上がる。1549・1550は口径がそれぞれ11.8cm、12.1cmに復元され底部端をナデてやや丸く収める。1551は口径11.9cm、器高が2.5cmになるやや深い皿である。1552は短く立ち上がる体部を持つ皿で、口縁にタールが付着する。1553・1554は平らな底面から直線的に逆「ハ」の字状に立ち上がる体部を持つ。1555～1557は厚い器壁を持つ粗製の皿で、内面にはロクロ目が顕著に残る。1556の内面にはタールが付着している。

1558は瀬戸美濃焼平碗で、口径11.4cmに復元される。

1559は青磁鉢である。高台内底面の軸を丸く掻き落としており、内外面に片切彫りによる文様が施される。1560は上田分類のBⅣ類に相当する線描蓮弁文の青磁碗である。剣頭は蓮弁を意識せずに施される。1561は漳州窯系の青花皿である。端反りの器形で、体部外面には唐草文が施される。1562は小野分類のB1群に相当する青花皿。内面にはアラベスク文、外面には渦状の文様が施される。1563は、体部前面にハート型の枠と、その内側に唐獅子文が描かれた偏壺の破片である。同一個体ではないが、同じ製品がSB1001周辺から出土している。

また、この遺構からはSB1001周辺から出土した440と接合する破片も出土している。

1564は円盤状の土製品で、直径1.8cm前後、厚さ0.35cmを測り、中心部には直径0.6cmの穴が開いている。煤が少量付着している部分が認められる。

1565は行書体の至道元寶で、初鑄年が995年の北宋錢である。1566は篆書体、1567は行書体の元豊通寶で、1078年初鑄の北宋錢。1567はややいびつで、模鑄錢の可能性もある。1568は元祐通寶で、1086年初鑄の北宋錢。1569は洪武通寶で、初鑄年が1368年の明錢である。

## 不明遺構 1-22 [SX1022]

〈検出地点〉

13-Ⅰ区〔中グリッド(b-9)・小グリッド(D-6)〕

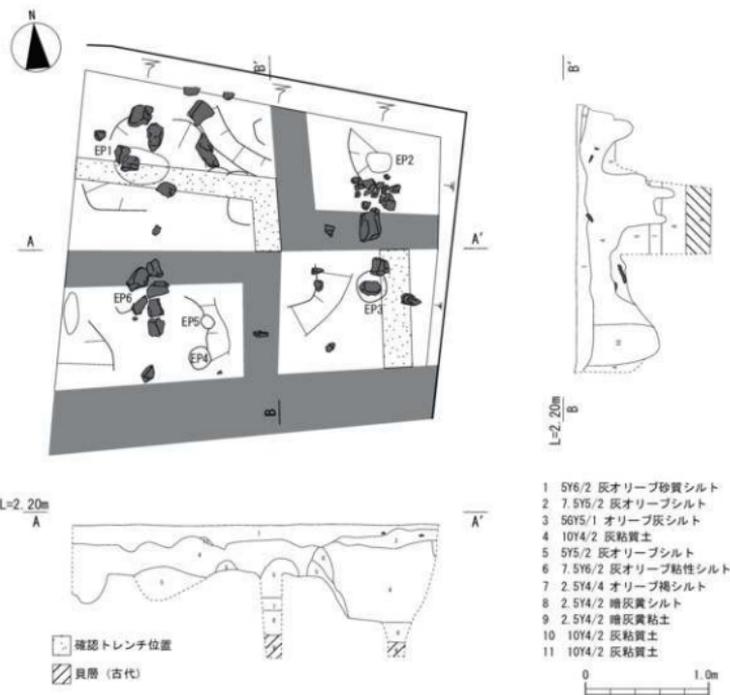
〈形態等〉

周辺部が攪乱を受けていたため平面形は不明である。覆土はグライ化が激しかったが、上部からは礫や瓦、土師質土器などが出土した。底部では不定形の遺構内遺構が12基検出された。

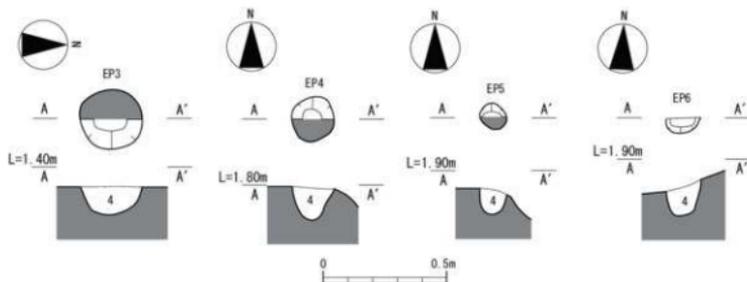
遺構の形状が不明瞭であったため、テストトレンチを設定して断面確認を行った結果、下層の標高1.3mの地点で厚さ15cm～20cm程度の貝層(SS2001)が検出された。SS2001については後述する。

〈出土遺物〉(第399図)

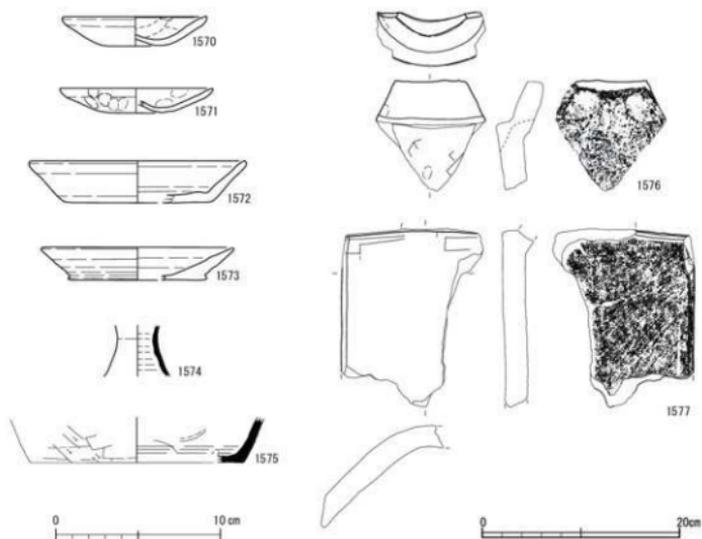
1570・1571は手づくね成形の土師質土器皿で、口径はそれぞれ8.9cm、9.4cmを測る。色調は灰白色系である。1572・1573はロクロ成形の土師質土器皿である。1572は底部に静止糸切りの痕跡が認められ、口径は13.0cmに復元される。1573は回転ヘラ切りで、口径は11.7cmに復元される。



第397図 SX1022 平・断面図



第398図 SX1022 (EP3 EP4 EP5 EP6) 平・断面図



第 399 図 SX1022 出土遺物実測図

1574・1575 は朝鮮王朝産の舟徳利の頸部と底部である。1575 の外面にはケズリ、内面には同心円状のタタキの痕跡が認められる。

1576・1577 は雁振瓦の破片である。いずれも凹面には布目とコビキAの痕跡が認められる。

#### 不明遺構 1-25 [SX1025]

〈検出地点〉

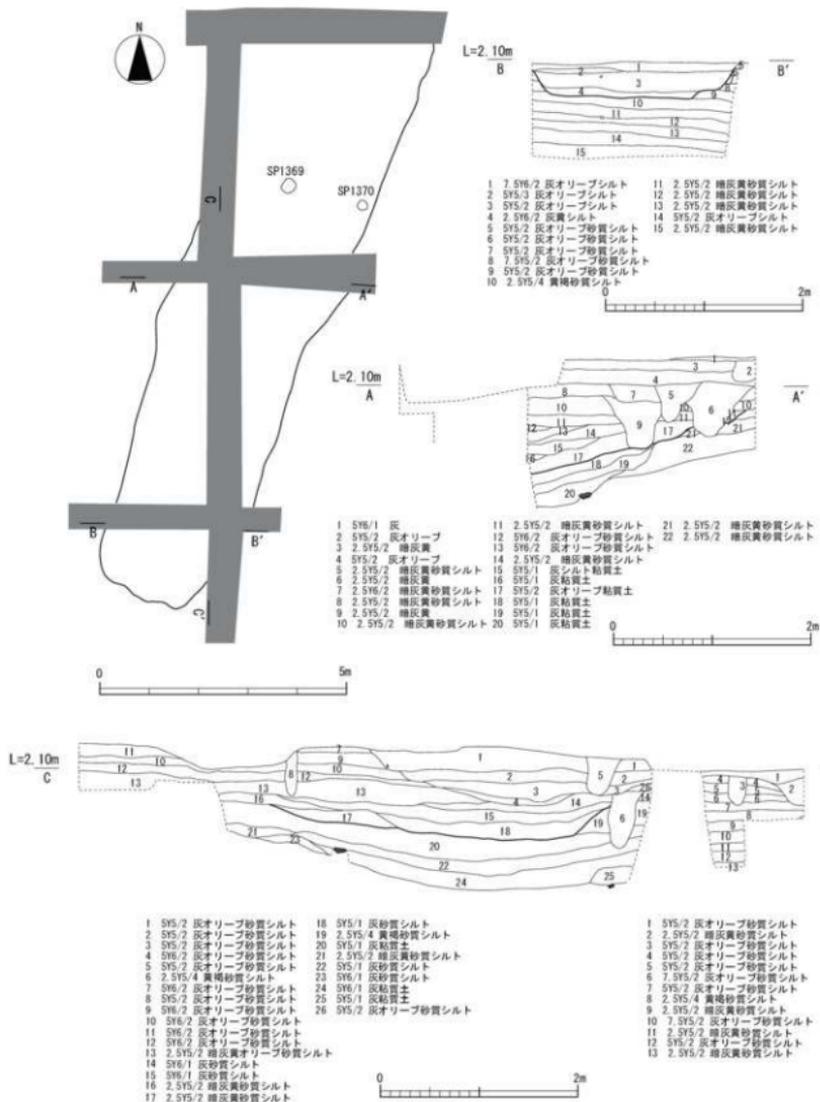
13-1区 [中グリッド (a-8, b-8)・小グリッド (T-18~20, A-18~20)]

〈形態等〉

N-20°-Eと東に振った軸で、長径約12m、短径約2mの不整な楕円形を呈する。部分的にトレンチで断面を確認したのみであるが、深さは146cmを測る。

〈出土遺物〉(第401図)

1578は手づくね成形の土師質土器皿で、色調は橙色系である。口径は13.5cmに復元される。1579は瀬戸美濃焼天目茶碗である。体部はやや内彎気味に立ち上がり、口唇部はほぼ直立し、端部は外反する。高台は削り出しの輪高台で、露胎である。



第400図 SX1025平・断面図



第 401 図 SX1025 出土遺物実測図

#### 不明遺構 1-29 [SX1029]

〈検出地点〉

14-Ⅳ区 [中グリッド (b-10)・小グリッド (E-3、F-2～3)]

〈形態等〉

上面で幅約 2 m、長さ約 5 m の範囲で検出された東西方向に延びる盛土遺構である。検出された高さは約 40 cm で、基底部は幅約 4 m と推定される。細かい単位での盛土が確認でき、盛土内からは 20～30 cm 大の砂岩が多数確認された。

遺構の性格は現時点ではよく分からないが、ある時期の圍繞施設の基底部である可能性も考えられる。盛土内の出土遺物は、16 世紀第 3 四半期頃と思われる。

〈出土遺物〉(第 403 図)

盛土の単位を確認するためにトレンチを設定して調査を実施したが、盛土内からは多くの遺物が出土した。

1580～1588 は手づくね成形の土師質土器皿である。色調は灰白色系で、1580～1585 は口径 9 cm 前後、1586・1587 は口径 11 cm 程度の製品である。1588 は口径 14.9 cm に復元される大型の製品である。

1589・1590 はロクロ成形の土師質土器皿で、底部に静止糸切りの痕跡を留める。口径はそれぞれ 7.6 cm、7.7 cm である。1591 はロクロ成形の土師質土器杯で、底部に静止糸切りの痕跡を留める。口径は 10.0 cm に復元される。

1592 は瓦質土器の火鉢で、口径 21.7 cm に復元される。体部外面の上半部は丁寧なミガキで仕上げ、下半部をヘラケズりする。やや内彎気味に立ち上がる体部を持ち、口縁部は直立し、端部を外方へ小さく広げる。

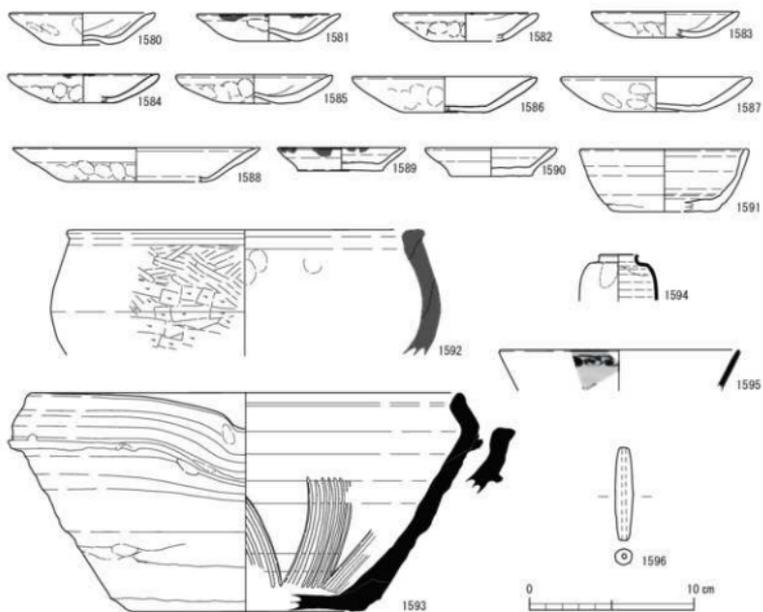
1593 は備前焼播鉢。内面には一単位 8 条 / 2.9 cm の播り目が間隔をおいて施される。口縁帯はやや内傾し、外面に弱い凹線が認められる。間壁編年の V 期に相当する。

1594 は小肩衝茶入れである。器壁は薄く仕上げる。茶褐色の胎土に鉄軸がかかり、外面には被熱痕が認められる。唐物もしくは島物の可能性がある。

1595 は青花碗で、口縁部外面に波濤文帯が描かれる。小野分類の皿 C 群に相当する。

1596 は土鍾。長さ 5.9 cm、直径約 1 cm の管状で、中心部に 3 mm の孔が開く。

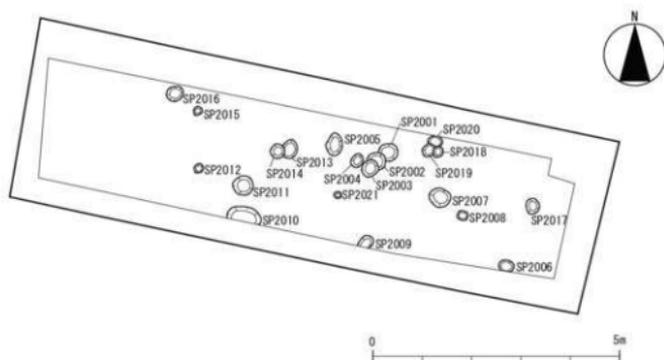




第 403 图 SX1029 出土遺物実測図

## (2) 第2遺構面

1-I区では第2遺構面の調査を実施し、溝や小穴を検出した。また、1-II区、2-I区、14-III区等で第1遺構面の遺構より下層で堀、溝、不明遺構を断面観察によって検出した。以下ではそれらを報告する。



第404図 1-I区第2遺構面遺構配置図

### ①堀

#### 堀 2-1 [堀 2001]

〈検出地点〉

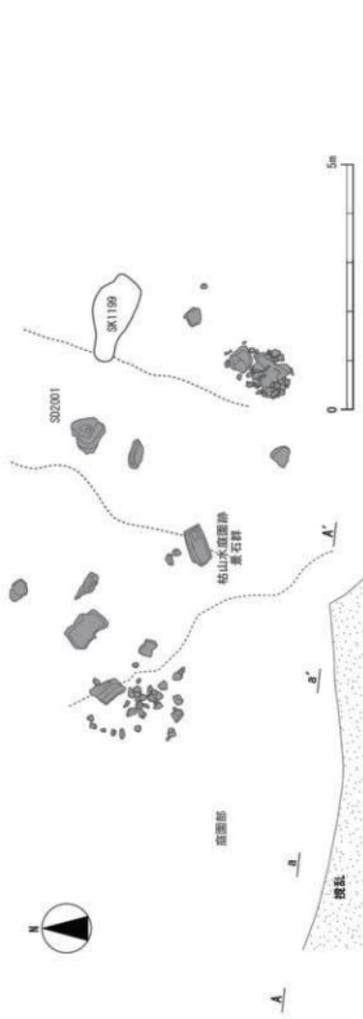
2-I区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (D-E-20)]

〈形態等〉

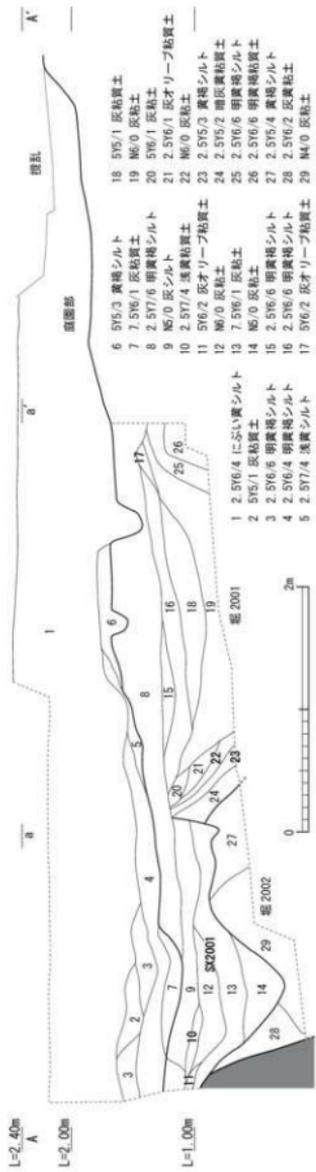
庭 1001 の西側で検出された。断面での検出であるため、全容は明らかではないが、南北方向に延びる堀と思われる。上幅は5m前後と推定され、法面は $50^{\circ}$ ~ $60^{\circ}$ となる。堀 2002 を切って構築されており、西肩はSX2001 に切られる。堀 2001 及び堀 2002 は、庭 1001 が造営される以前の屋敷境であろうと思われる。

〈出土遺物〉(第407図)

1597~1600 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系を呈する。1597~1599 は口径が9cm弱、1600 は口径が12.6cmを測る。1598・1599 の口縁にはタールが付着しており、灯明皿である。1601~1609 はロクロ成形による土師質土器皿である。1601~1607 は口径8cm弱、1608 は口径11.8cmを測る。直線的に大きく開く体部を持ち、底部には静止糸切りの痕跡を留める。1609 は逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる体部を持ち、底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。

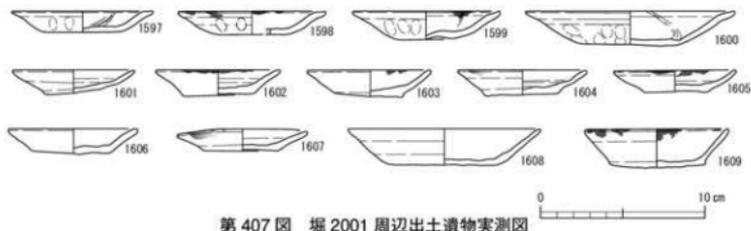


第405図 堀 2001 周辺平面図

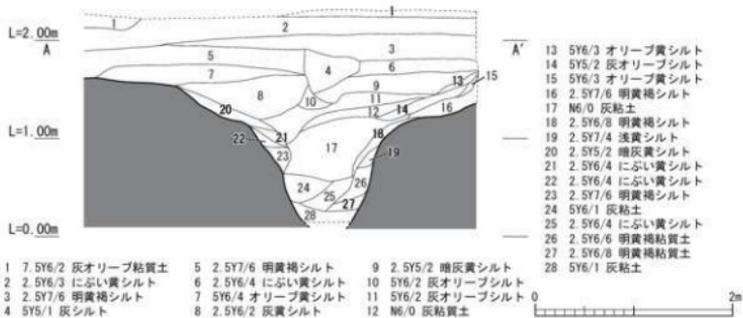
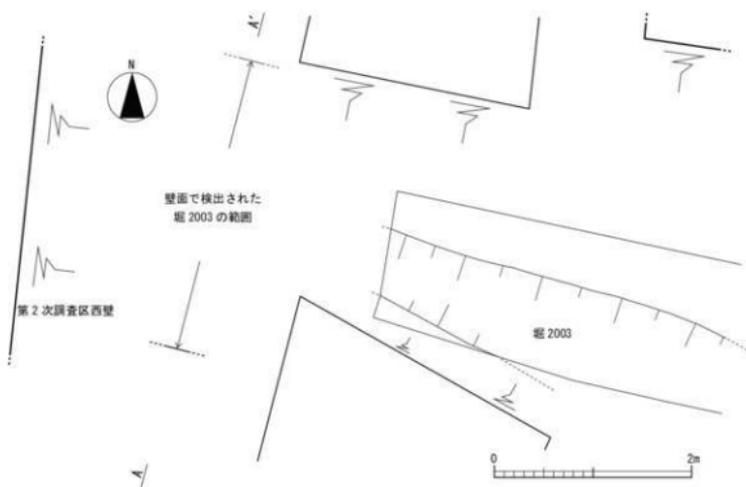


第406図 堀 2001・2002、SX2001 断面図

- 6 5/5/3 黄緑シルト
- 7 7.5/6/1 灰粘質土
- 8 2.5/7/6 明黄緑シルト
- 9 1/6/0 灰シルト
- 10 2.5/7/4 黄灰粘質土
- 11 5/6/2 灰オリーブ粘質土
- 12 1/6/0 灰粘土
- 13 7.5/6/1 灰粘土
- 14 1/6/0 灰粘土
- 15 2.5/6/6 明黄緑シルト
- 16 2.5/6/6 明黄緑シルト
- 17 5/6/2 灰オリーブ粘質土
- 18 5/6/1 灰粘質土
- 19 1/6/0 灰粘土
- 20 5/6/1 灰粘土
- 21 2.5/6/1 灰オリーブ粘質土
- 22 1/6/0 灰粘土
- 23 2.5/5/3 黄緑シルト
- 24 2.5/5/2 暗黄緑粘質土
- 25 2.5/0/6 明黄緑シルト
- 26 2.5/0/6 明黄緑粘質土
- 27 2.5/5/4 黄緑シルト
- 28 2.5/6/6 明黄緑シルト
- 29 1/6/0 灰粘土



第407図 堀2001周辺出土遺物実測図



第408図 堀2003平・断面図

## 堀 2-3 [堀 2003]

(検出地点)

2-I区 [中グリッド (a-9)・小グリッド (S-1~2, T-1~2)]

(形態等)

2-I区の西端で検出された東西方向に延びる堀。標高 1.6 m の地点から掘り込まれた堀で、法面は、上方 1/3 は 20° 程度の緩やかな傾斜であるが、そこから約 70° の急勾配となる。断面は V 字形を呈する薬研堀である。深さは約 1.6 m を測る。

## ②溝 (SD)

### 溝 2-1 [SD2001]

(検出地点)

1-II区、2-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (F-1~2)]

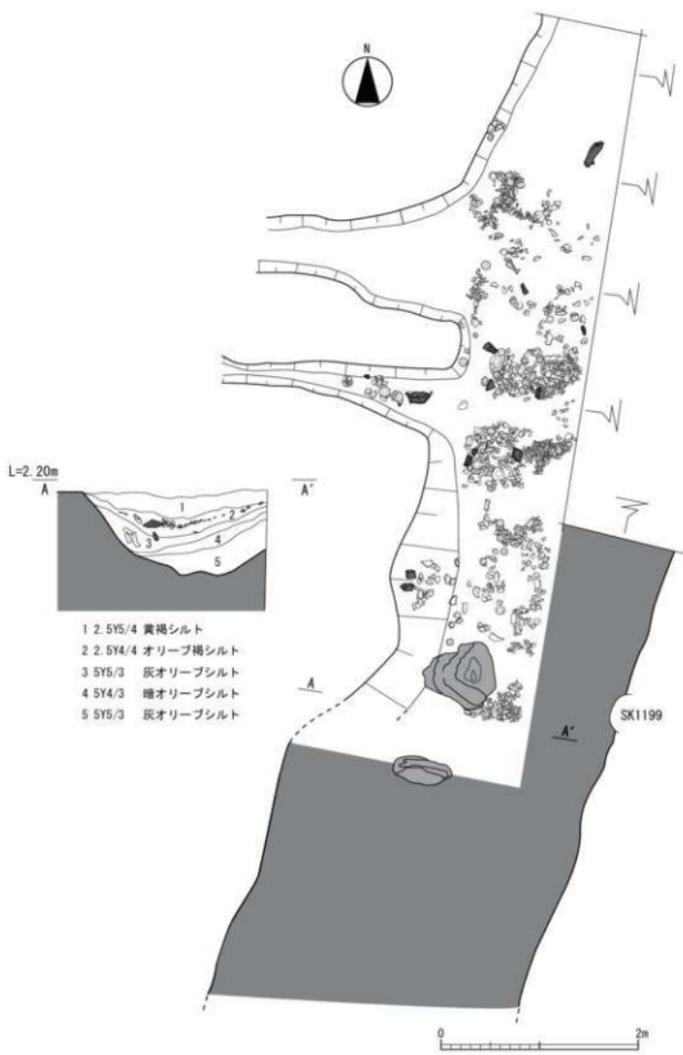
(形態等)

SB1001 及び庭 1001 の下層を南北に延びる溝。最大幅 4 m、深さ約 80cm で断面は舟底形を呈する。溝からは大量の土師質土器皿が出土した。

(出土遺物) (第 410 ~ 412 図)

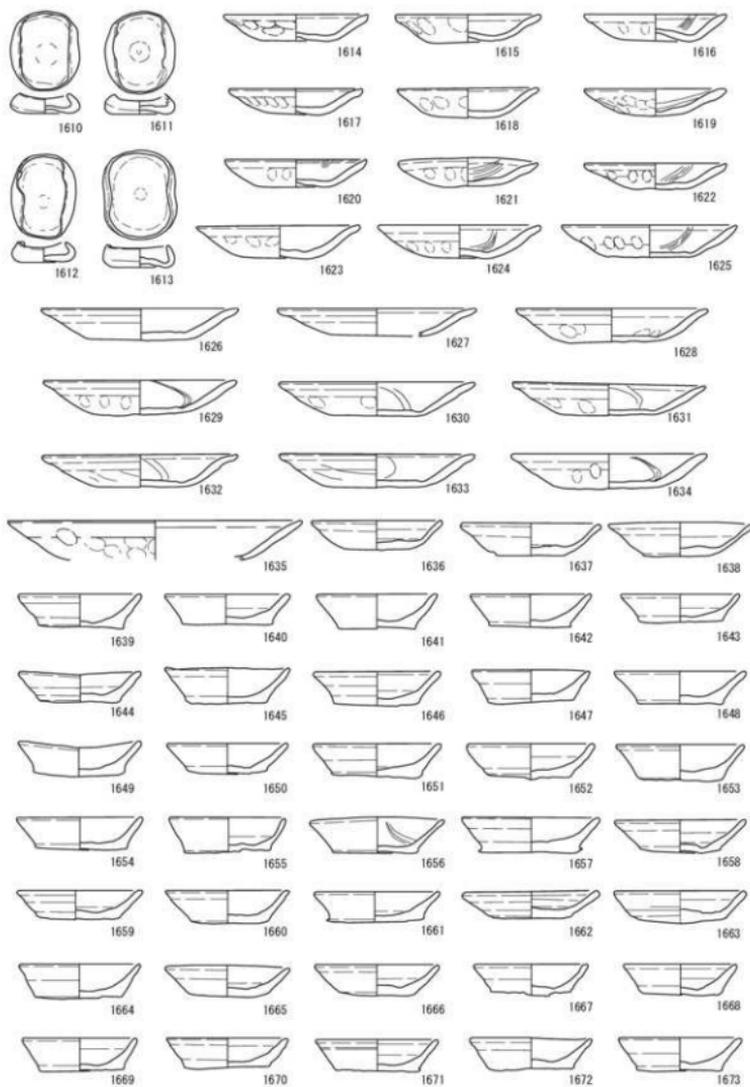
1610~1635 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系を呈する。1610~1613 は口縁部を両端からつまみ込んだ形状のいわゆる耳皿である。1614~1622 は口径が 9cm 弱で、内面には「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。1623・1624 は口径 9.9cm を測る。内底面を強くヨコナデしており、1623 は「2」の字状、1624 は「の」の字状にナデ上げる。1625~1634 は口径が 11cm~12cm を測る。内底面端を強くヨコナデした後、1625 は「の」の字状に、1626~1634 は「2」の字状にナデ上げる。1635 は口径が 18.0cm に復元される。

1636~1716 はロクロ成形による土師質土器皿である。1636~1638 はやや内彎気味に立ち上がる体部を持つ口径 8.5cm 前後の皿で、底部に静止糸切りの痕跡を留める。1639~1678 は逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる体部を持つ皿で、口径は 8cm 前後である。底部には回転ヘラ切りの痕跡を留めており、板状痕が見られるものもある。1679~1681 は底部に回転ヘラ切りの痕跡を留め、逆「ハ」の字状の体部を持つ皿で、体部をやや薄く仕上げる。外底部端をヘラで丸く仕上げる。1682~1693 は体部が短く直立する皿で、口径は 8cm 前後、器高は 1.5cm 前後を測る。底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。1694 は、逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる体部を持つ皿で、口径は 8.8cm を測る。底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。1695~1697 は厚い器壁を持つ皿で、胎土はやや粗い。底部には回転ヘラ切りの痕跡を留め、1697 には板目痕が認められる。1698 はやや内彎気味に立ち上がる体部、1699 はやや外反する体部を持ち、口径はそれぞれ 11.8cm、12.8cm に復元される。底部には回転ヘラ切りの痕跡を留め、外底部端をヘラで丸く仕上げる。1700~1716 は深型の皿で口径は 12~13cm、器高は 3cm 前後を測る。やや内彎気味に立ち上がる体部を持ち、底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。



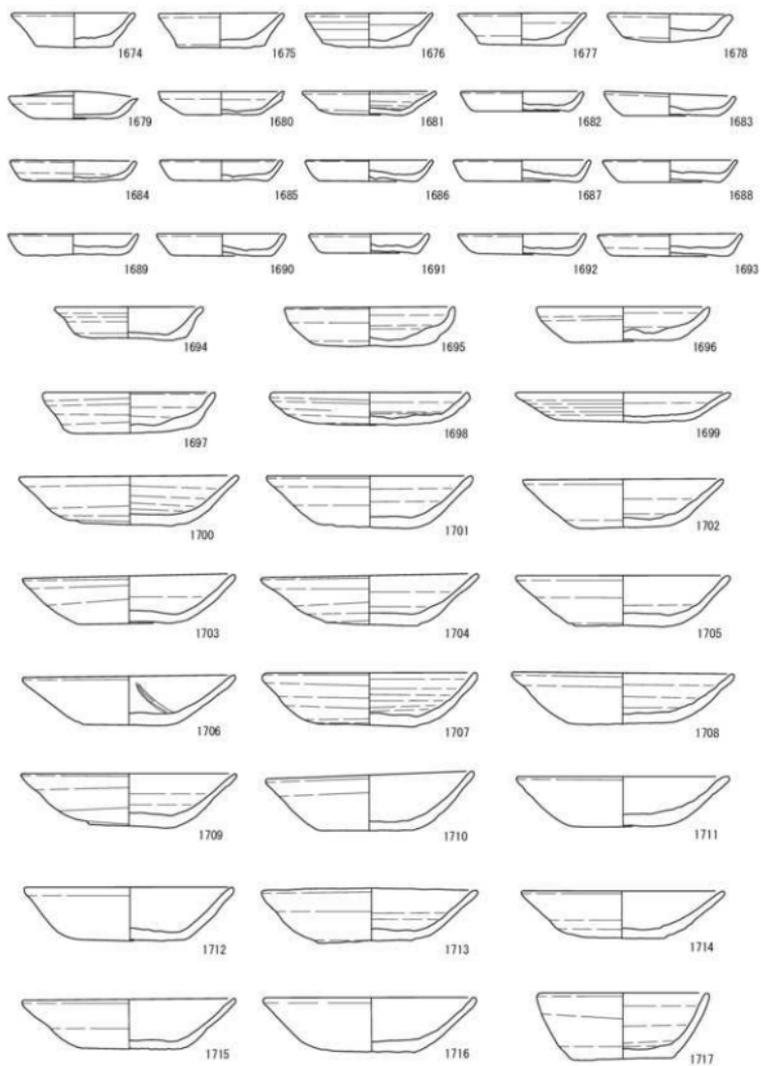
- 1 2. 5Y5/4 黄褐シルト
- 2 2. 5Y4/4 オリーブ褐シルト
- 3 5Y5/3 灰オリーブシルト
- 4 5Y4/3 暗オリーブシルト
- 5 5Y5/3 灰オリーブシルト

第 409 図 SD2001 平・断面および遺物出土状況図

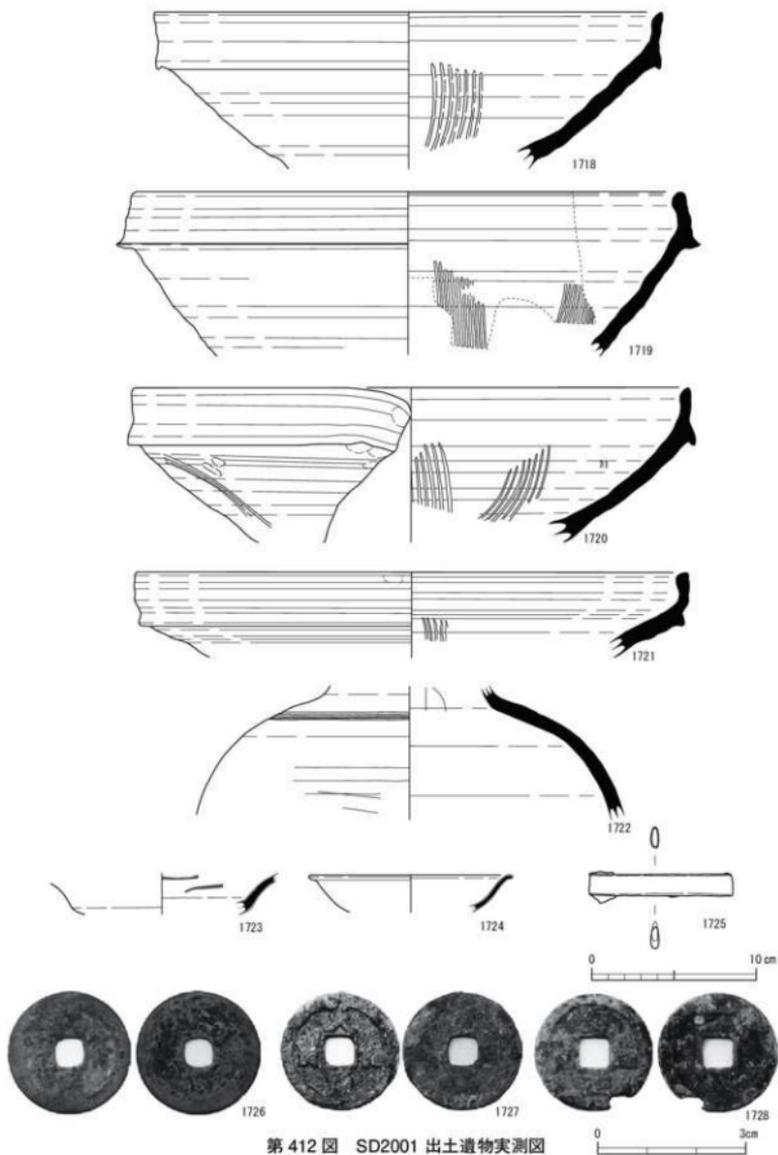


第 410 图 SD2001 出土遗物实测图





第 411 图 SD2001 出土文物实测图



第 412 図 SD2001 出土遺物実測図

1717 は土師質土器杯で口径 10.3cm、器高 4.0cm を測る。底部には静止糸切りの痕跡を留める。

1718～1721 は備前焼播鉢である。1718～1720 は間壁編年のⅣ期に相当し、口縁帯はほぼ直立し外面をヨコナデで仕上げる。1721 は口縁帯外面に弱い凹線が認められる。Ⅴ期に相当する。1722 は備前焼壺で、肩部に髷書きの凹線が認められる。

1723 は青磁襷花皿の腰部で、内面に片切彫りによる文様が施される。

1724 は白磁端反り皿である。

1725 は銅製の小柄。

1726 は祥符通寶で 1008 年初鑄、1727 は真書体の天禧通寶で 1017 年初鑄、1728 は篆書体の紹聖元寶で 1094 年初鑄。いずれも北宋銭である。

## 溝 2-2 [SD2002]

〈検出地点〉

1-Ⅱ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (F-2~3)]

〈形態等〉

南北方向に延びる溝で、延長が 1.7 m、幅が 0.1~0.3 m、深さが 0.05 m の規模で検出した。方位は N-15°E で、断面形状は皿形を呈する。

〈出土遺物〉(第 414 図)

1729 は手づくね成形による土師質土器皿である。口径 12.9cm に復元される。内底部端に強いヨコナデによる凹線が認められ、「2」の字状にナデ上げる。色調は橙色系を呈する。

## ③小穴 (SP)

### 小穴 2-1 [SP2001]

〈検出地点〉

1-Ⅰ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約 40cm の円形で、深さ 25cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、手づくね成形による土師質土器皿の小片が 1 点あるが、図化できなかった。

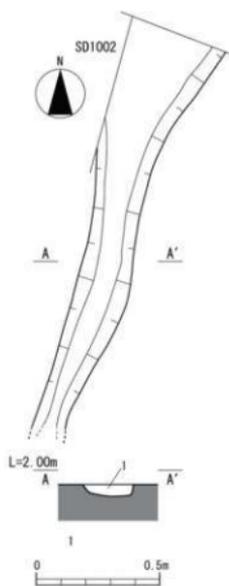
### 小穴 2-2 [SP2002]

〈検出地点〉

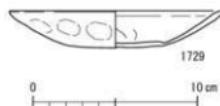
1-Ⅰ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

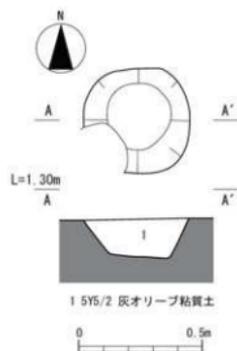
平面形は直径約 38cm の円形で、深さ 15cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。



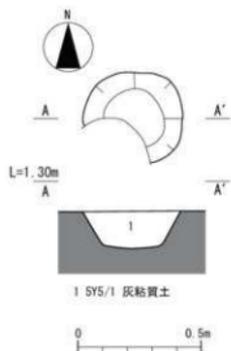
第 413 図 SD2002 平・断面図



第 414 図 SD2002 出土遺物実測図



第 415 図 SP2001 遺構平・断面図



第 416 図 SP2002 遺構平・断面図

### 小穴 2-3 [SP2003]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約 34cmの円形で、深さ 19cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、ロクロ成形による土師質土器皿の小片が 2 点と鉄釘片が 2 点あるが、図化できなかった。

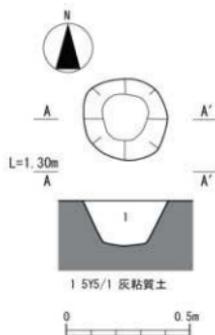
### 小穴 2-4 [SP2004]

〈検出地点〉

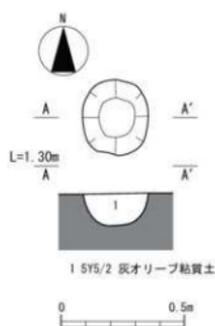
1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は長径 31cm、短径 26cmの楕円形で、深さ 12cmを測る。断面形状は碗形を呈する。



第 417 図 SP2003 遺構平・断面図



第 418 図 SP2004 遺構平・断面図

### 小穴 2-5 [SP2005]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は長径約 48cm、短径約 32cmの楕円形で、深さ 14cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、手づくね成形による土師質土器皿の小片が 1 点あるが、図化できなかった。

### 小穴 2-6 [SP2006]

〈検出地点〉

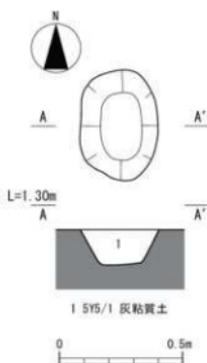
1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-18)]

〈形態等〉

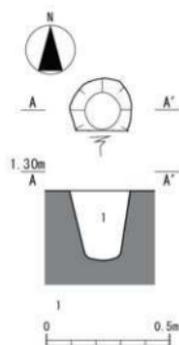
平面形は直径約 30cm の円形で、深さ 30cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、釘片が 1 点あるが、図化できなかった。



第 419 図 SP2005 遺構平・断面図



第 420 図 SP2006 平・断面図

### 小穴 2-7 [SP2007]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約 40cm の円形で、深さ 18cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉 (第 422 図)

1730 は永楽通寶で、1408 年初鋳の明銭である。

### 小穴 2-8 [SP2008]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は一辺が約 20cm の隅丸方形で、深さ 14cm を測る。断面形状は碗形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、手づくね成形による土師質土器皿の小片が10点あるが、図化できなかった。

小穴 2-9 [SP2009]

〈検出地点〉

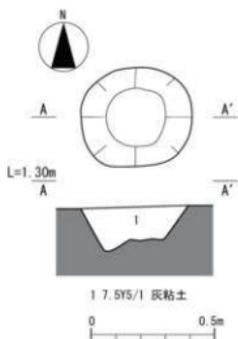
1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-18)]

〈形態等〉

直径約30cmの円形の北半部が平面で検出された。深さは9cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉

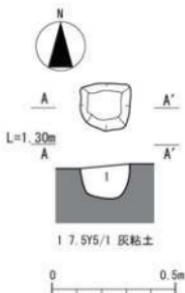
出土遺物は、手づくね成形による土師質土器皿の小片が1点あるが、図化できなかった。



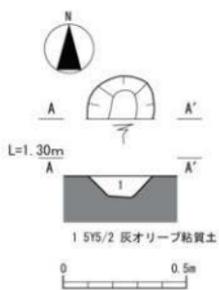
第 421 図 SP2007 平・断面図



第 422 図 SP2007 出土遺物



第 423 図 SP2008 遺構平・断面図



第 424 図 SP2009 遺構平・断面図

### 小穴 2-10 [SP2010]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

東西 68cm、南北方向は 22cm 幅で検出されたが、遺構のほぼ半分が南側調査区外へ広がる。深さは 13cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。

### 小穴 2-11 [SP2011]

〈検出地点〉

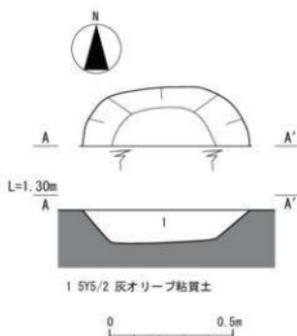
1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

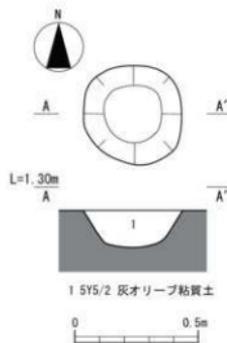
平面形は直径約 40cm の円形で、深さ 16cm を測る。断面形状は碗形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、土師質土器皿や備前焼の小片があるが、図化できなかった。



第 425 図 SP2010 遺構平・断面図



第 426 図 SP2011 遺構平・断面図

### 小穴 2-12 [SP2012]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約 18cm の円形で、深さ 12cm を測る。断面形状は碗形を呈する。

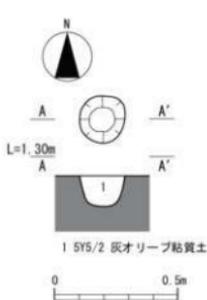
### 小穴 2-13 [SP2013]

〈検出地点〉

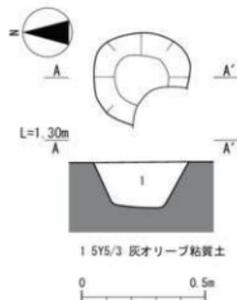
1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約 40cmの円形で、深さ 18cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。



第 427 図 SP2012 遺構平・断面図



第 428 図 SP2013 遺構平・断面図

### 小穴 2-14 [SP2014]

〈検出地点〉

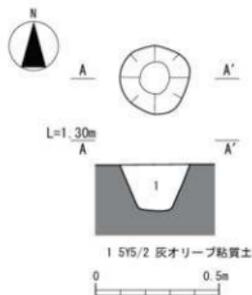
1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

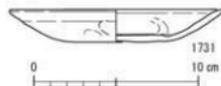
平面形は直径約 30cmの円形で、深さ 19cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉(第 430 図)

1731 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は橙色系を呈する。口径は 12.9cmに復元される。内底面端に強いヨコナデによる凹線が認められ、「2」の字状にナデ上げる。



第 429 図 SP2014 平・断面図



第 430 図 SP2014 出土遺物実測図

### 小穴 2-15 [SP2015]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約 18cmの円形で、深さ 16cmを測る。断面形状はU字形を呈する。

### 小穴 2-16 [SP2016]

〈検出地点〉

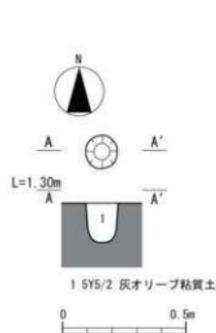
1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

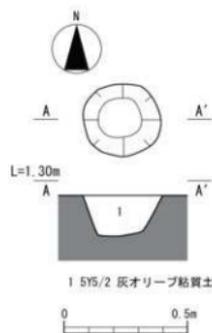
平面形は直径約 34cmの円形で、深さ 17cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、手づくね成形による土師質土器皿の小片があるが、図化できなかった。



第 431 図 SP2015 平・断面図



第 432 図 SP2016 遺構平・断面図

### 小穴 2-17 [SP2017]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約 30cmの円形で、深さ 17cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、ロクロ成形による土師質土器皿や焼締め陶器の小片があるが、図化できなかった。

### 小穴 2-18 [SP2018]

〈検出地点〉

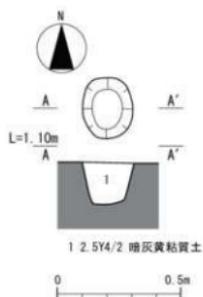
1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

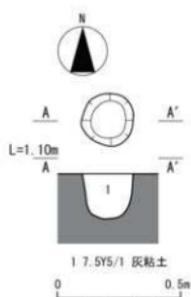
平面形は直径約 20cm の円形で、深さ 18cm を測る。断面形状は U 字形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、手づくね成形による土師質土器皿の小片があるが、図化できなかった。



第 433 図 SP2017 遺構平・断面図



第 434 図 SP2018 平・断面図

### 小穴 2-19 [SP2019]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約 28cm の円形で、深さ 15cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。

### 小穴 2-20 [SP2020]

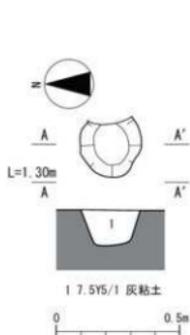
〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

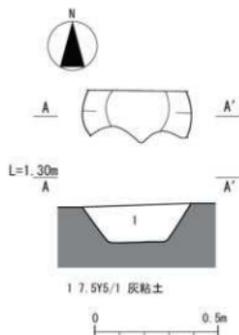
〈形態等〉

平面形は直径約 30cm の円形で、深さ 15cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。

以上 20 基の小穴は、1-1区で確認されている。調査範囲が狭小であるため建物の復元にまでは至らないが、ここには掘立柱建物跡の存在が推定される。



第 435 図 SP2019 遺構平・断面図



第 436 図 SP2020 遺構平・断面図

#### ④不明遺構 (SX)

##### 不明遺構 2-1 [SX2001]

〈検出地点〉

2-I 区 [中グリッド (b-8)・小グリッド (D-20)]

〈形態等〉

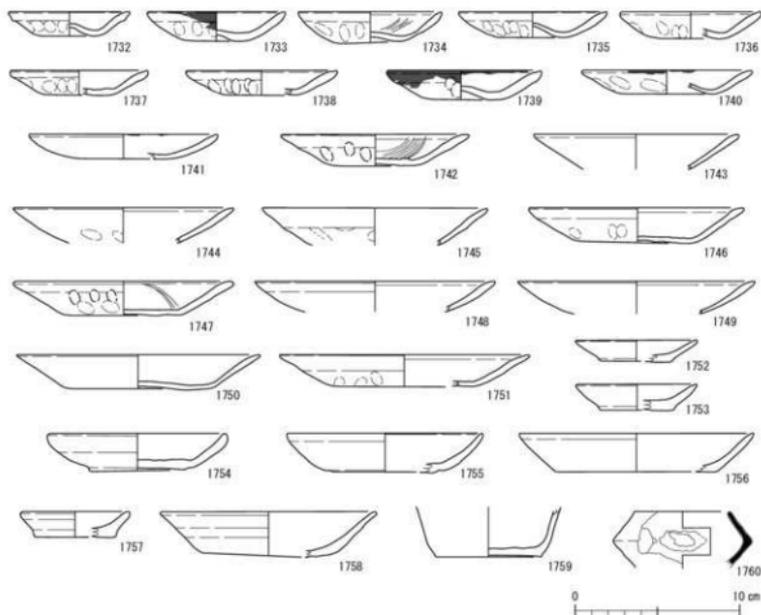
堀 2001、2002 とともに断面で確認した。堀 2002 の上面で小さな落ち込みが確認でき、堀 2001 の肩を切る。平面形、遺構の性格は不明である。

〈出土遺物〉(第 437 図)

1732~1751 は手づくね成形による土師質土器皿である。1732~1740 は口径が 9cm 前後となる。1732 は橙色系を呈し、突上げ底の底部には穿孔が認められる。1733~1740 は灰白色系を呈する。1733・1739・1740 の口縁部には煤が付着しており、灯明皿である。1741~1743 は口径が 11~12 cm で、色調は灰白色系を呈する。1742 の内底面端には強いヨコナデによる凹線が認められる。1744~1747 は口径が 13cm 前後で、色調は 1744 が橙色系、1745~1747 が灰白色系を呈する。1746・1747 の内底面端にはやや強いヨコナデの痕跡が認められ、「2」の字状にナデ上げる。1748~1751 は口径が 14cm 以上で、色調は 1748~1750 が灰白色系、1751 が橙色系を呈する。

1752~1758 はロクロ成形による土師質土器皿で、底部切り離し技法が 1752~1756 は静止糸切り、1757・1758 は回転ヘラ切りである。1752・1753 は平たい底部から逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる体部を持つ。口径は 7.2cm に復元される。1754・1755 はやや内嚮気味、1756 は直線的に立ち上がる体部を持つ。1757 は平たい底部から逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる体部を持ち、1758 は深型の皿である。1759 は土師質土器杯で、底部には静止糸切りの痕跡を留める。

1760 は瀬戸美濃焼の鉄釉の製品で、鳥の胴鉢である。算盤の珠状の形状を呈する。



第 437 図 SX2001 出土遺物実測図

## 不明遺構 2-2 [SX2002]

〈検出地点〉

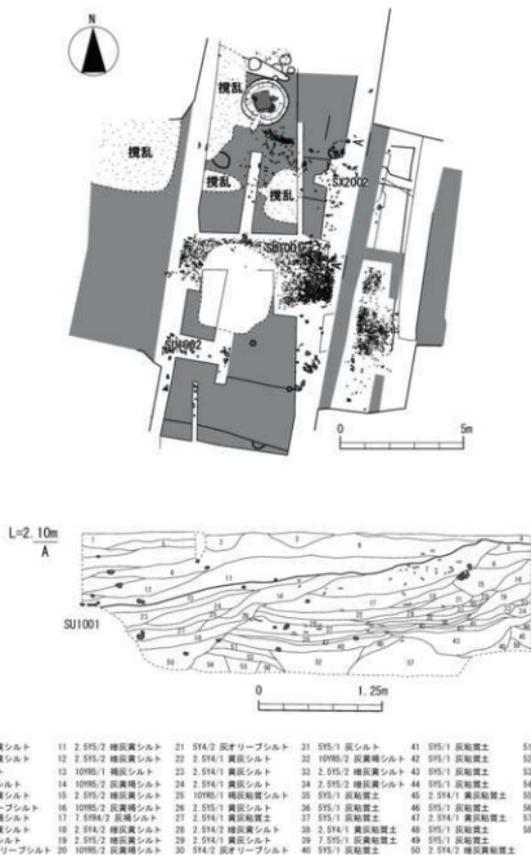
14-Ⅲ区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (G-19)]

〈形態等〉

石敷遺構 SU1001 及びその下層の確認のために設定したトレンチにおいて、断面観察で確認された。SU1001 に切られる形で検出されている。

〈出土遺物〉

1761～1764 は手づくね成形による土師質土器皿で、色調は灰白色系を呈する。1761・1762 は口径 9cm 程度で、底部はやや突上げ底、内面に「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。1763・1764 は口径が 11.5cm 程度で、内底面端にやや強いヨコナデによる凹線が走り、「2」の字状のナデ上げ痕が認められる。1765～1768 はロクロ成形による土師質土器皿で、底部には静止糸切りの痕跡を留める。1765・1768 の口縁部には煤が付着する。1769～1771 は土師質土器杯である。1769・1770 は体部が直線的に立ち上がり、底部には静止糸切りの痕跡が認められる。1771 はやや外反する体



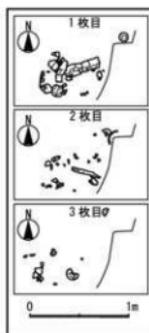
第438図 SX2002 平・断面図

部を持ち、外面に「太」の墨書が認められる。

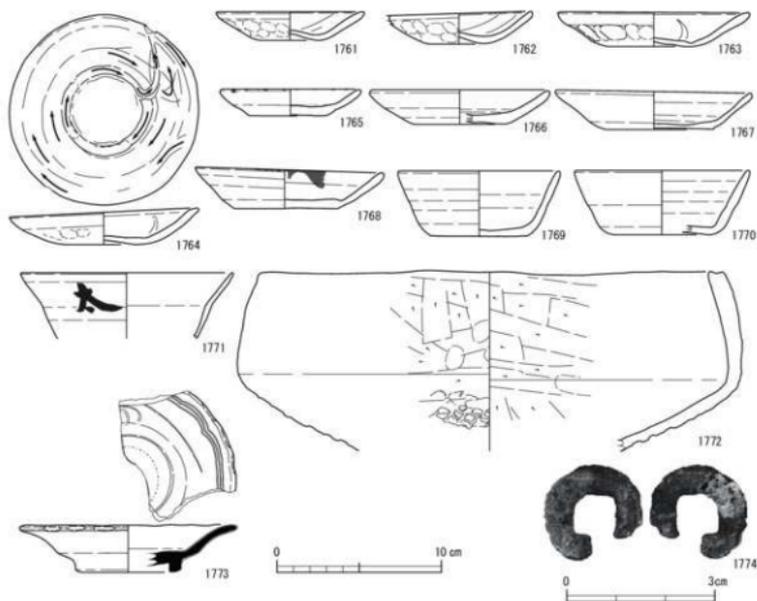
1772は土師質土器鍋である。口径は28.0cmを測り、端部には凹線が巡る。内外面とも、板ナゲによる仕上げ、外底面には格子目状のタタキが認められる。

1773は青磁綾花皿である。体部内面に片切りによる草花文、口縁部内面には櫛描きによる3条の沈線が認められる。

1774は無文銭。



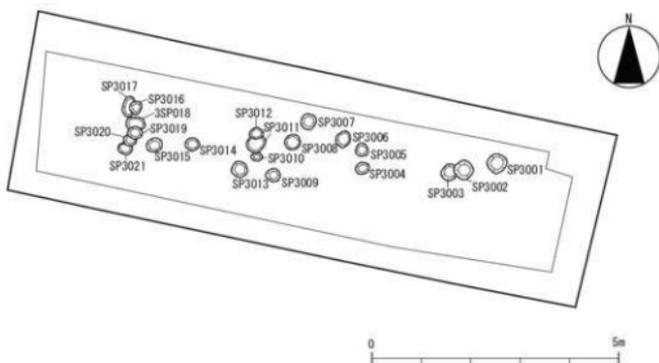
第 439 图 SX2002 沟状遗構出土状況图



第 440 图 SX2002 出土遺物実測图

### (3) 第3遺構面

第3遺構面の調査は1-I区のみで実施している。検出遺構としては小穴があり、以下ではそれらを報告する。



第441図 1-I区第3遺構面遺構配置図

#### ①小穴 (SP)

##### 小穴 3-1 [SP3001]

〈検出地点〉

1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約40cmの円形で、深さ34cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

##### 小穴 3-2 [SP3002]

〈検出地点〉

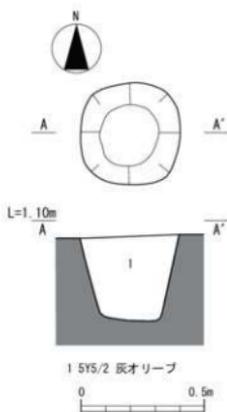
1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

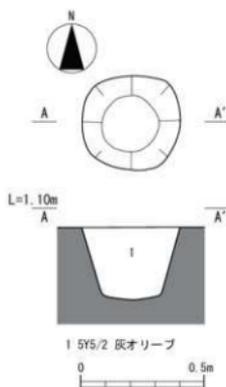
平面形は直径約40cmの円形で、深さ30cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、手づくね成形及びロクロ成形による土師質土器皿の小片があるが、図化できなかった。



第442図 SP3001 平・断面図



第443図 SP3002 平・断面図

#### 小穴 3-3 [SP3003]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径30~34cmの円形で、深さ16cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、手づくね成形による土師質土器皿の小片や鉄釘があるが、図化できなかった。

#### 小穴 3-4 [SP3004]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約26cmの円形で、深さ19cmを測る。断面形状はU字形を呈する。

#### 小穴 3-5 [SP3005]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径24~28cmの円形で、深さ36cmを測る。断面形状はU字形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、ロクロ成形による土師質土器皿の小片があるが、図化できなかった。

### 小穴 3-6 [SP3006]

〈検出地点〉

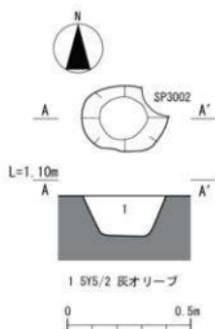
1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

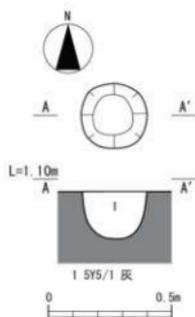
平面形は直径 30~36cmの円形で、深さ 33cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

〈出土遺物〉

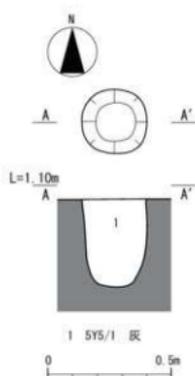
出土遺物は、手づくね成形による土師質土器皿の小片があるが、図化できなかった。



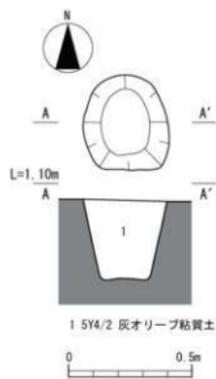
第 444 図 SP3003 平・断面図



第 445 図 SP3004 平・断面図



第 446 図 SP3005 平・断面図



第 447 図 SP3006 遺構平・断面図

### 小穴 3-7 [SP3007]

〈検出地点〉

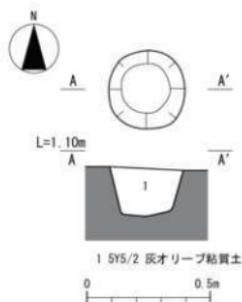
1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約 32cmの円形で、深さ 21cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

〈出土遺物〉(第 449 図)

1775 は、ロクロ成形による土師質土器皿で、底部には回転ヘラ切りの痕跡を留める。口径は 11.8cmに復元され、端反りの形状を呈する。



第 448 図 SP3007 平・断面図



第 449 図 SP3007 出土遺物実測図

### 小穴 3-8 [SP3008]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径約 30cmの円形で、深さ 17cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

〈出土遺物〉

出土遺物は、ロクロ成形による土師質土器皿や備前焼の小片があるが、図化できなかった。

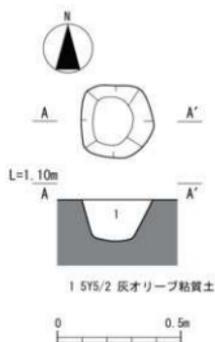
### 小穴 3-9 [SP3009]

〈検出地点〉

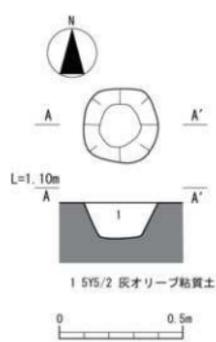
1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (T-19)]

〈形態等〉

平面形は直径 26~30cmの円形で、深さ 14cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。



第450図 SP3008 遺構平・断面図



第451図 SP3009 遺構平・断面図

#### 小穴 3-10 [SP3010]

〈検出地点〉

1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は直径18~22cmの円形で、深さ13cmを測る。断面形状はU字形を呈する。

#### 小穴 3-11 [SP3011]

〈検出地点〉

1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は直径35cm前後の円形で、深さ14cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。

#### 小穴 3-12 [SP3012]

〈検出地点〉

1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

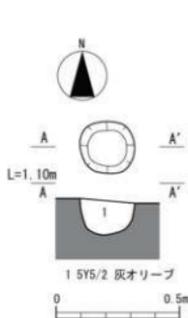
〈形態等〉

平面形は直径24~26cmの円形で、深さ14cmを測る。断面形状はU字形を呈する。

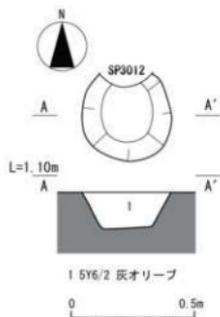
#### 小穴 3-13 [SP3013]

〈検出地点〉

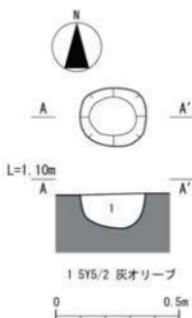
1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]



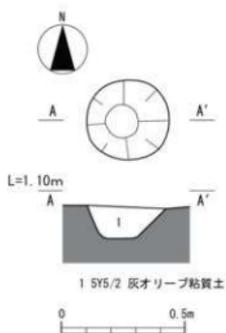
第 452 図 SP3010 平・断面図



第 453 図 SP3011 平・断面図



第 454 図 SP3012 平・断面図



第 455 図 SP3013 平・断面図

〈形態等〉

平面形は直径 32～34cm の円形で、深さ 13cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。

#### 小穴 3-14 [SP3014]

〈検出地点〉

1-1 区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は直径 28～30cm の円形で、深さ 27cm を測る。断面形状は U 字形を呈する。

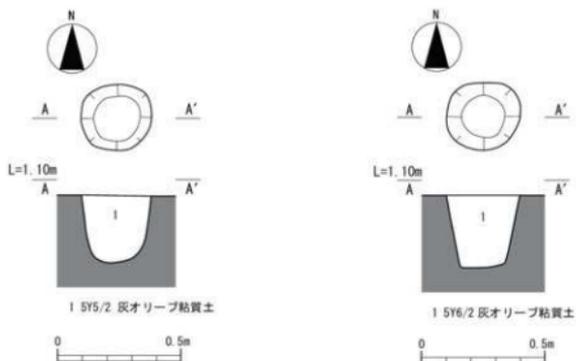
### 小穴 3-15 [SP3015]

〈検出地点〉

1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は直径 28~30cmの円形で、深さ 31cmを測る。断面形状は箱形を呈する。



### 小穴 3-16 [SP3016]

〈検出地点〉

1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は直径 24~26cmの円形で、深さ 16cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

### 小穴 3-17 [SP3017]

〈検出地点〉

1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は長径 42cm、短径約 28cm南北軸の楕円形で、深さ 16cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

### 小穴 3-18 [SP3018]

〈検出地点〉

1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は長径 38cm、短径約 24cmの楕円形で、深さ 16cmを測る。断面形状は箱形を呈する。

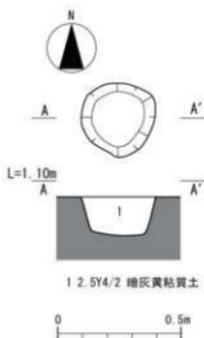
### 小穴 3-19 [SP3019]

〈検出地点〉

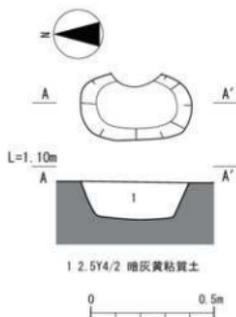
1-I区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

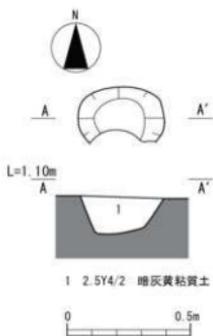
平面形は長径 30cm、短径 24cmの楕円形で、深さ 20cmを測る。断面形状は箱形を呈する。



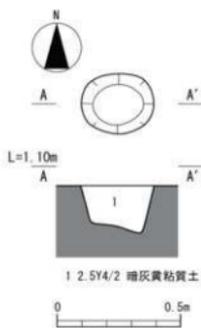
第 458 図 SP3016 遺構平・断面図



第 459 図 SP3017 遺構平・断面図



第 460 図 SP3018 遺構平・断面図



第 461 図 SP3019 遺構平・断面図

### 小穴 3-20 [SP3020]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は直径 22cmの円形で、深さ 16cmを測る。断面形状はU字形を呈する。

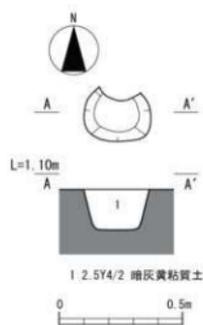
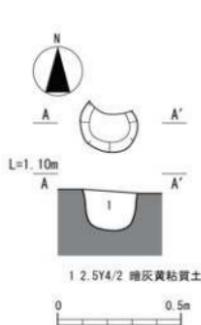
### 小穴 3-21 [SP3021]

〈検出地点〉

1-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (S-19)]

〈形態等〉

平面形は直径 28cmの円形で、深さ 17cmを測る。断面形状は箱形を呈する。



以上 21 基の小穴が見つかった。調査区が狭く、建物の復元にまでは至らないが、SP3001、3002、3003、3004、3009、3013 及び SP3006、3008、3011、3014、3015、3021 は東西軸から約 4° 南に振った角度で一直線に並んでおり、ここには掘立柱建物があったことが推定される。

#### (4) 包含層等

以下、包含層等から出土した遺物を紹介する。(第463～482図)

1776～1802は手づくね成形による土師質土器皿である。1776は口縁部を両側からつまんだ形状の耳皿である。1777は口径4.8cmに復元される小皿である。1778～1786は口径が8～9cm程度の皿で、色調は橙色系を呈する。内面には「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。端部を鋸歯状に刻み込むもの(1778)や、口縁部の2箇所に片口状の窪みが穿たれるもの(1780)、底部に2～3mmの孔が2箇所穿たれたもの等もある。1785・1786の口縁部にはタールが付着しており、灯明皿である。1787～1794は口径が8～9cm程度の皿で、色調は灰白色系を呈する。内面には「の」の字状のナデ上げ痕が認められ、底部はやや突上げ底となる。1787は灯明皿で、口縁部の内外面及び体部から底部にかけての外面にタール状のものが付着している。1795～1798は口径が13～14cm程度の皿で、色調は橙色系を呈する。内底面端にはやや強いヨコナデが認められ、「2」の字状のナデ上げ痕を留める。1799～1802は色調が灰白色系を呈する。内底面端にはやや強いヨコナデが認められ、「2」の字状のナデ上げ痕を留める。

1803～1824はロクロ成形による土師質土器皿である。1803～1806は底部に静止糸切りの痕跡を留める皿で、体部が逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がるもの(1803・1804)、やや内彎気味に立ち上がるもの(1805・1806)がある。1807～1824は底部に回転ヘラ切りの痕跡を留める皿で、1807～1809は逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる体部を持つ。1810～1822は胎土がやや粗く、器壁も厚い。粗製品である。1823・1824はやや深いタイプの皿で、端反りの形状を持つ。

1825～1827は土師質土器杯で、底部には1825は静止糸切り1826・1827は回転ヘラ切りの痕跡を留める。1825の体部外面には「茲」の文字が横向きに墨書される。

1828は土師質土器の短頸壺である。体部最大径は11.4cmを測る。

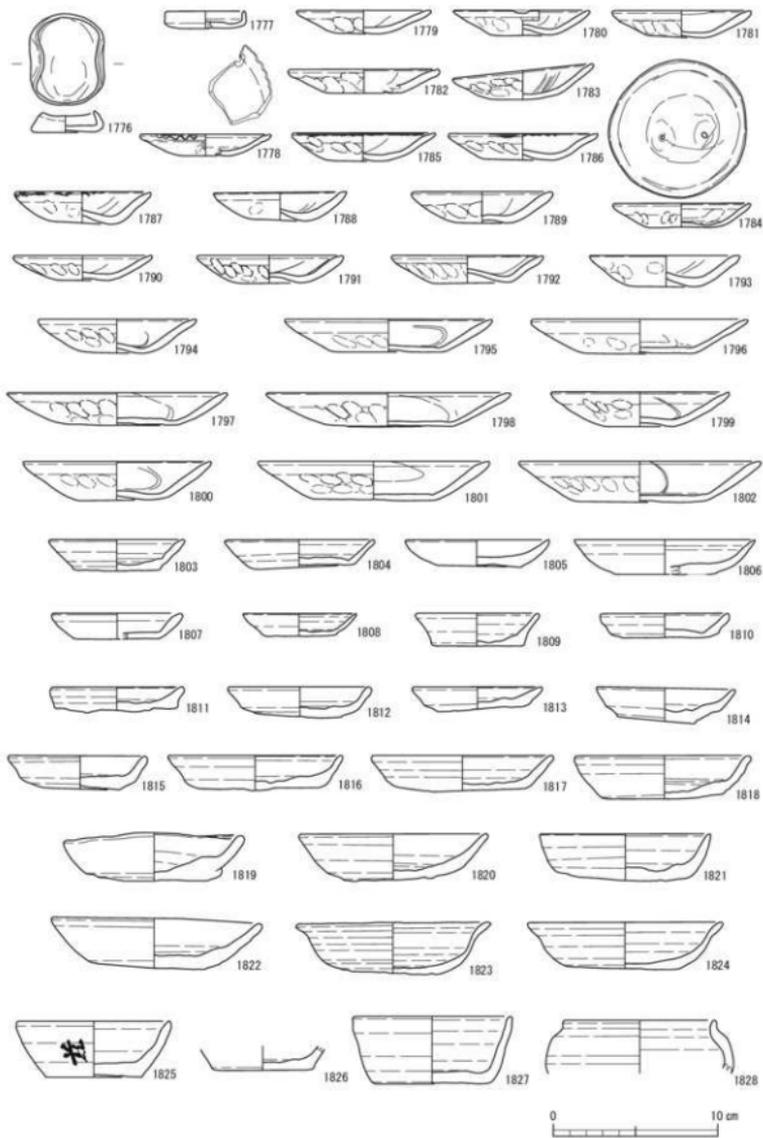
1829は土師質土器播鉢である。摩滅が激しいが、内面には播り目が認められる。

1830～1838は土師質土器鍋である。1830～1832は体部外面下半に平行タキの痕跡を留める。端部をやや外反する形状を有する。1833～1838は口縁部と鈎部が形骸化した形状を持ち、底部外面に格子目タキの痕跡を留める。

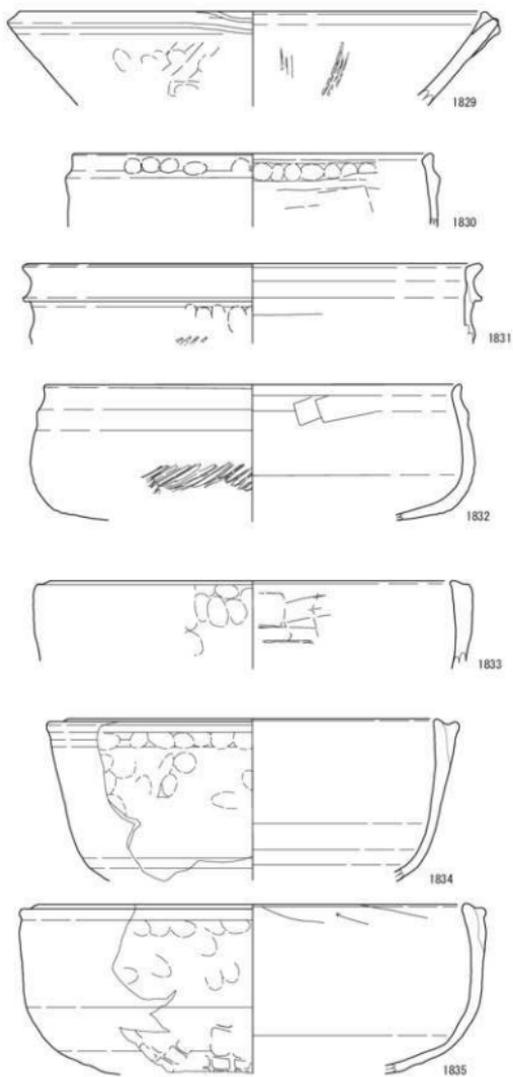
1839は口径30.8cm、1840は口径が51cmに復元される土師質の製品である。丸い形状の体部を持ち、端部を内面に折り曲げ、上面を平らに仕上げる。

1841は土師質土器壺である。口径は14.2cmに復元される。

1842～1848は瓦質土器である。1842は椀で貼付高台が付く。1843は口径11.1cmに復元される製品である。調整は内外面磨き仕上げで、口縁部外面には四角を四つ入れ子にした文様を連続して施す。1844は口径が27.6cmに復元される。直線的に立ち上がる体部を持ち、端部を小さく外方に折り曲げる。1845～1848は風炉である。1845・1846は体部が直立して立ち上がり、口縁部付近に1条の凸帯を巡らせる。立石分類の風炉Ⅲに相当すると思われる。1847は口縁部を直立させた短頸壺形で、口縁部外面は2条の凸帯により区画され、竹管文「◎」のスタンプが押捺されている。肩部には形状の異なる火窓を2箇所有する。1848は風炉で最大径は35cmに復元される。内面

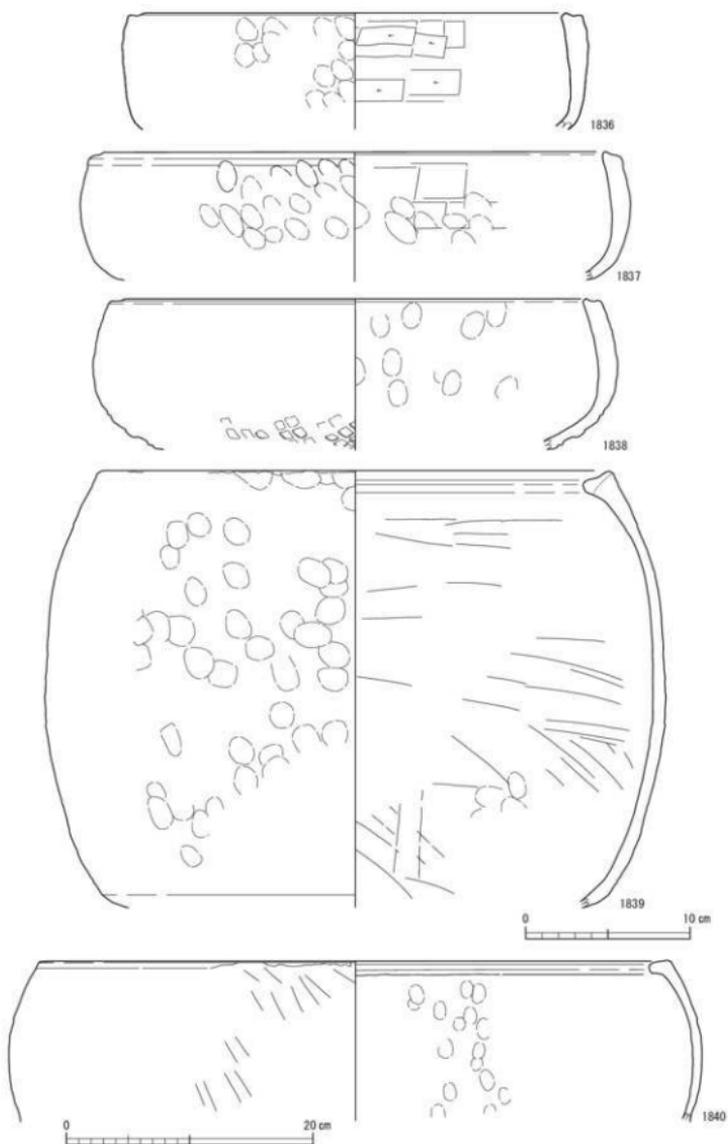


第 464 图 包含層 出土遺物実測図

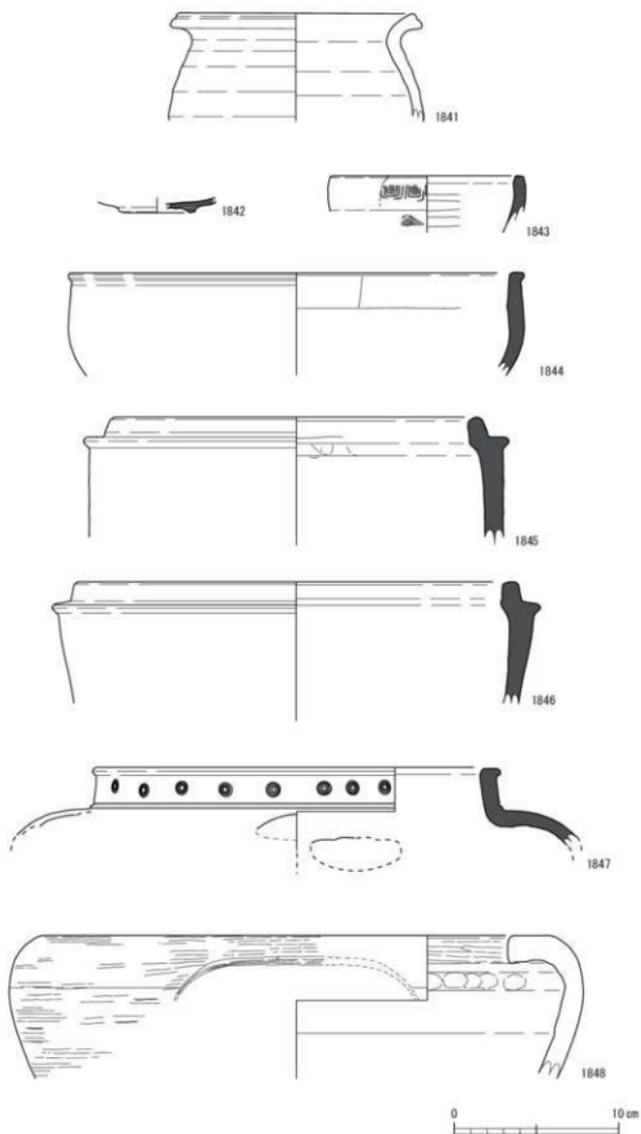


0 10 cm

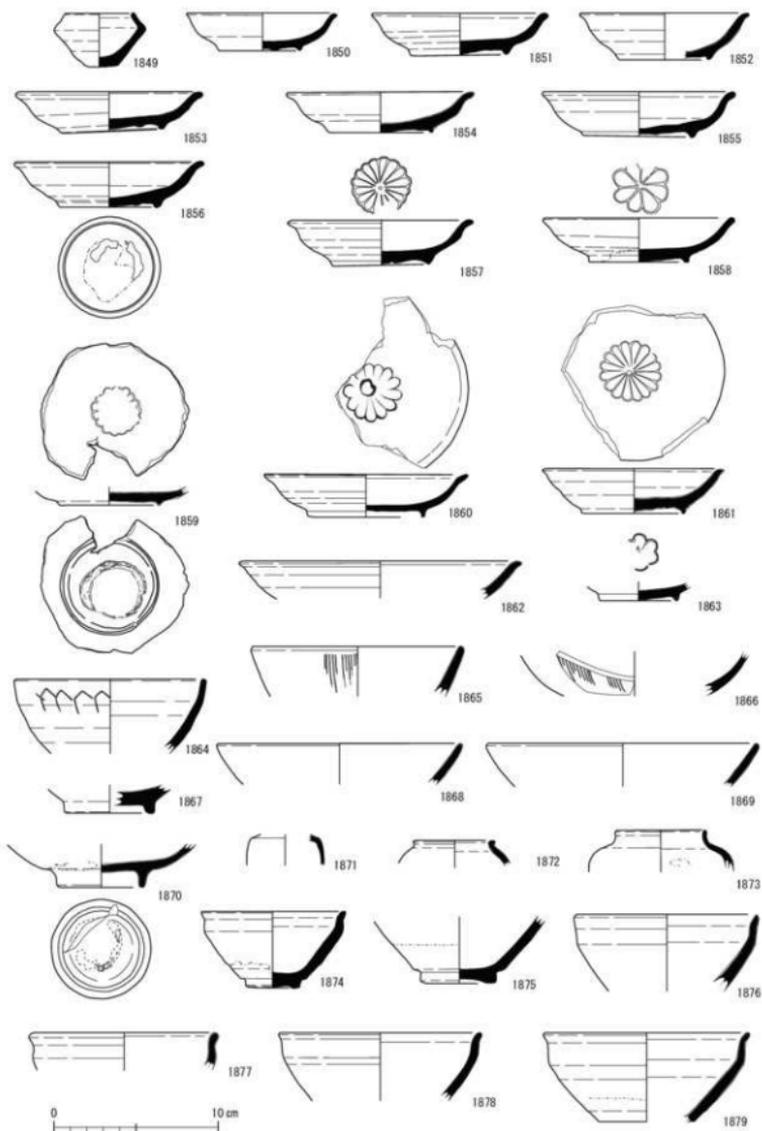
第465图 包含層出土遺物実測図



第 466 図 包含層 出土遺物実測図



第 467 图 包含層 出土遺物実測図



第 468 图 包含層 出土遺物実測図

はユビオサエと板ナデ、外面はミガキで仕上げる。

1849～1883は瀬戸美濃焼の製品で、1849～1870は灰釉、1871～1883は鉄釉が施される。1849は餌鉢である。体部下方は回転ケズリによる直線的な立ち上がりで、口縁部は内傾する。1850～1863は皿で、内彎気味の体部を持ち端部は外反する。見込に菊文や8弁花のスタンプを施されたものもある。1864～1870は碗である。体部外面には1864には連弁文のスタンプ、1865・1866には柳描文が施される。1871～1873は茶入れてで、肩が張り出した形状の肩衝茶入れ（1871）や横広の形状の大海茶入れ（1873）などがある。1874～1881は天目茶碗である。直線的に立上がる体部から口唇部は直立し、端部は外反する。1882は平碗で、体部は大きく開く形状を呈する。1883は壺である。

1884～1913は備前焼である。1884は皿で、内外面とも回転ナデ、底部には回転系切りの痕跡が残る。1885・1886は鉢である。1885の見込には柳描きによる波状文が認められる。1887～1896は播鉢である。1887は内傾した口縁帯を持ち、8条/2.6cmの播り目が認められる。間壁編年のⅣ期に相当する。1888～1896はほぼ直立した口縁帯に弱い凹線が巡る。間壁編年のⅤ期に相当する。1897は用途・器種不明の製品である。本体となる何らかの容器等に接着されていたものと考えられる。1898・1899は小壺である。1898の底部には回転系切り痕、板目痕が認められる。1899の内部には鉄屑・スラグを含んでおり、底部には鉄分が沈着した土がみられた。これらの製品はお歯黒壺としての用途が考えられるが、お歯黒の材料となる鉄漿水の痕跡の可能性も考えられる。1900～1905は壺で、頸部は外傾し、端部は玉縁状を呈する。肩部に柳描の波状文がみられる製品もある（1900・1901・1904）。1906～1911は甕で、端部は玉縁状に取める。1910・1911の口縁部の外面には凹線が巡る。間壁編年Ⅴ期に相当する。1912・1913は壺、或いは甕の体部である。1912の体部には2条の沈線、1913の体部には柳目が認められる。

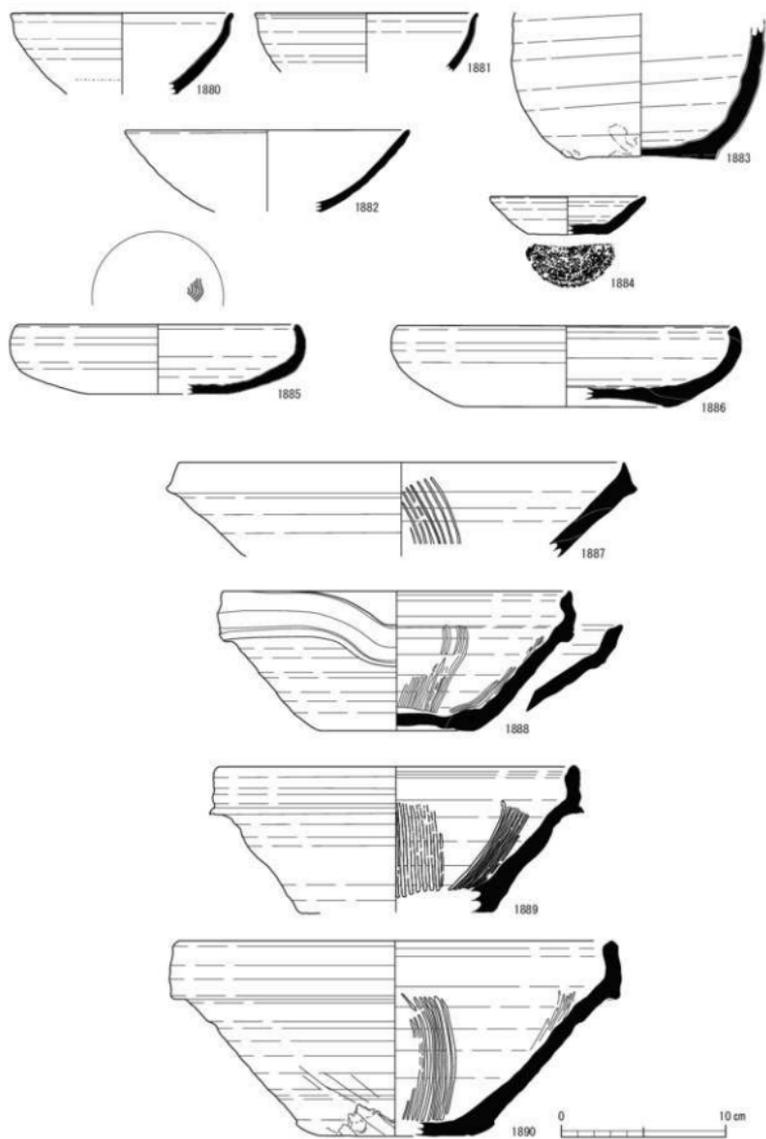
1914は常滑焼の甕の口縁である。端部をN字状に折り曲げる。

1915～1957は青磁である。1915～1925は皿で、1915～1917は口折皿。1916の外面には片切彫りの蓮弁文が入る。1918～1923は腰折皿である。1919・1920は稜花皿で、稜線にあわせて柳描文と内面に唐草の文様が認められる。1924は精緻な胎土で、高台をシャープに削り出す。見込は蛇の目軸割ぎである。1925は薄手の輪花皿である。明緑灰色の軸が薄くかかる景德鎮窯の製品である。1926～1946は碗である。1926は外面下部に線描きの芭蕉葉文が施される。薄手で、1925と同様に明緑灰色の軸が薄くかかっており、景德鎮窯の製品である。1927は片切彫の蓮弁文を持ち、上田分類のBⅠ類に相当する。1928は丸彫りによって蓮弁を表現しておりBⅢ類に相当する。1929～1938は線描の蓮弁文が施されるBⅣ類である。細線と剣頭が蓮弁としての単位を意識して施されるもの（1929）と意識されないもの（1930～1938）がある。1939は口縁部の内外面に雷文が施される。C類である。1940は底部の破片で体部外面にはヘラ削り痕が明瞭に認められる。D類の製品と思われる。1941～1945は口縁部の内彎する製品で、見込に「頼氏」銘や印花文を持つものがある。E類に相当する。1946は青磁碗の底部で、軸が畳付を越えて高台内面途中までかかり、外底は無軸である。見込に花文と「太」の文字が描かれる。1947～1951は盤である。

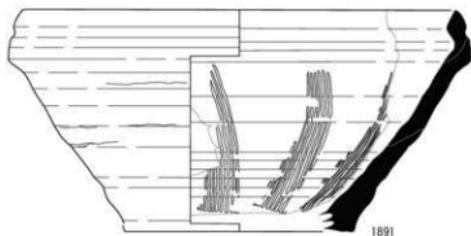
1947は櫛目文の折縁盤、1948筋蓮弁文の直口盤、1951は筋蓮弁文の折縁盤である。1952～1956は香炉である。1952・1953の体部下端には短い脚が貼り付けられており、底部には高台を持つ。1954の脚には幾何学文様が陽刻されている。1955は肉厚で大ぶりの製品である。1956は脚部で、獸足を象っている。1957は口折の鉢である。口縁はきめ細かい波縁としており、内面に構書の波状文を施す。体部外面には片切彫りによる唐草文が認められる。

1958～1984は白磁で、1958・1959は小杯である。腰部が張り、口縁部がやや外反する、壺付から高台内は丸く軸が掻き落とされ、見込部も円形に軸剥ぎされる。1960は八角形になる坏である。壺付部分から高台内まで露胎である。1961は体部下方は露胎で割高台を持つ。見込部には目跡が残る。森田分類のD群に相当する。1962～1964は碁笥底で、外反する体部を持つ皿である。E2群に相当する。1965～1977は端反りの皿で、E2群に相当する。1972の底部外面には青花で方圓内に銘が記されている。また、1973の底部外面には墨書がみられる。1973と1975は胎土がやや粗い製品である。1978・1979は菊花皿で、E4群に相当する。1980は盤。内外面に丸彫りによる筋蓮弁が施される。口縁部は縁折れで、端部は稜花となる。1981・1982は碗である。1981は肉厚な碗で、幅広い高台を有し体部は直線的に立ち上がる。内面見込部で顕著な口クロ目が見られ、外面はケズリによる調整痕が顕著に認められる。高台周辺から高台内まで露胎である。14世紀頃の製品であろう。1982は見込部の一部と壺付が露胎である。16世紀前半頃の景德鎮窯系の製品と思われる。1983は壺の頸部で、径は4.9cmに復元される。1984は無頸壺である。肩部には3条の沈線が巡り、その上部に凸帯が巡る。凸帯から口縁まではほぼ水平で、薄く軸が施されている。

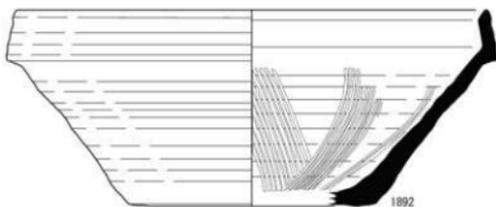
1985～2006は青花皿。1985は口径10cm程度に復元される小皿である。口縁部の内外面には1条の界線が施される。1986～1993は小野分類のB1群に相当する端反りの皿である。1987・1988は体部外面に細かい渦状の唐草文が描かれ、内面にアラバスク文様や梵字が描かれる。1990～1992は外面に牡丹唐草、見込に玉取獅子、1993は外面に牡丹唐草、見込に十字花文が描かれる。1994・1995はやや粗製の端反りの皿で、口縁部の内外面には1条の界線が巡る。漳州窯系の製品である。1996は見込に2条の界線が二重に巡り、その間に如意雲が描かれる。1997～2004は碁笥底の皿で、C群に相当する。1997は体部外面に芭蕉葉文、1998は体部外面に芭蕉葉文、見込に捻子花、1999は見込に捻子花、2000は外面に芭蕉葉文、見込に菊文、2001は外面に芭蕉葉文、見込に草花文が描かれる。2002～2004は胎土がやや粗く、漳州窯系の製品である。2005・2006は折縁の皿である。2005の体部には丸彫りによる筋蓮弁文が施され、周縁部は稜花様に仕上げる。2007は口径5.8cmに復元される青花小杯である。体部外面には馬の文様が描かれる。2008～2030は青花碗。2008～2011は端反りの碗で小野分類のB1群に相当する。体部外面には渦状の文様や唐草文、丸を三つ結合した文様が見られる。2012は口縁がやや直立する碗で、体部外面に渦状の文様が描かれる。E群に相当する。2013～2029はいわゆる連子碗でC群に相当する。体部外面には唐草文や芭蕉葉文、丸を三つ結合した文様、見込には法螺貝や蓮花、捻子花が描かれる。2028・2029は漳州窯系の製品である。2030は腰部がやや張る形状を持つ碗で外面に唐草文、見込に十字花文が描かれる。D群に相当する。2031・2032は別個体ではあるが同器種の青花扁壺と思われる。桃形の2条の界



第 469 图 包含層等 出土遺物実測図



1891



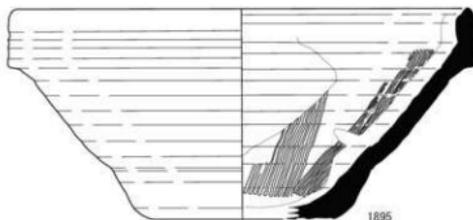
1892



1893



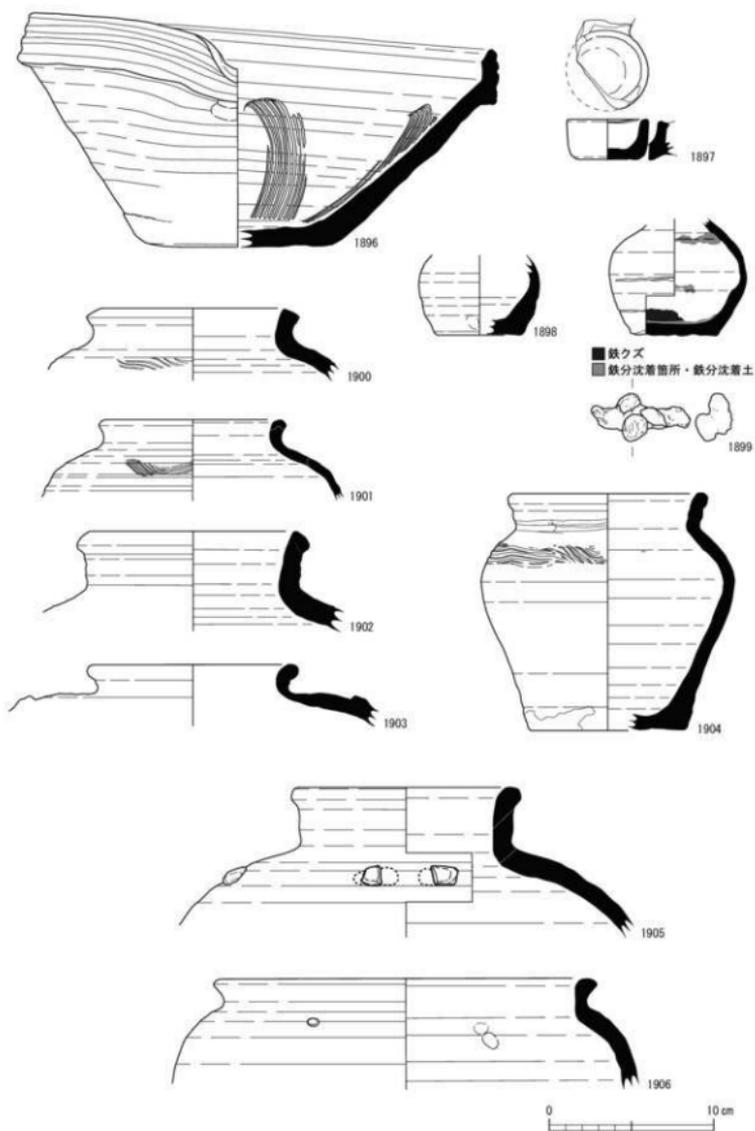
1894



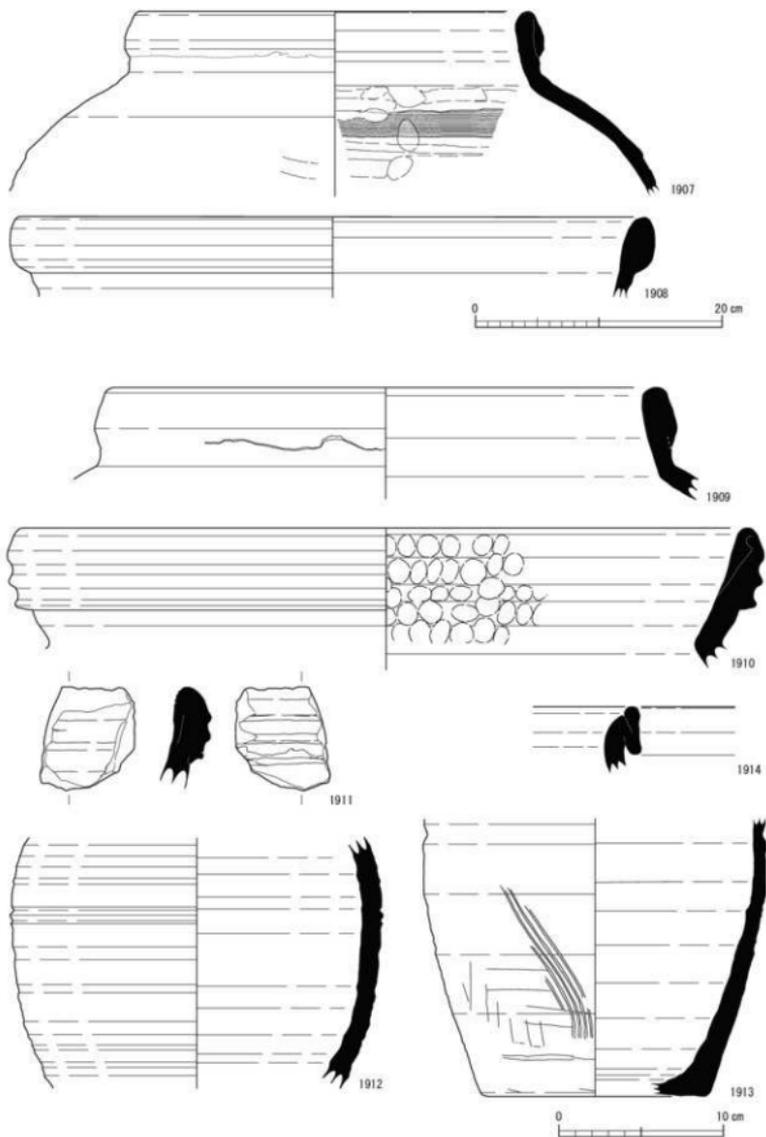
1895



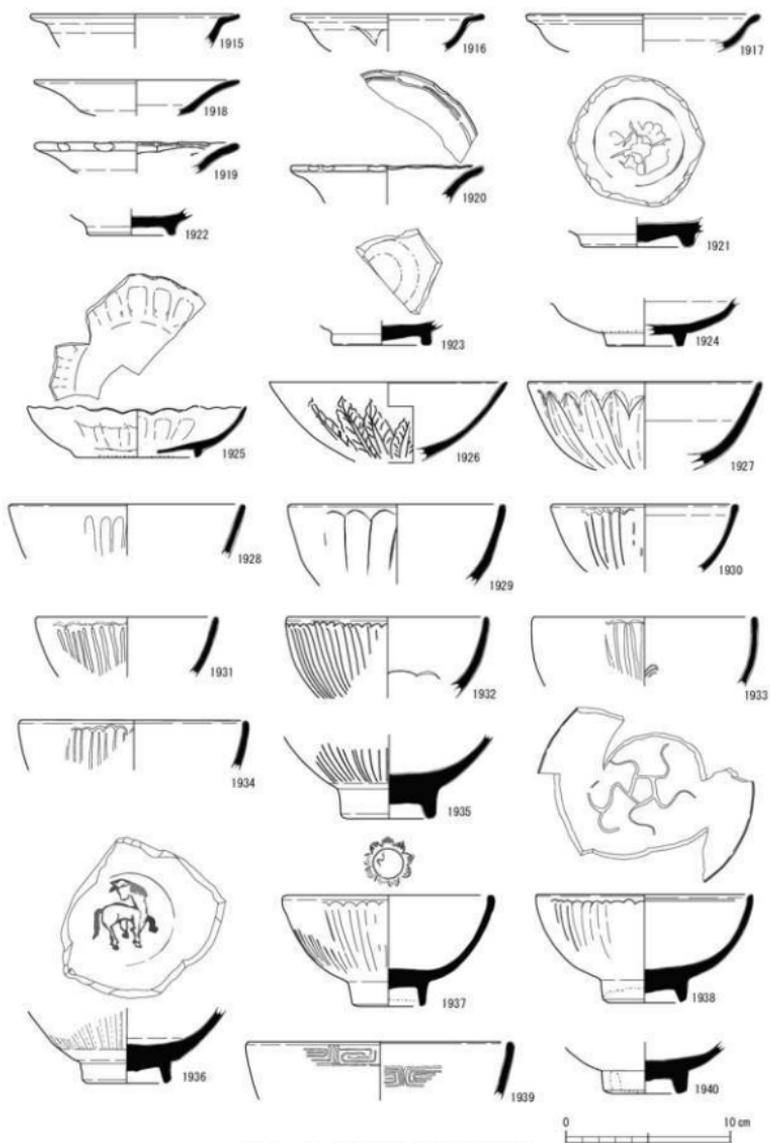
第 470 图 包含層等 出土遺物実測図



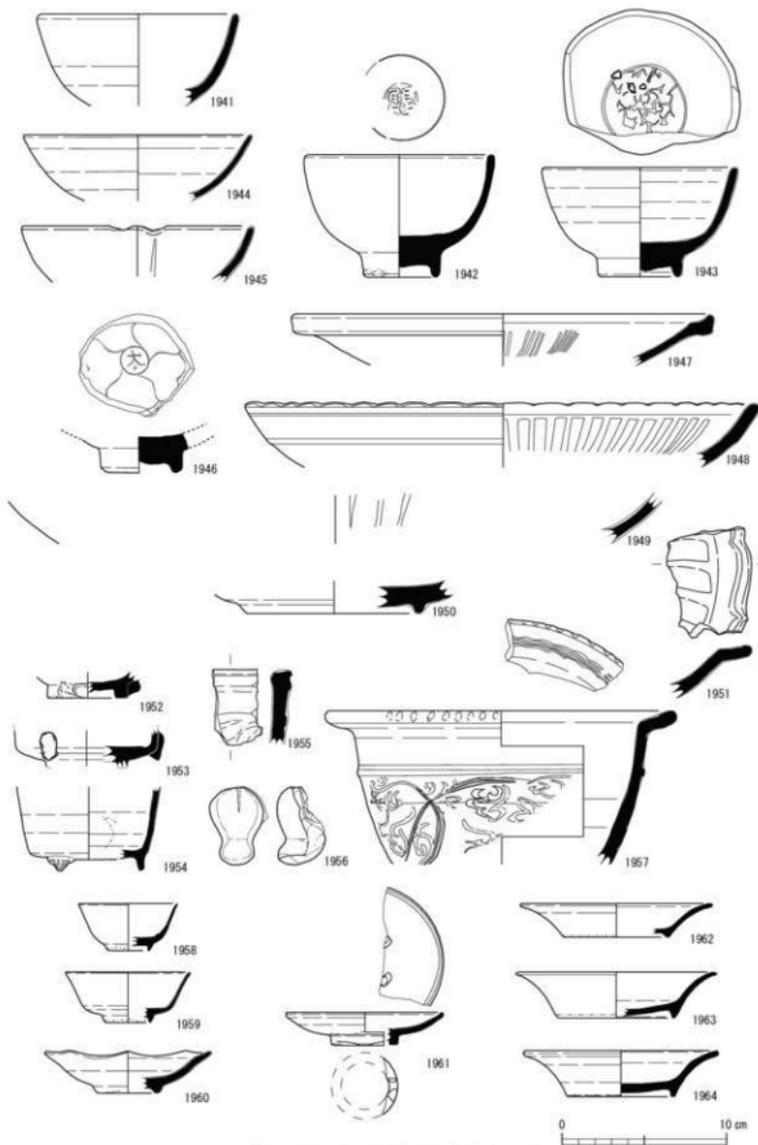
第 471 図 包含層等 出土遺物実測図



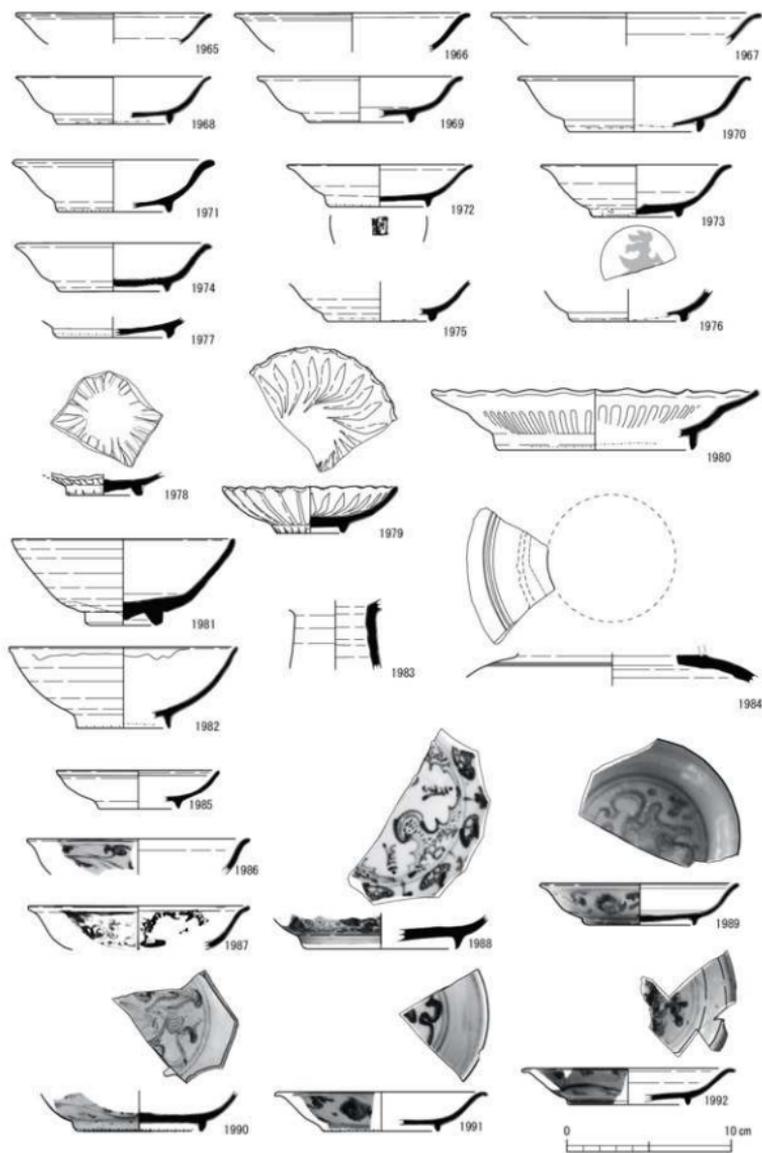
第 472 图 包含層等 出土遺物実測図



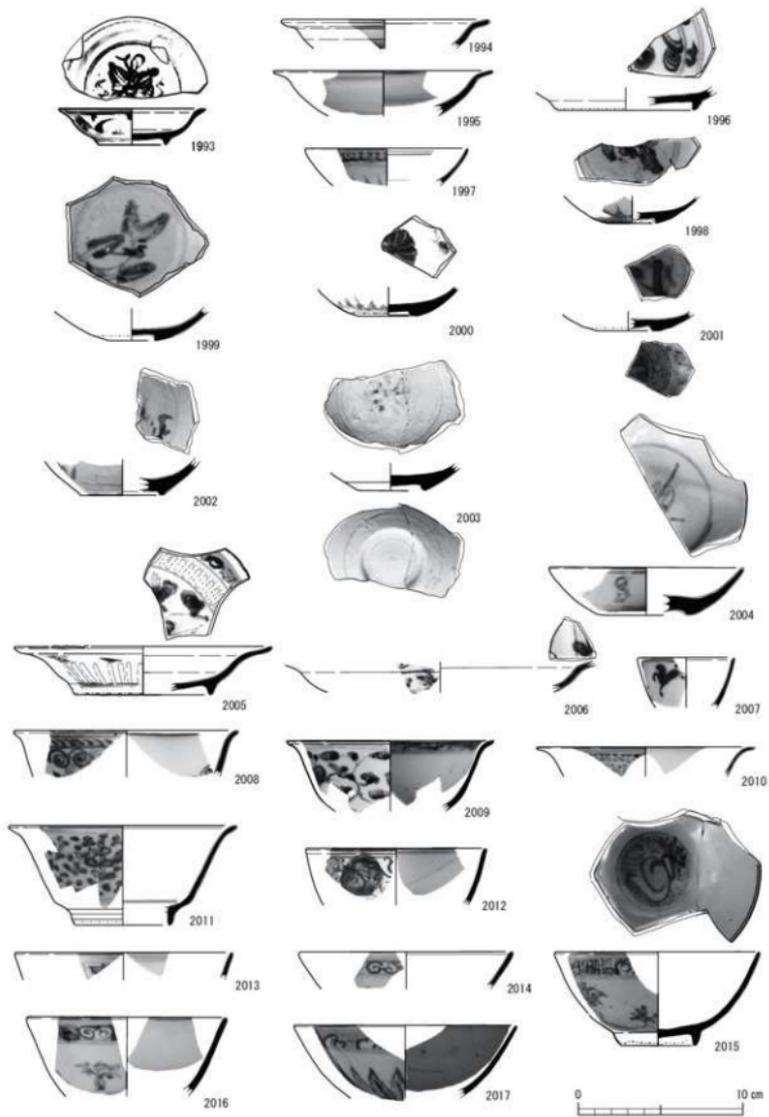
第 473 图 包含层等 出土遗物实测图



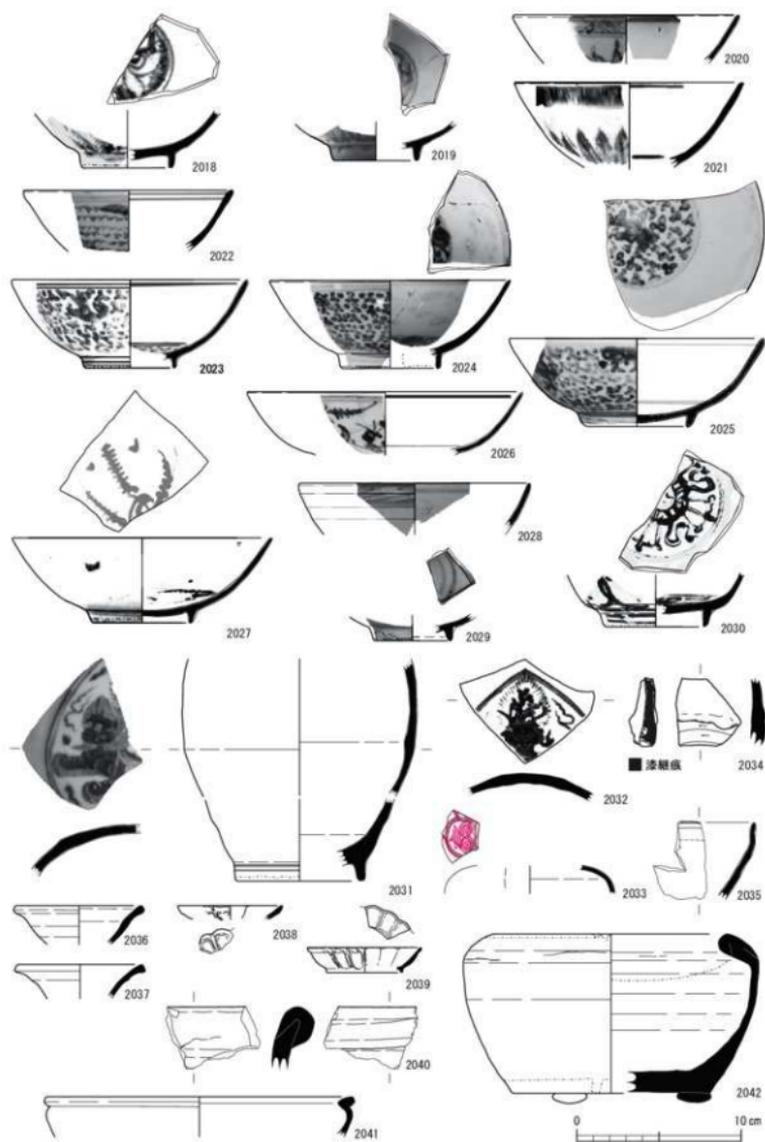
第 474 图 包含層等 出土遺物実測図



第 475 图 包含層等 出土遺物実測図



第 476 图 包含層等 出土遺物実測図



第 477 図 包含層等 出土遺物実測図

線の中に獅子が描かれており、その上部に華瓶、七寶（珊瑚）が描かれているのであろう。2033は五彩の合子である。青花に軸上彩で紅軸による渦状の文様が描かれているが、色はほとんど飛んでしまっている。

2034・2035は中国産の天目茶碗である。2034の胴部には厚い黒軸が施され、腰部は露胎で灰白色である。内面に顕著な使用痕が認められ、片側の断面には漆接痕が見られる。2035は禾目天目茶碗で、体部には茶色い細かい筋が見られる。端部から約1cmは錆軸となっており、口縁には覆輪が施されていた可能性が考えられる。

2036・2037は朝鮮王朝産の徳利で、内外面には雑軸が施されている。口縁部は端反りで、端部を2036は丸く、2037は方形に仕上げる。

2038は翡翠軸、2039は緑軸の菊花小皿で型押しによって成形されたものである。漳州窯系の製品である。

2040は焼締陶器の壺あるいは甕である。端部は玉縁状に取める。

2041は黄軸が施された鉢である。内彎する体部から端部を外方に折り曲げ、「て」の字状を呈する。

2042はボタン状の脚が付く焼締陶器で、胎土は橙色である。体部内面にはロクロ目が顕著に見られ、外面はナデによって調整されている。灰褐色の軸は口縁部から掛け流したと考えられるが、端部では軸剥ぎされている。

2043・2044は埴塼片である。同一個体の可能性も考えられる。

2045は紐状の土製品である。外面に緑軸が所々確認できる。

2046は泥人形の顔部分で、口は外からの穿孔、鼻は貼付けによって成形されている。

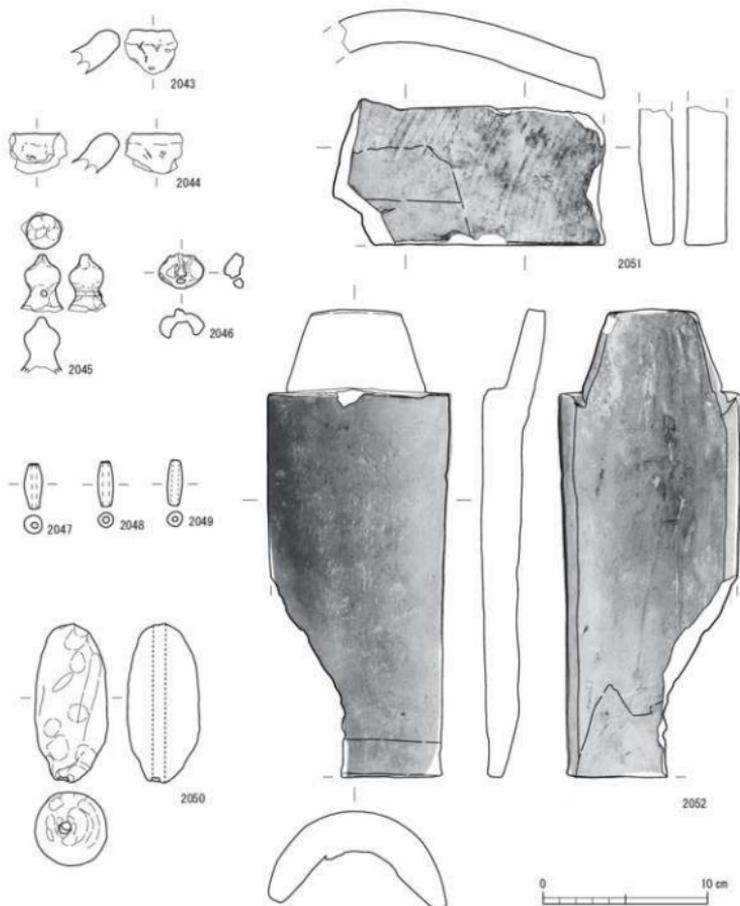
2047～2050は土錘である。

2051は雁振瓦、2052は丸瓦である。いずれも凹面に斜め方向のコビキ痕を残す。

2053は緑色のガラスビーズである。SP1142からも同様のビーズが出土している。

2054・2055は銅製の小碗で六器と考えられる。2055の底部外面には「全」と思われる文字が線刻されている。

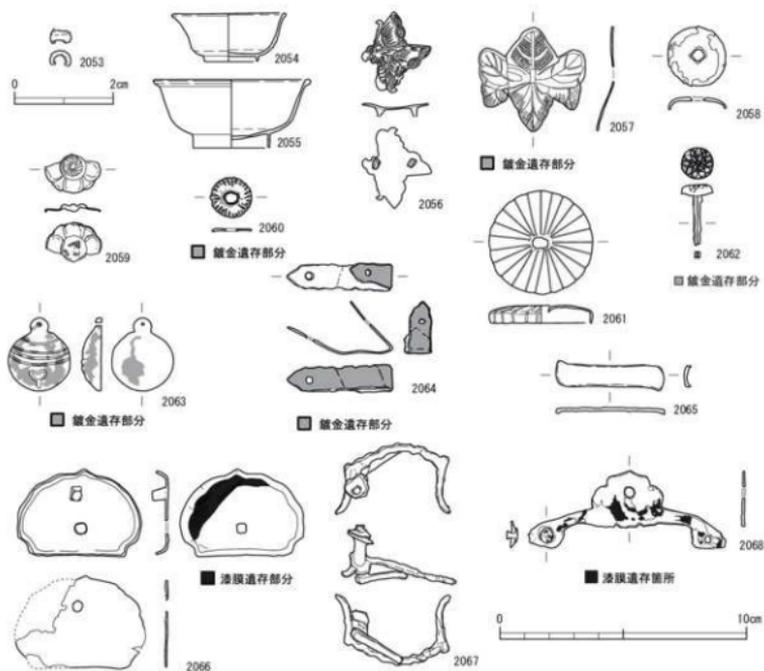
2056～2068は銅製の飾金具と考えられる。2056は蝶をモチーフとしており、裏面に二箇所突起が付く。2057は五三桐をモチーフとする。表面には金箔が施されていたようである。2058は丸く袋状に仕上げる。2059は梅の花をモチーフとする。2060～2062は菊をモチーフとしたものであろうか。表面には金箔が施される。2062の脚部は割ピン状となっている。2063は鈴形をした製品で、表面には金箔が施されている。2064は厚さ約0.05cm、幅約1cm、長さ約7cmの平板の両端を尖らせ、直径0.2cm程度の穴を穿つ。表面には金箔が施されている。2066は、一方は銅板を袋状に曲げたもので、内面に1cm程の突起を持つ。もう一方は板状となり、突起に対応して穴が穿たれている。表面には漆膜が認められ、花文が描かれる。2067はL字の金具と「コ」の字状の金具の二つの部品が合わさっている。L字金具の片側には7mm角程度の方形の銅板が2枚取り付けられており、これで製品に取り付けていたものと思われる。コの字金具で別の金具などに引っ掛け、調



第478図 包含層等 出土遺物実測図

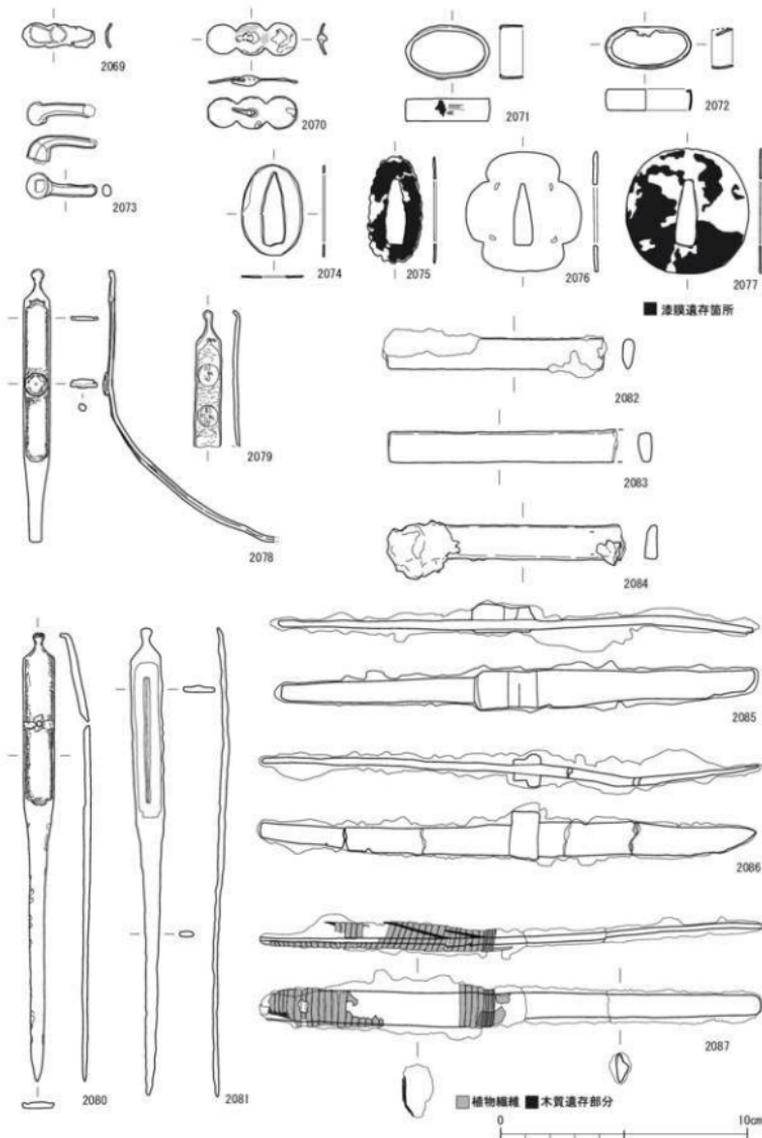
度品などの扉のあおり止めとして利用されていたものと考えられる。2068は把手状の銅製品で中央に4mm大の、両端に3mm大の穿孔がそれぞれあり、片側の穿孔にのみリベット状の銅製品が遺存する。また表面には部分的に漆膜の付着が見られる。

2069～2087は刀装具である。2069・2070は目貫金具。金箔が施される。2071・2072は緑頭と考えられる。外面には少量ながら漆膜が残り、2071の外面には細かい刷毛目状の痕跡が見られる。

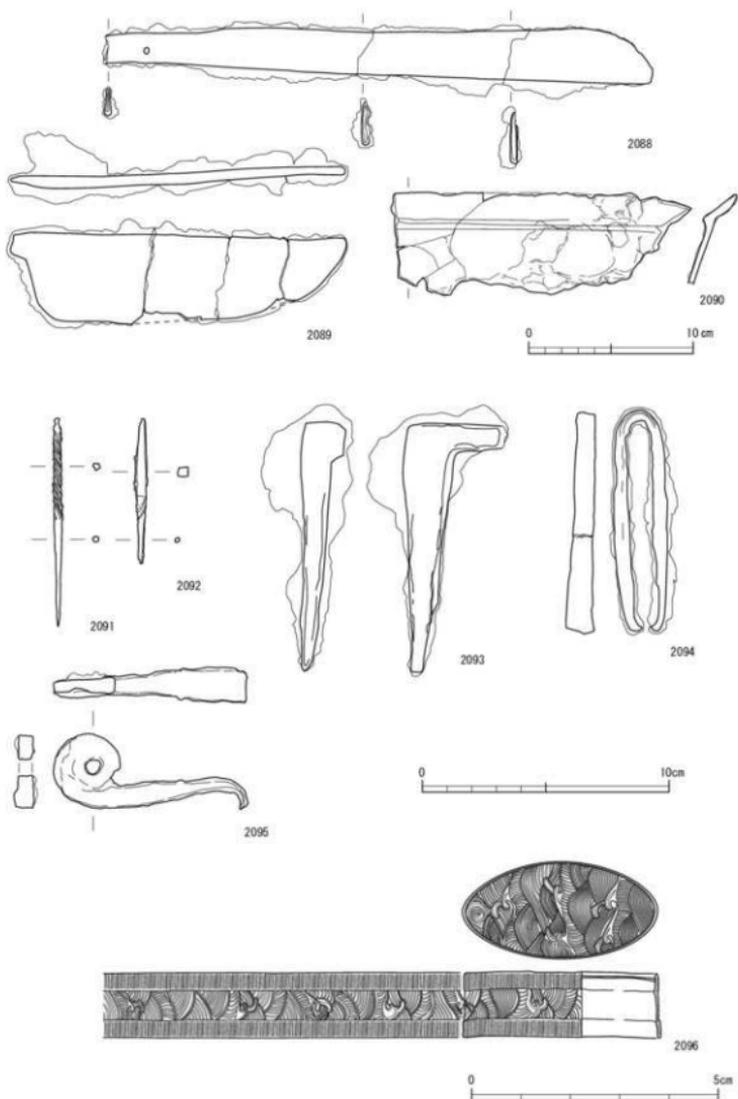


第 479 図 包含層等 出土遺物実測図

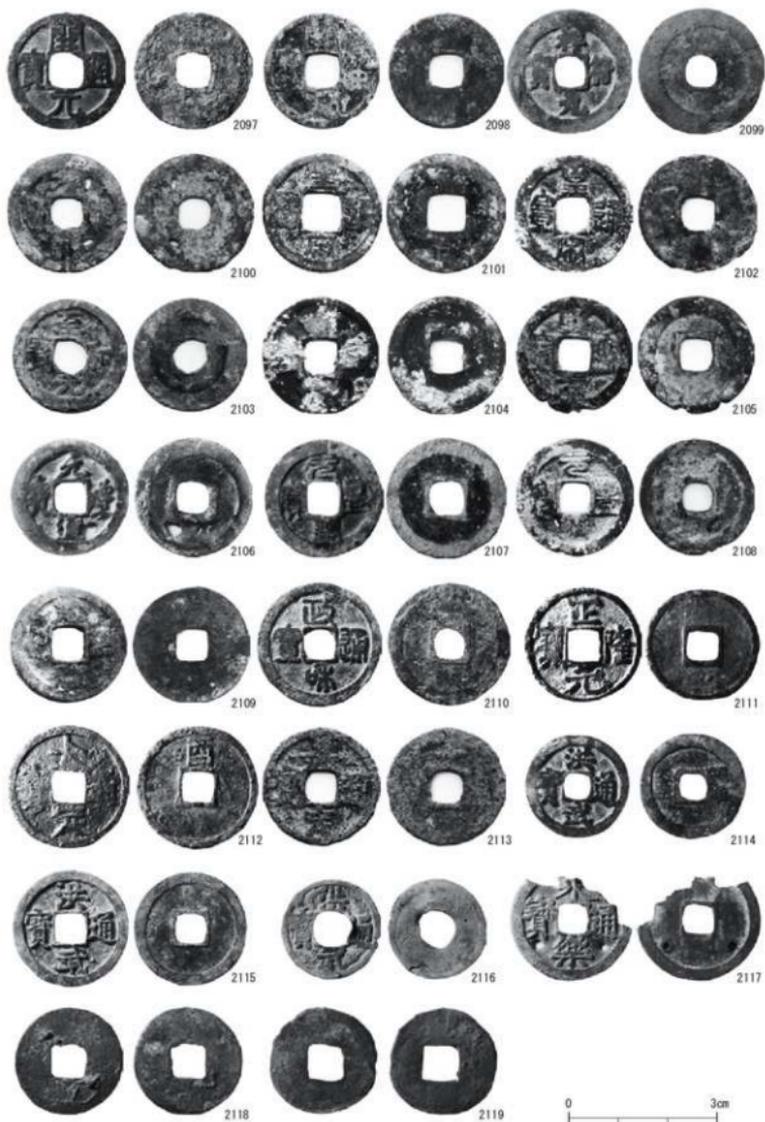
2073は返角で、金箔が施される。2074・2075は切羽。2075の外縁は鋸歯状の形状を有しており、表面には漆膜が多く遺存する。2076・2077は大切羽。2076は木瓜状の形状を呈し、四隅に猪目透かしが施される。2077は円形で表面に漆膜の付着が見られる。2078～2081は笄。2078は変形し先端が欠損するものの、魚子地に仕上げ、丸に反り釘抜の飾りがつく。2079は幅1.1cm程と若干小振りである。表面には魚子が認められ、丸文が刻まれる。丸文の内部には蝶のような文様が描かれている。2080は魚子地に仕上げられ本来飾りがつけられていた部分には2mm大の穿孔と両側に帯状に剥離痕が見られる。2081は長さ19.1cm、幅は最大で1.3cmを測る。2082～2084は小柄、2085・2086は刀子である。2087は部分的に木質部分と植物繊維が遺存する。帯状の植物繊維は薄さ0.1mm程度のもので、木質部分にのみ巻かれるもの・鉄製品も含めて巻かれるもの・長軸と同方向に部分的に見られるものが確認できる。刀子や槍先の茎などの可能性が考えられる。2088は鉄製短刀である。長さ33.4cm、最大幅3.3cm、厚さ4.5mmを測る。反りを控えた姿で茎には



第 480 図 包含層等 出土遺物実測図



第 481 图 包含層等 出土遺物実測図

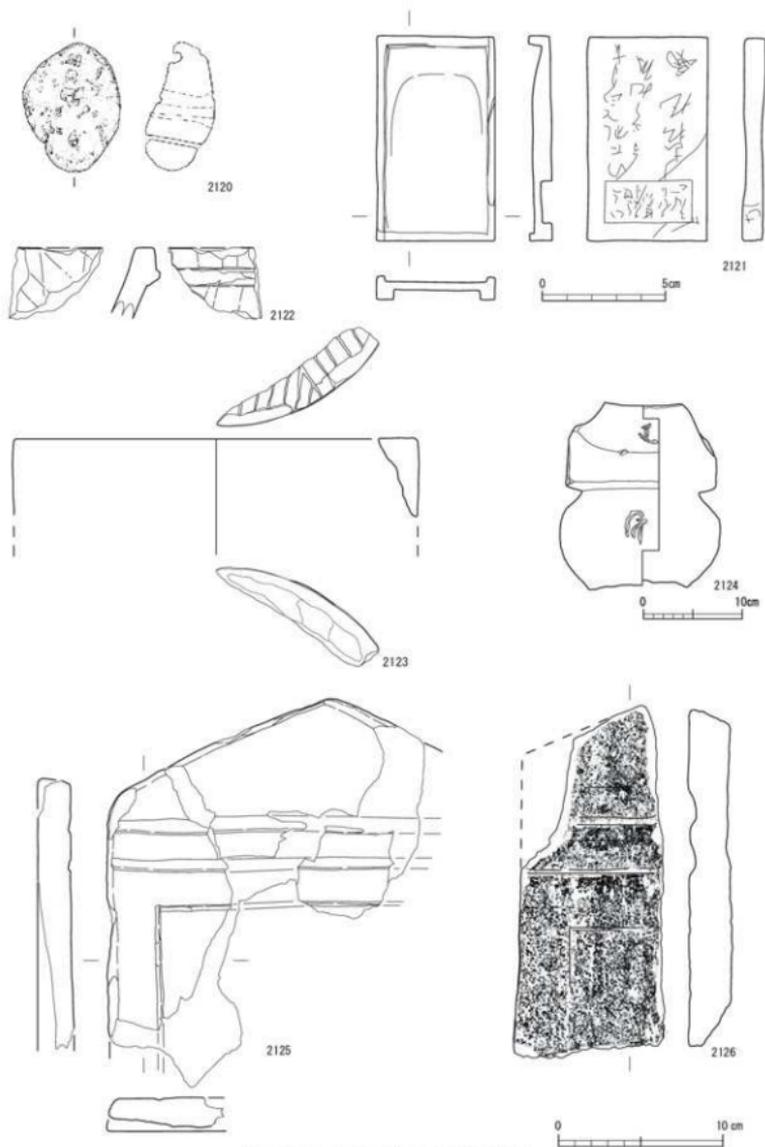


第482図 包含層等出土遺物実測図

4mm 大の目釘孔が穿たれている。2089 は包丁か。長さ 20.3cm、幅は最長部で 5.5cm、厚み 4.5～6cm を測る。2090 は鉄鍋で、直線的に立ち上がる体部に斜めにつばが付く。2058 は長さ 8.6cm で最大径が 0.3cm で、先が細く針状の形態を呈する。用途不明の製品である。2059 は細長い四角錐形を呈し、製品の中程よりやや下部で捻られている。同様の製品が濠 1001 から第 11 次調査において出土している。2093 は鉄製の二重折れ釘である。2094 は毛抜きと思われる。長さ 9cm、厚み 8mm～1cm を測る。2095 は鉄製品で、3mm 角の鉄棒の先を渦巻き状に仕上げている。また、もう一方を平たく仕上げ、緩やかに折り曲げる。用途などは不明である。2096 は金製品で、形状等から柄頭と考えられる。両端を 0.4cm 程折り曲げた幅 1.4cm の帯状の金の板を楕円形の筒状に成形する。その上から筒の内部に落とし込むようにして楕円形の金の板をはめ込んでいる。側面の折り曲げられた部分には細かいスジ状の文様がつく。その内側の幅 0.6cm 程の部分や上面には細かい波濤文が描かれる。波濤文には大小の単位があり、大きな単位をまず型押しで施し、小さな単位をタガネで細かく描いている。成分分析の結果、90% 以上が金であることが判明した。

2097～2119 は銭である。2097・2098 は開元通寶で 621 年初鑄の唐銭である。2099～2110 は北宋銭である。2099 は真書体の祥符元寶で 1009 年初鑄。2100 は真書体、2101・2102 は篆書体の皇宋通寶で 1038 年初鑄。2101 は広郭である。2103 は真書体の至和元寶で 1054 年初鑄。郭が不整形である。2104・2105 は篆書体の熙寧元寶で 1068 年初鑄。2106 は行書体、2107・2108 は篆書体の元豐通寶で 1078 年初鑄。2106 の背面には鑄ずれがみられる。2109 は真書体の元祐通寶で 1086 年初鑄。2110 は篆書体の政和通寶で 1111 年初鑄。2111・2112 は金銭。2111 は正隆元寶で 1158 年初鑄で「正」の字が 4 画で書かれている。2112 は大定通寶で 1178 年初鑄。背の上に「西」の字がみえる。2113 は嘉定通寶で 1208 年初鑄の南宋銭。背面上には「十」がみえる。2114～2117 は明銭。2114～2116 は洪武通寶で 1368 年初鑄。2114 は小ぶりの銭で、背面右側に「一銭」の文字が見える。2117 は永樂通寶で 1408 年初鑄の明銭である。約 1.5mm の穿孔が 2ヶ所見られる。2118・2119 は無文銭であるが、表面に僅かに文字の名残がみえる。

2120 は軽石製品で、複数の穴が穿たれている。このうち、二箇所は貫通する。2121 は硯である。縦 8.4cm、横 4.8cm を測る。裏面には文字が線刻されており、上部に穿たれた方形の凹みの中には「此□よ うき世 かな月 を□ か世・・」という和歌と思われる一文が確認される。また、その下部には「これを正月十日 主とく丸殿 古松丸（花押）」とある。2122 は石鍋、2123 は石臼である。2124 は砂岩製の一石五輪塔である。火輪、水輪にそれぞれ梵字で「ラ」「バ」の文字が刻まれる。上部の空輪、風輪および下部の地輪については欠損している。2125・2126 は板碑である。山形に切った頭部と、その下部に二本の凹線を持つ。



第483図 包含層等 出土遺物実測図

## (5) 勝瑞城館跡下層の遺構・遺物について

勝瑞城館跡の下層には、古代遺物包含層があることが確認されており、遺物も出土している。また、第13次調査では古代の貝層 SS2001 が確認されており、ここではそれらを紹介する。

### ①貝層 1 [SS2001]

〈検出地点〉

13-1区 [中グリッド (b-9)・小グリッド (D-6)]

〈形態等〉

不明遺構 22 (SX1022) の下層で検出した貝殻が密集した層。平面形状等は不明であるが約 0.9 m<sup>2</sup> の T.T から 15,000 点以上の貝殻が出土している。共存遺物から 9 世紀代の遺構と考えられる。貝殻は層上部でシジミが、下部でハマグリが多く見られ、その他に少量ながらサザエ、カキ、カワニナ等も出土した。食用には不向きと思われる 1cm に満たない殻長のものや、閉じた状態の二枚貝も散見できるが、層と平行な状態で多くの貝殻が出土している状況や生息域の異なる貝が共存していること、共存遺物などから人為的に廃棄されたものと考えられる。あくまで下層の遺構であるため全容は不明であるが、T.T による調査範囲内では層の厚さの変化が 5cm 程度あるものの、貝の含有率はほぼ変化せずに密であることから、この周辺に大きく広がる遺構であることが推定される。

〈出土遺物〉(第 484 図)

2127 は土師器皿 A で口径 15.8cm に復元され、器高 1.6cm を測る体部はやや外反しながら立ち上がり、内外面に赤色塗彩が施されている。調整は、内面に回転ナデ後、ヘラミガキが施され、外面は回転ナデ、底部は回転ヘラ切り後、丁寧なナデが行われている。また、内外面とも薄く炭化物が付着している。時期としては 9 世紀中～後半が想定される。2128 は土師器高坏と思われる。薄手の製品で、内面にはミガキが、外面下部には回転ヘラケズリが施されている。時期は 6 世紀中～後半が想定される。2129～2131 は土師器甕。内面を横方向、外面を縦方向のハケで調整する。

2132 はハマグリで 4.5cm～9cm を越える殻長のものがみられる。2133 はサザエで内湾に生息したものの。2134 はヤマトシジミで 1cm 以下のものから 3.5cm 程度の殻長のものがみられる。2135 は若干殻頂部が張り出した形状のヤマトシジミである。割合は低いものの同様の形状のシジミが散見できる。2135 は殻が閉じた状態で出土している。2136 はカワニナである。食用とする地域もみられる。2137 はマガキである。

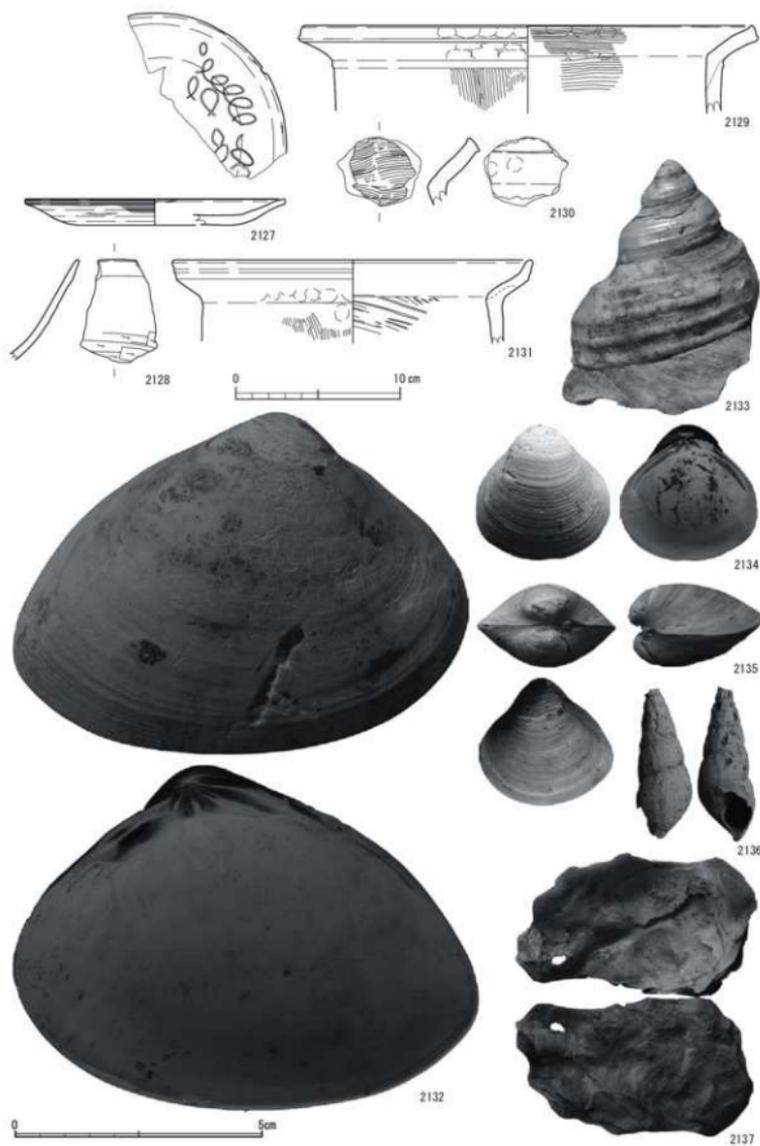
### ②その他古代の遺物 (第 485 図)

2138 は弥生土器で甕と思われる。底部はあげ底で台内面は三角形に近い平面形状である。内外面とも強いナデによる調整やユビオサエの痕跡が認められる。2139 は土師器皿 A で、口径 16.5cm、器高 1.7cm に復元される。内面にはヘラミガキが施される。時期は 9 世紀中頃と考えられる。ただ、不明瞭ながら放射・螺旋状暗文が施されている可能性がある。2140 は内外面に赤色塗彩が施され

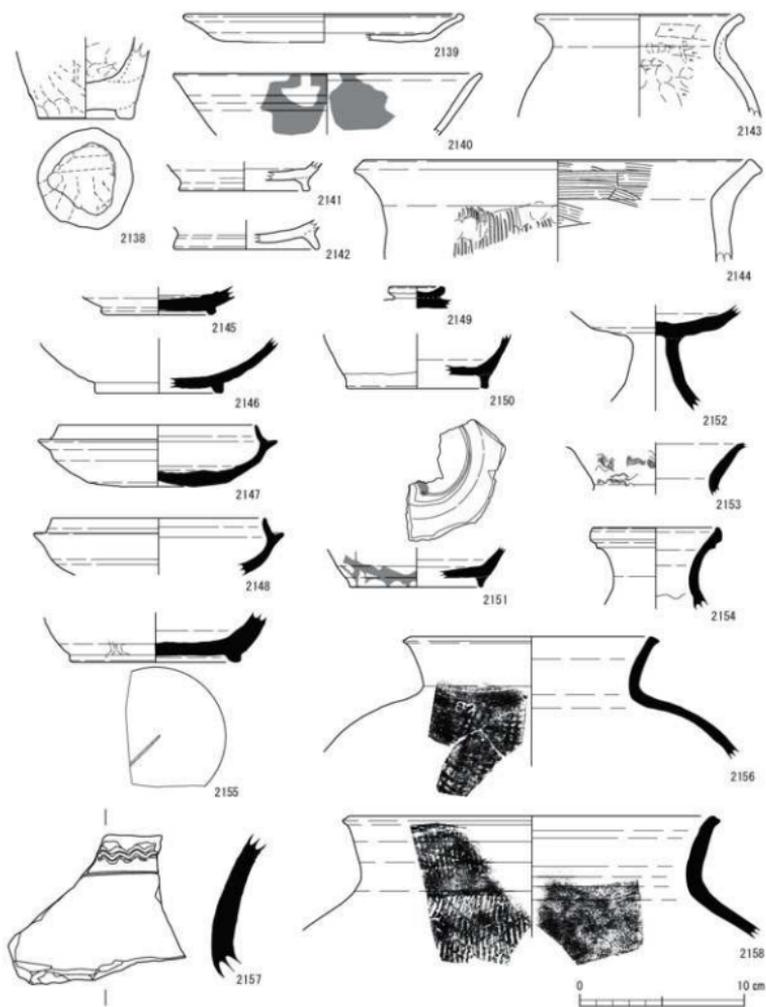
た土師器杯。破片が小さいため不確かではあるが、口径は 18.6cm に復元される。2141 は土師器碗、2142 は黒色土器 A の碗である。高台は貼付けである。2143 は土師器壺で口径は 12.2cm に復元される。外面は摩耗が激しい。内面はユビオサエや板ナエによる調整痕が認められる。2144 は土師器甕で、口径は 23.5cm に復元される。体部外面は縦方向のハケ（5 条/cm）後、ユビオサエし斜め方向のナエが行われている。口縁部内面は横方向のハケ（5 条/cm）が認められ、煤が付着している。時期は 9 世紀中頃と考えられる。2143・2144 の胎土には結晶片岩が含まれる。2145・2146 は緑釉陶器である。2145 は硬陶の胎土で鮮やかな緑釉が高台内の底部以外に施されている。見込部には高台径より小さい径で段が付き、少し離れて 2mm 程度の低い凸部分がみられる。高台は削り出しの輪高台である。時期は 9 世紀中～後半と考えられる。2146 は軟陶の碗である。削り出しの輪高台で釉調は淡い緑色である。時期は 9 世紀中～後半と考えられる。2147・2148 は須恵器の杯身である。2147 は口径 12cm、器高 3.8cm に、2148 は口径 13cm に復元される。かえりがやや内傾し僅かに外反しながら立ち上がる。2149 は須恵器杯蓋の摘みである。2150・2151 は須恵器 B で時期は 9 世紀後半と考えられる。2152 は須恵器高坏で 7 世紀前半～中頃のものと思われる。2153 は須恵器のハソウの頸部。弱い 2 条の櫛描波状文が施されている。6 世紀前半のものと思われる。2154～2156 は須恵器壺である。2154 は口径 7.6cm に復元される。時期は 9 世紀中頃と考えられる。2155 は外面及び内面見込に自然釉がみられ、底部外面にはヘラ描記号が認められる。時期は 9 世紀中頃と考えられる。2156 は口径 14.5cm に復元される。時期は 9 世紀前半～中頃と考えられる。2157・2158 は須恵器甕である。2157 は頸部外面に 1 条の沈線と櫛描波状文が巡る。時期は 6 世紀前半と考えられる。2158 は口径 22.2cm に復元される。外面にはタタキによる調整痕が、内面には当て具による青海波文が認められる。

第 8 表 SS2001 出土具組成表

種類	シジミ	ハマグリ	カキ	サザエ	カワニナ
数量	15,355	387	49	8	3
割合 (%)	97.17	2.45	0.31	0.05	0.02



第 484 图 SS2001 出土遺物実測図



第485图 勝瑞館跡下層 出土遺物実測図

## 第4章 まとめと考察

### 1 出土遺物の様相

#### (1) 出土土器・陶磁器の器種構成

今回対象とする調査区から出土した土器・陶磁器のうち、遺構出土分を除いて器種・器形ごとにグリッド別に示したのが第6表・第7表（第1分冊所収）である。これを種類別に分類したものが第9表である。

第9表 勝瑞城館跡出土遺物種類別一覧

種類	土師質土器	瓦器・瓦質土器	国産陶器	輸入陶磁器	その他・不明	計
破片数(点)	183,633	1,065	5,320	3,575	2,955	196,548
比率	93.43%	0.54%	2.71%	1.82%	1.50%	100.00%

※遺構出土分は除く。

これによると、総点数196,548点のうち土師質土器が183,633点（93.43%）と圧倒的多数を占めることが分かる。これは、土師質土器皿・杯が179,943点と全体の出土土器・陶磁器から見ても91.5%を占めるという特異な出土傾向が見られることによる。

土師質土器皿は、宴会や儀式において使い捨てられる器であり、これが大量に出土することは盛んに儀礼的な要応がなされていたことを示しており、その地域の政治的中枢をなす空間であることを示している。勝瑞城館跡という遺跡の性格を良く表した出土状況であろう。

第10表 土師質土器の器種構成

器種等	皿・杯		鍋・釜			その他・不明	計
	ロクロ	手づくね	讃岐系	播磨型	その他・不明		
破片数(点)	78,529	101,414	987	426	1,526	751	182,882
	179,943		2,939				

以下、国産陶器、輸入陶磁器、瓦器・瓦質土器の順となる。

国産陶器では備前焼と瀬戸美濃焼が多く、信楽焼と常滑焼が若干入る。備前焼は壺・甕や播鉢、鉢、徳利などの貯蔵具や調理具に見られる。瀬戸美濃焼は天目茶碗が圧倒的に多く、灰釉碗や皿などの供膳具がある。その他、特筆すべきものとして、茶入れや鳥の餌鉢など、特異な器種も見られる。

輸入陶磁器ではほとんどが中国産磁器で、碗・皿などの供膳具がほとんどを占める。その他、青磁盤や花瓶の耳、青白磁梅瓶、青花扁壺、唐物の天目茶碗などの奢侈品も見られる。

#### (2) 土師質土器皿・杯の検討

勝瑞城館跡では、前述したように土師質土器皿・杯が出土遺物の9割強を占める。それらは、成

形手法や形態によって分類が可能であり、それは土器の製作者集団の違い、あるいは時期差を表しているものと考えられる。ここでは、今後の編年作業の前提として、安定して存在する土師質土器皿・杯について分類を行う。

#### ①分類

土師質土器皿・杯は、ロクロ成形のものとはつくね成形のものに大別できる。さらに、ロクロ成形の土師質土器皿については底部切り離し技法が回転糸切りのもの、回転ヘラ切りのもの、静止糸切りのものに分けられる。こうした技術的な側面を前提として、以下のとおり分類した。

I A類 ロクロ成形で、底部切り離し技法が回転糸切りのもの。

- 1 やや内彎する体部を持ち、端部は丸く収められる。胎土色調は橙色系を呈する。今回の調査区ではほとんど出土しない。

I B類 ロクロ成形で、底部切り離し技法が回転ヘラ切りの皿。

- 1 外底部端をヘラ削りし、丸く仕上げる。体部は直線的に外傾し、端部は丸く収められる。胎土色調は橙色系を呈する。
- 2 直線的に外傾する体部を持ち、端部は丸く収められる。胎土色調は橙色系を呈する。
- 3 直線的に短く立ち上がる体部を持つ。胎土色調は橙色系を呈する。
- 4 ロクロ目が顕著で、厚い体部を持つ粗製品。胎土中に結晶片岩が含まれる。底部に板状厚痕が認められるものが多い。やや薄手のものをa、厚手のものをbとする。
- 5 器高がやや高く、小鉢型で大きく開く体部を持つ。色調は橙色系を呈する。

I B'類 ロクロ成形で、底部切り離し技法が回転ヘラ切り、底部から直線的に上方に立ち上がる体部を持つ杯。

I C類 ロクロ成形で、底部切り離し技法が静止糸切りの皿。

- 1 やや内彎する体部を持ち、端部は丸く収められる。胎土色調は灰白色系を呈する。
- 2 直線的に外傾する体部を持ち、端部は丸く収められる。胎土色調は灰白色系を呈する。
- 3 直線的に短く立ち上がる体部を持つ。

I C'類 ロクロ成形で、底部切り離し気御法が静止糸切り、底部から直線的に上方に立ち上がる体部を持つ杯。

II類 手づくね成形のもの。

- 1a 口径9cm前後の皿で、内面に「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。胎土色調は橙色系を呈する。
- 1b 口径9cm前後の皿で、突き上げ底、内面に「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。胎土色調は灰白色を呈する。
- 2a 口径10cm前後の皿で、内底面に強いヨコナデによる凹線が巡り、「の」の字状にナデ上げる。

2b 口径10cm前後の皿で、突き上げ底、内面に「の」の字状のナデ上げ痕が認められる。胎土色調は灰白色を呈する。

3a 口径11cm以上の皿で、内底面端に強いヨコナデによる凹線が巡り、「2」の字状にナデ上げる。器壁は薄く仕上げられ、胎土色調は橙色系を呈する。

3b 口径11cm以上の皿で、内底面端に強いヨコナデによる凹線が巡り、「2」の字状にナデ上げる。器壁はやや厚くなり、胎土色調は灰白色系を呈する。

第11表 土師質土器の分類

		1	2	3	4		5
					a	b	
I 類	B						
	B'						
	C						
	C'						
		1	2	3			
		a	b	a	b	a	b
II 類							

## ②土師質土器皿・杯の共伴関係

遺物の出土量が豊富であった遺構およびSB1001の礎石を覆っていた焼土層から出土した土師質土器皿・杯の共伴関係を第4表に表した。

まず、I類を見るとI B類が主体のSD1003、SD1014、SD2001、SK1046、SK1149と、I C類が主体のSD1009、SD1013、SD1018、SD1060、SK1008、SB1001に大きく分かれる。これにII類を併せて見ると、I B類が主体の遺構ではII類-1a及び3aが主体であり、I C類が主体の遺構ではII類-1b及び3bが主体であることが分かる。SD2001はSB1001の下層を南北に延びる溝であることから、ここで遺構の前後関係が確認できる。

これらのことから、ここでは、仮に前者を1期、後者を2期として検討を加える。

## ③中国磁器との共伴関係

続いて、中国磁器との共伴関係を見てみる。中国磁器の出土はかなり限られているため、一定量の出土があったSD1009、SD1013、SD1018、SD1060、SD2001、SK1008、SK1149、SB1001（焼

第12表 遺構出土土師質土器皿・杯の組成

分類	I B					I B'	I C			I C'	II					
	1	2	3	4a	4b		5	1	2		3	1a	1b	2a	2b	3a
SD1003					●						○	△			△	
SD1009							○	○		△	△	◎				◎
SD1013							●					△				△
SD1014			△		△	△					●	△			○	
SD1018							○			○		○				○
SD1060							◎	△		△		◎				◎
SD2001		●	○		△	◎					○		△		○	
SK1008							◎			△		◎				◎
SK1046	◎	◎		◎		◎	△									△
SK1149					●			△				△				△
SB1001	△	△					○	△	○			◎				◎

※表は、出土した土師質土器皿・杯のうち残存率が50%以上のものを計数の対象とし、そのうち50%以上を占めるものを●、50～25%を◎、25～10%を○、10%未満を△としている。

第13表 遺構出土の中国磁器

	1		2グループ						3グループ		
	青磁	青磁	白磁		青花				青磁	青花	
	E	B IV	小杯	E2	碗B1	皿B1	碗C	皿C	景	碗E	漳
SD1009	1		1	7		1	13	6	2	4	6
	244				68.29					29.27	
SD1013				4		1					1
					83.33					16.67	
SD1018		4		4				1		1	1
					81.82					18.18	
SD1060		2	2	20	1	7	1				1
					97.06					2.94	
SD2001				2		1	2				
					100.00						
SK1149				1			3				
					100.00						

土層)をピックアップした。それらを、消費地における一般的なセット関係を重視して3つのグループに分類した。年代観は、1グループが15世紀第1四半期～第3四半期、2グループが15世紀第3四半期～16世紀第1四半期、3グループが16世紀第2四半期～第3四半期である。

出土遺物量が少ないため、確定的なことはいえないが、前項で1期とした遺構からは2グループの遺物まで、2期とした遺構からは3グループの製品まで出土が見られることが分かる。

#### ④年代観

前項では、中国磁器との共伴関係を示した。これによると、全体的には2グループが中心となる。そのうち、仮に2期と設定した遺構から出土する中国磁器は、3グループの製品まで見られることが分かった。また、SB1001の礎石を覆っていた焼土層については大坂城跡の調査において示された年代観と比較から、天正10年(1582)の長宗我部氏の勝瑞侵攻によるものと推定されている。

このことから、2期は天正10年(1582)を下限として16世紀中葉頃、1期はこれより遡った時期となることが考えられる。

## 2 遺構の様相

### (1) 区画を形成する遺構の年代観

区画を形成する遺構としては、濠、溝が検出されている。主な溝出土の土師質土器皿と中国磁器の組成は前節に示した。以下に濠出土の土師質土器皿及び中国磁器の組成を表にした。

第14表 濠出土の土師質土器皿

	I B					I B'	I C			I C'	II						
	1	2	3	4			5	1	2		3	1		2		3	
				a	b							a	b	a	b		
濠 1001	△			△	●	△		○		△	△	○		△	△	○	
濠 1002					◎		◎								◎		
濠 1003				△	△			△		○	◎	○	△		◎	○	
濠 1004		○			●		○										
濠 1005	△	△			△		◎	○		△	△	◎					
濠 1006				○							○	○				○	△

※表は、出土した土師質土器皿・杯のうち残存率が50%以上のものを計数の対象とし、そのうち50%以上を占めるものを●、50～25%を◎、25～10%を○、10%未満を△としている。

第15表 濠出土の中国磁器

	1グループ			2グループ							3グループ					
	青磁		白磁	青磁	白磁		青花			青磁	白磁	青花				
	BI-II	C	E	D	BIV	小杯	E2	碗B1	皿B1	碗C	皿C	景	E4	碗E	皿E	漳
濠1001				3	2	10	70		10	30	7	2	2	13	1	29
	1.68			72.07							26.26					
濠1002	1						2			1						1
	20.00			60.00							20.00					
濠1003			1	1	1	2	5			4	6					1
	9.52			85.71							4.76					
濠1004					1											
	0			100							0					
濠1005					1		8		1	2						5
	0			70.59							29.41					
濠1006					1		3			5				5		2
	0			56.25							43.75					

※年代観は、1グループは15世紀第1四半期～第3四半期、2グループは15世紀第3四半期～16世紀第1四半期、3グループは16世紀第2四半期から第3四半期となる。

#### ①濠跡の年代観について

##### 〔濠1001〕

濠1001出土の土師質土器は2期、中国磁器は2グループに画期が認められる。中国磁器は3グループも26.26%の割合を占め、遺物としては伊万里焼や唐津焼の出土もみられる。明治20年頃に作成した地籍図（一分一間之図）において濠跡と対応する地割りが認められることから、勝瑞城館の廃絶以降も存続した濠であることが推定される。以上のことから、概ね16世紀中葉頃から天正10年（1582）まで城館の濠として機能したものと考える。

##### 〔濠1002〕

濠1002は調査面積も限られていたことから出土遺物は非常に少ない。しかし、近年まであった「かじ池」は、濠の残欠であることが考えられ、出土遺物においても漳州窯系の大皿が出土することから勝瑞城館の廃絶以降も存続した濠であると推定する。以上のことから、造営年代は不明であるが、天正10年（1582）まで城館の濠として機能したものと考える。

##### 〔濠1003〕

濠1003出土の土師質土器は2期、中国磁器は2グループに画期が認められる。この濠の覆土からは永禄7年（1564）の紀年銘入りの卒塔婆が出土しており、この時期には濠が構築されていた

ことが分かる。3グループに属する中国磁器の割合が低いことや、1期に位置付けられる土師質土器皿の割合が濠1001と比較して高いこと、一分一間之図においては濠跡と対応する地割りが認められないことから、16世紀中葉頃には城館の濠として機能したが、濠1001や1002よりは早い段階で埋没していた可能性が考えられる。

#### 〔濠1004〕

濠1004については、攪乱も多く、トレンチによる断面観察が主であったため、出土遺物は非常に少ない。しかし、土師質土器は1期に属するもののみしか出土しておらず、一分一間之図においても濠跡と対応する地割りは認められない。このことから、比較的早い段階で埋没した濠である可能性が考えられる。

#### 〔濠1005〕

濠1005についてもトレンチによる断面観察が主であったため、出土遺物は非常に少ない。しかし、2期に属する土師質土器が出土しており、2グループに属する中国磁器の割合が高く、3グループに属する中国磁器も29.41%と比較的高い。また、一分一間之図においてはこの濠跡に対応する地割りが認められることから、勝瑞城館廃絶後も濠1001と共に存続した濠であると推定する。概ね16世紀中葉頃から天正10年（1582）まで城館の濠として機能したものと考える。

#### 〔濠1006〕

濠1006から出土する土師器皿は2期に画期が認められる。また、中国磁器は2グループが56.25%と割合は高いが、3グループも43.75%の割合を占める。しかし、一分一間之図においてはこの濠の痕跡は確認できないこと、この濠は濠1003から分岐した濠であることから、濠1003と同じ時期に機能した濠であることが考えられる。

### ② 濠の年代観について

#### 〔SD1003〕

SD1003から出土する土師質土器皿は1期に画期が認められる。濠1001によって切られていることから、濠1001が構築される以前に機能していた溝であることが考えられる。

#### 〔SD1009〕

SD1009からは2期に属する土師質土器皿のみ出土している。中国磁器については2グループが28点、3グループが10点となっている。このことから、概ね16世紀中葉以降に機能した溝であると推定する。

[SD1013]

SD1013 から出土する土師質土器皿は 2 期、中国磁器は 2 グループに画期が認められる。概ね 16 世紀中葉以降に機能した溝であろう。

[SD1014]

SD1014 からは 1 期に属する土師質土器皿が主体となって出土する。SD1003、SD1017 と同一の軸を持ち、これら 3 つの溝は等間隔に並ぶ。このことから、これらの溝は 16 世紀中葉以前に機能した溝であると推定する。

[SD1018]

SD1018 からは 2 期に属する土師質土器のみ出土している。中国磁器については 2 グループに画期を持つ。このことから、概ね 16 世紀中葉以降に機能した溝であると推定する。

[SD1060]

SD1060 から出土する土師質土器皿は 2 期、中国磁器は 2 グループに画期を持つ。概ね 16 世紀中葉以降に機能した溝であろう。

[SD2001]

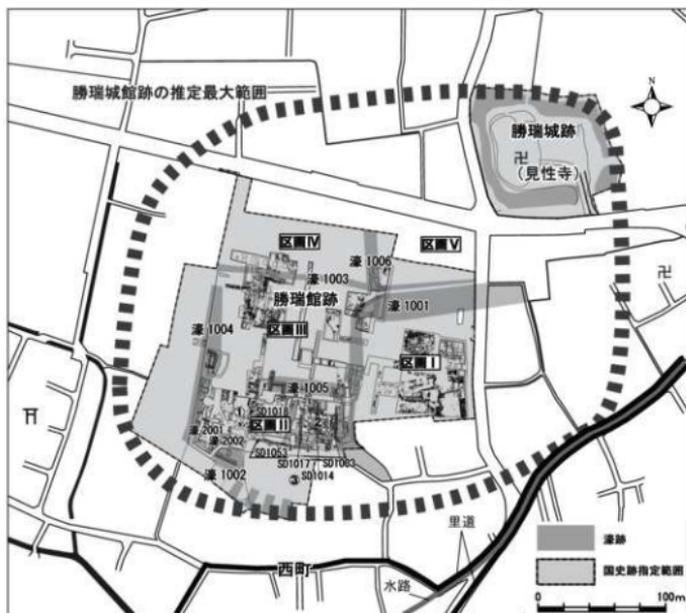
SD2001 からは 1 期に属する土師質土器皿のみが出土する。中国磁器は白磁 E2 群の端反り皿が 2 点みえる。この溝は、SB1001 や庭 1001 の下層を南北に延びる溝であり、16 世紀中葉以前に機能した溝であることが推定され、同時にそれ以降に SB1001 や庭 1001 の構築時期が推定される。

### ③ 濠・溝の年代観と形成される区画について

まず、概ね 16 世紀中葉以前に SD1003・1014・1017 が構築される。これらは等間隔に同じ軸方向で南北に延びることから、屋敷地の区画溝と考える。その後、16 世紀中葉以降に構築したのが濠 1001 であり、同時期には濠 1002・1005 が区画を形成し、その区画内に庭 1001 や SB1001 が存在する。また、北側でも濠 1003・1006 が区画を形成する。濠 1004 は若干時期が古いと思われるが、同じ場所には南北方向に延びる数条の溝跡等も検出されており、ここに区画施設が存在することは考えられる。これらのことから、第 1 図のとおり濠 1001 ～ 1006 によって形成される 5 つの区画が想定できる。

(区画 I)

濠 1001 が西側及び北側を区画する。この区画は今回の報告対象外ではあるが、16 世紀前葉に整備された池泉庭園とそれに伴う礎石建物跡が検出されている。



第 486 図 勝瑞城館跡の遺構と区画の配置

(区画Ⅱ)

東側を濠 1001、北側を濠 1005 及び SD1009・1018、南側を濠 1002 が区画する。西側の区画は濠 1004 付近と推定する。区画の西側では枯山水庭園とそれに伴う礎石建物跡 SB1001 が検出されている。その東側には SB1001 と軸を同じくする SD1018 が検出されているが、この溝を境として東側は遺構面が低くなり、出土遺物の組成にも差が見られることから、区画Ⅱの空間を仕切る役割を果たした溝と考える (SB1018 の西側を区画Ⅱ-①、東側を区画Ⅱ-②とする)。

第 12 次発掘調査では、区画Ⅱ-②の南側で複数の溝が切り合う状況が確認されており、これらも区画Ⅱ内を仕切る溝であろうと思われる (ここから南側を区画Ⅱ-③とする)。

区画Ⅱ-②では濠 1001 に切られた溝 SD1003 が検出されており、その西側には SD1003 と軸方向を同じくし、約 15 m の等間隔に並ぶ SD1014、SD1017 が検出されている。これらの溝は、濠 1001 が構築される以前のものと考えられ、ここに小規模な区画が存在したことがうかがわれる。

(区画Ⅲ)

東側を濠 1001、北側を濠 1003、西側を濠 1004、南側を濠 1005 が区画する。南西部には礎石建物跡 SB1002・1003 が検出されており、北西部は遺構密度が非常に高い区画である。

#### (区画Ⅳ)

南側を濠 1003、東側を濠 1006 が区画する。区画内の調査対象となった部分は狭く、西側や北側を区画する遺構は確認できていないが、柱穴と考えられる多数の小穴が検出されている。

#### (区画Ⅴ)

南側を濠 1001、西側を濠 1006 が区画する。区画内の調査対象となった部分は区画Ⅳと同じく非常に狭く、東側や北側を区画する遺構は確認できていないが、濠 1006 と軸を同じくする礎石建物跡 SB1005 が検出されている。

勝瑞館跡から県道松茂吉野線を挟んで北側には、現在見性寺の境内となっている勝瑞城跡の区画がある。勝瑞城跡は天正10年（1582）の土佐の長宗我部氏の勝瑞侵攻に備えて築かれた区画と考えられており、勝瑞館跡と一体のものとして機能していたことが考えられる。

勝瑞城跡は、現状でも周囲を幅約 13 m の濠で区画されており、一部に土塁が残っている。その規模は、濠を含めて東西約 105 m、南北約 90 m で、北西部に張出を有した不整形を呈する。

勝瑞城跡の発掘調査は、平成 6 年から 10 年にかけて実施しており、その結果、築城にあたり 70 cm 程の盛土が施されていることが確認された。その盛土層の下層から 1580 年頃を上限とする備前焼Ⅴ期新段階の揃鉢が出土しており、このことから天正10年（1582）の土佐の長宗我部氏の勝瑞侵攻の直前に築かれたものであることが分かっている。

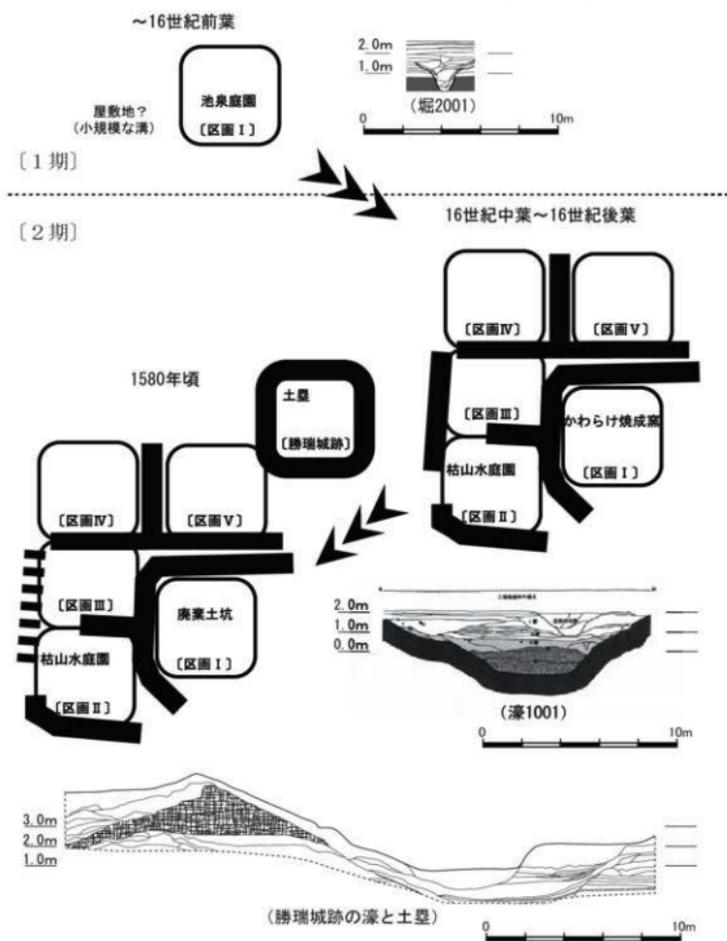
この時期、勝瑞を取り巻く軍事的緊張は高まっており、天正 9 年（1581）には羽柴秀吉から勝瑞の防備を固めるよう命じる書状が送られている。勝瑞城跡の構造をみると、幅約 13 m の濠とともに基底部幅 12.5 m、高さ 2.5 m の土塁が築かれており、土塁を持たない勝瑞館跡に対してここでは防衛的な意識が強く感じられる。これらのことから、勝瑞城跡は長宗我部氏の勝瑞侵攻の直前に築かれた砦であると評価されているのである。

### 3 まとめ ～勝瑞城館の変遷と歴史背景～

勝瑞城館は、最終段階においては前項に示した区画Ⅰ～Ⅴと勝瑞城跡をあわせた 6 つの区画（屋敷地群）によって形成されていることが推定されるが、最終段階の形に至るまで第 2 図のとおり構造の変遷が認められる。

今回の報告の対象とはなっていないが、区画Ⅰでは 15 世紀代には池が築かれていたと考えられ、16 世紀前葉には池泉庭園が再整備されることが分かっている。おそらく、この時期を通して権威を表象する空間としての性格を持っていたのであろう。16 世紀前葉は 1 期に位置付けた遺構が機能した時期で、SD1003・1014、SD2001、SK1046 等が該当する。

16 世紀中葉以降は景観が大きく変わる。SD1003 や 1014 で区画されていた屋敷地は統合され、濠 1001 等の大規模な濠が周囲に巡る区画が形成され始める。枯山水庭園は 16 世紀後半に築かれ



第487図 勝瑞城館変遷模式図

たものである。そして、最終段階の天正10年近くに勝瑞城が築かれるのである。

こうした城館の構造が変遷する背景には、権力者の移り変わりや社会情勢の大きな変化などの画期とされる歴史的事象があったことが考えられる。

まず勝瑞城館の歴史において、第一の画期は阿波守護細川氏による守護所の設置である。勝瑞

守護所の成立時期は諸説あるが、15世紀前葉説が有力であると思われる。第二の画期は文亀2年(1502)とされる細川氏の阿波在国である。15世紀後半から16世紀初頭にかけて阿波守護細川家を支え続けた成之は、応仁・文明の乱以後も在京を続けたが、文亀2年には阿波に下り在京するようになる。さらに、第三の画期は永正年間(1520年頃)とされる三好氏の勝瑞居住である。三好元長は、祖父之長の菩提を弔うため、現在の美馬市脇町岩倉にあった宝珠寺を永正年間に勝瑞に移転させ、之長の院号「見性寺殿」に因んで見性寺と改称したという(『板野郡誌』)。また、大永7年(1527)に管領細川晴元とともに足利義維を擁して堺へ渡るが、この直前に「井隈内勝瑞分壺町壺反」を見性寺に寄進している(「三好元長寄進状」見性寺文書)。これらのことから、この時期には三好氏は勝瑞に居住していたと思われる。

第四の画期は三好元長の死後、長慶の本宗家と実休の阿波三好家に分化する時期である。そして、実休は天文22年(1553)に守護細川持隆を殺害し、実質上阿波の実権を握ることになる。第五の画期は天正4年(1576)に細川真之が勝瑞城館を脱出し、反三好勢力の一宮氏に擁立される時である。天文22年以降も阿波守護には細川真之が推戴され、阿波守護家と阿波三好家の並存状態が続いていたが、この時がまさに決別の時である。

そして、第六の画期は天正8～10年頃である。この時期には勝瑞城館の主がめまぐるしく変遷する。三好長治没後に阿波三好家を再建した十河存保であったが、織田信長や羽柴秀吉と通じて、当時阿波に侵攻していた長宗我部元親や一宮成助を引き込んだ篠原松満らと対立することにより、一時讃岐へ退去することとなる。このとき一宮成助が勝瑞に入る。しかしその後、信長と本願寺の和睦に反対して本願寺を退去した牟人や紀伊・淡路の軍勢が勝瑞を奪い取り籠城する。これに対して秀吉は、黒田孝高や生駒親正、仙石秀久らを阿波に派遣して勝瑞を攻略した。しかし、阿波への介入はさほど深入りしなかったため、最終的に天正9年1月には十河存保が再び勝瑞を奪還することとなる。さらに、その翌年の天正10年には土佐の長宗我部氏の勝瑞侵攻が第七の画期となる。戦国期を通じて軍勢が迫るようなことがなかった勝瑞が、信長を中心とした広範な地域を巻き込む大規模な戦争の一環に飲み込まれることとなったのである。

現在のところ、これらの事象と勝瑞城館の変遷の関係については第16表のとおり考えられている。

#### 【参考文献】

- ・天野忠幸「戦国阿波の政治史から考える勝瑞」(『勝瑞 守護町勝瑞遺跡検証会報告書』徳高県教育委員会 2014)
- ・福家清司「勝瑞津と聖記寺の創建」(石井伸夫・仁木宏編『守護所・戦国城下町の構造と社会－阿波国勝瑞』思文閣出版 2017)

第16表 勝瑞城館の濠、遺構面、面期となる事象の年代一覧表

年代	1500	1550	1582	1600		
濠	1001		----	----		
	1002	----	----	----		
	1003	----	----	----		
	1004	----	----	----		
	1005	----	----	----		
	1006	----	----	----		
	2001	----	----	----		
	2002	----	----	----		
勝瑞城跡			----	----		
区画	I	【第3遺構面】 ・下層池 ・礎石建物 【第2遺構面】 ・礎石建物群 ・池泉庭園	→	【第1遺構面】 ・礎石建物(SB1005) ・廃棄土坑 ・土師質土器皿焼成窯	→	
	①		【第2遺構面】 ・溝(SD2001)	→	【第1遺構面】 ・礎石建物(SB1001) ・枯山水庭園	→
	②		【第1遺構面】 ・柱穴 ・溝(SD1003、1014、1017)	→		→
	Ⅲ			【第1遺構面】 ・礎石建物(SB1002・SB1003) ・掘立柱建物(SB1006)		
	Ⅳ		【第1遺構面】 ・柱穴	→		→
	Ⅴ			【第1遺構面】 ・礎石建物(SB1004)	→	
	勝瑞城跡				【第1遺構面】 ・土塁 ・瓦だまり	
面期となる事象	15世紀前半 勝瑞守護所の成立	文亀2年(一五〇二)細川氏の河波在国	永正年間 三好氏の勝瑞居住	天文22年(一五五三)勝瑞事件	天正10年(一五八二)勝瑞落城 天正8年(一五八〇)勝瑞城争奪戦 天正4年(一五七六)細川貞之勝瑞脱出	

藍住町教育委員会発掘調査報告書 第1集

**史跡 勝瑞城館跡 I**

— 勝瑞館跡西半部の発掘調査 —

《第2分冊》

発行日 2020(令和2)年3月31日

編集 藍住町教育委員会  
〒771-1292 徳島県板野郡藍住町奥野字矢上前52番地1  
TEL (088)637-3128

発行 藍住町教育委員会  
印刷 徳島県教育印刷株式会社